RECONSTRUCTION

改造

普選斷行・議會改造

研究と思想

末廣重雄
山川均
生田長江
堺利彦
室伏高信
堀江歸一
佐藤丑次郎

第二 福田河上兩氏論戰評

森戸教授問題批判

批判と文藝

賀川豐彦
長谷川如是閑
與謝野晶子
岩野泡鳴
正宗白鳥
宇野浩二
島田清次郎

貳月號

日本一のユウモリスト
貝塚澁六著
著者と同身一體の友人 堺利彦序

猫の百咳

四六判美本
定價壹圓四拾錢
送料八錢

輕快なる風刺。犀利なる皮肉、滑稽百出、興味津々たる裡に、天をも燒くべき改造の意氣澎湃たる快著。

堺利彦氏譯
山川菊榮女史譯

女性中心と同性愛

＝好評三版＝定價壹圓六拾錢＝送料拾貳錢＝

堺先生によりてウオードを傳へられ、菊榮女史によりてカーペエンターを述べらる。兩性問題婦人問題を語らんとする人は必ず先づ本書に就け。

與謝野晶子女史著

激動の中を行く

＝好評四版＝定價壹圓六拾錢＝送料拾貳錢＝

歌壇の女王、論壇の花形たる女史の熱烈火の如く、透徹氷の如き、權威ある最近の論集。

東京神田仲猿樂町 合資會社 アルス 電話本局二九八八番 振替東京二四八八八番

改造二月號目次

◎社會主義の學理的經典◎

高畠素之譯

資本論解説

法學博士福田德三氏序　カルル・カウツキー氏著

總クロース上製　定價二圓　郵税十二錢

半價格版發賣　價一圓五十錢 郵税六錢

訂正 前版までの誤植（第十三版）を全部訂正せり（發賣）

世界改造の大法廷は開かれたり。資本主義文明は今や最後の審判を前にして戰慄す。見よ**マルクス**が印したる科學的文字は新興階級の經典として地球の全面に舞躍せり。時代の批判は**マルクス學**の批判より始めざるべからず。

本書原著は**マルクス學**の中堅たる『資本論』に平易明快なる解説を加へたるもの、久しく專門學者の机上に置かれし難解深遠の典範も本書出づると共に高級常識の一資財と化せられたり。原著者は**エンゲルス**に次ぐ社會主義學の最巨頭にして、譯者は今福田博士等を縦勵して**マルクス**全集の譯出に從事中なる日本**マルクス學**の第一人者也。寔に原著者譯者共に其の人を得たるものと云ふべし。**マルクス學**は革命の學也。精緻なる學究的論理の間を縫うて一脈の熱火縦横に奔馳す。新人の腸、本書に依つて初めて燃えん。社會改造の戰に參與せんと欲する青年諸君の必讀を促す。本書は先きに六千部を賣り盡し、今裝釘を略して半價格版五千部を發賣す。紙價印刷費倍蹴の時價格を半減す、本書の普及に依つて社會主義宣傳の一端を行はんと欲するが故なり。

東京市芝區三田一丁目　**三田書房**　振替東京一八一一番

蘇峰 德富猪一郎著 ＝ 讀天下の歡迎を感謝す

織田氏時代 完成

織田氏時代 愈々完成す

全三冊 後篇 新刊 前篇 中篇 既刊

上製各冊 菊版クロース 函入七百餘頁 定價三圓五拾錢 郵税各十八錢

○○○ 並製各冊 四六版 七百頁 定價一圓六拾錢 郵税各十二錢

江湖の歡迎 愈々熾盛也

江湖の歡迎熾盛なる著者の『近世日本國民史』は今や『織田氏時代』後篇の刊行なりて、茲に其の第一期中の初期たる、織田氏時代の完璧を告げぬ。之を讀み書く者に譬へんか、『前篇』は即ち手脚を描き、『中篇』は即ち腹背を描き、『後篇』は即ち頭を描き、睛を點じたるなり。前、中、後の三篇を貫通して、信長の全體、茲に始めて顯現し、其の時代の眞相、茲に始めて發露したりと謂ふべし。其の發賣部數前、中二篇を合して十三萬餘部、後篇又既に四萬餘部を發賣し、織田氏時代完成と共に、本書の需要愈々旺盛なるは、本社の感謝に堪へざる所也。

改造的現代と信長時代

織田時代は、實に日本改造の一大時期なりき。此の時期こそ現代世界改造の一縮圖と謂ふべけれ。乃ち織田氏時代は、現今の世界改造に向つて、一大暗示を與ふるものに非ずして何ぞ。又た現時の日本は、人材を選め、舊慣故例を破り、社會の風氣を清新快活ならしむるに於て、宜く織田氏時代に鑑むべきなり。本書は實に改造の活ける教科者と云ふべし。

圖附錄、年表、索引、肖像、地圖、戰陣圖

前、中、後三篇を通して附したる、古文書引用の附註、時代年表、人物年表、索引、並に精巧なる挿圖、觀圖、肖像等は、興味と有益とを兼備ふるものにして、以て本書の光彩を添ふるに足る。

近世日本國民史 豐臣氏時代 甲篇 近刊

發行所 東京市京橋區日吉町 振替口座一三一〇〇 民友社

■法學士 新田佐逸氏新著 （著者多年研究の大著各人必讀書）

新刊 現代社會生活の批判

四六判最上製 全壹冊四百頁 金貳圓 送料貳拾錢

輓近社會生活の多端なるに伴ひ社會問題に關する著書は尠からずと雖も多くは其研究の一方面のみに偏し社會生活の全般に渉りて其根本的解決を與へたるもの無し本書は此點を遺憾とし汎て貧窮疾病犯罪及性慾的墮落の諸問題に渉りて之を組織的に考究せるものにて其目的は現代生活に對する嚴正なる批判にあり。今や一切の文化的或は教化的活動は凡て實證的科學的批判によりて始められざる可からず。本書は先づ原論に於て社會生活の自然的歷史的及法律的關係を明かにし各論に於て其原理の適用たる刑事政策との調和に就き纏術せり。新人の言─社會改造の要諦は本書によりて始て明かとならむ

內容目次

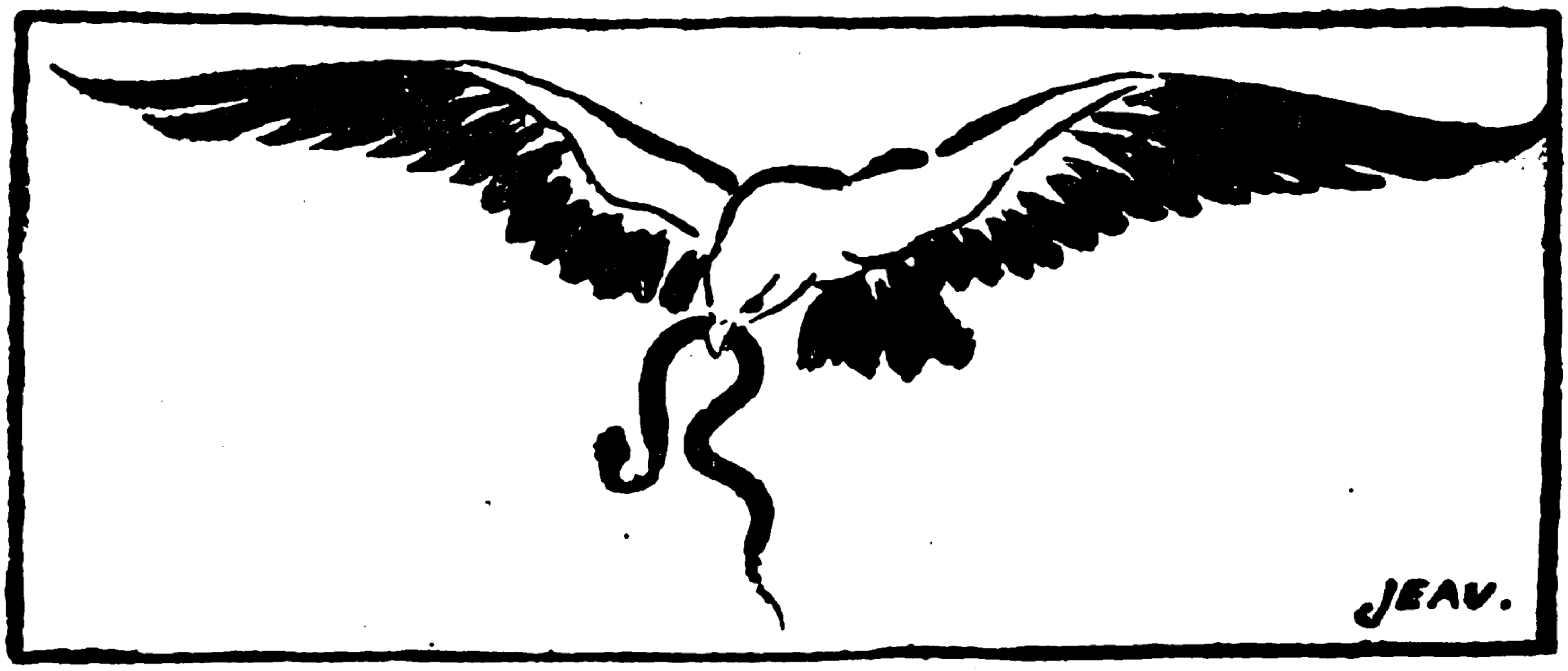
序論社會幸福の基礎を論ず▼前論原論第一章國家と社會主義運動▼第二章社會と犯罪▲第三章刑法の社會的基礎及其應用▼第四章社會制度の組織及發達▼後編各論第一章經濟狀態生活狀態の改善及社會衛生─文明と人口問題─新マルサス主義─食物の諸問題─家族生活の危機─▼第二章性慾生活に對する豫防─兩性問題─風俗に關する犯罪─猥褻姦淫及重婚罪─性慾異常と犯罪─性生活に於ける權利─▼第三章社會的情操の涵養優種學及刑事政策學─文明の進步と不自然なる性慾感爲─強姦罪の規定と婦人の保護─血族婚姻の利害─優種學の實行方法─▼以上細目は略す。

津田光造著 二宮尊德の人格と現代

四六判最上製本 金壹圓八拾錢 送料貳拾錢

現世界改造の第一步として思想界乃至產業界は今勞働問題の解決に混亂を極めて居る。勞働者を尊重せよ。「汗」を尊重せよ。人間の勞力を資本の手より解放せよ。勞働者に自由を與へよ。自律的人格的待遇を與へよ。併し斯うなつて來ると問題は產業上のものであると同時に教育上のものでなければならない。高き品性と貴き人格とを具備した有能な勞働者偉大なる國民出でよ。二宮尊德の人格は何の點からも慥かに現代の要求其ものでなければならぬ。

東京市神田區表神保町七 **大同館發行** 振替貯金口座東京八七貳番



―（改造二月號）―

帝國大學と森戸教授

有害と認めらるゝ思想でも、眞理は含まれてをる。眞理の含まれてをる思想は假令へ邊險に亘ろうが、政府のために利益になるまいが、眞理を闡明するために研究するの必要はある。

獨立せざる學問には、偉大もなければ、正義もなく、眞理もないのだ。正義を以て進む國家正義を以て起つ人類は眞理の前には同情を表し、眞理の前には眞率の態度を取らねばならぬ。山川東大總長、床次内相、中橋文相は特に寛厚の態度を以て、最近の思想問題に對し、そして高遠なる眞理を味はつて貰ひたい。

眞理に共鳴するは人類必然の本質であつて、また眞理に同情を表するのも人類當然の歸趨である。共鳴は同情の表示であつて、宣傳ではないことは最高學府の宰領たる山川氏は百も承知の事だろう。

吾人は過激思想には賛成が出來ぬ。隨つて森戸氏の言論に對しては批評を避ける。しかし森戸氏問題に對して、東大經濟學部の執りし態度、及び山川氏の言動に對しては學問の獨立、大學の獨立の上よりして深く遺憾に堪えぬものがある。

然り、高遠なる國家としての理想があるならば、國民をしてそれだけ眞理と理解に長ぜしめねばならぬ。思想の鎖國主義は今日では到底遂行することが出來ぬ。くさいものに蓋をしておけば、それ以上に知りたいは人性の常態である。

我が政府者が知らしめず、依らしむべしの政策を執るの迂愚と頑冥さは笑ふべきの限りであるが、山川總長が近來の守舊振りの鮮かなるには少からず面喰はざるを得ない。

吾人は不幸にして森戸氏の論文を一讀することが出來なかつた。であるからそれが眞理に對する一種の共鳴であつたか、或は無政府主義の宣傳であつたかを批判することが出來ぬ。何にせよ、眞理研究の中絶、日本文明の停電のやうな氣がする（一月十四日朝）

唯物史觀と理想主義（對話二篇）

堺　利彦

一　櫛田民藏君の議論について

客　『我等』十月號に櫛田民藏君が『唯物史觀と社會主義』と題して、『堺、河上二氏の論說』を批評してるね。讀んだか
私　ウン讀んだ。
客　君あれについて何も云はないのか。
私　少しは云ひたい點もあつたが、うるさくてねえ。
客　うるさいナンテ、學問に不忠實ぢやないか。
私　不忠實かも知らんが、實はモウあんな議論には飽きた。それに、あの論文は大體上、僕に取つて餘り不利益でないのだから、先づ河上君の答を聞いて見ようと思つてるんだ。
客　ズルイね。然しマアそれは可いとして、一體論點はどういふ處にあるのだね。
私　サア。それはチヨツト面倒だが、つまり『絕對道德』の有無如何、及び其の『絕對道德』の內容如何といふ問題だ。
客　へエ。そしてそれが君と河上君との間にどう分れてゐるんかい。
私　河上君は絕對道德を標準にして社會主義運動の手段方法を批判すると云ふ。僕は絕對道德なんといふ者は無いと云ふんだ。
客　成程。そして櫛田君はどちらに贊成してるんかい。

私　サア。それが一概に云へない。櫛田君は先づ斯う云つてる。マルクスは『永久の眞理』『不變の道德』從つて又『一切理想』の否定者でありながら。而も自ら『一定の理想』を有してゐる。それは明かな矛盾であると。

客　へエ。ぢや櫛田君はマルクスに反對だね。

私　所が、そうでもない。櫛田君は又斯う云つてる。唯物史觀がマルクスの人生觀であり、歷史哲學であるならば、右に云ふ通りの矛盾を生ずるが、唯物史觀を單に歷史の科學と解するならば、そこに何等の矛盾もないと。

客　人生觀と哲學と科學とは、どこがどう違ふものかい。

私　それは僕にもよく分らない。マルクスに取つては、科學の外に哲學はなく、科學の智識を綜合した考への外に人生觀といふ者はないだらうと僕は思ふんだけれど、哲學者の頭は僕等普通人の如き頭と違ふらしいから、どうもよく分らない。

客　それは謙遜かい。それとも皮肉かい。

私　サア。

客　ぢやマア其點は分らんとして、結局、櫛田君はどう云ふんかい。

私　それは斯う云ふんだ。社會主義の主張は唯物史觀以外、別に何等かの理想の下に立つてゐる。故にマルクスの否定する『永久道德』とは、實は『絕對道德』の意味でない。マルクスにも矢張り『絕對道德』即ち『理想』がある。

客　『絕對道德』といふ者と『理想』といふ者とは同じかい。

私　と見える。

客　へエ。そして櫛田君は其マルクスの理想をどんな者だと云つてるんかい。

私　『人類の解放』若しくば『解放の思想』と云ふんだ。

客　へエ。隨分漠然たる理想だね。然し何しろ、君は『絕對道德』即ち『理想』の否定者であつて、マルクスには『人類

解放」といふ『理想』即ち『絕對道德』があるのだとすれば、君はマルキシストでは無い事になるんだね。何しろ櫛田君の團扇は河上君の方に擧がつてるわけだね。

私　どうもそうらしい。

客　然し君は先つき、櫛田君の議論は大體上、君に取つて餘り不利益でないと云つたぢやないか。

私　ウン、之から先が僕の利益になる。

客　ヘエ。ぢや、それから先はどういふ事になつてるんかい。

私　斯ういふ事になつてる。河上君の謂ゆる『不變の道德』とは、『マルクスが含蓄した人類解放の理想であるか否か、それは十分明かでない』と櫛田君は云つてる。そして時に、河上君の謂ゆる『不變の道德』とは、マルクスが排撃した世間並の道德に過ぎないと櫛田君は云つてる。『世には、絕對道德を高調する人にして、近づいて見れば、案外「偉いもの」を握つて居る向もある』とさへ櫛田君は云つてる。

客　『偉いもの』を握つてるはいゝね。ウンコでも握つてゐそうだね。

私　學問上の議論にそんな失敬な事を云つちやイケナイ。それで結局、櫛田君は、『堺氏の絕對道德否定論は、今の時に、必ずしも、無用でないと共に、絕對道德の否定者堺氏は、案外絕對道德の含蓄者であるかも知れぬ』と大いに僕を持ち上げて呉れてる。

客　成程。それぢや君が聊か得意になる筈だ。

私　所がさ。僕も『絕對道德の含蓄者』と銘を打たれちや、コレラの保菌者と認定されたような氣持で、少々尻がこそばいゝ。

客　コソバイイたあ何だい。

私　僕の國言葉だよ。クスグッタイといふ事さ。

客　フーン。それぢや何かい。君は『人類解放の理想』に反對なのかい。

私　人類の解放に反對しないが、そういふコレラ菌があるとは僕は信じない。

客　『コレラ菌』とは『絕對道德』の事かい。

私　もう其話は其邊でいゝぢやないか。

客　イヤ、よくない。ぢや改めて聞くが、君は唯物史觀論者として『絕對道德』即ち『理想』の否定者だ。然し君は又社會主義者として『一定の理想』を持つてるだらう。理想を否定して理想を持つとは矛盾ぢやないか。

私　櫛田君はそういふ人だね。

客　君はそれに答が出來ないのか。

私　其答をするには先づ『理想』といふ言葉の意義を明瞭にする必要がある。

客　必要があるなら、それを明瞭にすればいいぢやないか。

私　マア少し待つてくれ。それは河上君の答を聞いてからにしよう。

二　河上肇君の議論について

客　オイ君。『社會問題研究』の十二月號にある河上肇君の『唯物史觀と理想主義』を讀んだか。

私　ウン讀んだ。

客　君はあれを何と思ふ。

私　サア。

客　『サア』きりぢや困るね。君は此前『少し待つてくれ』と云つたぢやないか。今日は是非ハッキリした議論を聞かう

私　弱つたねえ。先方がハッキリしなくちや、こちらもハッキリ出來ない。

客　そんな逃口上は駄目だよ。負けたなら負けたと白狀しろ。

私　マア負けたんだね。何しろ梯田君は『人種解放の理想』を押し立てる、河上君は『人間の完成』といふ『人道的要求』を振りかざす。そして兩君とも、其の社會主義の根本理想を以て、唯物史觀と分離して存在するものと見做す事に於いて一致してる。多勢に無勢だ。

客　オイ〳〵、マアそんなに弱い音を吹くな。君にも少しは議論があるだらう。

私　然し君。河上君のアノ感動のいゝ事を見たまへ。先づ『道細の理想は』と來たね、續いて『絕對道德の根本要求に本くが故に』と來たね。更に續いて『そは固より科學的研究に依りて發見せられ、因果的說明に依りて認識せられ得るが如きものでは無い』と云ふ堂々たる御論だ。僕には何とも仕方がない。

客　何とも仕方がないは心細いね。

私　だつて、僕は『科學的研究』と『因果的說明』を求めてるんぢやないか。パンを求めてる者に石を與へられたんぢや實際仕方があるまい。

客　そう聞けば少しは尤もな樣でもあるね。

私　所が、まだそれどころぢやない。河上君は更に進んで、『夫れ絕對の世界には、本來東西なし、何れの處にか因果の究むべきあらん』と來たね。それほどなら僕は鎌倉に行つて社會主義の研究をやるよ。

客　福田博士は最初鎌倉で『資本論』を讀んだと云ふぜ。

私　いよ〳〵禪學問答になつて來たね。

客　君が科學的研究だの何だのと云ひながら、變な皮肉を交ぜるからイケナイんだ。

私　そうか。あやまつた。所で河上君は、『道細の理想』が唯物史觀と關係のない事は『自明の理』だと云ふんだが、其の『自明の理』が僕に不明なんだから、つく〴〵身の不敏を嘆ぜざるを得ない。

客　オイ〳〵、もすこし元氣を出せよ。そして何とか少しくらゐ屁理屈でも云へないかい。君は先に「理想」といふ言葉の意義を明瞭にする必要があるとか何とか云つたね。それでも一つ明瞭にして貰はうぢやないか。

私　あ、そうだ。其點なら少し僕に言分がある。夫れ(!)理想とは何ぞや。

客　大きく出たね。

私　大きくも小さくも、それから考へて行くより外に仕方があるまい。僕の考へでは、理想とは、人が現在の不滿に刺戟されて、それの滿足された狀態を追求する心だと思ふ。

客　成程。然しそんな定義で河上君や櫛田君が承知するだらうか。

私　それは知らない。然し神樣と哲學とを無くして考へたら、そうより外に考へ樣がないだらう。それが普通の正氣の人間の考へ方だらう。

客　それ以外の考へ方は正氣でないんか。

私　正氣不正氣の論はマアその位にして置いてくれ。コワイから。

客　よし〳〵。そこで?

私　そこで斯うだ。若し人間がイビツな土瓶を拵へた。どうも据わりが惡い。水の出方も惡い。どうかしてモット据わりのいゝ、モット丸い、そして出口のキチンとした土瓶を拵へたいと考へる。やつて見ると中々うまく行かないが、頭の中にはボンヤリと、立派な申分のない土瓶の形が浮かんで來る。それが卽ち土瓶の理想だ。此頃の新聞廣告を見たまへ。理想のシャツ、理想の帽子、理想の萬年筆など、さすがは文明人だ、チヤンと理想の品を拵へてる。

客　オイ、人を馬鹿にするな。俺はそんな通俗話を君に要求してるんぢやない。

私　僕には通俗話と高尙話との區別はない。强いて云へば、僕の通俗話は言葉がやさしいだけの事で、世間の高尙話と理屈は同じだ。聞きたくなけりやモウ止さう。

客　イヤ、怒つちや困る。ちや通俗話でいゝからモットやつてくれ。

私　よし。そこでだ。我々が今、現在の社會に不滿を感じて、其の不滿の滿足された、將來の新社會の理想を持つのに何の不思議があるか。

客　別に不思議はないね。そんなに力むには及ばん。

私　何も力むわけではないが、現在の社會の据わりの惡いのに不滿を感じ、水の出の惡いのに不滿を感じて、モット据わりのいゝ、モット丸い、モット出口のキチンとした理想の社會を考へて、それを拵へようとするのは當り前ぢやないか。

客　それは成ほど當り前だ。それは分つてる。然し君は唯物史觀論者だらう。唯物史觀は宿命論で、必然論で、器械的世界觀で、人間は手を拱ねいて現社會の破滅と新社會の出現を待てばよいので、理想に向つて努力する必要もなければ餘地もないと云ふ批評は一體どうするんだい。

私　其迄については河上君が十分に辯駁してくれてる。其うへ僕が云ふ必要はない。つまり我々は社會進化の必然の趨勢を認識して、それを助長し促進するんだ。

客　必然な事物を君等の力で助長したり促進したりする事が出來るかい。

私　社會の趨勢に迫られると、個人の心の中にそれを助長し促進しよう〳〵といふ考へが起つて來る。其の起つて來るのも必然なのだ。人間は必然の事を意識的にやり得るんだ。

客　君は意志の自由を認めない人ぢやないか。

私　必然を看取してそれに順應する所が即ち意志の自由なんだ。僕等はそう考へてる。

客　曖昧だなア。

私　曖昧な事はないさ。外から見れば必然な事を、人は或る程度まで自由の意識を以てやるんだ。人は多少自由の意

識なしに思考する事も行動する事も出來ないんだ。それが意識といふ者の性質なんだ。然し其の自由の思考も行動も、過ぎ去つて見れば皆な必然なんだ。

客　君も少しは高尚話をやるなア。

私　僕は之で中々學者なんだよ。だからさ、唯物史觀論者が理想を持つのも必然、其の理想の爲に努力するのも必然少しも不思議な事はない。只だ其の理想の意味が違ふんだ。我々の云ふ理想は絶對道德でも何んでもない。只だ前に云ふ通り、現在の不滿に刺激されて、それの滿足された狀態を追求する心なんだ。

客　然し無暗に滿足の狀態を追求したつて、それが必然に合致するとは限るまい。

私　其通り。いゝ疑問だ。だから理想には隨分見當違ひがある。死後の生命を求めたりするような無茶な理想もあるそれはまだ人間の智力が不足で、必然を十分に看取する事が出來ないからだ。我々は眞逆にもう不死を求めるような事はしない。それと同じく、社會進化の必然の趨勢が既に明らかになつて來れば、無暗滅法な黃金世界を理想するような愚な事はしない。只だ其の必然の趨勢に順應して、そこに現在の不滿を滿足させようとするんだ。つまり我々の智力の進步に依つて、自然に必然に出來るだけの事を出かさうとするんだ。そこで必然の看取が十分になれば、我々の理想は只、過去現在の事實から割りだした、精確な將來の推測になるんだ。

客　そんな精確な推測が出來るかい。

私　それは中々出來ない。只だ出來るたけ精確にしようと云ふんだ。それでなくては無駄や混雜や犧牲や損失が多くて困る。我々は之を實際的理想主義と云ふ。我々の實際的理想主義は世間の哲學的理想主義と全然別だ。だから我々としては、唯物史觀と理想主義との間に何等の矛盾もない。

客　成程、ちやマア其點は一應君に服して置かう。然しモ一つ疑問がある。君のように云ふと、君の理想は單に算盤になるが、そんな冷たい算盤からどうして正義の觀念が出て來るだらう。君等はよく資本家の不正不義を罵倒したりし

てるぢやないか。

私　そこだ。それも善い疑問だ。そこで理想と道德との關係が問題になる。一體、道德とは何ぞや。今度はそれから考へて行かなくちやならない。

客　今度は『夫れ』が無いね。

私　あつてもいゝ。夫れ道德とは何ぞや。僕等の考へでは。道德心は卽ち社會的本能だ。社會的本能は動物にもある。故に道德心は動物にもある。只だ道德心の社會的現はれが約束となり命令となるのは、言語を有する人間以上の事である。そこで道德といふ言葉が若し道德律を意味するならば、それは人間のみの持つてゐる者である。

客　大變六かしい講釋になつて來たね。

私　マア少し我慢して聞きたまへ。僕の獨創の說ぢやない。ヨーロッパのエライ學者の說だ。獨創らしく見せるより か受賣と云つた方が有難味があつて好いだらう。そこで人間社會には道德律が出來た。然るに抽象的道德律は兎かく固定するが、社會の事物は刻々に變化する。或る年月の後には、道德律が社會の實情に伴はなくなる。卽ち社會生活の爲に有効でなくなる。そこで道德律も止むなく變化する。道德が變化すると云ふのは卽ち此事だ。だから我々は『可變道德』の外に『不變道德』若しくは『絕對道德』なんといふ者は無いと云ふんだ。

客　ナール程。そこで道德と理想との關係はどうなるんかい。

私　マア待て。斯ういふ風に道德は社會事物の變化に從つて變化するが、階級の反目する近世の社會になつてからは、其の變化が非常に六かしくなつた。權力階級は舊道德を便利として强いてそれを維持しようとする。新興階級は新道德を立てそれに對しようとする。そこで新興階級の間に、自由とか、平等とか、博愛とか、正義とか、人道とかいふ道德理想が起る。河上君が『人間の完成』と云ひ、櫛田君が『人類の解放』と云ふのもツマリ之だ。絕對道德でも不變道德でもない。只だ新興階級の新道德なんだ。將來の新社會の事物に適應すべき新道德なんだ。

客　君は成ほど存外學者だなア。

私　無論さ。もすこし云つて聞かせよう。右の如く、自由、平等、エトセトラが單に新道德に過ぎない者でありながら、過去數千年に亙つて高唱されたので、何だか永久の道德、不變の道德、絕對の道德のように見えてゐる。然しそれは、過去數千年の人間歷史が、種々なる變革を經來りながら、實は猶ほ階級社會といふ不自由不平等の同一性質を保つて來たからの事だ。其の證據には、時代々々に依つて自由平等の意義內容が違つてゐる。例へば、基督敎の自由平等と、フランス革命の自由平等と、社會主義の自由平等との間には、實際上の社會的欲求の大差異がある。

客　もすこしそこを委しく話して呉れないか。

私　委しく受賣りすると可いのだが、餘り長くなるからこゝは此の位にしておくそこで道德理想のお題目は、實はどうでもいゝ。只その內容の實質が大切なんだ。お題目は『人間の完成』であらうと、『人種の解放』であらうと構はない。只その內容が『生產機關の社會化』『階級鬪爭』と云ふような、ハッキリした、適切な者でありさへすればいゝ。換言すれば、道德理想が成るべく精密に實際理想と合致しさへすればいゝ。道德理想は運動の原動力になる。實際理想は運動の方針を示す。若し道德理想が漠然たる空疎な者で、それが實際運動の方針を指示する事になると、そこに混雜が起つて來る。絕對道德の標準で運動の手段方法を批判するといふ事の危險はそこに在るのだが、それも實際上に不都合が現はれなければ詮議立をするには及ばない。どうだ、分つたか。

客　分つたようでもあり、分らんようでもある。そこで結局、君は河上君と福田君とに反對なのか。

私　それを明かにする爲に之だけ話したんぢやないか。話してしまつたあとで、又最初の問題を出すんぢや仕樣かないなア。つまり斯うだ、反對な點もあるが、大して反對する程の事もないんだ。

客　何アんだ、つまらない。

私　だから僕はもウあんな議論に飽きたと云つたぢやないか。同じ油でも、種油と胡麻油と椿の油とはそれ〴〵違ふ。

モツト精製したら皆な同じ物になるかも知れんが、そこまでは容易でない。何アに天ぷらを拵へて食ふには、どの油でも構やしない。

客　全くだ。よく分つた。所で腹が減つた。ぢや之から天金にでも出掛けようか。それとも橋善にするか。それとも上野の天新と洒落れるか。

私　何アにどこだつて腹がふくれさへすればいゝ。一番近い處に行かう。

謹告

二月號の頭卷には森戸辰男氏と小泉信三氏とが、其深奥なる蘊蓄を傾けて、各々數十頁に亘る論文を寄稿される筈であつた所、森戸氏は今回の筆禍事件の爲めに起稿中途にして筆を措かれ、小泉氏は止むを得ざる事情の爲め、二十五頁の長論文を頂いて居つたに拘らず、一時掲載を見合せることになつたのは呉々も遺憾である。然し兩氏共筆硯を更めて讀者諸賢に見ゆる筈なれば、期して俟たれんことを切望す。（一月廿日）

階級闘爭の倫理的批判

――徹底人道主義者の立脚地よりして――

生田長江

（一）權利を主張することの道德

所謂社會問題勞働問題は遂に、世間一般の流行物となつて來た。殆んどあらゆる方面の、殆んどあらゆる人々がこれを口にする。猫も杓子もが啄を容れてゐる。

それは必ずしも惡い事ではない。けれども、猫も杓子もが、あらゆる方面のあらゆる人々が、より眞面目に、より嚴肅な態度で社會問題勞働問題を扱つてくれたならば、更により慶ばしい事であるに違ひない。

自分の貰つてゐる賃金を上げさせ、自分の働いてゐる時間を短くさせるといふ、單にそれだけでも、考へないよりは考へた方がいゝ。けれども、それらの人々にして自分達の當面の問題を、社會全體の問題として、より廣くより深く扱つて行くことが出來たならば、それは更により望ましき事である。

自分自身が資本家階級に屬してゐるか、勞働階級に屬してゐるかをも碌々考へても見ず、考へて見ることの必要にも迫られず、たゞ漫然と勞働者を可哀相であるとか、資本家を横暴であるとか言つて、或は衒學的に、或は彌次馬的にのみ談論してゐるのも、それさへしないでゐるよりか今日の場合ましであるかも知れない。けれども、それらの人々にして所謂世上の問題を、自分自身の最も直接なる問題としても、より眞劍に扱つて行くことが出來たならば、更により望ましき事である。

偖て私は、此の如く社會の問題を自己の問題としても考へることが出來、自己の問題を社會の問題としても考へることが出來るやうな、より眞面目なより嚴肅なより眞劍な人々だけを前にして、今日の社會問題勞働問題に關し、是非是非論じて見た

いと思ふ三四の事項をもつてゐる。そして其一が『階級闘争の倫理的批判』である。

資本家階級と勞働階級との間なる階級闘争は、固より止むを得ざる、避くべからざる、よんどころなき事實である。けれども、かるが故に階級闘争を是認すると云ふだけならば、脅喝詐僞竊盜强盜等の破廉恥的行爲をも、止むを得ざる、避くべからざる、よんどころなき事實であるとして是認することの條理に近い。

階級闘争を結局不都合なものとして非認するならば兎に角、苟くもこれを倫理的に正當なものとして、若しくは正當以上のものとして是認しようとするならば、私はすべからく『よんどころなさ』以外に何等かの、より合理的な理由を擧げて來なければならぬ。

ところで、此の如き理由が果して擧げ得られるであらうか、擧げ得られるとしたらば、そもそも如何なるものであらうか。右の問題に對して、私の所謂徹底人道主義の立脚地より、一應の解決を試みようとしたのが、此論文の眼目であり要旨である。

偖て私の議論は、先づ利己利他の關係を明らかにすることからして始められなければならぬ。否、自我と非我との關係を明らかにすることからして始められなければならぬ。

自我及び非我の、それぞれの本質が何であるかは暫く措き、この二の物の關係に就いて見るに、この二の物が全く離れ離れになつて、孤立し合つて、もしくは獨立し合つて存在するとは、所詮考へられない。また感じられない、自我及び非我が、相互の間に截然たる一定の境界線をもつてゐるとも觀られない。

なぜと云つて、かりに今私の心は確實に私の自我の領域に屬してゐるとする。しからば、私の體をも自我の領域に入れてしまふことが出來さうである。私の爪や髮毛が私の自我の領域に屬してゐるならば、序に私の體についた着物や帽子や靴などをも、自我の領域に入れてしまふことが出來さうである。

或は、つねつて見て痛いのが、私の自我の領域であるとする。さうすれば、子供の百日咳を自分自身の苦み、もしくはそれ以上の苦みとして感ずる私にとつて、子供は私の自我の領域に入れてしまふことが出來さうである。妻子眷族が私の自我の領域に屬してゐるならば、序に一鄕一村の人々をも、一國の人々をも、全人類をも、自我の領域に入れてしまふことが出來さうである。少くとも私といふ人間が、所謂人道的な心になればなるほど、愈々容易に出來さうである。

かくの如く自我の範圍は何處までも擴大して考へ、もしくは感ずることが可能なのである。卽ち、自我と非我とは、單にそれぞれの焦點を異にしてゐるだけで、一定した別々の領域を有するものでないといふことになるのである。

されば自我を擴大して觀れば觀るほど、自我をより善くしより惡しくすることが、その儘非我をより善くしより惡しくすることになり、非我をより善くしより惡しくすることが、その儘自我をより善くしより惡しくすることになる。

乃ち、利己に徹底しても利他となり、利他に徹底しても利己になり、本當の自愛がつねに他愛になり、本當の他愛がつねに自愛になる所以である。

かくの如く觀て來れば、自己より他人に與へるのが、必ずしも善でなく、他人より自己に取るのが必ずしも惡でない。讓步するのが强ち道德でなく、固執するのが强ち不道德でない。

否、正しいと思ふ自己の權利を、正しいと思ふ方法に於て主張するのは、本當に自己を愛するものであり、從つて本當に隣人をも愛するものであり、そして善事であり道德である――正しいと思はれる隣人の權利が、正しいと思はれる方法に於て主張されるとき、それを容認するのが、本當に隣人を愛するものであり、從つて本當に自己を愛するものであり、そして善事であり道德である如く。

利己と利他との、自愛と他愛との究竟的一致を十分に理解してくれない人々の爲めには、私は更に別個の見地からして、『權利を主張することの道德』を說いて見たい。

けだし、他人が自己の正當なる權利を侵害するのは、惡をなすのである。そして、他人が自己の正當なる權利を侵害せんとするとき、それを防衛しないのは、他人をして惡を遂げしめるものである。乃ち、正當なる自己の權利を、正當なる方法に於て主張するのは道德である、主張しないのは不道德であるといふ論理になる。

しかもこれは決して單なる論理的遊戲でなく、私共が被害者たる場合に於ても、或は他の場合に於ても、實際私共の感情の上に痛切に經驗するところの事實である。

レオ・トルストイは彼の所謂『危機』を經た後の最初の數年間、惡に對する絕對的無抵抗を說いてゐた。新約書に『人若し右の頰を打たば左をもめぐらしてこれを打たせよ』云々とある敎を、徹底的に傳へようとしたものである。しかし乍ら、斯うした敎を文字通りに、すべての場合に於て奉じると云ふのが、

眞の人道にかなはないものであることを、彼は久しく氣附かないでゐなかつた。これについて甚だ興味のある一節を、クロポトキンの『露西亞文學の理想と現實と』から引用して見たい。

トルストイは、彼が曾つて或る汽車の中で、一隊の兵卒を率ゐてゐるツーラ縣知事に會つた時のことを吾々に語つてゐる。兵卒達は銃を持ち、樺笞を一車に積んでゐた。彼等は地主の利益の爲めに、また法律を公然と破壞する爲めに、政府の許した明白な盜賊行爲に加擔して、或る村の百姓を鞭ちに行くところであつた。彼は一人の「自由主義の婦人」が、彼等の面前に於て、公然と、聲高く、力强い言葉を以て、知事や士官達を罵り、彼等を侮辱することを、例の寫實的な筆で描いてゐる。で、かうした征伐が實際にはじまると、百姓達は本當の基督教的忍從を以て、自ら震える手で十字架を描いて地に倒れる。そしてこの犧牲者の心臟が鼓動を止める迄殉じ且つ鞭たれる。しかし士官達はこの基督教的謙抑を少しも感じてゐるのではない。彼は此事をも描いてゐる。此征伐に出會はした時、トルストイは何をしたか。吾々はそれを知らない。彼はそれを語つてゐない。彼は多分士官達には抗議を申込み、兵卒達には彼等に從はないこと――卽ち反抗することを忠告したであらう。何れにしても彼は、此害惡に面して消極的態度を取ることは、無抵抗主義を取ることは、此害惡の默認を意味することになることを感じたに違ひない。それを加勢することを意味せねばないのみならず、惡に對して消極的忍從の態度を取ることは、トルストイの性質そのものに反してゐる。それ故に彼は、永く斯うした教理の遵奉者であることに堪え得ないで、間もなくこの福音書本文の解釋を「暴力を以て惡に敵する勿れ」と云ふ意味に變へた』云々。

右の如き士官達の暴虐に對して、トルストイが如何なる態度を取つたかについてのクロポトキンの想像は、かなり合理的なものでもあり面白いものである。しかし乍ら、私共はあれに關聯して、更に今一の同樣に合理的な同樣に面白い想像をも試みることが出來るやうに思ふ。

卽ち、トルストイにして若しあの暴虐の傍觀者でなく、むしろあの暴虐を加へられた百姓共であつとしたならばどうか。トルストイは右の如き暴虐に對し、奮然として反抗をなさなかつたであらうか。そして其反抗しないよりも遙かに人道的な道德的な行爲であると思はかつたであらうか。

勿論、自己の所有する正當と思ふ權利、並びにそれの正當と

思ふ主張の方法なぞは、人を異にし場合を異にするに從つて異る。また一般的に云へば、人類の歴史の推移につれて、より野蠻的なものからしてより文明的なものへ、より禽獸的なものからしてより人間的なものへ、若しくはより超人間的なものへ進化する。

人類の文化が無限に向上して行くものとすれば、私共の權利の主張は、精練に精練を重ね、醇化に醇化を加へた結果、恐らくは殆んど權利の主張と見做されないほどに文化的なものにまで向上して行くであらう。

トルストイが現實的な道德訓として、無條件の無抵抗を遵奉することが出來ず、條件附きの無抵抗を、又は條件附きの抵抗を承認せざるを得ざるに至つたのは、甚だもつともな事柄である。

絶對的無抵抗は、私共の權利の主張としての抵抗が、殆んど抵抗と見做されないほどに文化的になつた場合の道德である。私共人間が殆んど人間以上のものにまで完成した場合の道德であり、理想としての、極致としての道德である。

そして此の如き、極致としての、理想としての道德と、一部の人々がするやうに、空想として斥けたり輕んじたりするやうな心持は、聊かも私共にないのである。

けれども、出發點と途上と歸着點とは別々である。私共の道德的生活に於ける標準が、十分に現實的なものであり得る爲めには、その生活の出發點と歸着點とが、途上と歸着點とが混同されてしまつてはならぬ。卽ち私共は「無抵抗」といふ理想の絶巓をめざしながら、「抵抗」と云ふ現實の傾斜面を攀ぢ登らなければならないのである。

（二）鬪爭の以前に和合なし

漫りに我執するの非なるは、殆んど自明の事である故に、前章に於てもわざわざ說くことをしなかつた。双方に於て漫りに我執し合つた結果の鬪爭が、その勝敗に係はらず、二者の何れをも本當に益しないものであること、これは常識に於てたやすく承認され得べしと思ふ故に、敢へて精論することを略して置かう。

漫りに我執するものと、自己の正當なる權利を正當なる方法に於て主張するものとの間にも鬪爭は起る。此場合勝敗が何れに歸しようとも、本當に有意義であり得るのは、正當なる權利を正當なる方法に於て主張した者の行動だけである。彼は道の悲壯なる自覺の中に、自足することが出來ればそれでよい。

正當だと思ふ自己の權利を、正當だと思ふ方法に於て主張する一人の人間と、同じく正當だと思ふ自己の權利を、正當だと思ふ方法に於て主張する他の人間との間にも、闘争の起らないことはない。どんなに激烈な、一生懸命な闘争でも起らないことはない。

しかし乍ら此の如き闘争は、決して忌避するべきものでなく、寧ろ大に望ましき、大に慶ぶべきものである。なぜと云つて、唯だ此の如き闘争によつてのみ、まことの融和か、和合か、合致が生じ得るからである。

路傍にころがつてゐる二の石塊は、互に相離れて居り、互に相争はないでゐる。けれども、この故にこの石塊の間には、融和があり和合があり合致があると云へるであらうか。換言すれば、平和があると云へるであらうか。よしありとしても、さうした平和に何の意義があり、何の價値があるであらうか。

單に戰はないでゐるといふことが平和の内容でない。なぜと云つて、もし左樣なるものが平和の内容であるならば、平和は單なる「皆無」にすぎないからである。

これに反して二人の人間が、本當に理解し合つた友人、もしくは友人以上のものになる場合を考へて見るがよい。彼等にして互に若し、あらゆる場合にあらゆる事を讓歩し、あらゆる争闘らしきものを避けることにのみ努めてゐたとしたらどうか。彼等の間に如何なる相互的理解を致し得たであらうぞ。否、彼等にして各正當だと思ふところの自己の權利を、正當と思ふ方法に於て主張し合ひ、男らしくいさぎよく相争ふことをしないでゐたならば、どうして本當に接近し合ひ、握手し合ひ、抱擁し合ひ、合一し合ふところまで行き得ようぞ。

闘争の以前に和合なしといふことの事實は、友人同志の理解の進歩に於て見られると同樣に、もしくは同樣以上に、異性間の戀愛關係の發生成長等に於て見られると思ふ。

一般に生物の受胎が、精蟲の卵子に對する突撃及び其應戰によることの事實から說き出すまでもなく、性愛の本質はかなりに文化の進んだ人類の間に於てさへ、所詮異性を征服し領有しようとする欲求である、もしくは異性から征服され領有された形式に於て、その異性を征服し領有することの内容を獲得しようとする欲求である。

勿論、リファインされた男女の間であればあるほど、その性愛の闘争的本質は、愈々原始的野蠻性を遠ざかつて居り、時には殆んど闘争的な何物をもつてゐないやうにさへ見える位であ

る。けれども、犀利なる觀察眼をもつた心理學者等は、さうした場合にも尙ほ且つ、性愛の鬪爭であるといふ事實が、十分に暴露されてゐることを看過しないのである。加之性愛の本質的な傾向を病的に誇張したものとしてのサディズム並びにマゾヒズムの如きは、性愛と鬪爭との分離すべからざる關係を無殘なる程度にまで暗示してゐるではないか。

即ち、變態性慾としてのサディズム、マゾヒズムの患者等は、相手の異性等を或は肉體的に或は精神的に、苛虐し傷害し殺戮することによつて、その性慾の滿足を經驗する。若しくは反對に相手の異性から、或は肉體的に或は精神的に、苛虐され傷害され殺戮されることによつて、その性慾の滿足を經驗する。否、甚だしきに至つては、單にかくの如き事によつてのみ、よく性慾の滿足を經驗し得るのである。

かくの如く、性愛戀愛の最も原始的なものに就いて考察して見ても、その最も發達したものに就いて考察して見ても、乃至極度にまで病的なものに就いて考察して見ても、鬪爭のなきところに鬪爭の以前に和合のなきことが、遺憾なく明白にされてゐるのである。

かく云へばとて私共は固より、クロポトキンなぞの所謂生物界に於ける相互扶助の事實及び敎訓を、聊かも無視しようとするものでない。

私共人類も他の生物と同じく、個人としてまた團體として、互に扶助し合つて行くものであり、扶助し合つて行かねばならないものである。けれども、私共がその相互扶助へ來るまでには、私共は互に權利を主張し合ひ、抵抗し合つてゐなければならなかつた。即ち、その和合にさきだつて鬪爭がなければならなかつたのである。

更に別個の見地よりするも、私共が互に扶助し合ふのは、私共の共同の敵手と新しき鬪爭をなさんが爲めのものに外ならない。そして其新しき鬪爭が齎らす新しき和合の上に、新しき相互扶助のはじまること、はじまらねばならないことは勿論である。

乃ち、外に向つての生存競爭と、内に向つての相互扶助としての事實及び敎訓を承認した上で、私は敢へて鬪爭の以前に和合なしと言ひ、私獨特の見地から鬪爭是認論をきづき上げてゐるのである。

私は鬪爭を是認する。單に大目に見るといふ意味に於てゞなく、寧ろあるべきもの、あらねばならぬものとして是認する。

否、眞實の和合に到達すべき、唯一の眞實の道筋として手續きとして、その徳を頌することをさへ憚らない。

けれども固より一切の鬪爭を悉く皆是認し讃頌するのではない。正當なりと思ふ自己の權利を、正當なりと思ふ方法に於て主張したる結果の鬪爭でなければ、無用にして有害なものであり、道徳に反したものである。

權利及びそれを主張する方法の正當なると不當なるとは、一般文化の向上程度を標準として決定される。乃ち、或る種類の同一なる鬪爭が、一の社會に於て是認されると共に、他の社會に於て非認される所以であり、一の時代に於て道徳的なりとせられ、他の時代に於て反道徳的なりとせらるる所以である。

從來の大抵の戰爭是認論者は、一切の戰爭を無差別に是認して憚らないほどに亂暴であり無責任であつた。少くとも、論理の粗大を免れてゐなかつた。或は、單に現在の權力者階級に都合よき戰爭——例へば國際間の戰爭の如き——をのみ是認するほどに、厚顔であり無恥であつた。

私は、いかに鬪爭もしくは戰爭を是認するとは云へ、それらの粗暴なる、或は破廉恥なる戰爭謳歌者等と、無造作に混淆されてしまふことの迷惑を我慢しきれない。

私は鬪爭是認論者としての私の立脚地をより明らかにする爲めに、一二の具體的例解を試みることにする。

武士道時代の日本に於ては、君父の仇を復するといふやうなことが立派に道徳的な鬪爭であつた。けれども今日にあつては、其鬪爭の動機や理由から見ても、其鬪爭の方法や手段から見ても、到底道徳的なものであると云はれないのである。

今日の國家と國家との戰爭なるものを、正直な心から觀察して見るのに、戰勝國となつた場合、少數の金持が更に金持となり、軍人や役人達が立身出世の出來るのはたしかである。しかし一般國民は殆んど何等の利福を分たれない。もしくは利福を分たれない以上であることを、殘念ながら餘りに多くの實際の事實が證據立ててゐる。

これに對して、戰敗國になつたとする。何よりも先づ少數の特權階級の人々にとつて、かんばしくない結果になる。一般國民も有難い目に遭はないのは勿論である。しかし乍ら、一般國民のひどい目に遭はされるのは、戰敗國になつたが爲めであるよりも、戰敗國になるまで戰つて、ざんざ搾り上げられたが爲めであることを注意しなければならぬ。たやすく戰敗國になればなるほど、一般國民の負擔の輕くして濟んだことをも注意しな

ければならぬ。刀に賴らずして敗北者になつた場合と、戰勝國になつた場合と、一般國民にとつてどちらがより不幸であるか、かなりの疑問であるといふことを、注意しなければならぬ。

乃ち、戰勝國になつた場合も、戰敗國になつた場合も、どのみち貧乏籤を引かされるのは一般國民である。かくの如き戰爭が、單なる特權階級の爲めの强制されたる鬪爭が、今日の人類の已に到達してゐる文化程度に照らして見て、果して有意義なものと云へるであらうか。

少くとも、その鬪爭の方法及び手段が、所謂文明國民相互の間に用ひられたるものとして、十分に適當したものと云へるであらうか。人類の文化を逆もどりさせるものとして、私共の理性と感情との兩面から、呪咀されることを値してゐないと云へるであらうか。

私は今一度執拗に言明して置く。私は頭腦の粗大な、もしくは學者的良心をなくした戰爭是認論者等と同一視されることを此上もなく迷惑に思ふ。

私が鬪爭を倫理的に是認するのは、それが人類の一般的文化につれて進化するものと見る限りに於てである。乃ち、私の立脚地は、現實的平和主義者の立脚地にほかならないのである。

（三）近代的階級鬪爭の意義とマルクス派學者等の誇張と

同じ社會の內にあつて、何等かの社會的特權を有するものと、有しないものとに分たれる。或はその特權を有する程度によつて、いくつにも分れる。これが階級の差別である。如何なる社會にも何等かの階級別はある。また一の社會の內にも、ただ一種の階級別があるだけでなく、幾通りもの階級別があり得る。例へば今日の日本の社會に於ても、華士族平民の階級別だとか、智識階級對無智識階級（これは少し穩かでないかも知れない）がの階級別だとか、富豪階級中產階級無產階級の階級別だとか、色々のものがある。

しかしながら、今日の世界全體を通じて、文化史的に最も重要なる意義を有するのは、資本家階級と勞働者階級との對立である。マルクス派の所謂奪掠階級と被奪掠階級との對立である。此事實を否定することは、恐らく何人にも出來ないであらう。

此事實及び、此事實を招致した原因を明らかにすべく努力した點に於て、マルクス派學者等の貢献は決して小さなものでな

い。

とは云へ、ただに近代のみならず、過去の如何なる時代にあつても、資本家對勞働者の如き經濟的階級別があつたと說き、しかもさうした經濟的階級別が常に最も重要なものであつたやうに、否、殆んど一のものでさへあつたやうに言ひ做すのは、マルクス派學者等の誇張であると思ふ。

なぜと云つて、過去のある時代には明白に、宗教上特權を有するものと有しないものとの對立は、今日の資本家と勞働者との對立に讓らないほどの、重要なる意義をもつた階級別であつた。即ち、當時預言の能力を有するもの、魔法巫術をよくするものなどは、一般人に對する立派な支配階級權力階級であり得たのである。

また過去の或る時代には明白に、武力を有するものと有しないものとの對立が、今日の資本家と勞働者との對立にも讓らないほどの、重要なる意義をもつた階級別であつた。即ち、當時弓矢をとつて一騎當千の實力あるものなぞは、百姓町人共に對する支配階級權力階級の中の、しかも取り分け大なる特權をもつてゐたものなのである。

所謂近代的資本主義經濟組織の出來上るに至らないでゐる過去のあらゆる時代にまで溯つて、經濟的階級鬪爭觀の適用を重要視せんとするのが、マルクス派學者等の意識的或は無意識的の誇張であると見る私は、他面また彼等が、資本主義組織の解體と共に、一切の階級的差別も鬪爭も消滅するもののやうに考へてゐるのを、餘りにも理想派的な考方であると言ひたいのである。

なぜと云つて、無限に遠い昔からして人類の歷史を支配して來たやうな一大原理が、二十世紀の初年に於て、晩くとも其中葉に於て、絕對に其作用を停止するものと考へる如きは、餘りにも科學的可能性及び蓋然性を無視したものである、餘りにも子供らしき、お伽噺じみたものであるからである。

無限に遠い過去からして存在してゐた階級鬪爭は、當然また無限に遠い將來にまだ存在し續けるであらう。私共はどうしても斯樣に考へざるを得ないのである。

しかし乍ら、階級を差別するところの標準は、並びにその階級鬪爭を特色づけるところの方法手段等は、時代と共に限りなく推移して來て居り、また限りなく推移して行くべきものであらう。斯樣に私共は考へざるを得ないのである。

例へば、現在の資本主義制度が解體してしまつたとする。そ

の場合、資本家對勞働者の階級鬪爭が跡を絕つてゐるのは言ふまでもない。そして、その限りに於て現在よりもより善き社會になつたのである。

けれども、資本家對勞働者の階級的差別が跡を絕ちつゝあつたとき、夙くも已に他の何等かの新しき階級差別の發生しはじめてゐたことをも想像しなければならぬ。そしてそれから後の人々にとつて、その新しき階級的差別が新しい重荷になつて來べきこと、その新しき問題がまた新しき階級鬪爭によつてのみ解決さるべきことをも想像しなければならぬ。

要するに、マルクス派學者等の偏經濟的な階級鬪爭說は、その啓蒙的な唯物史觀と共に、マルクス等の生活をとり卷いてゐた思潮の力强い反動として、もしくは彼等の時代に於ける時代精神の熱烈なる反映として、成程無理ないと思はれるものである。だが、それだけにまた、それらの精神や思潮を超越して、更により高い見地から、更により廣く展望しなければならぬとき、かなり融通の利かない、偏狹な理論であることを發見されるのである。即ち、その適用を專ら、時代資本主義制度の批評的觀察に限つた場合にのみ、非常に痛切であり痛快でもあり得るのである。

偖て次ぎには、今日最も重要の意義を有する資本家對勞働者の階級鬪爭が、倫理的に批判して見て、如何に正しいものであるか、如何に正しからざるものであるかを考へて見たい。勞働者階級はその當初、薄給に忍び得ずして賃金の增加を要求し、虐使に耐へかねて時間の短縮を迫り出した。けれども、今日に於て世界の勞働者階級が、少くともより自覺した勞働者階級が、懸命に必死に要求してゐるところのものは、單なる賃金の增加や時間の短縮等に止まらない。彼等はその失はれたる人間的平等を、もしくは人間的自由を回復する爲めに、近代的奴隷制度としての資本主義經濟組織を、根本的に改むべく奮起してゐるのである。

そして勞働者階級は、かくの如き要求を、彼等の正當なる權利の主張であると思つてゐる。たゞに彼等が左樣に思つてゐるのみならず、實際にもまた、大體に於て正當なる權利の主張でもあり得たであらう。

かくの如き勞働者階級の要求を、それ〴〵の程度に於て斥けるところの資本家階級は、果して彼等自身の態度を如何やうに見てゐるか。大體に於て、同じくまた彼等の正當なる權利の主張であると思つてゐる。たゞに彼等自からが左樣に思つてゐる

のみならず、實際にもまた、今日一般の文化程度から見て、幾分正當なる權利の主張であり得たであらう。

乃ち、公正なる見地より見るとき、勞働者階級も大體に於て正當なる權利を主張し、資本家階級も幾分か正當なる權利を主張するところに、今日の階級鬪爭が成立してゐる。そして此限りに於て、今日の階級鬪爭は和合を來す爲めの鬪爭であり、今日の階級別其物をなくする爲めの鬪爭であり、從つて倫理的に有意義な鬪爭である。加之、勞働者階級の主張する權利が、主觀的にも客觀的にも、より正當なるものになつて行けば行くほど、彼等の鬪爭的態度は愈々より道德的なものになつて來る。資本家階級の主張する權利が、主觀的にも客觀的にも、より少く正當なるものになつて行けば行くほど、彼等の鬪爭的態度は愈々より少く道德的なものになつて來るのである。

私共が今日の資本家對勞働者の階級鬪爭を是認する論據としては、以上述べて來たところのものでも、足りない事はなささうである。けれども私共には別に今一の、ずつとより高い見地からしての論據が持ち合はされてゐる。乃ち更に章を改めて、さうした別個の論據をも提示して見たいと思ふ。

(四) 所詮何人の爲めの鬪爭なりや

現代の資本主義經濟組織が、勞働者階級にとつて其儘にして置けない害惡であることは、總ての良心と常識とを有つた人とからして承認されてゐる。

けれども、その害惡が如何なる意味に於て、また如何なる程度にまで勞働者階級に禍してゐるかについては、ただに世間普通の人々の理解が不十分であるのみならず、特に社會問題の研究に沒頭してゐる人々、社會運動に從事してゐる人々の見るところすらも、往々にして的をはづれてゐるやうに思はれる。

そして勞働者階級が如何やうに、如何ほどまでに不幸であるかに關する洞察の不十分は、今日の經濟組織の下に於て、資本家階級の境遇もまた決して幸福なものでないといふ大きな事實を、全然想見させないでしまふことになるのである。

資本主義制度も、その發生の當初にあたつては、恐らく人類を幸福にすべく役立つたものであらう。また其故にこそ發生したものであらう。

資本主義制度がそのはじめ、少くとも資本家階級を幸福にし、それに依つて間接ながら一般人類をどれだけか幸福にしたもの

であらうことは、私共にも推察され得る事柄である。

けれども、資本主義制度の發生成立したる當初の文化史的意義が、その爛熟期頽敗期に及んでも尚ほ且つ持續してゐるものの如く言ひ做すのは、廉恥心を失へる御用學者の曲學にすぎない。

一杯二杯を傾けてゐるのは、人が酒を飲んでゐるのである。けれども、杯の重ねられるにつれて、追々に酒が酒を飲むやうになる。そして終には、酒が人を飲むところまで行きつかねばおさまらないものである。

丁度そのやうに、はじめには人が金を支配してゐる。中頃は金が金を支配する。そして終には、金が人を支配するところまで來るのである。

丁度そのやうに、はじめには人の爲めに資本があつた。中頃は資本の爲めに資本があつた。そして今日では終に、資本の爲めに人があるのである。

これを生産の一事に就いて見るも、今日の資本主義的生産は、如何なる人間を幸福にする爲めにでもなく、ただ資本その物を肥大させる爲めばかりになされる生産である。如何なる人間が犧牲者にされやうとも顧慮するところなき、一に生産の爲めの生産である。乃ち、如何に善美なる物を生産すべきかよりも、**如何に多量の生活資料を生産すべきかをのみ念頭に置いてゐる。**貨幣をもつて價値を測定され得るやうなもの、即ち商品を、專ら多量に生産することにのみ標的を置いてゐるのである。

ところで、質的に善美なる生産物は、質的に善美なる勞働(もしくは勞働力)に須たなければならぬ。そこへ質的に善美なる勞働とは、それぞれの人格が、それぞれの固有なる本性を、個性を發揮したところのものでなければならぬ。所謂名工匠の制作の努力の如きは、その最善なる實例である。

けれども單に、資本その物の肥大をめあてに、量的に多額の生産物を獲る爲めばかりには、勞働の質的吟味に重きを置くことの必要がない。加之、左樣なる吟味に拘泥すれば量的に失ふところが少くない故に、むしろ忌避すべきものと考へられるのである。

偖て、勞働(もしくは勞働力)を量的にのみ計量して、質的に評價することをせず、從つて勞働のすべてを沒個性的反個性的のものにしてしまふといふのは、とりも直さず人間を人間として扱ふことをやめ、器械として使用するのである。かかる人間を器械の側に置く時は、人間が器械を使役するのでなく、器

械が人間を使役するのである。器械が人間の手足の延長であるといふ、本來の正當なる關係は顚倒してしまひ、人間が器械の必要なる若しくは便利なる一部分となしてゐるのである。これが、人間の勞働を苦痛なるものにし、不快なるものにし、願はしからぬものにしないでゐられようか。それが人間をより惡しくするものでなくして何であらうか。勞働時間を如何に短縮しても、依然としていやなものであり害になるものであると共に、それが延長されればされるほど、愈々人間の禍するものでなくして何であらうか。

乃ち、今日資本家經濟組織の下に於て、一般勞働者が其勞働から直接經驗するところの苦痛と被害とは、あまりに多くの時間を束縛されるよりさきに、あまりに本性を遠かつた、本性に逆行して仕事へ驅り立てられてゐるといふ點にあるのである。切言すれば反個性的な器械化された劣等勞働へ驅り立てられた上に、あまりに多くの時間を束縛されてゐると云ふ點にあるのである。

勞働が個性的であり、願はしきものであり、それ自體の中にも目的を有するものであれば、勞働する者は勞働するといふことによつて第一の、しかも最も大なる報酬を受ける。さうでない場合は、勞働者の報酬として要求するところのものは、いきほい專ら生產物の分配といふ方面にのみ向けられる。

ところで、資本主義制度の下にあつては、資本家の獲得するところに對して勞働者の獲得するところが、あまりにも少さ過ぎることは云ふまでもない。そして勞働者は殆んど例外なく、不適當な過度な勞働を餘儀なくされた上、更に生活資料の十分なる量を給與されない爲めに、たゞに其生活を向上させ得ざるのみならず、又殆んど單なる生存その物をさへ危うくされてゐる有樣である。

ところで資本主義經濟組織の下に、勞働者が悲慘を極めたる生活を強いられてゐるとき、資本家はそれに反比例した幸福を享受してゐるであらうか。

殘念な事乍ら、大抵の勞働者等にはさう見られてゐるやうである。それらの勞働者の心持に共鳴する、大抵の社會問題研究者社會運動家なぞからも、矢張りさう考へられてゐるやうである。そして又、生產物の量的及び質的吟味の問題を、從つて勞働に於ける個性及び沒個性の問題を、省察したことのない此等の人々が、資本家の境遇を左樣に幸福なものと見、考へてゐるのは自然の事である。

けれども、私共の見るところを以てすれば、――今日までのところでは、特に日本に於ては『私』といふ單數代名詞を用ひた方が妥當であるかも知れない――私の見るところを以てすれば、資本家も決して、他から考へられてゐるほどに幸福でない。たゞにそれほど幸福でないのみならず、寧ろかなりに不幸な地位に、時には彼等自らの心付いてゐるより以上にすらも不幸な地位に立たされてゐるのである。

なぜと云つて、資本家は先づ、勞働者が餘りに反個性的な勞働を餘りに多く强ひられてゐるとき、殆んど何等の勞働にも服しないでゐる。精しくは、資本家的生産にあつては、個性に適應したる勞働を見出すことが出來ず、さればとて生活資料を稼ぎ出す必要とてもなき以上、わざ〱反個性的な、從つて面白くもなき勞働に參加する氣にもなれないのである。よし偶々資本家的生産の圏外に出て、別に自由の小天地を開拓し、個々の本性に適應したる勞働――例へば、所謂藝術創作の如き――に服しようとするも、それが必要に資本主義社會の常識から、所謂不生産的なもの、馬鹿げたもの、氣違ひじみたものとして、極度に蔑視され愚弄される故、加之、今日の資本主義經濟組織からの惡影響と抗爭しながら。自己の本性に適應したる勞働――例へば、所謂藝術創作の如き――をなす爲めには、極めて特殊の、非凡の天分素質を必要とする故に、多くの場合不實行に終ることを免れないのである。

そして何等の勞働にも服せず、たゞぶらぶらと遊び暮らしてゐるのは、何よりも先づ他から想像されるほど樂なもので ない。寧ろ往々にして、殆んど堪へがたきものに感じられるといふのは、私共の前に十分證據立てられたる明確なる事實である。

また、無爲にして生きるといふのは、たゞに堪へがたき苦痛になるばかりでない。それが久しきに亘れば亘るほど、いよいよ當人達自身から氣遣はれてゐるより以上にすら、心身を毒するものである。

然し、私は敢へて心身を毒するといふ。久しく無爲に生きてゐる人々が、たゞに其肉體的の健康を損傷するばかりでなく、また其精神的のすこやかさ、强さ、美しさをも喪失するに至るのは、殆んど過勞者の末路の悲慘を極めたるに讓らないものがあるからである。加ふるに、勞働者が生活資料の缺乏によつて、空腹に過ぎることに依つて、その身心を毒されてゐるのに對し、資本家は生活資料の過剩によつて、滿腹に過ぎることによつて、その身心を毒されてゐるのである。

然り、私は再び身心を毒されるといふ。生活資料の多量なるに過ぎて、肉體的にも精神的にも消化力を弱められ、血のめぐりを惡くされ、風霜に堪へる力をそがれ、遂にあらゆる病弱と頽敗とへ逐ひ落されるに至るのは、生活資料の缺乏に依つて、肉體的にも精神的にも共死滅へ急ぐところの勞働者の場合と多く異るところを見ないのである。

以上の叙述は未だ以て、資本家階級が殆んど勞働者階級に讓らないほどに不幸であるといふことを明らかにすべく、十分なものでないかも知れない。私は更に、この階級が生活資料として與へられてゐるものの質的吟味を試み、私の觀察をより徹底したものにして置きたいと思ふ。

前にも述べたる如く、資本主義的生産にあつては、生産されるところの物が、人間の生活にどれだけ益するものであるか、質的に見て如何に善美なものであるかを殆んど問はない。問ふのは專ら、如何に多量の貨幣的價値を生産して、如何に速かに資本それ自體の增大を招致し得べきかの一事である。

乃ち、資本主義生産にあつては、自然の需要に應じて供給するといふが如き、控目な生産に甘んじてゐられない。しかし結局生産過多を持てあますに至らないことの爲め供給を以て逆しまに需要を促すの方策に出る。供給によつて需要を促すべく、そもそも如何なる性質の商品を生産することが最も便利であるか。人間の欲望を刺戟するに最も容易なるものを生産すること、それである。

ところで人間の欲望なるものは、その生活を維持し向上させる上に實際必要なるものに對して起されることもあり、單に必要と思はれるだけのものに對して起されることもある。そして實際に必要なるものは、例へば或る種類の食料品なぞの如く、一定の限度を越えて欲望されることのないものであり、單に必要と思はれるだけのものは、例へば或る種類の裝飾品なぞの如く、際限なく欲望しつゞけられ得るものである。加之、人間は動もすれば實際に必要なものを後廻しにしてまでも、單に必要と思はれるだけのものを欲望するやうな淺間しき傾向をすら有つてゐる。さうした欲望を横合から、色々に挑發された——プカプカドンドンや新聞廣告などによつてまで——場合に於て尚更さうである。

かくの如く、一方には欲望される限度があり、他方にはその限度がないとしたならば、また一方が往々他方の爲めに後廻しにさへされるとしたならば、また特に一方の欲望に挑發の餘地

がなく。他方の欲望に挑發すればしただけの効能があるとしたならば、資本主義的生產が主力を傾倒して所謂贅澤品の生產に從ふといふのは、極めて自然の勢であると云はねばならぬ。

加ふるに、勞働者階級は多くの場合、單に欲望するに止まつて、實際に需要するに至らない。なぜならば、それに必要なる購買力を有しないからである。これに反して、資本家階級の欲望は、それが挑發されただけそれだけ、悉く皆需要となつて現れる。從つて、さなきだに贅澤品の生產に主力を傾倒しがちなる資本主義的生產は、愈々絕對的必要品に遠いもの丶生產にばかり走つて行くのである。又其結果として屢々必要品の一般的拂底をさへ訴ふるに至るのである。

ところで、思想の膚淺なる在來の經濟學者等は殆んど皆、何が生活上の必要品であり、何が生活上の贅澤品であるかについて、何等の徹底したる見解を持してゐなかつた。私共は彼等に依つて作られて來た、漫然たる習俗的の定義と概念とに滿足することが出來ない。私共の見るところを以てすれば、必要品とは兎に角、人が人として本當に生きる爲めに、精しくは肉體的にも精神的にも、より善く生きる爲めのものである、贅澤品とは、たゞに此用を爲さゞるのみならず、むしろ肉體的にも精神的にも、人の本當の生活を壞敗させなければ置かないやうな物の謂ひである。

そして此の如き差別よりすれば、今日の勞働者階級が殘忍なる誘惑にかかつて、折々なまなかなる贅澤品を少しばかり買はされてゐると共に、實際の必要品をあまりにも僅に與へられてゐるのは改めて說くまでもない。資本家階級もまた、本當の必要なる生活資料を十分に與へられてはゐないのである。たゞにそれを與へられてゐないだけでなく、寧ろ不必要にして有害なるさまざまな物を、あまりに多く與へられるのである。しかもそれらの物が、屢々必要品としての假面をつけてゐる故に、それの及ぼす害惡は彼等自らに知られてゐるよりも酷だしく、彼等に好意をもたぬ大多數の社會批評家等の想見されてゐるよりも更に一層酷だしいのである。

偖て、同じく資本家主義的生產に祟られて、必要に遠くして贅澤品に近き物ばかりを、餘りに多く有ち過ぎてゐる資本家の生活と、それをさへ餘りに少く有ち過ぎてゐる勞働者の生活と、いづれがより不幸なものであらうか。これはたやすく斷定することの出來ない位の問題である。

見來れば、勞働者は惡しき勞働のみ強いられて居り、惡しき

生活資料をさへ十分に與へられて居らない點に於て、資本家は惡しき勞働をさへ爲すことの機會を有つて居らず、惡しき生活資料をのみ十分過ぎるほど與へられて居る點に於て、共にともに同一の、橫暴殘虐なる資本主義經濟組織の鐵鎖にいましめられたる奴隷的存在である。此儘に放置すれば、肉體的にも精神的にも、結局は同一の死滅に終るべき人間である。

　ところで此恐るべき情態を、彼等自らは如何に見てゐるか。

　勞働階級は、多少の見當違ひと淺薄さとを免れないながらも、兎に角彼等自らの地位の甚だ不幸なものであることを、其不幸の一に資本主義經濟組織に原因してゐることとを覺るに至つた。そして其組織の改造を、特に根本的の改造を希望し、要求し、期待するに至つてゐる。

　然るに資本家階級は、彼等自らの境遇のかなりにつまらないものであることを感じながらも、そのつまらなさが資本主義的經濟組織の避くべからざる結果であつたことを、未だ認識するに至らないのである。そして愚かにも、維持するに値しない現狀を維持すべく、意識的無意識的に改造の機運を阻止し、改造の努力を防遏することに傾いてゐる。

　この必然の結果として、二の階級の間に起つて來たのが、愈々猛烈になつて行きつつあるのが、現代の階級鬪爭である。

　乃ち、右の如き考察よりすれば、資本主義制度撤廢の要求は、勞働者の大多數が未だ心付かないでゐるにもせよ、單に勞働者階級の人間を幸福にするだけでなく、資本家階級をも同樣に幸福にすることの要求に外ならない。そして資本家階級は、彼等自らも幸福にする爲めの運動を、懸命に必死に妨害してゐるのである。

　かくの如き見地に立つとき、私共は勞働者對資本家の階級鬪爭に、特殊のより重要なる倫理的意義を承認せざるを得ず、資本家階級の此上の頑迷なる我執を遺憾に思ふだけそれだけ、勞働者階級が愈々聰明に且つ勇敢になり行き、從つて愈々道德的になり行くことを、熱望し期待せざるを得ないのである。

（五）　現代階級鬪爭の戰術及び武器

　現代の階級鬪爭が如何なる動機にもとづき、何を標的としてなされるかの考察から、それを是認していいことの理由は、一通り擧げ示したつもりである。けれども、それが如何やうにして戰はれるかを、即ち、それの戰術及び武器が如何なるものであるかを吟味して見なければ、私の勞働者對資本家階級鬪爭是

認論は、いまだその重要なる一面を閑却してゐるものであることを免れない所謂常識に立脚すると云ふ人々は屢々言ふ――兎に角暴力を以て抗争するのは空しくないと。結局條件附無抵抗主義者、又は條件附抵抗主義者になつてトルストイなぞも言つてゐる――暴力を以て悪に敵する勿れと。

暴力とはそもそも何であるか。何の謂ひであるか。法律に背反するところの行爲、又は合法的ならざる力の謂ひであるか。恐らくはさうした力や行爲が、必ずしも暴力であるとは云はれまい。なぜと云つて、法律其物が悪法として非難され得ることを思へば單に合法的でないといふだけでは强ち大なる反道德たることを意味してゐないらしいからである。

しからば、暴力とは腕力武力等の謂ひであるか。恐らくは腕力武力等も、必ずしも暴力であるとは云はれまい。なぜと云つて、大抵の人々が警察力の如きを、暴力であるとは考へてゐないらしいからである。

かくの如く觀て來ると、暴力の意義甚だ漠然たるを免れない。そして、私共はただ世間の人々が、自分達に都合惡るき力のあらゆる種類を、すべて皆暴力と呼び慣はしてゐることの事實を目撃するだけである。従つて現代階級鬪争の戰術及び武器を吟味するに際しても、それが所謂「暴力」であるや否やの如きを重要なる問題としないのである。

私共が或は是とし或は非とするときの標準は、人類の、特に所謂文明人等既に到達してゐる一般的文化のレヱルより見て、適當なものであるや否やである。必要なもの避くべからざる手段であるや否やである。

偖て今日、自覺したる勞働階級が、資本家階級との鬪争に於て取るところの方法は、大體に於て政治的改善に倚賴するものと、直接行動に倚賴するものとの二類に分れる。そして前者の是非に就いては、わざ／＼問題にするほどのものもない。乃ち專ら直接行動としてのストライキや、サボタアヂや、ボイコットや、ラベル等が、如何に正しいものであるか、如何に正しくないものであるかを考へて見たい。

假りに現代階級鬪争に於て、此等の戰術及び武器より以上により人間的なより文化的なものが勞働階級の爲めにあつたとする。そして、これらのものを必要としなかつたとする。さうした場合に於て、尚ほ且つストライキやサボタアヂやボイコットやラベル等の如き戰術及び武器を用ひることの不善なるは勿論である。

又假りに、此等の戰術及び武器が私共人類の已に到達してゐる一般的文化のレヱルから見て、不適當なものであり、逆もどりしたものであつたとする。さうした場合に於て、尙ほ且つ勞働階級がそれを用ふることの不道德なること、これはた多言を須たないところであらう。

しかし乍ら、歐米先進國に於てすらも、政治的改善の齎らす効果の、かなりいい加減なものであることが知れ渡つてゐる今日、たとひ政治的手段の意義を全然否定しないまでも、何人かよくストライキ、サボタアヂ等の直接行動を必要ならずと云ひ得るものぞ。何人かよくそれらの戰術及び武器を、最も有効なものに非ずと云ひ得るものぞ。

又、國際間の戰爭に於て、むごたらしく砲火が開かれ、爆彈が投下され、水雷が敷設され發射されてゐる今日、人が人を審いて、濫りに生かしたり殺したりしてゐる今日、何人かよく勞働者階級の止むを得ずして取るところのそれらの直接行動を、野蠻な武器であり非文明な戰術であるとは云ひ得るものぞ。

私共の奇怪に思ふのは、大體に於て勞働階級の直接行動をも是認する人々にして、尙ほ且つサボタアヂを是認するに躊躇する場合のあることとである。卽ち、彼等は往々にして次ぎの如く言ふ。曰く、『低廉なる賃金に對する低級なる勞働』の宣言ならば、そして此意味に於てだけならば、サボタアヂは必ずしも排斥されることを要しない。けれども、怠惰にして貪ることを意味するならば、それは非人道的なものとして、非認し去られねばならないと。

私共の見るところを以てすれば、かくの如き見解は甚だ論理の徹底を缺いでゐる。なぜと云つて、若し『低廉なる賃金に對する低級なる勞働』の宣言より以外に、別個の意味をもつたサボタアヂが不道德であるといふならば、勞働の契約を破棄してストライキをなし、資本家の利益を侵害する如きも、同樣にもしくは同樣以上に不道德であると云はねばならないからである。

思ふに、サボタアヂにせよ、その他の直接行動にせよ、それが排斥されねばならないのは、勞働階級の戰術又は武器として、何等の効果を奏しさうにもなき場合、或はただに効果を奏しないだけでなく、むしろ全體の戰鬪力を弱めることにもなりさうな場合なぞに限られる。

以上、階級闘爭の倫理的批判について、所見の大體を盡したつもりであるが、尙ほ終りに臨んで今一つ、駄目を押して置きたいことがある。それは、現代の階級闘爭に於て勞働階級から、

右に擧げたやうなものよりも、遙かに危險な遙かに恐るべき戰術並びに武器が、使用されるかも知れないと思つてゐる人々の、謂はれなき誤解もしくは杞憂を一掃して置きたいのである。

勞働者對資本家の階級鬪爭とは云ひ條、勞働者階級が事實上ぶつかつて行かねばならない正面の敵は、資本主義經濟組織その物である。現代社會の病的組織その物である。

ところで、單純なるものの破壞には、單純なる力で間に合ふが、複雜なるものの破壞には、どうしても複雜なる力を以てしなければならぬ。乃ち、現代社會の根本的病弊の如き、複雜に科學的に組織されたものへぶつかつて行く爲めには、やはり又それに相應して、複雜に科學的に組織された力を必要とする。

複雜に科學的に組織された力――それはやがて文化的な人間的なもの、少くとも私の所謂徹底人道主義的なものでなければならぬ。乃ち、單に必要といふ點から見ただけでも、現代の勞働階級の戰術及び武器として取るものが、所謂流血革命に於けるそれの如き、舊式なものであつてならないことは、世上すべて人々に明白に理解さして置きたいものである。

そして少くとも、勞働階級が政治的行動に於て、もしくは直接行動に於て、餘りに不自然なる拘束を被らず、餘りに殘忍なる挑戰的壓迫を加へられざる限り、彼等は恐らく一部の人々が杞憂してゐる如き、それほど時代錯誤の、それほど非文明な破壞力などに倚賴することはあるまい。なぜならば、彼等も多少さうした破壞力の有意義でないことを、知つてゐるからである。少くとも彼等の指導者は、十分にそれを知つて居り、追々とそれを彼等にも知らして行かねばならないからである。

要するに勞働階級の自覺も、彼等の運動も恐怖するに及ばない。恐怖すべきは唯だ、彼等の自然であるべき運動を不自然に拘束し、それに無用の挑戰的壓迫を加へんとする人々の、餘りなる無分別と理不盡とである。

――一九一九年十二月六日――

日本最後の陸海軍大臣

■正月のホロ醉氣分のカーキ色の一武辯は、ナーニ武斷政治が惡いの、社會主義を認めろの、……民本も社會主義もあつたものぢやない。我等の眼中には陛下と日本國民あるのみだといたく時事に憤激して△〇子の肩をポンと叩く。

■驚かされたのは△〇子だ。一武辯の話も尤もだが、しかし丸つ切り世界の思想を惡魔の如く思つてゐる軍閥は氣に喰はない。そして支那でも、西伯利でも、政府の政策と軍閥の遣り方とがいつも一致を缺ぐ。軍閥政治も獨逸が最後ぢやつたと△〇子が逆襲する。

■霞ケ關の一勅任は、ソーサ、全く今までの陸軍の遣り方は惡かつた。これがため僕の所なぞはドレ丈け出先で迷惑したかしれない。

■△〇子冷笑して曰く、利權も取る必要がない、時によつたら畜生からでも馬鹿にされても差支はない。だが正義、人道主義を取れる日本國が米國や英國でも頭ゴナシに押へつけられ、支那人よりも馬鹿にされる今頃の外交は何としたものかい。

■カーキ色昂然として、然り、外務は腰拔け△〇子はあまりに世界風を恐怖しておる。佛國にせよ、米國にせよ、昨年十一月來の帝國主義に傾けるを知らないか、喃。

■坐の一隅に默々たりし瑞鷺の一海軍大佐は曰く、陸海軍大臣文官説なぞは古い。だが今夜列席の將官の頭は何ほ古い、我海軍大臣は野村吉三郎を以て任命することとせば、田中義一、上原勇作の徒も太刀討は困難だぞ。

■異つた一カーキ色、生意氣云ふナヨ。權兵衛だつたテ大佐で大臣にはなれなかつた。野村輩が大臣になれて堪るものか。我輩の畑には多士濟々サ、必らずしも上原や田中の如きを擔ぐ要はない。

■レストランの夜は更けた。所が海軍大臣の選出を見た上は、陸軍大臣も出さなくてはならぬといふので一同七名が詮衡委員になつた。そして宇都宮、由比、大井、福田、宇垣、鈴木の六候補につき決選投票を行つた處が鈴木ソー六なる師團長が最高點で選出された。

■鈴木も野村も積極的の手腕家で、何れも長州や薩摩のお閥閥もなく、鍋ア閥もなく、財閥もなく、正銘の力量があるとの講釋があつた。

■△〇子は閉會を宣言した。そして日本最後の武官出の陸海相が鈴木、野村なるをも附言した所が、ソンナ馬鹿なことはないとカーキ色側から苦情が起り、さては二次會で呑み直すことに決定し、その會費はカーキ色と△〇子が負擔することとなつた。何處の宴會でも武官が少々燒け氣味になつてゐるのは如何なる譯か。

議會改造・普通選擧斷行

普通選擧斷行論

法學博士　佐藤丑次郎

第一　緒論

（一）

抑も制限選擧か將た又普通選擧かの問題は、啻に學理上に於て決定せられたるのみならず、實際上に於ても亦列强諸國の既に解決したる所であつて、歐米諸國に於ては遠くは一百年以前より漸次に財産上又は納税上の制限を撤廢して普通選擧を行つて居る。若し現今選擧權賦與の問題として學理上又は實際上に殘されたるものありとせば、其は唯一の婦人選擧權問題あるのみである。而して婦人選擧權問題も亦漸次解決の歩を進め、濠洲の聯邦、各州並に「ニュー・ゼーランド」は勿論、北米合衆國に於ては十州、歐洲に於ては丁抹、芬蘭及び諾威の三國は戰亂前に既に婦人に對して選擧權を認めたのであるが。歐洲の大戰亂に際會して英國は婦人の協力に俟つ所大なるに鑒み、之を國家の公民となすの必要を感じて、一昨年二月選擧法の大改正を斷行し、新に制定したる國民代表條例第三節及び第四節に依りて約六百萬人の婦人に選擧權を賦與したのであり。北米合衆國も亦略ぼ同一の理由の下に各州を通じて一律に婦人に對して選擧權を

認めんとして居る。斯くの如く世界の大勢は既に普通選擧の問題を解決し去りて、更に婦人選擧權問題の解決に歩を進めつゝあるに拘らず、獨り我が國に在りては今猶制限選擧を行ひ、直接國税納付の制限を撤廢し得ないのである、世界の大勢に後るゝこと夫れ幾何ぞ。

(二)

回顧すれば今より十四年前に、當時の衆議院書記官長林田龜太郎氏が選擧界の腐敗甚だしきものありたるを慨して一綱の公開狀を公にし、其の肅清を期せんが爲に選擧資格たる直接國税年額十圓の制限を低減して年額三圓に改正せんことを提議したことがある。其の際に余輩は之を以て甚だ姑息なる不徹底の案なりとし、全然納税上の制限を撤廢して直に普通選擧を斷行すべきものと考へ、卑見を京都法學會雜誌第一卷第二號に掲げたのであるが、爾來國民は發展し人文は進歩し時勢は著しく變化したるに拘らず、選擧法は依然として舊の如くであつた。尤も其の間に選擧權擴張の問題は屢々議會の議に上り、普通選擧法案も一度びは政友會の主張の下に衆議院を通過したけれども、悉く法律となるに至らずして戰亂の終局に及んだのである。而して歐洲の大戰亂は極東の我が國にも重大なる影響を及ぼし、之に適應せんが爲に各方面に亘りて改造を行はねばならぬこととなつたから、選擧權擴張の議朝野の間に唱へられ、前議會に於て之を解釋することとなつた。當時余輩は東京及び大阪朝日紙上に此の問題を論じて普通選擧斷行の自説を力説し、言論界の多くは略ぼ同一の主張をなしたけれども、政黨界は之に反し依然として納税制限の撤廢を肯んぜず、政友會が直接國税年額三圓に低減せんとするに對し、憲政會及び國民黨は年額二圓に低減せんとするに止まり、普通選擧法案に至りては僅かに二十名の賛成議員を得ること能はずして遂に議題とならず。其の結果として政友會案たる政府案は兩院を通過して法律となつたのであるが、是れ必竟十三年前の林田案が時勢の著しく變化したる大正八年に成案と化したるに過ぎない、時代錯誤の立法と謂はずして何であらう。

（三）

然れども國情は日に月に急轉して其の止まる所を知らざる有様であり、一年間に於ける變化又驚くべきものがある。普通選擧實施の要求の益々切なるは寧ろ當然と謂へやう。現今普通選擧斷行說は社會の輿論の如く見ゆるも、一方には普通選擧其のものを否とする絕對反對說もあれば、時機尚早を理由とする相對反對論も亦少からず。而して政黨界に於ては政友會は先づ地方制度を改正し漸を追ふて普通選擧に近づかんとし、憲政會及び國民黨は之に對して聊か急進論を主張せんとするが如きも、其の態度眞面目を缺き其の運動熱烈ならず、斯くの如くんば普通選擧の實施を見るに夫れ何れの日にか期すべき。我が國は既に勞働問題に就きて遂に特殊國となつたが、是れ暫く忍ぶべしとするも、選擧權問題に就きて永く特殊國たらんとするは國民の到底耐へ得ざる所である。此の際に國民の採るべき唯一の手段は即ち國民的一大運動を作興して輿論の權威を示し、頑冥者流の蒙を啓くと同時に、政黨各派を激勵し鞭撻して速かに彼岸に達せんと圖ることである。玆に於てか余輩は歷史上、學理上並に實勢上より論究して重ねて卑見を國民の有志に訴へざるを得ない、之を訴へて國民の有志と共に普通選擧斷行の運動に助勢するは、政治學研究者の當に盡すべき責務なりと信ずる是れ本誌を借りて素論を繰返す所以である。

第二　普通選擧論の論旨

（一）

普通選擧論の論旨は、第一に歷史的原則に適從せんとするに在り。之に沿革に徵するに英國の下院議員は初めは郡會之を選擧したのであつて、郡會には郡民一般に、婦人と雖も參列し得たのであるから一面より之を觀れば、極端なる普通選擧とも謂へやう。然るに百年戰爭起るや（自一三三九年至一四五三年）地方の貴族は數多の郎黨を集めて軍隊を編成し之を國王に

送りて巨額の給金を得之を以て廣大なる土地を買占め、戰後歸還する郎黨を小作人とし其の土地を開拓せしめんと圖つたのである、事玆に至らんか貴族の郎黨より成れる數多の小作人は等しく郡會に列し貴族の命ずる所に從ひて代議士の選擧を左右すべく、其結果として代議士は貴族の歡心を求めて中產階級を顧みず、貴族は上下兩院を通じて勢力を振ふこと〻なるべきを以て、其の弊風を豫防せんが爲に國王リチアード第二世（自一三七七年至一三九九年）の治世以來貴族の小作人を選擧場外に驅逐して貴族より獨立せる郡民をして下院議員を選擧せしめんと圖り、遂に國王ヘンリー第六世即位第八年法律第七號を以て四十志以上の年收入ある土地所有者に限り代議士の選擧に參與し得ること〻定めたのである、是れ實に一四三〇年のことであつて選擧權の享有に財產上の制限を付したる初めである。斯くの如き制限を設けたる所以は全く下院に對する貴族の勢力を排除して、下院を國民其のもの〻代表たらしめんが爲に外ならぬ。爾來此の制度の趣旨は北米十三州の襲用する所となり、次で佛國に移入せられて延て各國に傳はり、我が國の選擧法の如きも亦其の餘勢を蒙つて居る。

併しながら英國が普通選擧を改めて制限選擧を行ひしは特殊の事情に基き、極端なる階級選擧となるの弊風を避けんが爲であつて、第十五世紀前半の英國に於けるが如き特殊の事情存する場合には、之に依りて善良なる代議士を出し全國民の意見を議會に反映せしむることを得んも、經濟上の變革に伴ひて社會的狀態著しく變化し、國家的觀念の發達と共に國民の自覺喚起せらる〻ときは、制限選擧は却て階級選擧に變性して之を採用したる本旨に背くに至るは寧ろ當然の歸結である。是れを以て英國に於ける時勢の推移に伴ひて一七七六年以來、或はピツトの選擧法改正案となり、或はグレーの選擧權擴張策となり、或はベンザムの普通選擧論となりて選擧權擴張の要求は大に高調せられたのである。殊に奈翁戰爭後產業の勃興するに從ひて其の叫びは益々高まり、國民の不平は一八一九年に於けるラツセルの提案となり更に佛國七月革命の影響を受けて國民の選擧權獲得運動は一層の熱度を加へ、遂にグレーの自由黨內閣はウエルリントンの保守黨內閣に代りて一八三二年改正條例を成立せしめた、學者は之を稱して平穩なる革命と謂ふて居る。此の條例

は財産上の制限を低減して有權者の範圍を擴めたけれども、猶は制限選擧を支持したるが爲に未だ勞働階級の渇望を滿するに足らぬ。是れを以て選擧法改正の議再び唱へられ佛國二月革命の影響を受けて更に其の聲を高め、其の結果として一八六七年第二回の改正案議會を通過して國民代表條例の發布を見たのであるが、此の條例は一層選擧權享有の條件を輕減し、且市部の勞働者に選擧權を認めたけれども、郡部の勞働者を顧みなかつたから國民は猶之を以て滿足しない。乃ち選擧法改正の論三度び唱へられて遂に一八八五年に第三回の改正案議會を通過して議席再分配條例となつた。此の條例は市部と郡部とを通じて規定を設け、自己の住家又は住所として家屋の一部を占め家計を立つる者に對して一般に選擧權を與へ、以て財産上の制限を撤廢したのである。而して一昨年の二月に於ける第四回の改正に際し、一層輕き選擧資格として仕事場の所持を加へ、且選擧權を陸海軍の現役者に及ぼし、更に滿三十歳以上の適法婦人に選擧權を賦與したる結果、全人口約四千四百萬人中、男女兩性の有權者を合して實に一千六百二十五萬人を算へて居る。我が國に於ては全人口五千六百萬人中、現行法に依れば有權者僅かに一百四十二萬人、改正法に依るも猶二百五十萬人に足らぬ。其の懸隔餘りに甚大ではなからうか。

英國は本來保守的な國柄であるから選擧權の擴張は漸進的に行はれたが、北米合衆國に於ては之に比して稍急速であり、佛國に至りては一層急進的に成就したのである。北米合衆國の各州は母國の法制に倣ひて最初に制限選擧を採用したのであるが、母國と同一の理由に依りて選擧法を改正するの必要を生み、一八〇〇年ヴエルモンド及びケンターキー二州が普通選擧に改めたるを初めとして各州漸次同一の改正を行ひ、一八八八年にロード島が土地所有の條件を撤去するに及びて各州の選擧法中財産上の制限を見ざるに至つたのである。北米合衆國に倣ひたる佛國に於ては、種々の變遷を經て國王ルイ第十八世の下に直接國税年額三百法以上の納付を以て選擧資格と定めたる結果、却て其の反動起りて遂に一八三〇年の七月革命となつたのであるが、之に依りて有權者の範圍を擴張したること僅かに二十萬人の有權者を增加したるに過ぎなかつたから、國民は固より之に滿足すべき道理がない。從て選擧權擴張の論一層盛んに唱へられて或

は示威運動となり、或は政府への請願となり、而して政府は之を顧みざりしが故に一八四八年に至り、遂に巴里市民は激昂して革命を起し共和制を宣布すると同時に普通選擧を實施したのである。此の革命は列國に重大の影響を與へて民主國は勿論、立憲君主國も亦多くは制限選擧を廢して普通選擧を行ふに至つたのであるから、之を概觀すれば歷史は明かに制限選擧を捨てゝ普通選擧を採るべきことを吾人に敎ゆ、是れ卽ち歷史的原則である。我が朝野の人士は今日猶此の原則に背反せんとするのであるが、余輩は徒らに他國の立法を模倣せんことを主張する者ではない、其は實に歷史的原則なるが故に政治家は之を基準として劃策するを當然なりとし、國民は之を根據として要求するを至當なりと考ふるのである、況んや學理上より之を見るも普通選擧は現代に於て最も合理的なる制度なるに於てをや。

（二）

普通選擧論の第二の論旨は、立憲政治の本義に適合せんとするに在り。苟も學理上より本問題を考究するに當りては專ら立憲政治の本旨に照らし、之に期待すべき成績を慮りて理論を進めねばならぬ、一時的の便宜論や黨略論は一切之を排斥すべきである。然らば立憲政治の本旨は何ぞと謂ふに、要するに君民の合致意思を以て國家意思を決定するに在り。元來立憲政治は君權主義の下に自由主義を實現せんが爲に定められたる組織である、蓋し一方に於ては君權主義を採り君主の表示する意思を以て國家意思とし之に國民を拘束するの效力を認め、是れと同時に他の一方に於ては自由主義を容れ國民は其の意に反して拘束を受くべきに非ず若し之を拘束せんと欲せば豫め其の同意を經ることを要すとせば國民を拘束すべき國家意思は國民の同意を經て之を定め、君主の意思として之を表示せざるを得ず、換言すれば其の意思は形式に於て君主の意思たるべく、實質に於ては卽ち君民の合致意思でなくてはならぬ。從つて國家意思を決定するに當り國民をして直接に參與せしむべき筈であるが、國民は頗る多數にして一定の提案に就き其の贊否を求め難きが爲に乃ち國民代表の議會を設け、之をして贊否を表せしめ其の同意ありたるときは玆に全國民の同意ありたるものと看做

し、更に君主之を裁可して之に一般拘束の効力を認むるに至つたのである。故に國民が國家意思の決定に關して採る所の手段は代議士を選擧することであり、之を通じて國政上に間接に參與するのであるが、是れ全く已むを得ざるに出づるのであるから、セメテは其の手段たる選擧權を廣く國民に認むべきであつて、立憲政治の本旨は玆に初めて完うせらるゝのである。固より選擧權は單に議員の選擧に參與し得るの權利であつて、其の行使は直ちに代表者の選出を意味するものではない、且議員は其の自由意思を以て意見を決定し表決を行ふべく、敢て他人の指揮又は委託に依りて左右せらるべきでないから、有權者と雖も常に必ずしも其の意見を議會に表明して國政上に影響を及ぼし得るとは限らぬ。併し有權者は議會の組織と云ふ國家の大事に參與し得るのみならず、之に依りて其の代表者を選出することを得、之を通じて其の意見を議會に表明するの機會あるべきに反し、無權者は其の權利として國事に參與し得ざるのみならず、其の意見は全く法制上の手續を以て國政上に影響を及ぼし得るの機會を得ない。是れに依りて之を見れば廣く國民に選擧權を賦與する普通選擧は、之を特定の有資産者に限る制限選擧に比して遂に立憲政治の本旨に適合するものと謂ふべきである。

次に立憲政治は君民の合致意思を以て國家意思を決定するのであるから、議會の決議に於て全國民の意思を公示することを以て最大要件とする。議會の決議に於て全國民の意思を公示せんが爲には各議員は總て全國民の代表者でなければならぬ、是れ佛蘭西や白耳義其の他の憲法が明文を以て『兩議院議員ハ總テ全國民ノ代表者ナリ』と規定したる所以である。既に各議員を以て全國民の代表者と見るときは其の表決は總て平等の價値を有することゝなるから、其の多數を得たる意見が即ち全國民の意思と看做さるゝは當然であつて、各國の憲法が『兩議院ノ議事ハ過半數ヲ以テ決ス』と定めたるは之が爲である。帝國憲法が明文を以て各議員を總て全國民の代表者と定めて居らぬのは、之れ全く明文を竢つまでもなき理義明白の事柄であるが故であつて、憲法の本旨玆に存するは毫も疑を容れぬ、之を前提とすればこそ各國の憲法と同じく院議を決するにつきて多數決の制を定めたのである。斯くの如く各議員が總て全國民の代表者たるこ

とは憲法上の理想であつて、此の假定の下に形式上議會の決議に於て全國民の意思を公示し得るのであるが、事實上總ての議員は果して全國民の意見を代表するであらうか、將た又實質上議會の議決は果して全國民の意思を公示するであらうか。若し各議員が總て國家の大局に着眼し、國民各部の利害を考慮し、私心を去り偏見を棄てて良心の命ずる所に從ひ、一切の案件に對して判斷を下すならば、憲法上の理想は之を實現することを得べきも、斯くの如きは各議員に之を期待し難い。幸ひに各議員が私心を去り偏見を棄てて良心の命ずる所に依るとするも、各人其の境遇に支配せられ、且周圍の事情に影響せらるるは寧ろ當然であるから、其の主張と全國民の意見と遠く相隔ることあるは固より怪しむに足らぬ。殊に議員が其の選擧區に於ける有權者と其の所屬方面に動かされ易きは、明白なる事實である。然らば之を憲法上の理想に接近せしむるの方便なきやと謂ふに、少なくとも確かに二つある。其の一は議員をして國民各部の利害を考慮せしめんが爲に各部に有權者を置くことである、議員の最も懸念する所は言ふまでもなく有權者の態度であつて無權者の意見の如きは之を第二次又は第三次に置くを通常とする。從て上流者又は中產者のみを有權者とするときは最大多數の下級者は殆んど顧る所とならぬ。之を顧みて全國民の意見を代表せしめんが爲には下級者をも有權者としなければならぬ、普通選擧の重要なる意義玆に存するのである。其の二は各方面を代表する多數の議員を出して各方面の意見を議場に表明せしむることである、一人の議員が國民各方面の利害を慮り、意向の存する所を察して正當に全國民の意見を代表すること難しとせば、乃ち各方面より議員を選出して其の方面の意見を代表せしめ、各議員をして互に審議討尋して論理の示す所に由り道理の存する所に到達せしむるの外ない。然して相當年額の直接國税を納付する方面に限り議員を選出せしむるときは、其の他の方面に於ける意見は殆んど議場に表明せられないから、須らく選擧法より納税上の制限を撤廢して直接國税を納付せざる方面からも等しく議員を選出せしむべきである、普通選擧の重要なる意義亦玆に存するのである。要するに憲法上の理想たる立憲政治の成績を收めんと欲せば、速かに制限選擧を廢して普通選擧を行ふべきである。

(三)

普通選擧論の第三の論旨は、國家の實勢に適應せんとするに在り。凡そ制度は國家の實勢に適應することを要するが、選擧權の享有に納稅上の制限を付するは全く中世時代の遺物であつて、現代の國家に於ては到底支持すべからざる所である。中世時代に在りては國家の經費は王室の收入を以て支辨するを原則とし、國費多端にして王室收入を以て支辨し難き場合に限り、其の事情を宣明して貴族其の他に貢金の獻納を承諾せしめたのである。而して貴族其の他が國王に貢金を獻納するに當りては負擔を公平ならしめんが爲に各自の財產と一定の比例を保つこととし、且當時は農業を以て主たる生業となしたるが故に、其の財產は主として不動產より成りしを以て、貢金は自ら直接國稅の形式を以て之を獻納することゝなつたのであつて、從つて議會の重要なる任務は租稅の承諾に在つたから、直接國稅納付者又は其の選擧したる議員を以て議會を組織したのも相當の理由あることであつたが。時代の推移に伴ひ農業と並びて工業及び商業は勃興し、不動產と共に學力、能力及び勞力が著しく其の價値を高め、直接國稅の外に間接國稅を課して國費の大半を支辨し且議會の取扱ふ所は百般の人事に亘りて、租稅問題の如きは議會の取扱ふ問題の一部に過ぎざることゝなつたから、選擧權の享有を直接國稅の納付者に限るの制度は全く根據を失ひ、列强諸國は時勢の變遷に順應して夙に普通選擧を實施したのである。等しき義務を負ふ者をして等しき權利を有せしむべしとは有名なるダナイストの言ふたことであつて、一面の眞理を含んで居るが、謂ふ所の義務は固より直接國稅の納付に限るの道理はない、間接國稅を負擔する者も亦直接國稅の納付者と等しき權利を要求すべきである。納稅の義務と兵役の義務との間に輕重の差別を認め得ないとすれば就役者も亦納稅者と等しき權利を享有すべき筈である。否國民の國家に奉仕する所は單に納稅や兵役に限らぬ、凡百のこと悉く國民の協心戮力に竢つのであるから、國家は廣く國民に對して參政の權利を賦與すべきである。此の見地より謂はゞ米國や英國が婦人の努力を國家に致さしむる結果として、之に選擧權を賦與したるは最も徹底したる立法であ

る。然るに我が國に於ては今猶中世時代の遺物を固執して直接國税納付の制限を支持せんとするは、思はざるの最も甚だしきものと謂はねばならぬ。

更に國家の大局より之を觀るに、實勢上の要求は廣く國民をして政事に趣味を有せしむるに在る、現代の國家に取りて最も要ふべきは國民が國事に冷淡にして無頓着なること是れである。蓋し國民が國事に冷淡にして無頓着ならんか、國家は如何にして國民の協力を求め之をして責任を分たしむることが出來やうか。凡そ國民は自ら問題を取扱ひてこそ初めて其の事を愛し其の事に忠を盡すのであるから、國民が自ら國家問題に干與することに依りて眞實の意義に於ける忠君愛國の精神が喚起せらるゝのである。是れ遠くはソロンが亞典市民にして故なく民會に出席せざる者を罰したる所以であり、近くは普魯西亞に於て宰相シュタインが大儒フヰヒテーと謀りて國民教育の强制を斷行すると同時に、自治制を施行して憲政實施の基礎を立てたる所以である。英、佛、伊、獨其の他の諸國が兎も角も四箇年餘りに亘りて未曾有の大戰爭を續け得たのも一面より之を見れば實に國民的自覺心に據る所多きに居る、而して國民的自覺心を促進するの道は全く國民をして國家の政事に親しましむるに在るのである、廣く國民をして國事に親しましめんが爲には普く之に選擧權を與へねばならぬ。然るに玆に直接國税の納付と云ふ一大鐵門を設けて大多數の國民の國事に親しむの道を塞ぎながら、君には忠なれ、國をば愛せと要求するのは實に一大矛盾である。固より憲法は廣く言論、集會、結社の自由を一般國民に保障して居るから、縱令選擧權を之に認めざるも猶國家の政事に親しむの道は他に求め得べしと謂ふかも知れぬが、自ら投票を行ふと否とに依りて國民の政事に注意を拂ふ程度に非常の差違あるは當然であり、又各政黨政派や候補者、應援者が幸ひに無權者の同情を受くるも毫も得る所なきを以て自ら之を冷遇して、專ら有權者を動かして投票を集めんと熱中するも亦當然であるから、之に選擧權を與ふるに非ざれば、國民をして政事に親しましむるに於て決して十分なりと謂へぬ。則ち選擧法より納税上の制限を撤廢して斷然普通選擧を行ひ、以て多數の國民をして政事に親しましめ、政事的趣味を涵養し國民的自覺心を喚起して最善の努力を君國に致さしむべきである、而して是れ正しく戰

しましめ、政治的趣味を涵養し國民的自覺心を喚起して最善の努力を[illegible]

亂後の難局に處する唯一の道でなければならぬ。要するに之を歷史に鑑み、之を學理に照らし、之を實勢に考へて論究し得たる結論は即ち普通選擧斷行の六字に盡く、余輩は更に制限選擧論の謬見を糺し、普選尙早論を批判して一層論旨を明かにしやうと思ふ。

第三　制限選擧論の謬見

(一)

選擧權は權利中の權利であつて公法上並に私法上の權利は皆之に由りて消長し、國民は之を享有して初めて公民生活を完ふし得るのであるから、之を享有すると否とは國民に取りて眞に重大の事件である、而して現今尙ほ普通選擧に對して絕對に反對を唱へ、依然として制限選擧を主張して最大多數の國民に其の享有を拒まんとする者あるは、吾人の遺憾に耐へざる所である。論者或は曰く、恆產なき者は恆心なし、恆心なき者は一定の政見を有せず、一定の政見なき者をして議員の選擧に參與せしむるは啻に無意義なるのみならず、往々巧言に惑はされて候補者の鑑識を誤り、若くは黃白の爲に選擧權の濫用を敢てし、代議政治の實績擧らずして選擧界の弊風を助長すること甚だしきを致さん、故に恆產なき者に對して廣く選擧權を認むべきではないと。是れ最も俗人の耳に入り易き議論であつて、卒然として之を聽けば一理あるが如しと雖も決して然らず。余輩は敢て論者に反問せん、然らば恆產ある者は果して恆心ありやと、假りに恆產なき者は恆心なしとの命題が成り立つにしても、其の逆に恆產ある者は恆心ありとの命題は論理上當然とは許されないのである。若し恆產ある者は恆心ありて幸に一定の政見に基きて行動するならば、固より言論上並に物質上の誘惑に打勝つべき筈であるが、然らば我が現行法は何か故に嚴密なる選擧取締りの罰則を定めたのであるが、實際上に於て國家は直接國稅を納付する者と雖も猶恆心なき者少からずと前提して、選擧取締の罰則を定めて居り、而して其の豫想は適中して選擧の行はるる每に選擧法違犯者を生ずること夥しく、現に前回の總選擧に際しては約一百四十二萬人の有權

者中實に二萬六千餘人の犯罪者を出して居る。而かも是れ單に有罪判決を受けた者の數字であつて、其れ以外に選擧權を誤用し、若くは濫用したる者夫れ幾何なるを知らす、果して然らば論者と雖も恆産ある者は常に恆心ありと論定することを得まい。既に恆産の有無を以て恆心の有無を定め得ないとすれば、選擧權を賦與する標準を直接國稅の納付に置くこそ全く無意義である。

然らば之を如何にすべきか、等しく恆心なき者に對して選擧權を認めざるべからずとせり、玆に採るべき唯一の手段は候補者、應援者又は運動者をして個人運動を敢てすること能はさらしむるに在るのみ。蓋し假りに選擧人に恆心なしとするも個人に就きて直接に勸說、誘惑することなからしめば、少なくとも自己の良心を欺きて選擧權を濫用するに至らぬ筈である。而して候補者、應援者又は運動者をして個人運動を試むること能はさらしめんと欲せば、先づ各選擧區に於ける有權者を著しく增加して、當選に必要なる得票の平均數を頗る多くすることであり、之が爲には到底普通選擧を行ふの外に道はない。例へば普通選擧を行へる白耳義に在りては國民百人中有權者の數が二十人（滿二十五歲以上）であり、佛國に於ては二十七人（成年以上）であり、而して英國の如きは實に三十八人の計數になつたから、全く個人運動を行ふの餘地なく、投票買上の如き弊風は夙に其の跡を絕つて居る。然るに我が國に在りては現行法に依れば國民百人に對する有權者數僅かに二人半であり、改正法に依るも共の數漸く四人四分の一を算ふるに過ぎずして、當選に必要なる得票數亦從て僅少であるから、當選の結果を得んが爲には政黨の遊說や、集會の開催や、意見書の頒布よりは寧ろ其れ等の費用を節約して有權者を戶別に訪問し、或は甘言を以て誘惑を試み、若くは頻りに叩頭して憐みを乞ひ、又は黃白を散して投票を買上ぐるを捷徑とする、斯くの如くにして選擧界を廓淸するは恰も百年河淸を待つに等し、而して是れ實に制限選擧より來る必然の結果である。則て制限選擧は候補者、應援者又は運動者を驅りて個人運動に依りて選擧人を誘惑するに至らしむるのであり、之に反して普通選擧は選擧人をして自己の良心に從ひ投票を行ふの外なからしむるが故に、選擧界を廓淸せんが爲にも此の際斷然普通選擧を行ふべきである。

（二）

論者或は曰く、恒産なき者は主として勞働に依りて衣食する者にして、多くは學力に乏しく素養に欠くる所あるのみならず、日常の勞役に從ふに急にして思を政治問題に潜むるの餘暇なきが故に、縱令自己の良心に從ひて投票を行はんとするも政見を批判するの智力を欠き、人物を鑑識するの識見に乏しくして適材を選出することを得まい。且高遠なる論議は愚者の耳に入り難く、凡人は寧ろ卑近低調の言論を歡ぶを以て煽動政治家や、低級野心家は此の弱點に乘じて巧に譏謗を弄し、詭言を陳べて投票の蒐集に熱中すべく、從つて有爲の士は落選し無能の徒は當選して益々議會の品位を低下せしむると同時に、有權者の多數が曲論謬説に誤られて輿論の針路を失するの虞ありと。此の議論は一部人士の久しく支持したる所であつて、一應は尤もらしく聞ゆるも決して肯綮に當つて居らぬ。第一に學力と素養とは教育と自修の程度如何に由りて定まるものであつて、財産の有無並に其の多少に由りて直ちに決せらるゝものではない、財産の多き者又は其の子弟に限つて相當に教育を受け修養を積み得る譯でもなく、財産の少なき者又は其の子弟の中にも相當に教育を受け修養を積む者少からざるは事實である。第二に財産が教育並に修養上に方便を供へ得るにしても、其の方便に依りて與へらるゝ普通の學力と素養とは必ずしも政治上の智力と識見とに合體するものではない、政治現象は甚だ複雜であり政治問題は人事の百般に亘るを以て、之を理解して正當の判斷を下さんが爲には特殊の智力と識見とを要するのであるが、其の智力と識見とを養ふに就きては見聞と經驗とに俟つ所頗る多い、而して見聞を廣め經驗を重ぬることは直接に財産の有無並に其の多少と關係ないのである。第三に財産の少なき者は日常の勞役に從ふに急なるは事實であるが、財産の多き者に必ず餘暇ありとも謂へまい、米國の資産家の如き朝から晩まで自働車を乘り廻さねばならぬから足で歩める人達を羨んで居るではないか、英國に於ても亭主は多く其の本業に沒頭して餘暇を失へるが爲め、妻君の方が遙に常識と見識に於て勝るの奇觀を呈し、是れが婦人に選擧權を認めたる一因となつて居る。縱令財産の多き者は餘

暇を作り得るにしても、餘暇ある者が常に思ひを政治問題に潜むるとは限らぬ、若し生活に變化なく環境に刺戟なくして餘暇に午睡を貪らば毫も得る所あるまい、之に反して生活に變化あり環境に刺戟あるが爲に寸暇を窃んで政治問題を討究せば識見を養ふに於て大に得る所あらう、都市の熟錬職工が政治上の見識に就きて遙に山間の五反百姓に勝る所以は全く玆に基因する、而して一は直接國税を納めず他に之を納むる者である。從て第四に恒産なき者に對して普く選擧權を認むるも直ちに煽動政治家や、低級野心家を飛躍せしめて有爲の人材を凋落せしむるとは謂へぬ、現に民主主義の反對者たりしア・デ・トクービロさへも、佛國に於て一八四八年前に二十四萬人の有權者に依り選出せられたる知名の大小政治家は同年約九百萬人の選擧人に依りて殆ど例外なく再選せられたと報じて居るではないか、要するに論者の觀察は皮相であり、其の論據は甚だ薄弱である。

翻つて思ふに論者が一定の智力識見を具ふる者に選擧權を賦與せんと欲せば、財産上又は納税上の制限を撤廢して、之に代ふるに特定の教育を受け修養を積みたるの證明を以て條件とすべきである、而して其の程度は國家が國民生活をなすに須要の知徳を具へ得たりと認むるものを以て充分とする、換言すれば國民教育を終了して後ち相當の年月間見聞を廣め經驗を積めば其れで宜しい。元來選擧人は自ら政見を定め政策を立つる者ではなく、政黨又は候補者の政見並に政策につきて可否の判斷を下すものである、自ら獨創の政見を定め優秀の政策を立つることは固より容易の業ではないが、單に其の可否を判斷するには敢て深遠なる知識と高邁なる識見とを必要としない。タッシンゲが、自ら調理すること能はざる者も猶肉汁の鹹きを知ると言ふたのは一面の眞理を含んで居る、繪を劃くこと能はざる者も帝展や國展を觀て可否を判斷するではないか。若し國民教育に依りて基本的知識を具へ、更に見聞を廣め經驗を積みて政治上の知見を啓き見識を養ふならば、選擧に際して投票を行ふに決して不足なかるべき筈である。則ち選擧權享有の條件は國民教育の修了と相當の年齡とを以てすべきであるが、我が國は夙に國民教育強制の主義を採り、且學齡兒童の就學率は世界の第一位に在ると誇つて居るから、是れ全く必至の事實を以て條件となすものである。或は六箇年の義務教育を以て不十

分となすならば之を八箇年に延長すべきであり、財政の事情が二箇年の延長を許さぬならば一層補習教育を盛んならしめて其の足らざる所を充たすべきであり、追ては瑞西に於けるが如く補習教育に强制主義を適用するを至當とする。而して强制主義に依る國民教育にして充實せば、年齡は英國や佛國と同じく成年に達するを以て足れりとする、唯從來の國民教育に著しき缺陷ありとせば、一層長期間に亘る見聞と經驗とに由りて之を補充することを要するから、經過規定として暫く白耳義の如く滿二十五歲以上と定むるは眞に已むを得ぬことかも知れぬ、而かも本則としては固より成年以上とすべく、教育上の缺陷は別に之を塡充するの策を講ずべきである。

(三)

論者或は曰く、若し普通選擧を行ひて無資產者に對し有資產者と等しく選擧權を賦與するときは、無資產者は有資產者に比して頗る多數なるが故に、其の選出に係る議員は自ら多數なるべく。而して其の議員は無資產者の歡心を買ひて再選を期せんと欲し、專ら下級階級の利益を主張すべきに由り、上級階級の利益は下級階級の爲に抑壓せらるゝのみならず、經濟上に於ける各階級は政治界に於て活動せんが爲に各々政團を組織すべく、從て階級鬪爭が益々熾烈となりて國運の發展を妨ぐるかも知れぬ。殊に下級階級者は多く單純にして愚昧なるが故に、一旦其の意に滿たざることあれば多衆の威力を借りて車を橫に押すかも圖り難い。不幸にして事玆に至らんか、確かに國家の秩序を紊り國體の尊嚴を損ひ革命の氣勢を助長するの虞がある、故に納稅上の制限は之を撤廢すべきでないと。此の議論は深く一部人士の腦裡に浸み込んで居るが、是れ畢竟杞憂に非ずんば則ち偏見である。謂ふ所の革命とは政治上の革命を指すのであるか、然らば歷史は明かに制限選擧こそ革命の氣勢を助長することを敎へて居る、英國の第一並に第二革命は國會の成就したる時であつて其の國會は制限選擧に依りて上流階級の構成したるものである、一七八三年並に一八三二年の事件も亦略ぼ同じであるが、前後四回に亘つて選擧權を擴張したるが爲に今や英國の國基は盤石の如くである。佛國の七月革命並に二月

革命は共に制限選擧に依て促進せられたのであるが、普通選擧の實施せられてより奈翁三世の治世二十二年を經て更に五十年目の今日に及び、國運益々隆昌である。露國の革命は宰相ストロピンが一九〇七年六月三日に第二回議會を解散すると同時に、違憲の勅令を以て選擧法の改正を斷行し大に選擧權を制限したること其の一因をなして居り。獨國が四ヶ年有餘の苦戰の末終に大敗したるに拘らず、猶崩壞を免れて相當に秩序を維持するのは一は五十年以來實施したる普通選擧の賜と謂へやう、歷史の示す所實に斯くの如くである。然るに世界無比の國體を有する我が國に於て、普通選擧を行はゞ革命の氣勢を助長するの虞ありとは抑も何事ぞ、余輩は國體に關する國民の信念の鞏固なるを確認するが故に我が國に於て永く制限選擧を續行するも決して革命の氣勢を生ずることあるまいと思ふが、同時に普通選擧を斷行して廣く國民をして國事に協力せしめば、皇基は彌々振興すべきことを信ずるのである。

元來論者が普通選擧を行へば上級階級の利益は直ちに下級階級の爲に抑壓せらるゝが如く謂ふは、全く誤解と偏見とに基く謬論である。第一に普通選擧を行へば無資産者の選出に係る議員が衆議院に列するは當然であり、且時としては其の議員が多數の議席を占むるかも知れないが、併し衆議院は决して萬能の力を有するものではない。法律並に豫算の制度に協賛する者としては衆議院の外に貴族院があり、重要の國務を審議する者としては內閣の外に樞密顧問があり、而して司法權の發動に關しては完全に獨立したる裁判所があつて各々其の權限を行ひ、更に此れ等の統治機關の上に畏くも一天萬乘の聖天子在しまして、萬機を總攬し給ふのであるから、假令衆議院の一角に勢力を占むるとするも決して國務を專斷し得るものではなく、各方面の意向を參酌して協調を圖らねばならぬ。然るに論者が衆議院に多數を制すれば何事をも成し得るが如く考ふるは、全く政治組織の大綱を誤解して居る結果である。第二に無資産者が其の利益を主張する者を歡迎するは亦當然であるが、是れ多くは其の利益と國家の利益と一致する場合に於て然るのである、苟も國家思想を有する以上は、國家の利益を犧牲に供してまでも專ら其の利益を圖らんとするが如き暴論に與みする者はあるまい、而して無資産者の多數は有資産者の多數と同じく國家思想を有するのである。無資産者と雖も有資産者と等し

く國民教育を受くる限りは國家思想に就きて兩者の間に懸隔なかるべき筈ではないか、若し之を爭はゞ是れ實に國民教育に對する最大の侮辱である。或は無資產者は縱令國家思想を有するも利害の均衡を考量するの能力に乏しきを以て、正當に利害問題を判定すること難しと言ふかも知れぬが、併しながら一般に事情を了解し其の責務を自覺するときは、利害の均衡を考量すること比較的に容易にして利害問題の判定を誤ること寧ろ少なきものである。無資產者は國防の重要なるを了解し壯丁の責務を盡すべきを自覺して居るから、有資產者と等しく忠實に兵役に服し、一旦緩急あれば進んで身命を君國に捧ぐるではないか。有資產者と雖も彼の事情を解せず此の責務を覺らざるときは往々にして徵兵忌避罪を犯すのである。現に有資產者は統計上無資產者に比して遙かに多數の非國民者を出して居るが、論者は果して之を何とか觀る。若し無資產者を選擧界に引き入れて之に國情を知らしむると同時に、公民たるの責務を覺らしめば利害問題を判定して投票を行ふにつき大過なかるべきは明かであつて、玆に疑を挾むは畢竟無資產者を劣等視し來りたる偏見に外ならぬのである。

更に論者は普通選擧に伴ふものとして階級政團の組織を怖れ階級鬪爭の結果を憂ふるが如きも、是れ全く觀察と考究の周到ならざるが爲である。第一に普通選擧を行はば專ら地盤を無資產者に求むる政黨、例へば勞働黨の如きものの組織せらるるであらうが、是れ決して怖るるに足らぬ。勞働黨の如きも他の政黨と同じく作らるるものに非ずして自ら成るのであるから、之を怖れて制止すべきでなく、却て之を善導して健全なる發達を促すを至當とする。時運一度び到れば如何にしても同一又は類似の政團が組織せらるるものであつて、其の際に國法に依りて其の成立を禁ずるときは秘密結社となりて暴力手段を採ることとなり、適法の方法を以て公然に活動することを許さざるときは假裝政團となりて陰險手段を弄することとなるから、其の結果こそ寧ろ大に怖るべきである。而して勞働黨の如きものが普通選擧の施行に伴ひ公然政治界に活動し得るに至るも、無資產者は悉く之に吸收せらるるものではない、農家の傭夫、工場の職工並に商店の手代を初めとし、各別の境遇と環境とに從ひて思想、感情及び利害を異にするが故に、自ら其の欲する所相同じ

からざるは當然であり、且他の各政黨が此の關係を利用して黨勢の伸張を圖らんが爲に、均しく無資産者の向上策を其の政綱に加へて、割取運動を試むるは必然であるから、畢竟勞働黨は無資産者の一部を其の地盤となし得るに過ぎずして、其の勢力は敢て怖るるに足らざるを通常とする。第二　に普通選擧には無資産階級の利益が富豪階級や中産階級の利益と共に議會に反映するけれども、階級鬪爭が之が爲に益々熾烈となることは殆んど無かるべき筈である。若し論者の怖るるが如き無資産者が勞働黨の統制の下に結束して他の階級に對抗するならば、由々敷大事を惹起するかも知れぬが、斯くの如きは特殊の國情の下にのみ生ずべき稀有の現象であつて、通常無資産者は各政黨の地盤に分割せられ、各政黨者は互に其の見地より無資産者の利害を考慮して公式に論爭するのであるから、新に階級鬪爭を惹起するのではなく、從來潜在したる利害衝突が政治問題として顯出したるに過ぎぬ。上級者或は之を見て新なる問題の發生を促がし、鬪爭の機會を多からしむると謂ふも、是れ下級者の抑遜屈從に慣れて問題の潜在を覺知せざるが爲に起す誤解である。唯以前は利害の衝突が極端に達したる際に威力を以て一時的に問題を解決したるに反し、今後は常時に於て各階級の利害を考慮し、言論を以て繼續的に問題解決の歩を進むるのである。從て普通選擧の施行は一面より之を見れば各階級間の衝突を緩和して平穩に問題を解決し、以て階級鬪爭の慘禍を輕減する所以であるから、論者の如く其の結果を憂ふべきではなく、却つて此の結果を收めんことを期すべきである。論じて玆に至れば、制限選擧論は學說としては理論に合せず、政策としては實際に適せざること明かなると同時に、絕對に普通選擧に反對するの無意義なることも亦自ら瞭かであらう、制限選擧の廢棄せられて普通選擧の之に代るは蓋し當然の歸結であらねばならぬ。

第四　普選尚早論の批判

（一）

普通選擧は理論上最も合理的のものであるから、我が國に於ても終には之を行ふの外なしと信ずるも、今日直ちに之

を實施するは國家の現情に鑑みて時機尙早しと認め、相對的に反對を唱ふる者頗る多い。論者或は曰く、凡そ權利は其の享有を要求する者に對して之を賦與することを立法上の本則とする、若し其の享有の要求せざる者に權利を賦與せんか、權利者は故なくして之を拋棄し、又は之を濫用して不正の利益を圖るの虞れあり、選擧權に就きても亦同樣である。而して現今我が國に於て無資産者の選擧權要求の叫びは未た高しと謂へぬ、從て此の際直ちに普通選擧を實施せば徒らに棄權者の增加を來し、延ては選擧界の腐敗を助長するやも圖られず。而かも一旦之を與ふるときは容易に之を奪ふこと能はざるが故に、暫く納稅制限の低下に止めて更に適當の時機を待つべきであると。此の議論は法理論に立脚して理義明晰なるが爲に、最も適切なる所見として有識者の間に相當の贊同者を有して居り。論者が權利賦與の基準として說く所は余輩も亦立法上の本則として之を是認し、國事の現情として擧げたる事實は余輩の等しく首肯する所であるが、而かも猶論者の所見に對して余輩の批難せざるべからざる點三つある。第一に現今我が國に於て無資産者の選擧權要求の叫び未だ高からざるは事實であるが、直接國稅年額十圓以下の納付者より殆んど選擧權要求の聲を聞かざりしことも亦明白の事實である。故に立法上の本則より之を謂はゞ絕對に選擧權の擴張を拒否すべくして、納稅制限の低下を許容すべきではない、其の間に差別を設けて直接國稅年額若干を納付する者に限り選擧權を與ふるは確かに矛盾である、若し近き將來に選擧權を渴望するに至るべきを豫想し、先手を打つの意味を以て低額の納稅者に選擧權を認むるならば、同一の賢明なる考慮に基き選擧權擴張の範圍を無資産者に及ぼすを至當とする。第二に權利は其の享有を要求する者に之を賦與するを本則とするも、此の本則は決して絕對的のものではなくして多少の例外を許すのである、國法は國家生活の必要に應じて規定せらるゝものであるから、特定の權利は其の享有を要求すると否とを問はず之を賦與し得るのであつて、其の權利は主として公務的權利並に義務付權利即ち是れである。例へば貴族院令第三條は公侯爵を有する者滿二十五歲に達したるときは議員たるべしと規定し、公侯爵に對して貴族院議員たるの特權を認むると同時に、議員の公務を盡して殊遇に報ゆべきことを命じ、議院法第十九條は之に照應して特に公侯爵議員に歲費を給せざるが如

き共の一例を示すのである、而して選擧權の行使を公務と解釋するは多數の學者の是認する所であり、更に白耳義、墺太利、リーヒコンスタイン及び瑞西の數州は之を義務付權利と定めて投票强制の制度を行つて居る。然らば則ち選擧權を賦與する場合をば立法上の例外と看て差支ないのであつて、論者が此の場合に對し直ちに立法上の本則を適用せんとするは甚だ輕卒に失するものと謂はねばならぬ。第三に普通選擧を行はば制限選擧を行ふに比し、相對的に棄權者の增加すべきは論者と同じく余輩の首肯する所であるが、選擧權濫用者も亦相對的に增加すべしと云ふは余輩の是認し得ざる所である。之を選擧の實際に徵して有權者總數に對する棄權者の比率を見るに、佛國に於ては一八四八年並に・七七年の二割を最少とし・五二年並に・九八年の三割七分を最多として其の間を上下し、獨國に於ては・七一年の四割九分を最多とし一九〇七年の一割五分を最少として其の間を昇降して居り、而して英國が最近に行ひたる選擧に於ては約五割であつたと聞き及ぶ。然るに我國に於て現行法施行以來の成績は第九回及び第十回の一割四分が最も多く、第十二回の八分が最も少き數字である、斯くの如き結果を生ずるは全く一は制限選擧を採るに反して、他は即ち普通選擧を行ふが爲に外ならぬ。併しながら此の結果を見て制限選擧の場合には普通選擧の場合に比して、有權者は遙に選擧權を尊重するものと速斷してはならぬ、何んとなれば普通選擧の場合には制限選擧の場合に比して有權者が著しく多數なるを以て個人運動を行ふの餘地なく、從て制限選擧の場合の如くに投票の豫約や、有權者の狩出しをなし得ざるが爲に棄權者の增加するは寧ろ當然であるからである。而して選擧權の濫用は既に述べしが如く專ら個人運動の行はるる場合に發生する罪惡であつて、制限選擧は個人運動をなすことを得せしむるに反し、普通選擧は之を試むるの餘地なからしむるとすれば、普通選擧の場合には制限選擧の場合よりも相對數に於て選擧權濫用者の減少すべきは必然であり、且絕對數に於ても亦其の減少を見るを通常とする。果して然らば論者が棄權者と選擧權濫用者とを同じ樣に取扱つたのは根本的の誤謬であり、同時に兩者の增加を防がんが爲に納稅制限の低下に止めんとの主張は到底支持すべからざる所である。吾人は棄權よりも選擧權の濫用を一層重大と視るが故に、速に普通選擧を行ひて選擧權濫用の罪惡を根絕すると共に、

徐々に政治教育を普及して棄權者の減少を圖らんと欲する者である。

（二）

論者或は曰く、凡そ國家制度の改正は漸を追ふて進むべく、急激なる變革は努めて之を避けねばならぬ、是れ實に一般政策上の原則である。而して選擧權の擴張は重要なる制度の一大改正であつて、其の效果を收めんが爲には國家としては相應の準備を整へねばならず、國民としては公民たるに須要なる教育と訓練とを修得することを要する。若し此の際に全然納税制限を撤廢して直ちに普通選擧を採用せんか、必ずや衆議院の組織と機能とに著しき變化を來して國政上に急激なる變革を生ずることを免れぬ。故に暫く納税制限の低下に止めて、一方に於ては國民に對して政治教育の普及を圖ると同時に、他の一方に於ては地方制度に一大改正を加へて自治的訓練を廣め、以て普通選擧實施の素地を作るべきであると。此の議論は政策論に立脚して論理一貫するが爲に、最も穩健なる見解として實際家の間に多數の贊成者を有し、現に前回の議會に於ては貴族院は勿論衆議院の最大多數者も亦此の所論に一致したのである、余輩は普通の場合に於ける政策上の基準としては漸進主義を肯定するけれども、今回の問題に就きては飽くまで之に反對せざるを得ない。第一　に漸進主義は普通の場合に於ける政策上の基準であるから、之に據りて特別の問題をも處理せんとするは誤りである。蓋し國家制度は國情の變遷に順應して漸次に改正せらるべきものであるが、國家の情勢は日に月に變轉して已まざるに反し、國家の法制は通常靜止の狀態に在るが故に、其の間に甚大の懸隔を生ずることがある。殊に國情が急轉直下の勢を以て一大變化を受けたる場合には、之に順應せんが爲に斷乎たる一大改正を行ふを要する。國家制度の改正は須く改革の方法を以てすべく、革命的手段に出づべからずと謂ふときに、論者の所謂政策上の原則は最も至當なる方針として是認せらるゝのであるが、而かも猶特別非常の場合には革命的手段を正當と見るではないか。例へば維新前の政局に就きて考ふるに、漸進主義に從へば公武合一論に歸着すべきであつたが、斷乎として急進主義を採りしが爲に大

政奪還となりて明治の照代に到達したのであるから、其の際に於ける革命的手段の正當なりしことは何人も疑はざる所である。爾來半世期間に我が國情は幾度びか變遷したが、併し歐洲大戰亂に影響せられたる今回程に急速な、且重大の變化を受けたことは曾てあるまい、特に經濟關係や社會狀態や思想方面の如き之を戰亂前に比すれば殆んど隔世の感がある。此の特別非常の時局に處せんが爲には自ら急進主義を以て制度の一大改正を斷行するの外ない、權利中の權利たる選擧權の擴張問題に就きて殊に然るのである。普通選擧の實施は固より革命的手段と見るべきではない、唯納稅制限の低下の漸進的なるに比して聊か急進的なるに止まる、之をしも猶且急進に失するものとし、尋常一樣の漸進主義を以て此の局面に臨まんとするは、餘りに時勢を視るの明なきものと謂はねばならぬ。第二に選擧權擴張の效果を收めんが爲に國家に相應の準備を整へねばならぬと謂ふが、其の準備とは抑も何であるか、普通選擧の實施に伴ひて形式上に表はるべき唯一の變化は有權者の激增であるから、選擧人名簿の作製や、投票所の增設や、選擧事務員の增員を要すること勿論であるが、斯くの如きは敢て重大視するを要せぬ。謂ふ所の準備とは實質上に表はるべき變化に對應せんとするのであつて、畢竟國民に對して公民教育の普及を圖り、自治的訓練を廣むることを指すのであらう、理想としては余輩も亦論者の所見に贊同するのであるが、現實は正しく論者の期待に背いて居る。現今直接國稅納付者に限りて特に公民教育を施すの設備ありや、若し學校教育の方法に依りて公民の素質を養ふの機關ありとせば、其の機關は無資產者の等しく利用し得べきものである。社會教育の手段に依りて公民の素質を養ふの機關も亦然り、試みに政治出版物の閱讀者や政談演說會の聽衆を調べて見るならば、其最大多數は無資產者であつて國稅納付者は其の一小部分を占むるに過ぎざるを發見するであらう。果して然らば公民教育の關係に於て、有資產者と無資產者との間に殆ど差別の認むべきものがない、從つて其の間に差別あるを理由として一には選擧權を與へ、他には之を認めざる論者の所見は不當である。次に地方制度に依る自治的訓練は全く直接國稅納付者に限りて之を施し得ることゝなつて居る、府縣制郡制も市制町村制も等しく議員の選擧に國稅納付の制限を付するからである。去りながら自治的訓練は單に地方制度に依りてのみ之を

施し得るとは限らぬ、各種の經濟的組合や社交的集團に至るまで總て自治的に構成せられて居り、組合長の選擧と謂ひ富番幹事の互選と謂ふやうに總て選擧に依りて取り運ばるゝから、之に依りて自治的訓練を經ること決して少くない、而して其所には有資產者と無資產者との間に顯著なる差別ないのである。固より地方制度に依る自治的訓練は眞に重要であるが、我が國の現情は果して如何であらう、理想として正式に之を謂はゞ地方自治に依りて修得したる公民の素質を以て憲政に臨むべきであるが、實際は憲政上に現はるゝ弊風をば悉く地方自治の上に移して全く逆式になつて居る、現に昨秋に行はれたる府縣會議員の選擧に際しても夥しき違犯者を出したではないか、其所に如何なる自治的訓練があらう。上の好む所下之より甚だしきはなき現情であるから、此の際斷然普通選擧を施行して衆議院議員の選擧界を廓清し、以て模範を地方議會議員の選擧に示すべきである、斯くの如き現情を顧みずして地方制度に自治的訓練を期待するは、聊か短見の非難を免れまい。第三に此の際直ちに普通選擧を行はゞ衆議院の組織と機能とに著しき變化を來たして國政上に急激の變革を生ずべしと謂ふは必ずしも杞憂ではあるまい、衆議院は固より萬能の力を有するのではないが其の院議は最も重きをなすのであるから、其の組織と機能とに著しき變化を來たすならば、或は國政上に急激の變革を生ぜずとも限らぬ。去りながら普通選擧の實施に伴ひて衆議院が其の組織と機能とに於て根本的に變化するや否やは疑問である、一般に之を謂へば其の變化の如何は專ら既成政黨の方針態度とに依りて定まる、詳言すれば既成政黨が有資產者のみならず、無資產者の意向を察知し其の利害を考慮して政綱を定むるならば、新に有權者となりたる無資產者は殆ど其の勢力圈内に吸收せらるるに相違ない、縱令無資產者の一部を地盤として勞働黨の如きもの出現するも遂に勢力を振ふに至らぬ、從て議院の組織と機能の上に顯著なる變化を來さぬのであるが、之に反して既成政黨が依然として有資產者の利益に偏し其の意向を迎ふるに急にして、無資產者の向上の如きは之を眼中に入れざるときは、無資產者より成る大多數の有權者は其の意見を議院に代表せしめんが爲に、他に特殊の政黨を求めざるを得ない、事玆に至れば議院の組織と機能の上に顯著なる變化を來たすは眞に已むを得ざる所である。而して英國や佛國の選擧史は一樣に普通選擧

の實施が議院の組織及び機能の上に齎したる變化の極めて輕微なりしことを教へて居る、蓋し政黨は本來國家の大局より打算し國民各部の意向を察知して其の政綱を定むべきであり、政黨が其の政綱を定むるに當り國民一部の利益に偏して最大多數の意向を顧みざるが如きは、全く變體であつて本體ではない。故に我が國の既成政黨が其の本體に立ち還へりて本來の任務を盡すに忠ならば、普通選擧の實施に就き論者の謂ふ所は必ず杞憂に終るに相違ない。唯既成政黨は從來の情勢に依りて容易に變體の現狀を改め難く、其の態度を變し方針を更へしめんが爲には、外部よりして廣く眼界を展開せしむることを要する、換言すれば政黨者が從來顧みざりし無資產者を有權者として其の眼中に投げ込まねばならぬ、然らば則ち普通選擧の實施は政黨改造の第一步であつて、余輩は此の意義に於て特に普通選擧の斷行を高唱するのである。若し普通選擧にして實施せられんか、既成政黨は必ず存立と威力とを維持せんが爲に自ら其の改造を企圖すべく、政黨が各々其の本體を表現して忠實に本務を盡さば、國政上に多少の變革を生ずることあるも、是れ全く憲政に期待すべき當然の結果であらねばならぬ。

要するに選擧權の擴張に就きては須く急進主義を採用すべく漸進主義は之を排斥すべきであるが、前議會に於ては衆議院の最大多數は漸進主義に據り、急進主義を主張したるは議員總數三百八十一人中僅かに二十人に過ぎず、唯其の間に意見の相異りたるは、政友會の國稅年額三圓と定めたるに對し、憲政會並に國民黨が國稅年額を二圓に切り下げ、更に有權者の範圍を擴張せんと欲したるが如く、或は知識階級を選擧界に入るるを名として中學程度以上の學校卒業者に選擧權を認むべしと謂へる見當違ひの案を附し、或は納稅の義務と共に兵役の義務を計算に入れて兵役終了者に被選權を與ふべしと謂へる無理解の案を加へたのみである。而かも過去一ケ年に於ける國情の變轉は、何人と雖も之を看過することを得ない、果然今議會に臨むに當り、國民黨は普通選擧を提げて立つた、是れ過を改めて憚る所なきものである。憲政會も亦黨議を以て普通選擧に決したが、猶ほ次の總選擧より實施することを躊躇して居る、是れ悔ひ改めて未だ到らざるものである。而して政友會は主義として普通選擧を容認しながら、進んで之を提議することを肯んじない。

先づ市制、町村制の階級選擧を廢して平等選擧に改むるに止めんとする、是れ捉はれて遂に悟らざるものであるが、其所に一應の據るべき理屈あるに相違ない、次に其の理屈を審批して見やう。

(三)

論者或は曰く、現行選擧法に一大改正を加へたるは正しく前議會のことであつて、改正法は未だ實施するに至らず。改正法實施の結果を見ずして更に之を變更せんとするは、一面に於て著しく立法府の權威を毀損するのみならず、他の一面に於ては大に國民の遵法の觀念を薄弱ならしむる虞れがある。朝變暮改は眞に立法政策上の禁物であるから、暫く改正法を實施して其の結果を審かにし、徐ろに研究を重ねて第二次の選擧權擴張を圖るべきであると。此の議論は政府者及び政友會の最も力說する所であつて一應の理屈であるが、徒らに改正法の發案者並に助成者の立場を擁護するに急にして遂に强辯に陷りたるを遺憾とする。第一 に改正法實施の結果を審かにして更に研究を重ねんと謂ふは口實に非ざれば則ち黨略に過ぎない。改正法實施の結果は極めて分明であつて、現情其の儘なるは敢て言ふを俟たぬ、改正法は國稅納付の年額を十圓より三圓に切り下げて、僅かに一百萬人の有權者を增加するに過ぎぬからである、僅かに一百萬人を勢力圈内に引き入れて其の地盤を堅むることは、政黨に取りては頗る容易の業なるべきも、其れが頗る容易の業なるが爲に、選擧の結果に變化の生ずべき筈がないのである。唯改正法は現行法の大選擧區制を廢して小選擧區制を採用し、一層個人運動の便宜に供ふるを以て、益々選擧界の腐敗を助長して選擧罰則の違犯者を增加するに相違ない。論者は斯くの如き結果を見るに非ざれば選擧法の研究をなすこと能はずと謂ふが、國民は其の結果を見るに耐へずして、改正法を變更せんことを要求するのである。第二 に朝變暮改は之を避くべしと謂ふ、此の格言は政情を浮動狀態より安定狀態に入らしめて人心を鎭靜せんが爲に法令の亂發を戒むるに在るから、之を今回の場合に適用すべきではない。若し法令が政情を安定せしめて人心之に依りて鎭靜せば、是れ立法其の宜しきを得たるものにして、容易に其の變更を許

さぬのであるが、之に反して一旦法令を發布するも政情は依然として浮動の狀態に在りて人心の動搖止まざるときは、卽ち立法其の宜しきを失ひたるが故に、自ら改廢を行はざるを得ない、從て立法者は愼重の態度を採り周到なる考察を行ひて國情に順應したる法令を制定すべしと謂ふのが、此の格言の警告する所である。然るに前議會の多數者が此の警告を聽かずして選擧法の改正を誤りながら、今議會に於て更に變更を加へんとするに對し、此の格言を以て、對抗せんとするは矛盾であり、自家撞着である。第三　に前議會の改正したる法律に對し今議會に於て變更を加ふるに、立法府の權威を毀損し國民の遵法心を薄弱ならしむと謂ふが、强辯も玆に至つて極まるものである。國民は本來國法に遵はんと欲するのであるが、種々なる誘惑の爲に往々にして其の信念に動搖を來たし、遂に犯則の所爲に出づるのである。而して改正選擧法は小選擧區制を採り議員を增員しながら、有權者を增加したること僅かに一百萬人に過ぎずして、大に個人運動を行ふの餘地を存して居るから其の下に選擧の行はるゝ場合には、有權者に對して從來以上に猛烈なる誘惑の來るべきは明白なる事實であつて、幾何の犯則者を出すべきや殆んど圖り知るべからざるものがある、從て改正法の施行こそ眞に國民の遵法心を薄弱ならしむるのである。我が國は選擧犯罪者の多き點に於て世界無双であるが、改正法は嘗の如く此の醜體を保持せんとする、之に變更を加へて個人運動の途を杜絕することが何が故に國民の遵法心を薄弱ならしむるであらう。立法府は立法其の宜しきを得て初めて權威を有するのである、自ら立法を誤りて强ひて其の非違を遂げんとするは決して其の權威を維持する所以ではない、改過遷善は立法府に於ても亦等しく必要のことである。列國に於て議會が國民の信賴を失ひたる事例決して少なしとせぬ、國民の直接表決の如き、勞働者の直接行動の如き、形式に於て相異る所あるも、少なくとも動機が一に歸す。余輩は幸に帝國議會をして權威を保ちて、國民の信賴を繋がしめんと欲し、今期の議會に於て再度の選擧權改正を斷行し、以て普通選擧の實施すべきを要求するものである。

第五　普通選擧法と思想

(一)

吾人が今期議會に於て選擧法の再改正を行ひて普通選擧を斷行すべしと謂ふは決して吾人の獨斷でない。世界の公法史を讀めば、普通選擧を行ふは歴史的原則に從ふ所以であり、之を學理に照せば立憲政治の本旨に副ひ之は期待すべき成績を收むることを得べく、而して絶對反對論並に相對論は到底之を支持すること能はざるが故である。吾人は敢て特異の思想より割り出して之を唱ふるのでなく、亦固より特異の思想を政治上に實現せんが爲に之を求むるのでもない。勿論民主々義や社會主義の思想より選擧法を論ずるは、必然に普通選擧に到達するのであり、且代議政治に依りて其の思想を實現せんと欲せば、全く普通選擧を採るの外はなからうが、是れ單に結論に於て偶合したるに過ぎぬ。從て假りに民主主義や社會主義の思想を以て非難すべきものとするも、決して余輩の主張を否とせらるべき理由はない、若し彼れを以て此れを否とするならば其れこそ坊主を憎むの餘りに袈裟をも惡む以上の痴態である。ビスマルクは一八六三年三月二十八日北獨逸立憲議會に臨みて普通選擧を提唱し且曰く、余輩は少なくとも他により善き選擧法を知らぬと、更に晩年に及びて其の『思案と回顧』に錄して曰く、余輩は今日と雖も猶普通選擧を以て理論上のみならず、實際上に於ても亦正當なる主義なりと考ふと、而してビスマルクは實に民主主義の反對者であり、社會主義の勁敵であつたではないか。此の點に於て特に一部人士の反省を求めたい。

(二)

一部の人士が好ましからぬ思想家の同じく之を主張するを以て直ちに普通選擧を斥けんとするは思想問題に對して餘りに過敏にして、且狹量なりと謂はねばならぬが更に普通選擧に依りて好ましからぬ思想家の勢力を增長せんことを怖れて、之を拒まんとする一部の人士がある。曰く、普通選擧の施行に伴ひ好ましからぬ思想盛んに宣傳せられて、下級

の國民が滔々として之に赴かば害に思想上の不統一を來たすのみならず、終には政治上に混亂狀態を惹起するの虞あると。此の議論は確かに保守的の人士を動かすに足るかも知れぬが、仔細に考察すれば是れ亦思想問題に對して餘りに短見である、且小心なりと謂はざるを得ない。所謂好ましからぬ思想の如何なるものを指すかは暫く之を問はず、且つ然ふした思想が現今我が國內に潜在するものと假定せんか、其の勢力を政治の實際に及ぼさんと欲せば同志議員の相當數あることを要し、其の當選を得んが爲に多數有權者の贊成と同情とを得なければならぬ。而して之を得るの道は即ち廣く國民に對して其の思想を宣傳するに在るが故に、問題の中心は全く好ましからぬ思想の宣傳に歸するのである。然るに普通選擧は單に議員の選擧に際し無資產者にも投票を許すの制度なるが故に、直接には思想宣傳の手段となり得ない、間接には思想宣傳の爲に機會を供するが、其の際に宣傳せらるるものは好ましからぬ思想ではなくして政治化されたる其れである。換言すれば其の思想に據りて各種の政治問題を解釋したる意見である。今試みに普通選擧を施行するとして順次に思想宣傳の梗概を述べんに、第一　に好ましからぬ思想家が其の同志と共に穩和なる主張を標榜して、所謂假裝政黨を組織し、不平家の若干を誘引して之に加入せしめ、其の統制の下に專ら無資產者の間に地盤を求めんと努むるであらう。其の際に內務大臣が安寧秩序を紊すと認むるは其の結社を禁止すべく、同志の者相謀りて猶ほ其の意圖を遂げんと欲せば、禁制を犯して秘密結社を結ぶの外ないが、適法の手段を以て活動し得ざるは論を俟たぬ。第二　に好ましからぬ政黨が假りに結社の禁止を受けずして、黨員の幾人か或は單獨に或は公認を經て議員候補者に立たば、其の應援者と共に集會の開催並に文書の頒布に依りて政治化したる思想を宣傳するに相違ない。其の際に官憲が、安寧秩序を紊すものと認むるときは講談論議を中止し、又は集會の解散を命じ、若くは文書の頒布を禁じ其の刻版及び印本を差押ふべく、官憲は之に制限を加へざる場合は、其の色彩鮮明ならずして普通の政談集會又は政論文書と大差なかるべし。且制限選擧の下に於ても政談集會の會同者並に政論文書の閱讀者は選擧權なき者寧ろ多數を占むるのであるから、普通選擧となりたればとて著しく其の人數を增加すべき筈はない、選擧準備の爲めの政談集會に於ても亦同じことであ

る。但官憲が偏見を以て失當の取締をなすときは、會衆は憤慨して却て該論者に同情せぬとも限らぬ。第三に好ましからぬ候補者が多數の投票を得て選に當りたりとしても、少なくとも二十五名以上の同志議員あるに非ざれば院内團體を成すことを得ず、院内團體に加入するに非ざれば質問や、議案の發議や、修正の動議をなすこと殆んど不可能であり且各種の委員は通常院内各團體より按分比例を以て選任せらるゝが故に、委員會に列することも亦甚だ困難である。幸ひに院内團體を成し得たる場合には議員の權能を行ふにつきて支障なきに至るけれども、同志議員が相當數に達するに非ざれば院議を左右することが出來ぬ、若し院議を其の政綱に近接せしめんと欲せば必ずや他の政黨と妥協推讓をなすことを要し、從て其の主張は自ら軟化せざるを得ない。之に反して成敗を眼中に置かず專ら其の政綱に忠ならんとせば自ら選擧民を失望せしむべく、且其の主張をなすに當りては議院法及び議事規則の制限を受けねばならぬから、過激なる思想を以て院議を動かすが如きは到底想到し得ざる所である。斯くの如く好ましからぬ思想家及び其の同志が縱令政黨を組織し、選擧運動の形式に於て宣傳運動を行ひ議場の發言に依りて其の主張を表明し得たりとするも、其の宣傳する所は政治化したる思想であり、其の表明する所は軟化したる主張であつて、本來の主義は却て不鮮明となり微溫的に傾くのであるから、普通選擧は制限選擧に比して思想の宣傳に多大の便宜を與ふるものではない、所謂好ましからぬ思想の勢力を增進するは他に重大の原因の存するが爲めで、余輩は此の點につきて特に識者の考慮を促したいと思ふ。

(三)

論者が既に好ましからぬ思想と謂ふなら、之に對して必ずや論者の所謂好ましき思想があらう、否な、好ましからぬ思想以外のものは總て好ましき思想でなければならぬ、而して論者が前者を敵者とし後者を味方となすが故に、便宜上前者を敵者の思想と呼び後者を味方の思想と名付けやう。固より敵者の思想中に主義の相違なるものあり、味方の思想中に主旨の相同じからざるものがあつても、兎に角に思想界に於て斯く相對立するときは互に其の勢力を伸張せんが爲に相爭ふこと必然である、一方の思想家が其の同志と共に結束して其の主張を政治上に實現せんとせば、他方の思想家

も亦其の同志と結合の力を以て政治上に其の本旨を貫徹せんと努むるは自然の事理であるから、玆に自ら政黨の分立を見るのである。從て政黨は主義の上に立つべきであり、其の政見は論理に依り理智に從ひ政治問題に對して主義を適用したる斷案でなければならぬ、其の結果として政黨の戰は主義の善惡と政見の良否との爭である、而して其の戰場は議員を選ぶ選擧界と議事を決する議院であつて、其の勝敗は主として有權者たる國民の向背に依りて定まる。若し有權者の多數が一政黨の主義政見を是なりとせば其の政黨は選擧界に勝利を得て多數の議員を出すべく、多數の所屬議員が自黨の政見を主張すれば議院に勝利を得て之を院議と定むるのであるから、政黨の鬪爭は國際の戰爭と異なり、何れの勝利に歸するかは主として第三者たる有權者の心意に懸る、故に政黨は專ら主義の宣傳と政見の辯明とに努むるのであつて、此の點に就きては味方の政黨も敵者の政黨も相同じかるべきであり、制限選擧なると普通選擧なるとに依りて相異なる所なき筈である。若し敵者政黨が普通選擧の下に無資產者の有權者となりたるに乘じて盛んに其の主義を宣傳せば、味方政黨も亦大に努力して其の事に從ふべく、敵者政黨が勞働者の是とする政見を定めて、其の同情を集めんとせば味方政黨は勞働者の一層優れりとする政見を定めて其の贊同を求むべし、斯くて各黨各派互に國民各部の利害を較量して國策を決するを以て、國民の爲にする利益と國家の爲にする負擔とは國民の一部又は一階級に偏倚することとなり、各黨各派互に切磋して最善の政見を競ひ、國政は益進步するのであつて憲政の長所實に玆に存する。論者が敵者政黨の普通選擧の下に活動するを見ば、須く味方政黨を率して飛躍すべきである、普通選擧の供ふる機會は均等にして各人の利用する所に任かすではないか、徒らに敵勢の加はらんことを怖るゝは眞に小心の怯者と謂はざるを得ない。

（四）

更に百步を進めて考ふれば、第一に普通選擧は廣く國民に選擧權を認むるの結果、各黨各派をして資本家、中產者及び勞働者各階級の利害を考量せしめ、國家を本位に置きて其の衝突を調節緩和するの政策を立てしむるが故に、大に民衆の不安を減じ不滿を少からしむ。而して民衆の一部が所謂好ましからぬ思想に共鳴するは國家の施設に不安を感じ

不滿を抱くこと其の主因であり、經濟生活の問題に關して殊に然るのであるから、普通選擧は一面に於て多少特異思想の蔓延を阻止するのである。例へばビスマルクが普通選擧を行はなかつたなら到底社會政策的立法を成し得なかつたに相違ないとは、學者の明言する所であり、且ビスマルクの社會政策的立法が社會主義的趨勢を著しく緩漫ならしめたことは一般の承服する事實である。第二に普通選擧は廣く國民をして議員の選擧に參與せしむるが故に、公民の自覺を喚起すると同時に、議院に信頼するの習俗を普及する、是れを以て不平の徒と雖も適法の手續に依りて問題の解決を告ぐべきことを期待し、自ら政治上の要求を容れしめんが爲に違法の手段を以て直接行動を採ることを躊躇する。從て政治的の騷擾を醸して急激に民心を轉回せしむること少ないから普通選擧は他の一面に於て特異思想の急速なる進展を妨ぐると謂へやう。第三に普通選擧行はるるときは特異思想家は政治の實際問題に接觸するを以て、漸次實行を重んずるの傾向を帶び、其の同志と共に黨を結んで選擧界に馳驅するに及び、啻に思想の政治化するのみならず、反對黨に對抗するの必要よりして其の主張を參酌取捨するを以て、著しく緩和せらるるは當然である。殊に議院に議席を占めて議事を決するに當りては自黨の政見全部を主張して全敗に終らんよりは寧ろ他黨の政見の一部を容認すると同時に自黨の政見一部の實行を圖るを以て得策とするが故に、自ら他の政黨と妥協推讓することとなりて、一層其の主張を軟化するのである。試みに佛國や獨國などの社會黨の現況を一瞥せば、特異思想の軟化の實情を了知するであらう、而して是れ全く普通選擧を行ふに非ざれば之を見ること能はざる所にして、普通選擧は確かに特異思想を軟化せしめて、其の危險性を減殺するものと謂へるのである。

要するに普通選擧を實施するも一部人士の憂慮するが如く、之が爲に好ましからぬ思想を盛んならしめず、亦之に依りて政治上に混亂狀態を惹起することもない。其の玆に至るは他に重大原因の存するが爲めであつて、普通選擧其のものは多少とも其の思想の蔓延を阻止し、急速なる進展を妨げ、且之を軟化し去りて危險性を減殺するものであるから。之を我が國に施行して毫も差支なきのみならず、其の施行の由りて初めて憲政の完美を期し得るのであつて、是れ余輩が普通選擧の斷行を主張する所以である。

議會改造、勞働者代表並に經濟組織革新

法學博士　堀江歸一

政黨内閣謳歌するに足らず

日本は兩三年前憲法發布二十五年祝賀をやつたやうに記憶するが、年數の上から云へば、立憲政治の實驗に淺いとは斷言が出來ない。政黨の外に超然とした内閣が組織された時代もあつたが今日では如何なる内閣も衆議院に多數を占むる政黨の援助がなければ、一日として其地位に安んずることが出來ないのみならず、多數黨自ら進んで内閣を組織するの時勢とまで進んで來たのである。現に今の原内閣の如き、衆議院の多數黨たる政友會を根據とした純政黨内閣であることは、間違もない事實である。然らば日本は立憲政治の下に、政黨内閣の組織を見る時代と爲つた譯であつて、明治十年頃から議會の開設若しくは開設後十數年間、政治に多少の趣味を持つ多數の國民が殆ど夢寐の間にも忘れなかつた一ツの理想は今日に至つて、正に實現されたものと見なければならぬ。

然し斯く國民年來の政治的理想が實現された今日に於て、果して國民の生活は幸福に爲つたであらうか、少なくとも政治の力で、國民の生活は次第に改良され、國民が物質上に懐いて居る希望は漸を逐うて、充されつゝあるものであるか、どうか。早い話が今日の原内閣は國民の生活を改善するに就て、幾何の施設をしたであらうか。物價の調節は我國に於ける數年來の懸案であつて、米、綿布、木材、薪炭等の價格を調節しなければ、國民生活の安全の維持されないのは、何人も認めた所であるのに政黨内閣であり、國民の輿望を荷うて居ると自稱する原内閣は少しも實質的効果を及ぼすに足るやうな物價調節策を講ぜず、殆ど物價を自然の赴く儘に奔騰させて、顧みざるの有様である。元來物價の趨勢に就て、生産者階級と消費者階級と、又は都會と地方との利害が反撥するのは免

がる可からざる所であつて、今日の如き物價の騰貴は地方の農民に利益を與へるが、都會に居住する俸給衣食者に不利益を及ぼすのである。然らば政治の局に當る者は斯く衝突す可き兩者の利害關係を如何なる點に於て調和したならば、國民全體に對して、政治の公正を保ち得るかと云ふことを大體の基準として、物價政策の根本方針を立てなければならぬ譯である。

今日の政黨は徒黨に類す

原内閣が斯く物價の調節に冷淡であり、又國民生活の安定を得るのに、不熱心であるのは、何故なるかと云へば、其原因は政友會が都會に於ては、中產以上の富豪資本家、地方に於ては、中農以上の地主の歡心を結んで、政治上に權勢を張らんとするの結果に外ならない。通貨を收縮するのが、一般的に物價を調節する最良策であると云ふことが分つて居つても通貨收縮の手段として、金利步合が引上げられ、株式の市價を低落させ、資金の融通を不自由にし又企業熱を冷却させたならば、都會の資本家や企業家は必ず政府に反對する態度を示すのであるから、彼等の好感を繫ぐには、政府は物價調節は愚か、寧ろ物價騰貴の勢を煽揚する政策を取らなければならぬ。米價を調節するには、餘程以前に輸出を禁止することが必要であり、又其以後に於ては、最高價格を公定することが急務であつたのに拘はらず、政府が斯る方針に出でなかつたのは、要するに地方農民の感情を害することを恐れたからである。

在野黨たる憲政會では、原内閣の物價を調節せぬことや、通貨を收縮せぬことに就て、頻に非難を加へて居るやうである。然らば憲政會が政局に當つた場合に、能く政友會の爲し得さる所を爲すだけの覺悟があるかと云へば、今日のやうに政治上の權力が都會の金權者階級や、地方の地主に掌握されて居る場合に、時の政府が如何に國民全體の爲めとは云ひながら、財產家や地主の反對を招いて、自分達の政治的生命を危うするまでに、思ひ切つた政策を施すことが出來やうか、反對黨の議論は、議論としては甚だ立派であるが、結局一個の空論に過ぎないではあるまいか、私の疑問とする所である。

斯く論じ來ると、日本國民は現在の政黨又は之を基礎とした政黨政治を通じて、國利民福を期待することは出來ない。政黨なるものは、一局部即ち社會に於て參政權を有する階級の利益

に使用せらるゝものであつて、事實は一の朋黨に過ぎず、私黨に外ならないと斷定するの外はない。富豪や地主の如きは、斯る政黨に倚頼して、自分等の利益を保護し、又之を發揚するに苦しまない。現に富豪や地主の內には、政友會か、憲政會かの孰れかに籍を置き、自分の屬する政黨に政權を掌握させて、致富の目的を達する便宜を得やうとし、又平生成る可く所屬を曖昧にし、何か事の起つた時には遽に當時の政權を有する政黨に好意を表して、交換的に利益を占めやうとする事大主義者も少なからぬやうに見受けれらる。此の間に立つて、最も慘澹たる地位に居るのは、選擧權はあつても、一の階級として、團結することの出來ない中流以下の消費者と全然選擧權を有しない階級とであつて、前者は都會の俸給衣食者で代表され、後者は全國の勞働者で代表されるのである。

藩閥政治は薩長兩藩出身者をして政府の要路に就かしめ、他藩の出身者は如何なる才能があつても、總て之を排斥する怪しからぬ政治であり、官僚政治は官僚として出身し來つた少數の然も知識の狹い、經歷の貧しい人々に政柄を掌らせる時代錯誤の政治であるが、獨り政黨政治は國民の輿論に從ひ、天下の公議に基き、國民全體の利益を尊重する政治であつて、政黨內閣の下に、政府と國民とは始めて融合して、同一體のものと爲ると云ふことは、政黨政治を謳歌する人々に依て、世人の常に聽かされた所である。さればこそ、原內閣組織の當初、日本に於ける政黨內閣の嚆矢であるとか、又は平民內閣の模範であるとか、存外好評の嘖々たるものゝあつた所以であるが、今日と爲つては、如何なる人と雖も、日本現在の政黨內閣を以て、國民の利益を保護するに足るものと認めないであらう。藩閥內閣は無論不可ず、官僚內閣も亦賴むに足らず、今や政黨內閣も國民生活に沒交涉の政治ばかりをして居るものとすれば、國民は如何なる形式の政府に倚賴して、自家の安全を謀り得るのであるか。此點に就て、今日の國民は惑はざるを得ない。幾ら惑つた所で、適當の道がないと云ふ時に爲つたならば、國民をして或は政府無用と云ふが如き危險なる思想を懷かせたり、又は出る政府も、出る政府も片端から破壞すると云ふが如き、非政府的思想を養はせるやうに爲りはしないであらうか、私の將來に恐れる所は實に此一點に外ならないのである。

國民は政治に失望するか

然しながら我々は從來の政治が宜しきを得なかつた、又現在の政黨内閣が國民の利害を蹂躪して居ると云ふだけで必ずしも直に政治其ものに絶望することを要しない、寧ろ進んで政治其ものを改革するの方針に就く可きであつて、而して其方法の一つとして、私は普通選擧の斷行を急務とするものである。從來我國の政治に幾多の積弊あり、政黨内閣が現出した今日に於ても、尙ほ國民全體の利害の閑却されるやうな政治の行はれて已まないのは、要するに參政權が財產家地主の如き一部の社會に偏し、政治上に權勢の及ばない階級のある結果であるとすれば、普通選擧制度の下に、廣く國民に選擧權を與へるのは、從來政治上に顧みられなかつた階級をして或る力ある階級たらしめる所以であつて、我國に於ける政治の缺陷を補充する最良の方法と云はなければならぬ。

普通選擧の下に、先づ第一に新に選擧權を得るものは勞働者に外ならぬ。俸給衣食者中の薄給者で所得税免除點以下の所得の者も普通選擧の下で、選擧權を與へられることゝ爲るが、團體として普通選擧の恩惠に浴することの著しいのは、勞働者階級であり、殊に今日の如く勞働者が階級的利害の在る所を識別し來つた場合には、勞働者は必らず選擧權を活用して、自家の利益を謀るものと考へられる。現に普通選擧は從來一部の急進的政治家の主張に止まつて居つたが、近來遽に勞働者階級に於て之を必要とする聲が高まり、東京でも、大阪でも勞働者團體が中心と爲つて、普通選擧の運動に熱中して居るのは何故であるか。之を一言にして云へば、我國の勞働者が其知識に於て、技術に於て、資力に於て、共に面目を改め來つたに拘はらず、我國現在の法律に於て、社會の習慣に於て、勞働者に與へる所のものゝ頗る乏しい結果、勞働者は政治上の權力を通じて、與へられざるものを收めんとするが爲めである。華盛頓の勞働會議で列國は何れも勞働組合を根據として、眞實勞働者の利害を代表す可き勞働委員を選出派遣し、會議の席上に於て充分勞働者の爲めに、行動することが出來たに拘はらず、日本の勞働者は自分等の信頼する代表者を簡派し得なかつた、會議の席上に於ても、日本の政府委員と資本家委員とは必死に爲つて、八時間制の適用に反對し、勞働者に對して、天來の福音を齎すことを遮ぎつた、而して斯く勞働者に對して、不公正極まる處置に出でた政府や資本家階級に向つて、勞働者は何か酬ゆるの道があるか、少なくとも言論の自由の保障されたる場所に於て、政府や資本家の勞働

者に對する取扱の不公正なること、根本的に兩者の勞働問題に對する見解に誤謬あることを指摘し、痛論して、改む可きは改め、改む可きは改めさせたいのが山々であらうが、今日の處では、如何ともすることが出來ない。斯く考へたならば、今日の勞働者が普通選擧の下に、自家の代表者を議會に出したいと望むのは當然であつて、彼等に斯る考を懷かせるに至つたに就ては、政府も資本家も、一部の責任を荷はなければなるまい。

勞働者と普通選擧

本來我國の勞働者は現行の法制に於て、如何なる保護を受けて居るであらうか。工場法は勞働者を保護する至重の法典と稱せられるが、其規定の如何に不備であり、又不滿足であるかは、今度の勞働會議に於ける議決に依て、多くの程度まで修正を加へなければならぬと云ふ一事を以て、其一班を知ることが出來るし、殊に勞働者の業務上に於ける傷害に對する保護規定の如き貧弱千萬で、殆ど談ずるに値しない、一方に勞働者が團結をしやうとしても、團結權は認められず、罷業權に至つては、治安警察法の有効である今日、沙汰の限りであるとすれば、勞働者は法制上に於て、多くの保護を受けず、却て窮屈なる束縛の下に立つものである。而して近き將來に於て、勞働保險の制度も設けられやう、職業紹介の機關も組織されやう、傷害保護の規定も改正されやう、勞働爭議に對する仲裁制度も定まらうが、是等の場合に立法を案出し、又之を審査する者は勞働問題に理解のない、又勞働者社會の實情に通曉しない官僚や、議員のみであつて、彼等の方寸で、勞働者は如何なる利害關係に律せらるゝか、測り知れないとしたならば、彼等が衷心安んぜざることも、强ち無理ではない。彼等をして安んぜしむるは、一に彼等の代表者を議會に送つて、勞働立法に參與せしむるの一事であつて、此目的を達する前提として、勞働者は今や普通選擧を要求しつゝある次第である。

勞働黨の組織は如何

昨年來我國には勞働黨組織と云ふやうな問題が世間に行はれて居り、又勞働黨を組織す可き政治家は誰れ誰れであると云ふ人名まで擧げられて居る。然し私は勞働黨は一二の政治家が自己の力で作爲す可きものでなく、自然の機運で組織さ

れるものと考へる。立脚地に窮した政治家や、進退に迷った政治家が普通選擧施行後に於て、勞働者の勢力の政治社會に伸張することを見越して、之を利用する考で、勞働黨組織を云々するが如き、果して勞働者の利益に副ふものであるか、どうか疑なきを得ない。勞働者の望む所のもの、又勞働運動に於て必要とする所のものは、團結權であり、罷業權であり、又選擧權である。勞働者が是等の權利を獲得し、團結權の下に、勞働組合を組織して、資本家に當り、更に罷業權に依て、傭者に對する要求を貫徹し、選擧權に依て、勞働立法をして、勞働者自身に有利なる方嚮に向はせるのが今日の問題であつて、斯る狀態に達したならば、勞働者の內より、相當の才識あり度量あり、機略ある人物が輩出して、勞働運動を統率するの任に當ること丶爲るであらう。勞働者の利害を代表す可き人物が政治界に一人もなく、又勞働者に選擧權の與へられて居ない今日から、勞働黨首領の詮議立ての如きは、無用の業に過ぎないのである。

勞働者が代表者を議員に選擧すると云ふのは、彼の勞働運動の最も進んだ英國に於ても、比較的新しい事であつて、實に千八百七十四年マグドナルド氏と、バート氏とが選擧されたのを端緒とする。而して其後段々同志者が殖へ、勞働黨と爲つたが爲めに英國の勞働立法を進捗するに與つて、力あつたのは、著明の事實である。斯く勞働者が代表者を議會に送るに就て、必要の機關と爲るものは實に勞働組合である。幾ら英國で敎育が國民間に普及し、勞働者亦一通りの知識を備へて居ると云つても、昨日まで炭坑で炭を掘り出して居つた坑夫や、鐵道の運轉をして居つた機關手が今日直に組合を代表して議員に選擧される譯のものではない。是等の勞働者の內で、相當に知識もあり、世才もある者は自然勞働組合の世話を燒き、業務執行委員の一人に擧げられて、次第に勞働者殊に筋肉勞働者の生活から足を洗ひ、半勞働、半事務の生活に移り、斯る生活の下で、次第に政治の實際を窺ひ、社交をも廣くして推しも推されもせぬ勞働代表の議員候補者と爲るのである。又斯く組合の爲めに盡力し、組合と切つても切れぬ關係が結ばれて議員に選ばれるのであるから、組合は勞働代表の議員に其生活を支持するだけの金を給與し、又選擧運動費の大部分を負擔すること丶爲るのである。

勞働組合と勞働者の議院代表

斯の如く論じて來ると、勞働組合と普通選擧と勞働者の議會に於ける代表者選出とは互に密接の關係を持つて居ることが分る。一片の理想から言へば、國家が勞働者に團結權を認めて、勞働組合を組織させ、勞働者が組合の統率に依て、團體的行動に慣れた所で、選擧權を與へて、相當の規律あり、訓練ある勞働代表者を議員に選出するのが、當然の順序であつて、斯の如くして政治と勞働運動との關係を圓滑にするを得るのであるが、日本では從來勞働組合も政權で壓迫して居つた、選擧權は極端に制限して居つた、勞働者の政治的代表の如きは事實に於て、之を許容しなかつた關係から、今日では世界の大勢に促されて、一度に是等の三問題を解決するの機運に臨んで居る、恰も怠け者が中元と節季とに一遍に出會つて、手を拱の狀態である。原內閣が普通選擧に反對し、勞働組合を否認し、勞働者の政治運動に干涉するやうな時代錯誤の政策を講じて憚らないのは、要するに勞働問題が紛糾し、殊に政治と交涉を生じ來つて、其解決に血迷つた結果であつて、我々の認めて醜態とする所である。

勞働者の直接行動と議院政策

勞働者が參政權を要求し、政治上の運動に依て、各自の地位を改善し利益を保護しやうとするのは、要するに時の政治機關なり、政治組織なりに信賴する結果であつて、彼等に此信賴の念ある間は、國家が勞働問題を處理するのは、比較的容易である。歐米諸國に於ても、勞働團體なり、社會主義者なりが議院政策を信奉し、立法上の施設に依賴して居る時代には、國家の力で社會の利害關係を調和して、略ぼ遺漏なきを得たのである。然るに歐洲戰爭に依て、斯く維持された調和的關係に龜裂を生じ、勞働者は從來のやうな型の定まつた職業別の勞働組合では滿足せず、別に產業的組合の下に勞働者の大同團結を組織し、勞働者自ら產業の管理權を掌握することを主張し、資本主義に正面から反對し、此主義を倒す爲めには、如何なる種類の直接行動も敢て辭さないと云ふ風潮に支配され來つたのは、掩ふ可からざる事實である。

之に比較すれば、日本現時の勞働問題の如きは、極めて幼稚なものである。勞働者は何事を要求して居るかと云へば、勞働時間の短縮と賃銀の增加との二者に外ならぬ。此外に從來

先覺者から教示され、又華聖頓勞働會議に刺戟されて、團結權や、罷業權を要求し、更に進んで參政權を要求するやうに爲つたとした所で、今日の狀態では、日本の勞働運動には資本主義と調和し、兩立して行く可き餘裕がある。我國勞働者の本心を叩けば、『キャピタリズム』を亡ぼすことを望むものでもなければ、自ら資本家の地位に代らんとするものでもなく、唯從來の資本主義の下に、從來の賃銀制度に支配されて良好なる勞働條件を得ることが出來れば滿足するのであつて、參政權を要求するが如きも、要するに勞働條件改善の保障を得るの方便とするに止まるのである。私が日本の勞働者の要求する所を以て、國情の然らしむる所とは云ひながら、頗る微溫的であり、妥協的であると考へる所以であるが、勞働問題を兎に角解決しやうと云ふ點から見れば、此處が即ち着眼點として重きを置く可き所であつて、日本には決して今日英米兩國の政治家が頭を惱まして居ると同じ狀態で勞働問題解決の急を告げて居らないのである。

勞働問題の將來

然し日本が斯く勞働問題に就て、武陵挑源の夢を貪りつゝあるのは、何時まで續くものであらうか。勞働者は物資の生產者でありながら、自分の生產した物資を自分自身に豐富に消費することが出來ない。自分の勞働に對しては或る金額の定まつた賃銀を得て、窮屈な生活をしなければならぬと云ふが如き矛盾した狀態は、今日の資本制度や、賃銀制度の維持される場合に、必ず起る所であつて、假に八時間勞働制度が勞働上に實行され、又賃銀が勞働組合なり、國家の公定なりに依て、今日以上に增進したとした所で、彼等が資本家に對する關係は附屬的地位に居ることを免かれない。勞働者が何時まで此地位に安ずるものであらうか。之に安んぜずして、賃銀制度の撤廢、賃銀奴隷の解放、私有財產權に對する制限、勞働者の產業管理等を目標とし、勞働者自ら團體の下に統率されて、政治上に產業上に目覺ましき運動を起し來る日の遠からざることは、私の豫想するに苦しまない所である。

資本家と勞働者との間に如何なる關係を結ばせるのが正しいかと云ふことは、從來經濟上に於ける一問題であるが、之を多年の經過に徴すると、勞働者の資本家に對する要求は次第に承認され、實行されて行き、資本家は今日一城を失へば、明日は一砦を拔かれる趣あることを否定し能はぬ。如何にも多

年に亙つて何れの國に於ても、資本主義の下に生產業の發達の著しかつたことは、爭ふ可からざる事實であるが、一方に斯る資本的生產制度が國民の全體に幾何の利益を與へたかと云ふ問題に接すると、何人も萬卒の骨を枯らして、一將の功を成さしめたと同一の譏を免かれない。是れが資本主義を基礎とした現在の經濟組織をして殆ど行詰りの狀態に陷らせた所以であつて、如何に經濟組織を改革す可きやの問題が、資本主義に就て經驗久しき歐米諸國に惹起されたのも偶然でない。諸國に於ける勞働問題は詮ずる所、經濟組織改造の問題に外ならないのである。

然らば諸國に於ては、今後如何なる方法に依て、經濟組織が改革されるであらうか。此點に就ては、本論に於て之を詳述しないが、私の考では產業上の方面に於けるデモクラシーと政治上に於けるデモクラシーと併行するのが、將來に於ける經濟組織の要領でなければならぬと信ずる。デモクラシーの下に、普通選擧が實行され、勞働者と雖も、獨立の家計を維持する以上は、一個の選擧權を有し、之を行使する方法の如何で內閣の運命をも左右するの地位に立ちながら、產業上に於ては、資本家專制に支配され、如何なる仕事を如何なる分量まで爲し、又之に對して幾何の賃銀を收め得るやと云ふやうな生活上に肝要なる事項が資本家の方寸で定まるのは勿論、產業經營の方針や、重要の計畫にも與らず、一に自家の運命を擧げて、資本家に託すると云ふが如きは、矛盾も亦甚だしい。日本の勞働問題が勞働時間の短縮や、賃銀の增率で、紛糾錯綜して居る時代には、之を解決するは比較的容易であるが、普通選擧が行はれて勞働者が愈々覺醒した國民と爲り、產業上に於けるデモクラシーを要求し出すのは明白の事實であつて、此大勢には何ものゝ力を以てしても、對抗することは出來ない。民衆の知識と團結で、民衆を支配する。其支配する方法に間違ひがあれば、民衆自身の責任である。政治は私の仕事でもなければ、少數者の仕事でもない。民衆の生活に政治の關係する所淺からざる以上は、政治を行ひ、政治の方針を定める者も亦民衆自身でなければならぬ。苟も世上に現在する富や資本は一個人の利用享樂を目的として、一個人に占有せらる可きものでない、勞働が民衆の爲めに行はれる如く、富や資本も亦民衆の爲めに運用されなければならぬ。我々が今後進む可き新なる社會は既に彼岸に見へつゝある。之を民衆に見せまいとするのは官僚や資本家の猿智慧に過ぎない。

彼等が幾ら隠し立てをした所で、今日の如く國際間に思想の共通する時代、世界の一角に起つた事實が他の一隅に反應を及ぼす時代に於ては、如何ともすることは出來ない。日本が一滴の血を流さずして、憲法の發布を見るに至つたのは、從來國民の誇とする所であつた。今や歐米諸國を襲ひつゝあるが如き黒風白雨に接せずして、經濟上の組織を革新する道は如何なる邊に存するであらうか、我々の將來研究を要するは、此問題に外ならないのである。

消費者階級の自衛策

今日の經濟組織に於て、勞働者と共に、所謂虐げられたる階級に屬するものは消費者階級であつて、日本の實際に就て云へば、此階級中、俸給衣食者の如きは、勞働者階級よりも、更に不利の地位に居ることを爭へぬ。資本家は正に二本の劍を持ち、一本の劍では勞働條件を劣等にして、勞働者を虐げ、他の一本の劍では、自己の産出する物資の代價を高くして、消費者を苦しめ其間に暴利を貪るのを職とするものである。勞働者は之に對抗する爲めに、勞働組合を組織し、更に進んで組合を基礎として、勞働代表者を議會に送つたならば、政治上に經濟上に救済の道を得る譯であるが、消費者階級は如何にして資本家の横暴に對抗するを至當とするか、私は此點に就ては、消費者階級の自衛策として、消費組合の組織を推稱することに躊躇しないのである。

消費組合と云ふと、日本では普通に理解される所では、組合の當事者が原産地なり、卸賣商人なりに就て、大規模に、又隨つて廉價に買入れた物資を組合員に相當の價格で、分配することを重なる職分とし、其價格が少しでも一般の市價よりも低廉であれば、消費組合の目的を達したりとするものゝやうである。然しながら斯る仕組の消費組合であつたならば、到底消費者をして資本家專制の羈絆から脱せしめることは出來ない。消費組合にして日本現存のものゝやうに、單に原産地や、卸賣商人から廉價に仕入れた物資を組合員に分配するのは、所謂分配的消費組合であつて、組合の諸形式中の一たるに過ぎない。我々は此外に生産的消費組合なるものゝあることに、注意しなければならぬ。生産的消費組合と云ふのは、組合自ら相當の資本金を持ち、其一部分を生産業に投下し、例へば日用品を分配する組合であれば、組合自ら山林を所有して、薪を切り出すなり、炭を燒くなり組合自身で生産したる薪炭を組

合員に分配することゝするのである。此方法で組合を經營するから、一方に組合員は品質の純良なる物資の供給を受けると共に、他の一方に於ては組合の力で、一般生產業者の代價を騰貴させる勢を抑制する次第であつて、斯くて消費組合の眞面目が發揮されるのであり、又消費者の團結で、資本家に對抗する所以と爲るのである。我國に於て、今日まで斯る意味の消費組合の設立されないのは、私の遺憾とする所であつて、此事を一般の消費者に勸告する次第である。

議院政治の缺點

斯の如く普通選擧の下に、勞働者の代表者を議員に選出することが必要であるとして、次に考ふ可き問題は勞働代表者が選擧を爭う費用の負擔に堪へ得るや否やの一事である。英國で勞働者の議員選擧に容易であるのは、選擧の運動費が制限されて居るのと、其費用の一部を勞働組合が負擔するのと、議員當選後、生活費を勞働組合から仕送ると云ふ諸點の與つて力あるのは、明白の事實である。然るに日本では、是等の點が總て英國と正反對であるの趣がある。議員選擧を爭うには、二三萬乃至數萬圓の運動費を要するのは、公然の秘密であつて、普通選擧の下に選擧權者の多數に爲つた場合に、尙ほ從來のやうに、投票依賴の書狀を頻繁に出したならば、選擧運動費は增加するとも、減少することを望まれない。斯る運動費は假令ひ勞働組合で負擔するとしても、到底其負擔に堪へられ可きでない。殊に勞働組合が未完成の狀態に居る日本では尙ほ更ら此邊の懸念を免かれない。隨て普通選擧實施の後に、勞働代表者を議員に選出しやうとするならば、國民が志を一にして選擧運動費を節約することに心掛け、殊に候補者に對する負擔を輕減させることが、急務中の急務である。或る候補者に同情し、又此候補者を是非當選させたいと希望するならば、選擧民、自身手辨當で運動する覺悟があつて欲しい。英吉利で選擧の際、候補者は單に政見の發表演說だけで投票を選擧民に求める、演說は大道や、公園でやるし、又有志が貸料を寄附した會館でもやる、而して有志は候補者の爲めに若干枚の名刺を寄附し、之を有權者に配布すると、有權者中此候補者に投票しやうとする人々は其名刺を硝子窓に揭げて、人の注意を惹かうとするが如きは、誠に面白い、又費用のかゝらぬ運動法であつて、斯の如くにして、勞働者も容易に選擧を爭うことが出來るのである。

日本で普通選擧の制度が行はれるやうに爲つたとして、從來**選擧界に積り重なつて居つた弊害が一掃されるか、どうか。**若しも從來の有權者が一向に覺醒せず、叩頭した回數の多い候補者や親族縁故のある候補者や、又は運動費を多く撒布した候補者などに投票し、新參の有權者亦之に倣つたならば、普通選擧の如きは、殆ど無意義の沙汰に終るものと云はなければならぬ。普通選擧の尙早を論ずる人々の如き、此邊の成行を懸念するやうであるが、私は必ずしも斯る惡傾向の生ずるものとは考へない。勞働者階級は今や生活上の必要から、選擧權を要請しつゝあるものであつて、今日の狀態では、此要求も惡戰苦鬪の後でなければ、得られさうにもない。既に然らば勞働者が一旦選擧權を得た後には、之を珍重視して、其運用を愼しむ可きは勿論であつて、金錢情實感情等に左右されて、詰らなく選擧權を用ゆることはなからうと思ふ。普通選擧尙早論の如きは、要するに我國勞働者の知識や、要求の如何なる點まで進んで居るかを知らず、又今後組合の組織に依て、更に一段の進歩を期することを考へず、何年前かの狀態や、一片の臆斷に據て立論して居るの非難なきを得ないのである。

○

大庭柯公

一、貴衆兩院を改造する以前に、樞密院の廢止が必要であると信じます。臨時の機關であるとすれば、言ふに足らぬかも知れぬが外交調査會など云ふやうなものも、勿論廢止することが必要です。そして國家の政治責任は、事實上に内閣に存することゝし、内閣は衆議院に多數を制してをる政黨に依つてのみ組織されることが、嚴格に取行はれる事が、兩院改造の先務であると思ふ。種々の曖昧な政治的機關があつたり、元老など云ふ不可思議なものが政界に出沒する間は、議會も決して眞面目になり得ぬ。

二、既成政黨即ち現在政黨は改造の見込なし。一日も早く普通選擧を實施して、政界を根柢より引くり返すより他に改造の望なし。

三、先づ堺利彥君が適任であらう、首領としては經歷、信望、學識の外に、相當に他政黨と拮抗して政界縱斷の略と勇とが必要である。他の諸君で此れだけの注文に應じられる人が一寸見當らぬやうである。私は堺君を推します。

無產階級より見たる普通選擧論

法學博士　末廣重雄

一

衆議院議員選擧法は、今春の第四十一議會に於て改正され、舊選擧法の下に於て、選擧人たる資格を有するには、年額十圓以上の直接國稅を納むるを要したのを、三圓に低下する事になつた。是れは進步には相違ないが、舊選擧法同樣、一定の納稅額を以て選擧權の有無を決定するは、餘りに機械的である。何故に年額三圓の納稅者に選擧權を與へて、二圓九十九錢の納稅者には與へないか。何故に僅か一錢の差が、國政に參與すべき重大なる權利の有無を生ずるのであるか。其れと同じ理由で、三圓の納稅者が選擧權を持つて居るのに、何故に二圓の者が有つて居ないのか。更に何故に其れ以下の者が有つて居ないのか。此事に就ては何人と雖も到底合理的の說明を爲す事が出來まい。況んや、同じく兵役の義務を始め、一切の國民的義務を負擔する者の間に、直接國稅三圓を標準として、政治上差別待遇を爲す事は、全く階級的の思想に基くもので、第十九世紀の舊人は之に滿足して居たかも知れぬが、第二十世紀の新人は到底斯かる不合理な事を承認しないであらう。更に進んで考ふるに、今春の選擧法改正に依り、有權者の數が百五十萬人より、約三百萬人に增加するさうであるが、之れでも日本國民の約二十分の一に當る約三千萬人の男子の僅か一割に過ぎないのである。去る明治元年に明治天皇が五ヶ條の御誓文の第一條を以て汎く會議を興し萬機公論に決すべしと仰せられて居るが、男子の數の一割、日本國民總數の二十分の一に過ぎざる者が選出する議會では、萬機公論に決するの實が果して何處に在るか。御誓文出でて既に五十年を經過したる今日、尙ほ先帝の有難き御思召に反くとは、實に以ての外の曲事である。

今日に至りては、最早主義として普通選擧を是非する者はあるまい。納稅資格を撤廢する事には何人も異議のない筈であるから、普通選擧の理論的基礎に至つては玆に說かぬ。斯くの如

く主義としては爭がないが、實行の時期に關しては、少からぬ異論を見受けるのである。政友會は、新選擧法成りて未だ一回も實施せぬのに、忽ち之を改正するは議會の威信を毀くるものであると稱し、憲政會の幹部は、今日俄に普通選擧の即時斷行を說くは輕卒の譏を免れずと云ひ、政黨者流には尚早を說く者が多い。然し私は此等の尙早論を排して、極力普通選擧促進を主張する者である。然らば何故に私は促進を說くか。是れより進んで我國の內政外交上、其の已むを得ざる所以を述べる。

二

今次の戰爭は歷史上未曾有の大戰爭であつて、死傷約二千五百萬人、是を我國の兵役義務年齡者、即ち十七歲より四十歲までの男子九百五十萬人（大正二年調査）に較ぶれば、約二倍半に當り、戰費は約三千七百億圓（昨年十一月休戰條約調印の日まで）、實に我が國富の約九倍に相當する金額が煙となつて消へ失せた譯である。古來戰爭は多いが、斯くも犧牲の大なる戰爭は實に未曾有である。斯かる大戰爭の事であるから、其の世界各國に及ぼす影響も亦實に大なるもので、其の一として擧ぐべきは、世界各國に於て、戰前既に甚だしかつた富の分配の不公平が益々甚しくなつたことである。富者は益々富み、貧者は益々貧しくなり、一方に無制限なる奢侈があるかと思ふと、一方には極端なる貧困があることになつた。貧富の懸隔の甚だしき社會は、決して健全なるものとは云へないから、斯かる缺陷あり、疾病あるところの社會を破壞し、少くとも之を改造して、新に健全なる社會を建設せんとする運動が起つて來た。尤も此の運動は戰前既に起つて居たけれども、戰後に至りて益々甚だしくなつたのである。然らば世界各國に行はるゝ有產階級に對する無產階級の此の運動は如何なるものであるか。

先づ最も紛糾を極めつゝある露西亞に見よ。一昨年末、レーニン及びトロツキーの企てた革命は、忽ちにして無產階級をして、有產階級に代つて政權を握るに至らしめた。其後レーニン政府即ち所謂過激派政府の行動が、餘りに亂暴を極めたから、世人は其の壽命の久しからざるを想像した。然るに意外にも、北西露に於けるユデニツチ、南露に於けるデニキン等の下にある反過激派政府の旗色や振はず、西伯利のコルチヤツク政府も亦過激派に追擊されて、無慘やオムスクを後に、遙かに東方へ敗退しなければならぬ運命に陷つた。斯うなると英佛の如き從來此等の反過激派政府に與へて居た財政的援助を打切り、撤兵

までして了つたから、有產階級の勢力恢復は殆んど見込の立たぬことになつた。

露西亞の過激派の革命の近因は、實に甚だしい生活難にあつた。更に南歐伊太利も亦今や同一原因の爲めに、革命の襲來を蒙らんとしつゝある。同國に於ては、今年中に行はれた軍隊復員の爲め、俄然激增した勞働の供給を吸收すべく、餘りに其の工業界は不振を極めた。元來此國では、戰爭中原料品、殊に石炭の供給が不足して居たが、戰後に至り其の傾向益々甚だしいので、已むを得ず、多くもあらぬ森林を片ッ端から伐り倒し、甚だしきに至りては、此國に取つて經濟上大切なる果樹をさへも、薪とせざるを得ない窮狀を呈することになつた。之れが爲め工場の閉場するもの續々、失業者の數今年九月の交に於て、既に五十萬人に上つた。そこで政府當局は米國移住を奬勵して失業者の多數に出づるを防止せんとしたが、不幸にも米國の門戶は伊太利移民に對して閉鎖されて了つた。斯くして日に日に增加する失業者は物價暴騰のため非常に窮困し、人心著しく險惡に傾いた。今九年中に恐るべき革命の烽火が揚るべしとは、一般に豫期したところであつた。幸に國民が例のフューメ問題に熱中せし爲め、一時形勢の緩和を見たが、同問題も何うやら解決が出來さうになつた今日、伊太利の前途は決して樂觀する事を許されない。

英米兩國は如何うであらう。今春から冬へかけて、或は炭坑工夫、或は鐵道從業員、或は鋼鐵業勞働者の大ストライキが頻々と行はれたのみではない。殆んどストライキが流行病となり小ストライキに至つては擧げて數ふる遑がない。此等ストライキの目的は、往々勞銀引上、勞働時間短縮以上に出で、現代の產業組織の根本的改造に至るやうな有樣で、事態重大であると云はねばならぬ。

佛蘭西では、先般の總選擧は、クレマンソー內閣の勝利に了り、國內目下靜平であるけれども、是れは昨年十一月の對獨休戰條約すら未だ完全に履行されず、獨對媾和條約に至りては、未だ其の效力を發生せざる今日、國民の戰爭氣分が去らず、敵愾心が消磨せぬからである。元來熱し易く冷め易き佛國民が、果して何時まで精神の緊張を維持し得るであらうか。思へば佛國は恰も煙を斂めた休火山である。

敵國側では獨、墺の革命は多言するを要せない。現在墺太利の如きは、物資非常に缺乏し、國民は殆んど餓饑道に陷りつゝある。是れに乘じて過激派は其の魔手を延ばし、同國は今や累

卵の危きに在る。

三

歐米諸國の形勢は斯くも險惡である。伊太利の如きは社會革命が近き將來に豫期せらるゝ。此の世界大變亂の肉薄せる時に當り、獨り我國のみは世界的大思潮の外に超然として、全く其の影響を蒙らぬ程、國民の思想が健全であらうか。否、私の見る所では不幸にして毫も樂觀する事を許さぬ。

我國の物價は非常なる騰貴を爲し、激甚なる生活難の怒濤は既に國民を呑んで了つた今日、人心は著しく動搖し、思想は甚しく惡化しつゝあるのである。今夏以來勞働者間に、同盟罷業怠業等頻々として行はれ、俸給生活者間にすら、增俸運動を起す者が續々として現はれた。尤も一巡り增俸の行はれた結果目下世間は平靜であるけれども、引續き暴騰しつゝある物價の壓迫を受けて、近き將來に再び猛烈なる增給增俸運動が起るであらう。物價騰貴の止まぬ限りは、此の運動は何處までも續くべく、竟局不測の變を生ぜぬとも限らぬ。我國の前途頗る憂慮すべきである。

斯る事情に對應すべく、現内閣は如何なる抱負と經綸とを有するかと云ふと遺憾ながら皆無である。外には過激思想の侵入を喰止める爲めなりと稱して、陛下の忠良なる軍隊を西伯利の氷雪に暴らし、内には危險思想の發生を防止する爲めなりとして浪花節語を巡回させて居るけれども、肝腎なる國民に生活の安定を與ふる事を閑却して居る。民間に物價調節の聲高く、通貨收縮は殆んど輿論であるにも拘はらず、現内閣は只經濟界の景氣を惡化する事のみを恐れ、物價の奔騰を放任して顧みない。高橋藏相の云ふ所に依れば、社會の多數者は今日の好景氣を喜び、之に苦しむ者は社會の極く少數者なる俸給生活者のみであるさうであるが、俸給生活者即ち智識階級は、社會の少數者とは云ひ乍ら、其數約一千萬人(俸給生活者の家族を合して)に達し、決して少數者として無視す可きではない。加ふるに此の階級の者は質に於て社會の最優等者である。社會の中堅となり、國家の背髓となる者である。斯かる者を少數者として侮り其の利益を顧ずして可なりや。更に今日の如く、物價の暴騰の爲め苦痛を感ずる者は、決して智識階級のみに限らず、勞働者も亦同樣である。尤も現在の好景氣の結果、勞働者の或者は戰前に數倍する收入を得て、所謂勞働成金となれるものもあるけれども、其の多數者は然らず。戰爭開始當時に較べて勞銀は一

般に騰貴して居るけれども、決して物價の騰貴に伴はぬから、勞働者間にも智識階級同樣生活難を感ずる者が多い。此事は最近の頻々たるストライキ、怠業が最も雄辯に說明して居るのである。斯くの如き次第であるから、我國の勞働運動が惡化し、而うして、現代に不滿を抱く智識階級が無產階級として利害を同じうするの故を以て、勞働者を援助することになれば、恰も虎に翼を添へるやうなもので恐るべき事である。目下の如く景氣の好い時代にはさして心配の事はないが、遠からず來るべき世界的不景氣の爲め、我國に於ても多數の失業者を生ずる曉には、餘程憂慮すべき事がありはすまいか。

　現內閣にして我國の將來を思ふの誠意があるならば、一日も早く物價を調節して、國民に生活の安定を與ふべきである。多少貿易の不振を來す位は、最早や顧慮すべき秋でない。然るに平民內閣の名に背き、現內閣は有產階級の味方となつて、無產階級の利益の如きは眼中に置かない。從て物價を調節して、生活難より無產階級を救出す誠意乏しく、其の物價調節の爲めと稱して行ふところは、殆んど全く世間に申譯の爲めにするに過ぎない。如何う考へても、物價調節に關して、現內閣は前內閣に較べて、其の誠意の遙かに及ばざるを遺憾とせざるを得ない。尤も前內閣が物價調節の爲めに取つた策は、殆んど全く失敗に終り、無能の譏は免れ得ないとしても、無產階級の爲めに極力努力する誠意を有つて居たことは疑ふの餘地がなく、官僚內閣の方が、平民內閣と稱せらるゝ現內閣よりも、より多く無產階級の味方であつた事を認めなければならぬ。然し斯く云ふからとて、私は官僚內閣を謳歌するものではない。否な之を排斥して熱心に政黨內閣を支持する者である。然し何れの政黨も社會の一部たる有產階級の利益を代表するに過ぎざる場合に行はるる政黨內閣は、官僚內閣以上に不可なることがある。此の理由に基き現內閣を不可なりとせば、憲政會內閣は如何。之れ現內閣と同穴の狐である。如何なる政黨內閣たりとも、現狀の下に於ては到底無產階級の利益を考へるやうなものはない。斯かるものに對して物價調節を求むるは、蓋し無理なる注文を爲すものであらう。無產階級の利益擁護の爲めには、現狀を打破し、政黨延て議會を改造し、汎く國民の利益を代表するものとせなければならぬ。斯くて始めて無產階級の利益が顧慮される事となり、始めて物價調節も實行される事となるのである。其他勞働問題を初め、無產階級に利害關係ある問題の解決皆然りである。現在のやうに有產階級が議會を支配する間は、迚も其の見

込みがない。最近勞働者が要求する意味に於ての勞働組合公認の如き、實に然りである。此等の重大問題は、議會が根本的に改造されて始めて解決の見込がある。何よりも普通選擧が第一である。是れが有らゆる社會改造の基礎であらねばならぬ。

無産階級が、今日の如く際限なき物價騰貴の爲め其の生活を壓迫され、思想上に甚大なる惡影響を蒙る事とか、勞働問題が今日の如く紛糾して、近き將來に於て如何なる大波瀾を捲き起すやも計られざる事とかは、今春の第四十一議會に於て、選擧法改正案が議せらるゝ時には、何人も豫見せなかつたことである。然る所其の後世界の形勢の大變化に連れて、我國の事情も急轉直下して僅か一ケ年足らずの間に、今日の如くなつて了つた。新選擧法が成立するや否や、直ちに時勢に適應しなくなつたのであるから、斯樣な法律を改正するのは當然の事である。改正せねばならぬものを改正するのに、政友會の云ふ如く、議會の威信を毀くると云ふ事はない筈である。又憲政會の幹部の云ふが如く、如何にして輕卒の譏を招かうぞ。

四

更に我が外交の改造を爲すにも、亦普通選擧を斷行する事を急務とするのである。惟ふに日支の國交險惡なる今日より甚だしきはない。今春山東問題に關聯して發生した支那の排日熱も一時靜まりかけたが、福州事件の如き地方的の小事件の爲め再燃することになつた。日貨排斥は今や南北支那は勿論、新嘉坡ジヤバ、スマトラ等南洋に行はれ、遠く米國桑港に及んで居る。支那に既に發送した商品は送還され、注文は取消され、對支輸出は非常に減少することになつた。今大阪神戸兩港對支輸出品中主要なるものにつき今年六月より十月に至る五ケ月間の數量を、昨大正七年同期の其れに比較すれば、左の如き大減少を見る。

玩具	八割九	化粧石鹸	八割〇
硝子鏡	七、九	精製糖	七、三
洋傘	六、八	賣藥	六、八
綿製タオル	五、九	椎茸	五、七

今回の日貨排斥は過去の排貨の如く地方的でなく、又容易に止みさうにない。然らば何故に日貨排斥が盛に行はれるのであらうか。我國が戰爭中支那に於て經濟上大發展を爲したるを妬み、山東問題に基く支那の對日反感を利用して、我國が開拓せる支那の市場を蠶食せんとする英米商人の煽動もあらう。日貨

排斥、國貨奬勵運動が自己の利益となる支那製造業者の陰謀もあらう。色々の動機に出づる學生、新聞記者、政治家の運動もあらう。然し此等英米人及び支那の排日の口實となり、又は眞に支那人をして奮起せしむる原因となるものは、我が軍閥が支那に對して行ひ來つた侵畧主義が是れである。此の侵畧主義が最も露骨に現はれたのは、大正四年日支交渉の時であつて、我國が支那に最後通牒を突き付けた五月七日を、其後每年國耻日として紀念するに徵しても、支那人が如何に我國を怨み憤るの深いかを知る事が出來る。若しも當時彼我位置を替へ、支那が我國に同様の事を爲したなれば、吾々は必ず同じく怨み憤つたであらう。支那の排日が我が軍閥の侵畧主義に基くの大なるは今更呶々するを要せない。

次に米國元老院が、山東問題に關し、我國に對して非常に無禮なる態度に出でたのも、是れ又米國人の多數が、我國の多年支那に對して行ひ來りし所を見て、我國を疑ふが故である。我が軍閥の侵畧主義が我國に禍する所は、蓋し非常に大なるものがある。

斯くの如く我國は支那に排斥され、米國に疑はれ、英佛も亦決して我國を信用して居ない。日露戰爭後我國を目するに、亞細亞民族中の先覺者を以てした印度人すらも、大正四年の日支交渉以後、我國に對する尊敬の念を薄ふするに至つた事は、印度の志士の告白する所である。我國は今や實に四面楚歌の裡に在るが、滿蒙除外問題西伯利問題の如き益々我が國際的立場を困難ならしめんとして居る。

英佛は露西亞より撤兵し、反過激派政府に對する財政的援助も打切り、米國も亦西伯利より撤兵したる今日、獨り我が軍閥は西伯利增兵を主張して居る。官僚軍閥の殘黨より成り、西伯利露西亞人間に非常に不人望なるコルチヤツク政府が將に沒落せんとする今日、益々之を助けて、過激派を正面の敵とせんとして居る。過激派は今や其の勢隆々たる有様であるから、之に當るには多大の兵力と巨額の軍費とを要し、或は我が國力を傾け盡さねばならぬやうなことに立至らぬとも限らぬ。然るに我が軍閥は何が爲めに敢て此の大犧牲を供せんとするか。增兵の理由が甚だ不明瞭で、吾人すら疑惑を抱くやうな次第であるから、外國人の猜疑は當然である。遠からず西伯利露西亞人間に、我國の侵略的野心を理由として、甚しき排日が起るに相違ない。

軍閥が既に我國に禍するところ甚しく、今後更に累を及ぼす

ところ測るべからざるものがある。斯くの如く軍閥が外交上に跋扈して、外務省を掣肘し、廣く國民の利益を無視して顧ざるは、**一に議會が汎く國民の利益を代表せず、軍閥の走狗に甘じて居るからである。**軍閥本位の外交より、國民本位の外交に移り、我が國際的立場を安全にするには、議會を至急改造して、民主主義の基礎の上に置く事を要する。若し依然として軍閥が我國の外交上に勢力を有し、將來に於ても憚る所なく侵畧主義を行ふならば、遠からず米國と大衝突を爲し、取返しの附かぬ事になる虞がある。私は我國の安全の爲めに成るべく日米戰爭を避けたいと思ふ。尤も世間には、日米戰爭の結果を樂觀する者が少なからぬやうであるけれども、其れは甚だ危險である。此等の人は、曾て蒙古襲來の時に神風が吹き、日露戰爭の時天祐があつた。日米戰爭憂ふるに足らずと云ふだらうが、天祐は恃む可からず。恃む可からざるを恃む時は國危し、此の日米戰爭と云ふ大國難を避ける爲めには、一日も早く普通選擧を斷行する事を必要とする。

五

普通選擧斷行、議會改造は、斯くの如く我國の內政、外交を刷新するの基礎となり、我國を救ふ最も有力なる手段である。所が、遺憾なることには、政友會は尙早論を固執して居る。**常に官僚と妥協苟合する事を生命として居る政友會としては、敢て怪むに足らぬが、**野黨たる憲政會は何うであらう。憲政會政務調査會は幹部案を容れて、今期議會に普通選擧法案を提出するけれども、大正十年十二月二十一日以後の總選擧より實施の事に決したさうである。從つて解散がなければ、大正十四年の總選擧に始めて實施せらるゝ譯で、正に六年先の約束をすることになり、誠に悠長な話である。武富總務は過日憲政會大會の席上に於て、加藤總裁に代つてなしたる演說中、世界の形勢は急激に民衆の勢力を增大し、政治上、經濟上、社會上に著しく影響を及ぼしつゝあるが、我國獨り此の大勢より孤立する能はずとせば、今日無爲にして終るは甚だ不可である。而して其の對策の一は普通選擧の確立であつて、是れぞ實に時艱を救ふ最良の方策の一であると云ひ乍ら、同時に六年後に普通選擧を實施すべしと云ふのであるから、丸で調和が取れぬ。私は到底斯かる姑息不徹底なる事に贊成し得ない。

憲政會幹部は、去る明治十四年明治天皇は十年後の明治廿三年に帝國議會開設を御約束あつたではないか、六年先の約束は

決して不當でない。と辯解するのであるが、前にも述べた如く最近社會の變化は非常に急激であつて、今日の一年は明治十四年時代の十年にも相當する位である。今日六年先の事を約束するは明治十四年時代に六十年先の約束をする如うなもので、四十年前の例は到底申譯の材料とはならぬ。憲政會の幹部は民論には從いたいが、然し其れでは元老や貴族院が憲政會の政權に近くを妨ぐる恐れがある。其處で所謂、河豚は食ひたし命は惜しいで、遂に羊頭を揭げて狗肉を賣ることになつた。黨内に急進派の反對あるは當然の事である。

六

政友會や憲政會幹部派が、普通選擧尙早論を唱ふるは、定めし普通選擧は主として勞働階級に選擧權を與へる事になるのであるが、此の勞働階級は未だ政治的自覺に乏しく、選擧權を有効に行使し得まい。之れに與ふるは、正宗の銘刀を小兒に授けるが如きものであるから、先づ敎育を盛にし、其の智識向上の日を待つべしとするのであらう。然るところ我國に於ては普通敎育頗る發達し、無敎育者は佛、伊、白等立憲政治の先進國に較べて少ない。我國よりも無敎育の多い國に於てすら、現在普通選擧が相當なる成績を以て行はれて居るに、何故に我國獨り其の實行を躊躇する。尤も我國の勞働階級に多少政治的自覺の不充分なるところあるは事實である。然し乍ら政治的自覺の不充分なる事は、獨り此の階級に限らず、現に選擧權を有する農民、商人亦然りである。然るに何故に此等の間に差別待遇をなさんとするか。去る明治廿三年帝國議會開設の時、果して國民に充分なる政治的準備が有つたであらうか。否な無かつたのである。立憲政治は當時見方によつては尙早であつたにも拘らず斷行したればこそ、太平無事に立憲政治が行はるゝ事となつたのである。若し當時尙早と稱し、實行を躊躇したなら、恐らく我國は世界に誇り得べき憲法史を有しなかつたであらう。今日の普通選擧尙早論者は、當時の政府當局の苦心した所を大に學ばなければならぬ。

普通選擧には或者の云ふ如く弊害もある。然し何事も一利あれば一害あるもので、弊あるを恐れ、利あるも斷行を躊躇すれば天下何事も出來ない。納稅資格を撤廢し、廿五才以上の男子（私は必ずしも此の年齡を固執せない）にして六ケ月以上其の選擧區内に住居を有する者に選擧權を與ふるは、今日の急務である。然るに現在の衆議院議員は選擧區に於ける自己の地盤が普通選擧の實施に依り崩壞するを恐れ、只自己の立場のみを考へて贊成せざる者が多いから、吾人は起つて、輿論の力を以て彼等に壓迫を加へ、次の總選擧より普通選擧を實施すべく、選擧法改正案を今期議會に提出通過せしめなければならぬ。

（大正八年十二月二十八日）

兩院改造・勞働首領問題

近時貴衆兩院並に既成政黨の行動に對して不滿を懷く者尠少ならず、何等か之を改造して眞に國民の爲めの議會たらしめんと熱望するの聲野に充ち滿ち居れり、仍つて之が改造の根本に關して、先達の士に左の三個條の問題に就て御意見の發表を乞へるに、多數の御贊同を得たるは、我社同人の感謝措く能はざる所也。

一、貴衆兩院改造の第一歩は先づ何から着手すべきか。

二、既成政黨改造の第一着手は何よりすべきか。

三、勞働黨出現の際は如何なる資格ある人が首領として適任なるや又適任者は誰なりや。

○ 小泉信三

私は議會などは何うでも好いものだと云ふ考へは持て居ない。併し吾々は吾々の目前にある帝國議會及びそこにある諸政黨の爲めに氣を腐らされて居るので、何時の間にか、議會及び政黨に關する問題は士人の論ずるに値せざる問題であると思ひ込むやうになつて仕舞つて居た。ヰリヤム・モリスが二十一世紀の英吉利を描いた夢想小説の中ではエストミンスターの國會議事堂は肥料置場になつて居る。而して小説中の一人物たる博學の一老人が往時を追懷して、昔しあの建物の中には肥料よりももつと不潔で、肥料とは違つて全くもの〻役に立たぬものが入れてあつたのだと云ふところがあるが此一節を讀んで微笑を禁じ得ないものは恐らく私一人ではあるまい。少し見識のある人ならば、あの不誠實不正直にして粗野無識なる政黨員等の手で、吾々の生活の改善などはして貰ひ度くないと誰しも考へて居る事だらう私の友人の中にも議院に席を連ねて居る人があるが、私は是等の尊敬すべき紳士が何うして彼の政黨員の仲間に伍して日を送つて居られるか、たゞ其事を不思議に思ふ許りである。

私は如何にして議會を改造す可きかと云ふ「改造」社の問には答へないで、吾々が如何に

厭惡と輕侮の念とを以て現在の議會と政黨とを眺めて居るかと云ふ事丈けを述べた。併し現在のものに對する不滿は『改造』の第一步である。── して見ればこの答にならぬ答へも或は改造社の要求の一部を滿たして居るのかも知れない。

法學博士　岡村司

余は一國の經營料理は一國の人悉く之に任すべく國內の能力者は總て國政に參與するの權利ありとする理由に依り普通選擧を主張する者なるを以て貴衆兩院改造既成政黨改造の如きも先づ普通選擧さへ實行せば自ら改造の緖を得べく恐らくは刃を迎へて解くるの快あらんと信ず。世間普通選擧に反對する者往々之あるが如きも此輩は僭越にも自ら支配階級に屬すと妄信さる者然らずんば奴隷境涯に甘んじ政治は机上の爲す所なりと猥りに自ら枉屈する者なるべし、貴族院議員も普通選擧に依り唯被選資格の年齡を高むべきか、既成政黨も普通選擧の結果恐らくは根本より破壞せらるべし勞働黨の出現は早晩避くべからず其の首領たる者は固より之を今日の白頭口舌者流の中に求むべからずして勞働者中の少壯有爲の者に草野泥土の中より倔起して之に當り裁決流るゝが如く一言にして大疑を斷ずるの概あらんことを要す余は必ず此の如き人物の出現すべきことを信じて疑はざるなり。

早大教授　北澤新次郎

一、第一步は何と云つても普通選擧であつて之れなくして、改造の希望はない。而して小生は衆議院が眞に民衆を代表するに至らば、貴族院は必要なからんと思惟するものである。

二、第一着手は矢張り普通選擧である。今日の如く議院が特權階級の利益を代表するものであつては到底新日本の建設は出來ないのである。故に既成政黨は速かに根本的に改造する必要がある。

三、勞働黨出現の際は自分は高野岩三郎博士を其の首領適任者の一人と思ふ。博士は人格高潔、識見卓越、加ふるに勞働問題に關して極めて進步的の思慮深いからである。

○　室伏高信

一、議會の權限を縮少し之を消費者の代表者に制限すること及び貴族院を廢止し普通(男女)平等直接法定年齡選擧即時實行

二、既成政黨員は樞密顧問扱ひにすること、勞働黨樹立のこと

三、首領適任者は今後の出現に俟つ、自然に生長すべし(政黨とともに首領も生長す)

○　賀川豊彦

一、貴衆兩院の改造は先づ普通選擧によつて金權政治を廢し、徐ろに衆議院を改造し、衆議院の改造によつて、貴族院を壓迫することによつて成果を見ることが、出來るでしやう。

二、既成政黨の改造も普選運動の結果に待つ外に道はありません。國民が政黨を信用せぬとが、改造の近道でありましやう。

三、鈴木文治君を勞働黨の首領に推しましやう。理想から云へば鈴木君はヘンダーソンの樣に豪くは無からうが、中心人物が無くちや困るから、勞働運動に苦勞した鈴木君を首領にするのは至當だと思ひます。

法學博士　末廣重雄

政黨及議會改造の第一歩は普通選擧の實行であらねばなりませぬ、勞働黨の首領として適任の人を發見するを得ざることを悲しみます。

○　安部磯雄

一、貴族院の改造は絕望です出來る事なら之を廢止するのが最良策と存じます、衆議院の改造は普通選擧が第一步でありますが成年（男女共）選擧まで徹底しなければ駄目だと思ひます

二、普通選擧から成年選擧まで進めば政黨の改造は自然に行はれるだらうと信じます

三、勞働黨出現の際は當然勞働者の中から首領を選擧すべきだと思ひます勞働者以外から首領を選ぶ程に勞働者が無力であるならば勞働黨が起る筈はありません勞働黨には多少勞働者以外の者が參加するかも知れませんが左樣な人々を首領に戴くことは萬々ありますまい勞働者が自分の仲間から代議士を出し首領を選ぶ樣にならなければ勞働黨は決して起りますまい若し起つたとすれば其は似而非勞働黨であります

北昌素之

一、大選擧區制普通選擧の卽時實施。

二、同前

三、北原龍雄君　識見、手腕、精力、辯舌、文章、風貌に於て、六千萬同胞中、勞働黨首領として同君の右に出づるものなしと確信す。

代議士　齋藤隆夫

一、速に普通選擧を施行して衆議院を改造し强力なる國民の後援を以て貴族院改造に邁むべし。

二、已成政黨を離て解散し新組織の上に新政黨を樹立すべし。

三、差當り適任者を發見する能はず。

法學博士　神戸正雄

一、先づ貴衆兩院の組織を改める事より着手すべし、私の理想と考ふる所に依れば、衆議院にては半數の議員は有産者より選擧し他半は無産者より選擧することゝすべく、貴族院の方は凡て選擧に依らず又〃選とも せず、專ら現在の勅選議員の如きもののみとしたし。

二、第一の結果として自ら既成政黨も改造せざるを得ざることゝなるべし。

三、遺憾ながら、未だ適任者見當らず。

○　近松秋江

少年時代より政治に興味を有することは、今に至つて何ほ變らざれど、現在の議院政治及び政黨の、如何なる點に慊焉たらざるかに

ついては、直接其等の團體と關係する處殆どこれ無きが故に、貴問にお答へする事不可能に候。

乍去貴族院の一部の特權階級たる華族は將來（併も近き將來）全廢すべきものと信ず。例へば現在の侯爵を、子孫の代に伯、子、男と遞次降下するといふやうな方法にても可なり。

若し夫れ下院及び現在の既成政黨に弊多しとして、これを改造すれば、先づ普通選擧制を急施するが、その第一着手なりとの世論喧しけれど、狂生の見る處は、稍々世論と異り、否な未だ十分に世論を解する能はず。暫く狂生の所見の一端を洩らせば、普通選擧とは少くとも、間接税以外に金貳圓也五圓位は國家に納税する者に選擧權を與ふるが道理なり。納税は國民一般の普通の德義なりと信ず。一年に貳圓や五圓位の金は直接に國庫に奉納するが普通なり。此の意味に於て、狂生は、金貳圓はさておき金五圓でも拾圓でも國家にお賽錢を奉納して、一ヶ年間吾々の生命財産の安全を保護したる國家にお禮のしるしをするのが當然なりと思ふ。ルッソウの民約的國家にても、はた如何なる共和的の國家にても、兎に角人民の生命財産の安全を保護する國家に對して、ロハで容喙權を得やうとするは、不心得とも、罰當りとも、圖々しいとも、慾が好すぎるとも申すべき也。如上は、御下問以外の贅言なれども、貴問に對する責ふさぎに一言すること斯の如し。

法學博士　添田壽一

小生歸朝以來多忙を窮め之ぞと申上候事ほどの者も浮び不申不惡御思召奉願申上候。

○　馬場恒吾

議會及政黨を如何に改造すべき乎の御質問は、議會と政黨を如何なる程度迄改造する、必要ありや先決問題を決めずんば回答する能はず候、小生の私見に依れば、貴族院も、衆議院も、今日の議員は大多數之を更迭せずんば、改造の實に擧らずと存じられ候、買收と情實に依りて出で來りたる代議士、貴族も多額納税者たる貴族院議員は、到底新時代の政治を談ずる資格は無之候、即ち議會改造は、些々たる議院法の改正に依るべきものにあらず、其人間を大部分入れ更ゆるにあり、之は國民が、政治の遣り方に關して今迄の方式を全部改める必要ある事を自覺し、其自覺を行爲にて證據立てる事に依りて始めて行はるゝものに御座候、即ち國民の奮起を待つものに候、政黨改造は、普通選擧に依り、同じく政黨大部分の人の更代に依る外なし、小生は政界現狀打破の手段としてのみ勞働黨組織を必要と思ふ者なるが、階級戰の手段としての勞働黨には不賛成に候、階級戰代表者が議會に列するは、自家撞着なり、然し、強いて勞働黨首領を求めらるれば現在の友愛會長鈴木文治氏以外に適任者なし。

○　山田わか

（一）、貴衆兩院及び（二）、既成政黨改造を要求する一般國民の改造熱を先づ改造する事が第一

參です。（三）、勞働黨の首領は其の黨員が滿足する以上は誰でもいゝと思ひます。

○濱口雄幸

貴問三項者重大の問題にて熟考の上ならでは意見回示致兼候條不惡御諒承被成下度候。

○永田秀次郎

一、余は貴族院が従來執り來りたる態度に關して大なる不滿を有せず、寧ろ國民の眞正の意思が衆議院よりも却つて貴族院に於てより正確に代表せらるゝが如き觀あるを見て窃かに貴族院の爲に之を慶し代議政治の爲に之を悲しむものなり、今や改造の新天地に於て昨年中に貴族院に於て起りたる諸團體の離合の如き寧ろ之を衆議院に於て見るべき筈のものにはあらざるか、改造の急は衆議院にあり、衆議院の改造は政黨の改造に俟たざるべからず。

二、政黨の改造は政黨をして懼るゝ所を知らしむるにあり、現在の如く政黨の盛衰は地盤擴張にありて政策の良否にあらず、との信念が政黨首領の腦中を支配するが如き狀態にては政黨は絕對不可能なり、宜しく速に普通選擧を斷行し政策の良否に依りて黨勢を消長せし政黨をして黨員以外に國民ある事を知らしむるが第一の急務なり。

三、余は勞働黨の出現を希望せず、若し勞働黨にして農民を代表すと云はゞ政友會は何を代表せむとするか、若し勞働黨にして職工を代表するものとせば憲政會は何を代表せむとするか、畢竟此の如き問題の提供せらるゝ所以のものは既成政黨が眞正な國民の意見を代表せずとの不滿の下に起りたるものならむ、恰も米國の無黨派同盟 Non-Partisan League が農民の利益を代表して既成政黨を無視し直接政治に關與せむとして奮起せるが如きものが、余は此の如き空氣の早晚我國を風靡せむ事を懼る、然れども成るべく既成政黨の改造せられむ事を期待し勞働黨出現の際に於ける首領の詮議などを爲す事を欲せず。

代議士　植原悅二郎

一、貴衆兩院改造とは貴衆兩院の關係改造を意味するものに有之候、貴族院と衆議院との組織改造を意味するものと存候貴族院の組織を改造するには何うしても貴族院令の改正を要すべく、衆議院の組織を改造するには所謂一種の普通選擧（マンフードサフレーヂ）の實現が必要に候、又貴衆兩院關係の改造は主として兩院の權限規定の改正を、意味するものなるに依り憲法の修正を企圖する必要有之候、併し貴族院令の改正を實現するにも、憲法を改正し貴族院の權限を縮少するにも、又衆議院の組織を改造するにも、要は國民全體の政治的勢力を增進するより外に、途無しと、故に根本問題は凡て選擧權の大擴張に有之候。

二、既成政黨を改造するには、既成政黨の基礎を改造するより外に途無く候、而して凡て政黨の基礎は政黨員を選出する衆議員選擧法に非されば既成政黨改造は選擧權の大

擴張に求むる一策あるのみに候。

三、勞働黨の出現せるに其首領を定むるが如きとは不可能に候、元來政黨の首領は其黨内より自然に生ずるものならざるべからざる義に候、勞働黨の成立は普通選擧實行後に於て始めて見るべきを、而して其首領は其中より出現せざるべからざるものに候、從來の我國の政黨の如く首領を戴く政黨なら眞の政黨には無之又勞働黨としても價値なきものに候。

帝大教授　大島正德

一、衆議院と貴族院との權限關係上、前者には積極性後者には消極性のみを附與すること、但し其の消極性にも更に制限を設けて無際限ならしめざること。

華族選減制を實行して空名と實力との不公平を少からしめ、勅選者の終身任命を改めて停年制を設け時代的實感なき者を少からしむること

要は、貴衆兩院ともに、議員の粒を良くすること、衆議院に就ては國民の直接の責任である。

二、普通選擧を實行すること、是は既成政黨の改造であり、かねて政治其者の改造である。但し其の後も從前の通り黃白戰の上で當選出來るやうでは、政治の改良は前途遼遠である。今日の議員は、悉くが、投票賣買の上に立つてゐる。良心的政治の出來ぬは當然である。眞に心あるものは議員などにはなれぬといふ有樣だ。其れも國民の多數が立憲政治の何たるかを知らぬからだ。義務教育年限延長は、焦眉の急務。

三、何人が適任なるかを知らぬ、但し假作りや想說的人物の變裝首領は御免である。今の處多くを望めぬが、本當に眞面目な、初から其の方面に心を捧げた人がほしい。

○　相島勘次郎

一、普通選擧より

二、同　樣

三、何人が適任なるやを知らず、而も私自身は私が適任ではないかとも思つて居る。

文學博士　三浦周行

一、貴族院にあつては貴族制度其物が既に問題なるが、姑く現狀維持として有爵者、又は多額納税者間の爵別、府縣別選擧の制限を撤し全有爵者間全國多額納税者間の公選に改め勅選議員は政黨關係を超越し經綸學識閲歷に富める經世者學者教育者等を奏薦することゝしたし而して衆議院は普通選擧に依るの外なし。

二、國民の自覺なるかな

三、世評に上れる一二人者は滑稽に非れば皮肉なり此種の問題は勞働者が皮相の盲目的摸倣より着實なる國家的自覺に進んだる後徐ろに考ふるも遲からず、今次の國際勞働會議に臨みし勞働代表者及顧問の輩は第一に忌避するを要す。

慶大教授　阿部秀助

一、貴衆兩院改造問題は貴衆兩院の任務又た

は本質を明かにすることによつて自から之れが解決點を見出すを得可し、論者の信ずる處を以てすれば貴衆兩院の主なる本質は其が國民生活の表現物たる點にあり、議會が斯くの如き意義、內容を有する結果は國民生活と比較的沒交涉の狀態にある官僚化と、國民生活に向つて動もすれば壓抑的の態度に出でんとする資本主義的傾向に對して先づ改造の叫を發せざるを得ず。

一、吾人は政治上社會上に於ける政黨の價値を割引せんとするものにあらず、只だ我邦に於ける政黨は過去に於ける國民多數の政治的情操に同じき結果、一種の資本主義的色彩あり、而して此色彩をして出來丈け稀薄ならしめんが爲めには先づ既成政黨改造の根本の條件として國民の政治的自覺心を喚醒する必要あり、何んとなれば其時代の政黨は要するに其時代の國民政治思想の反影に過ぎざるを以てなり。

一、我邦の政界が勞働黨の存在を叫起せし場合に於て余は何人か之れが首領たるに適するやに就きて全く知る處なし、但、如何なる程度の人物を必要とするやに就きては余は獨逸社會民主黨の領袖たりし故「ベーベル」の如き人物を求めんと欲す即ち勞働黨にとりて最も必要なる資格は勞働者的體驗を有する指導者なることなりとす。

男爵　藤村義朗

一、貴族院改造の第一歩は華族制度と貴族院令の根本的改正

衆議院は普通選擧の實施及び帝國議會の開會期間を少くとも六箇月に延長すること

二、政治及社會的權利義務の思想に付き國民に徹底的自覺がなき以上政黨を善き方面に改造することは六ケ敷い、先づ國民の社會教育より始めたが宜い。

三、原敬氏　黨首として多年の經驗を有し常識に富み僻のなき平民的性格を有する故に、氏の白紙主義（オッポルチュニズム）は相當に勞働黨首領たらしめ得るであらう。

法學博士　山本美越乃

一、貴衆兩院改造の第一歩は先づ是等の兩院を組織せる議員其の者の改造を爲すに在り、議員其の者の改造は貴族院に在りては先づ終身議員の制度及華族中一定の爵位を有する者は當然議員たることを得るが如き惡制を改むべく、衆議院の選擧級にのみ迎合して國民の多數の福利を念とせず、殊に中等階級の衰頽を顧みざるが如き議員を議政壇上に立たしめざる樣改造を加ふるに在り。

二、既成政黨改造の第一着手は外交に、財政に、教育に産業に今少しく新なる智識と識見とを有する人物を入れ、老骨果肉の集團たるが如き感ある現在の政黨內の沈滯腐敗せる空氣を一新せしむるに在り。

三、勞働黨出現の際は何人が首領として適任なりやと質問に對しては、乍遺憾吾人は未だ其の適任者を發見せずと答ふるの他なし、苟くも勞働黨の首領たらんとする者は

身自ら勞働階級の實況に通じ、少くとも勞働問題なるものに對する一ケの定見と徹底せる理解とを有する者ならざるべからず。此の意義よりせば世の後藤、尾崎兩氏、等を勞働黨の首領に擬せんとするが如き說には賛成する能はず、我が國民は一夜作りの女子勞働顧問を國際勞働會議に送れるが如き滑稽事を玆にも再びすべからざるなり。以上

法學博士　花井卓藏

一、人物改造、就中貴族院に在りては陳陳代謝を改めて新陳代謝となすの要あり。

二、資本閥を背景とする舞臺より改むべし。

三、其何人の適任なるやを知らず。

○上司小劍

一、私はパアーリヤメンタリズムといふものゝ信者ではありません。從つて上下兩院なぞといふものをも改造したいとは思つて居りません。

二、前條の理由から、パアリヤメンタリズムの私生兒たる政黨といふものも嫌ひです。

三、政黨が嫌ひですから、勞働黨といふものも好みません。殊に首領といふやうなものを必要とする黨派は厭やです。

四、要するに、どうでもよいのです。（人間が總べて完全なものにならない以上）

○堺利彥

一、普通選擧の外なし。

二、既成政黨は、普通選擧の施行、勞働黨（若くは會社黨、若しくは社會黨）の出現と同時に、自然に改造せらるべし。即ち彼等の資本家的性質がいよ〱明瞭となるべし。

三、勞働黨出現の際、ホンの一時の過渡的現象として、或は舊政治家中の進歩分子（例へば尾崎君の如き）を利用する事になるかも知れぬが、グズ〱してゐると、モウそんな過渡時代の必要が無くなる。イヤ、もう無くなつて居るかも知れない。一體、勞働黨の初陣に「首領」などいふ者のない方が宜しい。成るべく實力のある若い勞働運動者が揃ひさへすればそれでいゝ。

法學博士　河上肇

拜覆御問合せの御書面只今手許に見付かり不申候に付御質問の個條委しくは相分り兼ね候へ共貴族院に關する問題なりし事だけは承知致居候而して小生は普通選擧を主張すると同一の根本的理由よりして貴族院の廢止即ち一院制度の樹立を希望致居候差當りては其權限の縮小が必要かと存候それに就ては憲法改正の必要これあるべく候はんが既に憲法の條文中にも改正の手續規定しある事なれば凡て合法的手段にて此等の事も實現出來得べくと存候匆々



帝大新舊思想衝突批判

森戸助教授問題と森戸君の態度

長谷川如是閑

社會が、傳統や、因襲や、廣い意味での制度やの民梏に生命の固定を感ずる時に、社會的乃至國民的頽廢の自覺が起る。それは個人に於ける老衰の自覺と似たものであるが、個人の老衰の場合には、大隈侯のやうに、百二十五歳まで生きるといふやうな、觀念的の慰安法によつて、生命の信仰を續けて行くか、然らざれば、『早晩死んでしまう』といふありのまゝの事實に降服する外はない。それは、個體の生命は、更改によつてその個體自身の存在を永久にすることが出來ないからであるが、社會の場合、國家の場合には、それを組成する個體の更改によつて、集合體の生命が、或る程度までの「永久」の存在を續け得る。それを言ひ換へると、集合體の生命の存續には、それを組成する個體の更改が必要條件である。そこで、始めにいつたやうな原因から、自分の『生命の固定』を集合體が自覺し出すと（その自覺といふことは、集合體が生存を續け得る必須の條件で、この自覺を生じない社會又は國家は潰滅する）その『固定』を打ち破るほどの生氣を持つた新しい個體を求め出す。それが『新人』の要求である。さうしてそれは、生命を求めることなのである。自から生きる唯一の道なのである。

『新人』と私がいふのは、年の若いといふ意味に於てゞはない。漢語では『花婿』とい

ふ意味だ相だが、花婿は成る程年は若からうが、花婿の本來の資格は、年が若いといふ事その事に存するといふよりも、その若い生氣を以て、ジエネレートし得るといふ資格に存するのである。(ジエネレートといふ言葉は適當の譯語が見當らない、『產む』といつては狹い。『進化さす』といつては抽象過ぎる、要するにジエネレートするのである、デジエネレートの反對である)年が若くても、ジエネレートし得なければ『花婿』の資格はない。私のいふ『新人』も同じ意味で、社會的にジエネレートし得る人をいふのである。固定によつて衰滅することから社會を救ふ個體をいふのである。

此の意味で、或る集合體を組成してゐる人類の個別調査を行つて見ると、往々驚くべき事實を發見する。その集合の主要細胞(地位に於ても、數に於ても主要な)が、悉く老衰狀態に在るといふ事實を發見する。これで何うしてその集合體が生存して居るだらうと怪しまれる位である。醫者が能く、肺病で死んだ患者の肺を解剖してから　それが悉く黴菌の爲めに海綿のやうになつてしまつてゐることを發見して、これで能く患者が今まで生きて居られたことだと怪しむことがあるといふが、我々が、人類の集合體の生體解剖を行つて、屢々同樣の驚愕を値する事例に出會すのである。

これは私自身がやつた生體解剖ではないから責任は持たないが、『改造社』が、東京の帝大經濟學部を組織してゐる人類について、隱居細胞と、花婿細胞とを分類して、後者としてたツた二人を擧げたのは、(顯微鏡試驗の錯誤でないとすれば)私の今云つた驚愕すべき事例の一なのである。

改造社の擧げた二人とは、助教授の森戸辰男君と、講師の櫛田民藏君とであつた。森戸君の名は、世間にも說明なしで通つて居るが、櫛田君の名は、學者間に、一種の深刻さを以て通ほつて居る割合に、世間では說明を待つて知られてゐる名のやうである。何れにしても此の兩君は、東大經濟學部の堂々たる大家敎授の間では、後輩で彼等大家連の眼中に――無い、とはいはれまいが―あるにしても睫毛の末端に引かゝつて居る位の處であらう。私は個人的に兩君を知つてゐるが、兩君も。大家の睫毛の末端に引ツかゝつてゐることを十分に自覺し、且つ滿足し、場合によつて、光榮とすることも辭退しない心懸けは持つてゐるやうである。従つて兩君とも、自分達が、東大經濟學部に於ける『ジエネレートする人』であるなどゝいふ自覺を持つてゐるとは思はれない。兩君をさう解したのは全くの『他覺』であ

らう。然し兩君は、さう『他覺』された爲めに、全く面喰うほど自信のない人でもないらしい。花婿的赤面はするかも知れないが、花婿的職能については自信がある筈である。朝鮮人蔘の力を借らなくとも、それ自身にジエネレートする力を有つてゐることは確信してゐる人らしい。朝鮮人蔘の力を借りても、もうジエネレートする力の出ない人、朝鮮人蔘の力を借りて大にジエネレートする力をリキミ出さうとしてゐる人、さういふ人達の間では、兩君は、朝鮮總督府專賣局の御蔭を蒙らずに、ジエネレートし得る『新人』であらう。朝鮮人蔘を飲み過ぎて、朝鮮總督府の申し兒のやうなものをジエネレートしてゐる人々から見ると、兩君は、自發的、個性的、創造的性質を有つた『新人』であらう。(『らしい』『筈』『であらう』などゝ懷疑的判斷ばかり下してゐるやうだが、私は人間の身上のことになると、自分自身のことをさへ、『である』だの『だ』だのと、最終知識を高調する言葉で言ひ現はせないのだから、自分を離れた人體については、『らしい』といふさへビク／＼ものなのである)

で改造社が、兩君をジエネレーターと鑒定したことについて私は責任は有てないが、異議もない。然し、同社から、兩君の人物評見たいなものを書いてくれと頼まれた時に私は面喰つたのである。自分のことすら『らしい』以上に進めない私が、人のことを語るのに、何と云つて好いか、その場合の日本語がまだ發明されてゐないのである。その上、東大經濟部には、まだ、私の交際してゐる、又私の交際してゐない人で、朝鮮人蔘のお世話にならない人が澤山ゐる筈である。或は全部が、さういふ人であるかも知れないのに、改造社の顯微鏡試驗だけで發見された黴菌か細胞か、兎に角、その人見御供だけについて評論するといふのも、私に責任のないことについて、私自身責任を取らなければならないやうになる虞もあるので――その外にも、忙しいとか、頭がわるいとか、いろ／＼の理由をつけて、謝絶したのだが、そんな謝絶にへこたれるやうでは、雜誌の編輯者は、始終白紙の雜誌を出してゐなければならないといふことは、私自身に經驗のないことでもなし、原敬氏の外には、白紙の雜誌を出す勇氣のある人はないといふことも心得てゐるので私は、改造社が、私にシャニムに請求するのを、決して不條理とも、不道理とも、思はなかつた。五六日の間に、記者が二回、電報が三通、手紙が二通―餘計な事を省略するとすれば、結局私は、此の一篇に於て、兩君のことについて何か云う義務を承認したのだが、その折柄、森戸氏は、『經濟學研究』に掲げた『ク

ロボトンの社會思想の研究』の爲めに、雜誌と一緒に回收されたばかりでなく、起訴までされたのである。私は、人間の身上のことは、自分のことで解らないといつたが、更らに改正して『身上』と『自分のことでも』の二語を削つて、『人間のことは解らない』と言ひ直したいのである。元來それが私の本音なのだが、あゝいつたのは『お前は馬鹿だ』と言ひたい場合に、『少しお解りにならないやうだ』と云ふと同じく、味淋を混ぜて言つたに過ぎない。相手の解らなさが餘り甚しくなると、つひ『この馬鹿野郎』と本音を吐きたくなるが、馬鹿を『馬鹿』と云つてやつて、馬鹿が癒るものでないとすると、さういふ大聲を發じない方が社會的に妥當である（個人的自己滿足からいへばその反對だが）科學的醫師は、發狂者を氣違ひ呼ばりしたり、患者に向つて氣合ひをかけたりするものではない……

又話が外れたが、私は、森戸君の事件の不可解さの爲めに、同事件について、誰れ〳〵のかく〳〵の行爲は怪しからんといふ風の規範的の判斷を下すことは出來ない。從つて、誰れ〳〵がかく〳〵の處置を取り又は取られたのは、かく〳〵の理由によるとすると、さうしてその理由によるとする外に考へ得られないとすると、それは怪しかるとか怪しからんとかいふ風に、論理的の形式を採るより仕方がないのだが、それは『我等』の二月號に『森戸君筆禍事件の論理的解剖』と題して發表することにしたので、私は改造社に對する約束の履行としては、私は、森戸君の今度の論文に示した態度に關聯して、私の見るところ—それは偶然に、私の友人連も大抵同じやうに見てゐる—を簡單に一言して置きたい。

森戸君の論文の內容を引いて、その態度を觀察することは、法律上不可能なので、話が抽象的になるのは已むを得ないが、森戸君は、『凡て政策乃至運動は理想の存在を豫想する。』といふ立場に在る人で、唯物論的社會學者や、社會主義的經濟學者とは、全然違つて立發點を持つ人である。又君自身は社會政策の研究者として、その研究の中途にある人で、從つて『理想』の確立についても。中途にある人でなければならない。然し『理想』は物質的の攤がりから成り立つてゐないのであるから、『中途』と『到達點』との間には、言葉通りの『距離』といふものがない。『理想』を求めてゐるといふことは、或る意味で『理想』してゐることである。金錢だと『儲けやうとしてゐる』こと、『持つてゐる』といふこととは、『無』と『有』との違ひほど違

うが、『理想』に於ては、『求めつゝある』ことゝ『有つてゐる』といふこととが、同じやうに『有』なのである。從つて森戸君は、『求めつゝある』理想を『有つてゐる』と解せられても仕方がない。

がそこが問題で、理想は、宗教のやうに直覺的の認識に出立してゐると共に、知的認識によつて性質づけられる。故に固定的のものでなく進化的のものである。そこで理想は、必然に科學的研究と聯絡を有つてゐる。森戸君が、科學である社會政策と理想とを結びつけてゐるのは、其の點で論理的に正しい見解であるが、私は、『理想』が『科學』を規定するといふ斷定は採り得ない。さういへば、反對に、『科學』が『理想』を規定するともいひ得るからである。寧しろ後者の方が、合理的證明が可能なのである。人類學者の研究などは、後者の立證を重な仕事としてゐるのである。

さうだとすると、『理想を求める』仕事は、半は以上知的經驗そのものなのである。就中科學的經驗そのことなのである。固定した理想を造つて置いて、それにハマるやうな科學を見出さうとするのは、我々の祖先が試みて全然失敗したことなのである。森戸君が、その研究に於て立脚地としてゐる『理想』は、その手段としてゐる科學によつて進化すべき彈力を有つてゐるべきものである。

森戸君は『自由なる人格』といふ觀念を、自分の『理想』と必至的關係に置いてゐる。此の『自由なる人格』なる觀念の外延は變らないかもしれないが、內包は、知的經驗と共に變化して行く可能性を持つてゐるものでなければならない。同君がクロポトキンの社會思想についての研究は、此の內包的進化の手段であつて、信仰的でなく、知的である。即ち科學的である。氏が理想を求め、又は持つてゐるといふことは、科學的であるといふことを妨げては居ない。

で森戸君は、理學者が物質を要素にまで分解すると同じやうに社會の組織や制度について、それを要素にまで分解してゐる學者の研究を紹介した。さうして必要上そのメソッドについて批判し、その科學的正確さについて批判した。科學的研究に關する科學的批判とは畢竟さういふ仕事の外にはないのである。森戸君の今度の研究が、その成果に於て、全然成功したものか何うかは別の問題で、その態度の科學的であつたことは疑はれない。

それに對して、具體的に、あの論文の文句を捕へて、その主

觀的傾向の勝つてゐることから、非科學的であるといふ批評を下すものがあるかも知れないが、森戸君は、所謂文化科學は、自然科學のやうに主觀を離れては成り立たないといふ見地に立つてゐる多數文化科學者の立場を取つてゐる人であると云はれてゐる。さういふ人達の科學は、最も嚴正な意味に於ても、主觀に重大な意味を與へてゐるので、從つてその表現法としても『二プラス二は四に等し』といふやうな超主觀的な言ひ現はし方ばかりしてゐる譯には行かないのである。該論文の主觀的傾向は、文化科學傾向の必然の結果で、又その間の聯鎖を失ふほど非科學的表現法は用ゐてゐないのである。

殊に同君は、無政府主義的思想の實際的方面については、明言して、これを度外視し、又その主義の採つた實際的方向に對して反對を言明し、たゞそれが該論文の問題外故『他の機會に讓る』と云つてゐる。恐らく、それを他の機會に讓らなかつたら、此の問題は起らなかつたのであらうが、それは此の問題に關して根本的のことではなく、實際方面に關する贊否は、兎に角、此の論文の性質と表現法とが、研究の範圍を出たものでないことが、問題を決し得るのである。

次ぎに森戸君の此論文以外に於ける態度について考へて見る必要がある。此點に關して、同君の友人で私の友人である、さうして私がその人について何かいふ義務を持たせられた、前にも云つた櫛田民藏君の話の一節を紹介しやう。君は私にかういつてゐた。

政策の研究には、その前提の研究が必要であり、前提の研究には學說史の研究が必要である。殊に社會政策學者は經濟學說中、とりわけ近代思想史の研究を必要とする。近代思想史の中でも、マルクスの思想とクロポトキンの思想とは、學者も實際家も、一應も二應も研究して置かねばならないことなのである。森戸君のあの論文は全くその意味で書かれたのである。社會政策專攻の學者として、必要上研究の前提たるクロポトキンの思想を研究して見たに過ぎない。その證據には、同君は、更らに前提の一として、メンガーの思想やブレンターノの思想を、研究して、ブレンターノの翻譯も最近に公にしたし、メンガーの翻譯も目下整理中なのである。メンガーやブレンターノはクロポトキンとは全然違つた思想の人だが、森戸君は、矢張前提として研究すべき價値を同樣に認めて一緒に研究してゐる。さうして時を同うして、此の大なる距離を持つた三者を同時

に世間に紹介しやうとしてゐる。森戸君が、クロポトキンの思想の研究者であることは明諒ではないか云々。

私は『宣傳』と『研究』との區別が法律上有罪無罪を決することになるか何うかと云ふことは專門家の見地に任せるが、假りに、此區別を非科學的と科學的の區別と同視して、その意味で、森戸君の平生の態度の宣傳的でなく研究的であることを言ひ得ると思ふのだが、更らに『宣傳』を實行的傾向と結びつけて見ても、森戸君は、自分の研究した學說に直ちに實行的價値を認め、これが實行を高調してゐるものと思へない點で、『宣傳的』でないとも云へる。森戸君は、櫛田君のいつてゐるやうに、相反したいろ〲の學說を同時に研究し發表してゐるのを見ても、その何れを直ちに我國に實行しやうといふ意志でないことは窺はれる。相反した思想は同時にそのまゝ實現し得るものではないから。

森戸君はその研究した學說を、實行的の意味で宣傳したものでないことは明らだが、若し君が『實行』といふことを考へた時に、氏の研究中のものゝうちで何の思想が一番實際的で、實行に適切だかといふことを考へたとすると（それは事實考へたか何うか知らないが）何の思想を採つたであらうかといふことを想像して見るのも、本事件の決定について必要なことである。

私の見るところでは、森戸君が其の點でクロポトキンの思想を採つてゐると思はれる證據を見出さない。寧ろプレンターノを採つてゐると思はれる證據を見出し得る。それは去年の九月に公にしたプレンターノの『勞働者問題』の翻譯の序文に云つてゐる言葉である。君は、プ氏を『現存經濟秩序と矛盾せぬ限りに於て、勞働者階級の地位の向上し得る最大限度を指示』したものと斷じた上にかう云つてゐる。

『殊に泰西諸國に比して經濟的社會進步の著しく遲れたる我國、未だ治安警察法第十七條の存置を固執して勞働組合の順潮なる發達を阻止しようとする當局者を持つ我國、官僚と資本家との抱合に生れた怪物、協調會を以つて勞働者問題を解決し得るかのやうに考へて居る我國、にとつては本書の如き、反覆精讀する必要があると思ふ。』

此の文句によると、森戸君は、我國の經濟狀態に對する實際指針としては寧ろプレンターノを推奬としてゐると認めなければならない。その森戸君が、クロポトキンの思想を同時に紹介してゐるのであるから、その後者に對して、實際的宣傳であると斷定することは出來ない。假令森戸君は其のつもりであつたにしても、客觀の事實が、それを成り立たせない。

これでは私は森戸君を辯護してゐるのか、ケナシつけてゐるのか一寸解らなくなるが、私も『研究的態度』を以て、科學的な事實を觀てゐるだけで、森戸君を『宣傳』するつもりでも何でもないのだから、勢ひこんなことになる。

が自分のことさへ解らない私が、人のことを、あゝだのかうだのといふのは、私にとつては、甚だ非科學的態度としか思はれない。で私は嘗つてさういふことを公にいつた覺えはない。内密には云つてゐるが、總て『でしやう』體若くは『じやないか？』體を以て語つてゐる。それでも後で汗を流してゐる。今此文章を書きながらも、嘘ではない、兩腋にダク／＼汗を出してゐる。たゞ今度の森戸君の論文から進行してゐる事件は、實際不可解である。雜誌が回收される、それも不可解、森戸君の休職、それも不可解、森戸、大内兩君の起訴、それも不可解、人間のことは全部解らないと定めてる私をさへ、その不可解に焦ら／＼させるほどの不可解事である。萬事解つたつもりでゐる人々には定めし飛んでもない不可解事であらうと思ふと、學生達が『解らん／＼』と騷いでゐるのも無理もないことゝ思う。

私は皮肉な質で、自分に何事も解らぬ癖に、餘り人が『解らん／＼』と騷ぐと、アベコベに『解つた／＼』と云つてやりたくなる。で森戸君についても、少くとも、これだけのことは解つてゐると、腋の下の汗を覺悟して、これだけのことを云つて見たのである。もし森戸君について、これだけのことが解つてゐるならば、君の此度の論文について少しも問題などは起らない筈であるのに、仰々しい問題の起つてゐるのは矢張解らないーとすると『人間のことは全く解らない』といふ私の本音が肯定されることになりはしまいか。

自分のことを棚に上げて云つて見るならば、合理的思索の肯定し得ない事柄が無暗と起るといふことは、すべての人間を懷疑的にする道である。最も懷疑を忌む學者や役人が、懷疑者の製造に努力してゐるのは解らない。此等の人々の眼には、『理想』を持つ青年が、『懷疑』に行くまいとして藻搔いてゐる、あの同情すべき苦悶が見えないのであらうか。懷疑に行くまいと藻搔いてゐる點で、彼等青年は、人間を愛する人々である、社會を愛する人々である。此の人々を、幾度も／＼失望させることは餘りに殘酷である。殘酷は決して、好い結果を持ち來さない、私は、至純な、無邪氣な青年諸君の爲めに、その青年諸君によつて持ち來たされる次ぎの時代の爲めに、森戸君の事件が起らなかつたことを希望し、既に起つた以上は、合理的な道德的な結

局を見んことを切望してゐる、如何なる結局が、合理的であり道徳的であるかは、私の前に云つた『我等』の論文に於て觸れて置いたが、實をいふと、それは餘りに明白たことで、總ての人の理性が、それを彼れ自身に敎え得るのである。堂々たる學者や役人の、理性がそれを彼等に敎えないといふ道理はない。多くの人々は、自分の理性に目を塞いで行動すべく餘儀なくされてゐるのだ。さういふ必要を感じない青年諸君のみが、眞向に理性を見得る。社會は青年に敎えられる……こゝまで書いて來て私は、先きに昇格運動などで泣いたり笑つたりした青年のあつたことを想ひ出して、筆を止めた。傳統や因襲……その現はれであるいろ〳〵の名目や形式が、その名目や形式にこだわつた學校敎育や、實物敎育が、眞純な青年達をさへ、そんな風に固定した制度の奴隷にしてしまうことを想つて、今更でもないがイヤな感じにうたれた。日本は、いろ〳〵な方面から、自分の靑年をいろ〳〵の意味で失ひつゝある。森戸君の事件の歸決如何によつては、又々多くの靑年をいろ〳〵の意味で失はなければならない。次ぎの時代の日本を形作る人々を失つてしまつて、何によつて日本を作らうとするのであるか。私に解らないことが又一つ殖えた。

編輯局より

今月は突如として森戸敎授問題が起つたので、新人評論が結局此問題に乘り換へて了つた感がある。隨つて山田わか氏其他の二三執筆を願つたものは來月に延期することにした。

山川均氏から七十五枚の長論文を頂いたけれども何うしても〆切に間に合ひ兼ねた爲め、殘念乍ら次號に延した。表紙に山川氏の印刷をして了つた後であつたので、其儘とした。

森戸問題に就きて

京都大學教授
法學博士　神戸正雄

（一）

東京帝國大學經濟學部の森戸助教授が同學部の機關雜誌「經濟學研究」の創刊號にクロポトキンの共産的無政府主義を紹介されたるに就き其が問題となり、其結果、右雜誌は發賣禁止とはならなかつたが、自發的販賣中止の形にて發賣禁止に近きことゝなつたといふことである。其れで世間には其處置の當否並に森戸君の態度の當否が切りに問題とせられて居る。仍つて私にも之に對する意見を吐くやうの依頼のまゝに、敢て茲に卑見を述べやうと思ふ。

（二）

先づ森戸君の態度の當否から述べる。同君の論文を見ると、同君はクロポトキンの夫の主義に關する數多の參考書物を讀んで、之を綜合して、且つ紹介し且つ敷衍して居らるゝ。其の單純なる飜譯でなく、當さに森戸君の意見になつて居り、たゞ其に其の出處淵源を、書物の頁數を指して明かにせられて居る。之に依つて同君も亦た共産無政府主義者であると推定し得る。此に於てか同君に對する讃否が盛に起らなければならぬ。或者は同君こそ我等の本當の總大將である、福田時代よりも河上時代よりもむしろ森戸時代を來らしめざるべからずといふであらう。併し反對者は森戸君を以て國賊と呼び、危險人物と爲し、單に其論文の撤回のみにて滿足せず、進んで同君の地位をも脅かさうとして居る。今日までは河上君に對して猛烈なる非難を聞いたが、今や森戸君の如き一枚上手の新人の現はるゝに依りて、河上君の如きは最早そんな危險人物でなくなつた。河上君は森戸君に感謝しなければならない。

（三）

共産主義、特に無政府主義といふと、其詞自身が普通の人には如何にも危険のやうに感ぜられる。恰かも外國から耶蘇敎が這入つて來た當初に於て其が非常に危險視せられたと同様である。併し此主義其ものは本來決して危險ではない。人間が共產主義や無政府主義の下に平和且圓滿に生活して行けるといふのには人間が非常なる發達を遂げて、神様の如き人間の寄合とならなければならぬので、私達も何うかそんな美はしい世の中に住みたいと思つて居る位である。處が其は全く理想で實行難のものである。實行が未來永劫絶對不可能ではないにせよ、實行大困難のものであり、現代から其處まで行くのには中々距離がある。まづ地球と火星との交通位のものである。今其實行大困難のものを森戸君が唱へたからといふて、決して本來は危險とは考えられない。たゞ併し其が近頃の如く社會動亂が頻發し、人心不安定のときに權威ある森戸君の如き人が之を唱えることになると、折角の理想が濫用されて有害なる擾亂を生ずることになるの心配はある。で穩健なる學者ならば假令理想として之を可と思つても、時と場合とを計つて先づ遠慮して置くであらう。**併し學者に研究の自由があり、且つ學者的良心があるならば、**右の理想を研究し之を可と信ずるに於て之を正々堂々發表するとも少しも不思議はない。森戸君が所謂穩健でないといふ非難は受けなければならぬが、併し學者としての盡すべきものを盡したとはいふて良い。學者としては結果の良否を問はず、正當と信じたことを正當と發表すれば足る。即ち森戸君は學者として責はない。むしろ唯だ政治家として教育家としては穩當でない。或は學者としても、色々の主義學說を批評するのは良いが、或主義に捉はれ之を宣傳するのは不都合といふ人もあるが、此も學者の研究方法の相違で、夫の仕方が全然惡いとはいへない。

（四）

處で森戸君の論文の載つた雜誌を撤回した處置は、何ういふ成行であつたか其邊を詳しくは知らないが、其は多分大學の全くの自發的に出したのではなくて、政府當局よりの注意に出てたのであらうと想像せられる。又さういふ風に世間に傳えられて居る。が此は良くなかつたと思ふ。森戸君が學者的良心に動かされて正々堂々發表したものを、大學が當局の注意に遇ふて

引込めたといへば大學としては甚しき不面目で、むしろ發賣禁止の制裁を受けた方が大學として正々堂々の態度であつたと思ふ。大學として切角其學校内の人が眞面目に研究した論文を自ら引込めるといふのは、大學の權威を失墜するものである。自らを侮ること夥しい。併し乍ら私は政府が夫の雜誌を發賣禁止するならば其は多分已むを得ないことと思ふ。其處が大學と政府との立場の異る所である。政府としては、說の眞理か否かを問ふよりは、其結果の良否を問ふべきであり、森戸君の論文の如く苟くも國家政府を無視せんとするものは、政府としては默認することが難からう。で政府も此觀察點より彼を不穩當と思ふならば、斷々乎として發賣禁止すべきである。其を大學であるからといふて遠慮するとは是れ亦不思議であり、政府として其責を盡さゞるものといふべきである。斯くいへば大學としては不利の結果を生ずるけれども、此は致方がない。大學として國家政府に不利なることを發表する場合には、むしろ發賣禁止を賭して之を爲すべきである。斯かる事項につきては大學と政府とが其立場の相違よりして戰爭するより外はない。斯くて大學は時に國家に不利なることにても眞理と信ずる以上は、發賣禁止を賭して正々堂々發表すべく、政府は國家に不利と認むるに於て斷々乎として發賣禁止を行ひ、少しも假借するに及ばぬ。此れで大學の職分も完うせられ、政府の職責も盡さるる譯である。私は斯う考ふる。依つて今回の森戸問題に關聯した大學や政府の處置は何れも不當と認むる。若夫れ森戸君に至ては穩健なる學者といふことは出來ぬが、學者としての職分を相當に盡されて居るものと斷定する。

追録

前文を書き終つて郵便に附したる後、夕刊を見ると、森戸助教授休職並に留學罷免の辭令が出て居る。噓かと思つたが二三の新聞に同樣に出で居るから、先づ眞であらう。就ては私は尙一言する責任ありと思ふに仍りて追錄する。

森戸君は實に學者としては其責任を果した。併し國家の官吏としての制裁を受けた。此の如き始末になるのは官吏たる帝國大學教授助教授の避くべからざる運命であらう。私は森戸君に同情する。併し政府の處置も適當と思ふ。前の雜誌の論旨發賣を不適當と思つたが、今度の處置はむしろ適當である。但し其は當り前の事を行つたといふのだから賞める値はないが、非難することは出來ない。森戸君に至ては氣の毒ではあるが、初め

より其位の事を覺悟するの外なかつたであらう。官吏としては可なり手厳しい制裁を受けられたが、其代り學者としては立派に功名を顯はされた。永く思想史に特筆されることが出來る。前に岡村司教授が言禍により譴責を受けたことがあるが、今度のは休職であるからもつと厳しい譯である。併し厳しかつただけ森戸君の思想發表に對する勇氣と忠實とは一層尊敬を受けなければならぬ。森戸君は官吏として制裁を受けたが、併し天下の新思想に憧憬する幾萬かの新人には神の如く父の如く仰がるるであらう。其結果は夫の思想を抑壓する能はずして却て激成するかも知れない。強き反抗心を内に藏して機に應じて騷動を起さぬとも限らぬ。洵に困つたことになつて來たものである。政府としては之を放任するも危險、之を制裁するも亦其結果は危險、洵に困つた事である。政府のことは兎に角、思想問題を取扱ふ學者も、之を掲載する雜誌も今後は大なる覺悟を以てかゝらなければならぬ。吁、森戸事件、色々の難問題を惹起す種を播いた。

森戸氏とマルクス

村上正雄

森戸助教授お休職になつた。氏の眞の活動はこれから始まると信ずる。

その昔、マルクスはボン大學の教授にならうと志した。だが彼の餘りにも人道に忠なる主義と主張は、彼に教授の地位を拒んだ。森戸學士はまだ助教授である。そして歐洲に遊學されて歸朝後早速教授になられる筈の人である。ところが圖らざりき氏の「餘りにも人道に忠なる主義を主張し或は紹介――」は準備の整つた洋行までも奪ひ、その上氏を獄に投じやうとしてゐる。

マルクスは教授の望みを失ふと「ライン新聞」へ走つた。森戸氏は果して何所へ走られるのであらうか?。氏の前途は大いに見物である。官僚で腐つた狹い天地に住むべく氏は餘りに清く、餘りに自由である。

全部が「研究」の範圍

大庭柯公

クロポートキンの著書は、何時も外國語で先づ刊行されて、後に露語に翻譯される。Paroles d'un révolté の刊行されたのは一八八五年であるが、夫れが露譯されたのは一九〇六年であり、La conquête du pain. は一八九六年の刊行で、一九〇六年の露譯は、Mémoirs of revolutionist. 一八九九年の刊行で露、佛、獨語の順序で翻譯されてをる。私は其の最後のもの〻露譯を、一九〇六年に西伯利で購入して來て、同年の夏頃であつたと思ふ、其中の面白い個所を翻譯して、それに『革命家の手帳より』と、新聞流の見出しを附けて、當時の『大阪毎日』紙上へ連載したことがある。二十四回以上連載したかに記憶するが、相當に愛讀されたやうであつた。クロポートキンの名著は何處の文明國でも翻譯せられ、新聞紙流の興味本位ではあつたが、兎も角も今より十四年前に、彼の名著中の或部分は、現に私が邦譯してをる。斯んな有名な人の有名な學說乃至理想が、多少とも詳述されたからと云つて、それが一九二〇年といふ今日、濟むの濟まぬのと云ふ大問題になるとは、寧ろ不思議なほどである。

○

問題になつた森戸氏の論文に就て、その引用書の指示を拜見すると、後に十數冊のクロポートキンの著書の名が出してあるこれから見ても森戸氏は、我國でのクロポートキン研究のオーソリチーであるには相違ない。しかしながらクロポートキンの學說及理想の一班を知ることは、案外容易な仕事である。外國語の一でも理解するほどの者に取つては、其の一般的知識を得ることは案外容易である。若し邦字で現はされたものは之を禁絕し、横字の彼れの著書は寬過するといふのであるならば、文明的意義から見て、矛盾も甚しいものである。何んとなれば英佛獨とも、孰れも爭ふやうにして自國語に翻譯してゐるではないか。

〇

今一つ觀やうを變へて、兎角に危險視する人々に取つて、クロポートキンといふ人と名とが、惡いのであらうかと假想して見る。これが亦如何にして見ても、左樣であるとは思はれぬ。一八八二―八三年のリオンでの絹織物工の騷擾事件の際に、職工團に對して演說をしたといふ廉で、クロポートキンが五年の禁獄に處せられた時、ハーバート・スペンサー、ヴイクトル・ユーゴー、スウインバーンなどいふ名士が、彼れの爲めに哀願したほどである。これだけの事實でも、彼れが如何に尊敬に値する人格であるかゞ想像され得る。クロポートキンの名と人とを危險視するのは、丁度我が開國維新の當初、耶蘇敎の名を危險視して、耶蘇を惡んだのと同樣である。

〇

森戸氏は偶々氏の專攻學科である經濟學上の研究からして、『クロポトキンの社會思想の研究』と題する長論文（六十六頁に亘る）を書かれた次第である。その方面に於て全然素人である。私のやうな者にも、一讀しただけで無政府共產主義の大體が、理論的に明瞭に會得される論文である。而かも其處に說明はあるが、提唱はない。其處に極く微弱な肯定はあるが、些少の主張だもない。つまり大部分の紹介と僅少の批判があるのみである。切言すれば全部が「研究」であるに過ぎぬ。思ふに如何なる妄論家も、學者に「研究」を容さぬと言ひ得るものはあるまい。其研究が縱令如何なる種類のものであらうとも、森戸氏の論文は畢竟此の種類に屬する。

〇

何人も知つてをるやうに、クロポートキンは無政府主義の研究以外に、大なる博物學者で又地理學者であり、隨つて又大なる旅行家である。現に『東部西伯利地誌資料』（一八七五年刊行）や『東部西伯利地誌大觀』（一八七三年刊行）などの大著述が彼の早い時代にあるが、斯んな二大著書でも飜譯紹介したならば我が帝國主義者や軍閥共は、クロポートキンは吾黨だと言つて彼を危險思想家とは扱ふまい。これほどの廣い深い學者にして政論家であるクロポートキンの理想論たる無政府共產主義を、我が大學助教授が研究批評紹介したのだ、今更知れ切つた學問の獨立など〻云ふことを絕叫するほどの事もない位、簡短な問題だと思ふ。

思想大臣でも新設せよ

山本實彦

山川帝大總長は總長として保守的であつてもよい。官僚臭い帝國主義者であつてもよい。しかし頭腦の進步的にして、人格に哲學的基礎があつたより善いことはない。この意味に於て今まては山川氏の頭腦の古いことも寛容しておいたが、今回の森戶問題に對する山川氏の專制的態度には少からず不快を覺えた。

現代は―民衆と共に―眞理と共に―の時代であつて―、法律に從へ―專斷の威力に見よ―の時代ではない。古き衣の國家主義者も新らしき衣の民本主義へとニスを塗り變へる時代である。

數多き大學敎授中には極端な新思想者もあれば、高天原的憲法黨もあろふ。民本主義者もあれば、國家社會主義者もあろふ。そしてそのうちには金權黨の御用臭い學者もあれば、軍閥の御本尊の所へ日參する似非學者もあることだろう。これ等の人々はそれ〴〵自分の願望と信念とがあることだろふから個人そのもの丶內面にまで立入る必要はない。

さま〴〵の異つたる形式に於て研究さる丶學理そのものは現在に於て、それが非難はあるにせよ、百年の後に於ては大歡迎大感激を生ずることもあり得る。レーニンの政策にしても、クロポトキンの「相互扶助論」にしても、現代の政體と相いれず、また時代の政治を毒し、人類の偕和を賊し、國家の存立を危くするから我々はよりよき國家の發達を希し、よりよき人類の福祉を望む點より極力排擊しなくてはなるまい。しかしクロポトキンや、ツエンカアの思想そのものは世界の學者によりて既に研究されてあるものである。彼等の學說はマルサスの人口論と對峙、研究されて學界の注目を引いておる。

泥棒や、殺人犯者の如く既に世人に齒せられないものでも、その心理、その動機やその生立なぞは研究の必要があると共に、いかに過激派であらうが、無政府主義であろうが、眞理の發見のためへの研究は必要である。眞理の研究が盛んでなかつたら科學でも、哲學でも、法制でも進化することは不能である。また假令へその過激派でも、無政府主義にも幾分の眞理は含まれておろう。眞理研究の中絕は文明の中絕である。我國の學者のみが獨りこの種の思想研究の出來ぬ理由はない。何故に山川氏は師弟の情誼を無視して、森戶氏排斥を目論見める一味の學生

に森戸氏の處分法を暗示したか。

山川氏は日本の官吏である筈である。それでありながら教授會の開催に先だち學生に教師排斥の擧に同情を表したか。少くとも日本の文部省として同氏の校規を紊り師弟道德を蹂躙したことにつきては懲戒に附する必要があると思ふ。(尤もこれは新聞による記事を根據にして立論せるものである)森戸氏のクロポトキン紹介が宣傳であるなら、それは或る種の處分は止むを得ぬとして、さて總長が生徒の排斥の議に肯定を與へるのは從來の倫理觀念から見て異例に屬する。

その結果として教授會なぞいうものは有名無實のものになつてしまいはせぬか。また—民衆と共に—眞理と共に—の近代的のいい傾向から酷く裏切つた事實で、あまりに教授連を馬鹿にしてをる。

余を以て見れば、山川氏は既に現代の思想をよく了解が出來ぬ人である。氏の奉ぜる帝國主義(?)はもう進化せない囚はれたる思想ではなかろうか。國家の理想は人智の進化と共に、ます〱高遠にならねばならぬ。それにはマルクスも、クロポトキンも多々益々研究批判して、そして國家の意思を健全にして人類の前途を光輝あらしめねばならぬ。

學說の研究についての予の意見は右の通りである。彼の英國では。南亞戰爭に際して、愛蘭黨首領レッドモンド氏は「英國は今回は戰端を開くことは回避せなくてはならぬ。南亞人に對する現在までの英國の要求は人道を無視し、正義を無視した遣り方であつた。今回若し開戰するとせば我國は正に正義の敵とならねばならぬ」と開戰論に大反對であつた。しかし、彼は議論には敗れたが國家の命令には服從した。そしてより强き愛國の實を示したのであつた。實際政治家さへ純理を汲分けるかくの如きものがある。我國であつたら奈何であらう。議論と實行とは飽まで別にすべきである。

總長に走つた興國同志會員は、また、文部省にも恩師の處分をせまつた。古い昔の文部行政でさへ呑み込めぬ中橋氏に、どうして近代思想が判ろう。現代の日本には全く「思想大臣」の新設を必要として來た。當局者に新思想を解し得るものが果してあるかどうか。そして世界の思潮に對して一家の見を有するものがあるかどうか。こう觀察して見れば當局の無學さはお氣の毒の至りである。

クロポトキンなぞ云へば、其名に恐れて直ぐでも國家を轉覆する計畫でもあるかに思つてゐる全く三代將軍時代の切支丹に對すると同一の態度で。

國民道德を朝から晩まで口癖の如く喋舌してをる文部の官僚等は、これ位の事で日本國民性が崩壞するのと思つてをるのか憚りながら我が國民思想の根柢はソコまで薄弱ではあるまい。

第二 福田河上兩博士論戰批評

カウツキーと社會民主主義

室伏高信

（一）

福田博士は久しく社會民主主義論についてその論敵に答へなければならない地位に置かれてゐた。當代における最大人氣學者の一人としての河上博士が福田博士に攻擊の矢を放つてからこの必要は一層促進された。福田博士から河上博士に立會演說を申込んだといふ噂もあつた。私は立會演說の必要であることを信じてゐた。それは如何なる理由かはしる由もないが河上博士の側から拒絕したといふことである。私は河上博士からその拒絕の理由を聽くべき機會の來ることを信じてゐるものである。しかし河上博士の拒絕にもかゝはらず、福田博士はその所信を發表するために社會政策學會の講演會を利用した。『勞働組合と階級戰爭』といふ講演がこれである。その速記を一讀してみて私の期待は裏切られずしてすんだ。矢張りわれ〳〵の立場が正しいといふ自信が益々確かならざるを得なかつた。福田博士はこの講演によつて、博士の特異なる社會民主主義論に何等の深い根據もないことを明らかにした、いふまでもなく私は學者としての福田博士に對して多大の尊敬を拂つてゐることは今も昔も些の異るところがないし、また學問上の論爭たるべき機會を利用して人身攻擊をなすがごときことは我等の厳に戒しめるところでなくてはならない。しかし私は福田博士を尊敬するがゆえにあくまでも福田博士の誤りを正したいと思つてゐるの

である。ありふれたる大學の先生達の議論であるとすれば少しも問題とするには足らないからである。また福田博士が畏敬すべき學者であるがゆえにその誤りを正すことは重要な意義をもつものであると信んぜられるのである。

(二)

福田博士の社會民主主義論の特質は第一にそれをもつて勞働階級の專制を意味するものであるとすること、第二はそれが單なる手段であつて目的ではないとすること、この二點である。この二點は福田博士のあくまでも維持せんとするところである。この點については私は既に意見を發表してゐるからこゝに繰返す必要もなく、また福田博士の『勞働組合と階級鬪爭』の講演を讀んで後にも私の既に述べてきた意見について少しも變更するの必要を感ずるものではない。たゞこゝに述べてをく必要のあることは左の數點である。

(一)福田博士はその社會民主主義論を證據立つるために今度は主としてカウツキーの『階級鬪爭』(Karl Kautsky, Das Erfurter Program)を引用した。さうして『私は其證據をもつてきた』と述べてゐる。證據とは實にこの『エルフルテア・プログラム』をいふのである。福田博士の講演のあつた翌日都下の諸新聞紙が『福田博士が大講演をなすために珍本をもつてきた』と報じた珍本は即ちこれである。尤も東京朝日新聞(大正九年十二月廿二日)によるとこれが『エンゲルスの珍本』『エンゲルスのエルフルト綱領解釋』として報導されてゐる。エンゲルスのこうした書物が若し存在してゐるとすればそれは慥に『珍本』であるに相違ない。さう云ふ『珍本』はわれ〳〵のような貧書生の手にはとても入るものではない。しかしその『珍本』と稱するものも實はカウツキーの『エルフルテア・プログラム』であるとすれば、『化物の正體見たり枯尾花』の感を免れることができないのである。何となればこの書物は社會主義のリテラチユーアのうちでは最もポピユラアなものであるからである。但し日本では發賣禁止になつてゐるとのことである。さうしてこの書物が發賣禁止になつてゐるのは世界中で日本だけであらう。

(二)福田博士はこの書物が社會民主々義の解釋上に重要な地位を占めてゐることを主張し、さうして次のように述べてゐる『…………………所が室伏君の御批評中にも、又河上君の御批評中にも一言も論及して居らない』と。河上博士に對しては

このことは事實であるが私については誤りである。何となれば私は既に『眞正の社會民主々義』のうちでこの書物の重要性を主張したるうへにこの書物のうちから、私の論據を發見したからである。(『改造』第一卷九號八五——六頁參照)

(三)福田博士に從へばカウツキーのこの書物は福田說の唯一の裏書きである。即ちカウツキーは社會民主々義をもつて勞働階級の專制を意味するものであると主張してゐるといふのである。しかし私の見るところは福田博士の見るところと正反對である。カウツキーはこの書物の何れのところにおいて勞働階級の專制を主張してゐるか。福田博士は少しもその根據を示してゐないが、私の讀むだところでは全篇を通じて福田博士の解說のごとき部分を發見することができない。勿論第五章の階級鬪爭論の部分にもこれを見當てることはできない。その全篇を通じての意味はエクスプロイテーション Ausbeutung の廢止、その廢止のための階級鬪爭の鼓吹、社會主義生產の實現といふことである。即ちこの書物の階級鬪爭篇の第十節勞働黨論のうちではこの問題について次のように述べてゐる。『被絞取階級の最低階級としてのプロレタリアートは、他の階級のなしたがごとくに、絞取の重荷を他の肩上に移すことはできない。それはそれ自身の絞取とさうして凡ての絞取とに終焉を與へなくてはならぬ。』この陳述によつて明らかであるとほり、カウツキーの期するところはエクスプロイテーションの廢止である。獨り資本家によつてのエクスプロイテーションの廢止であるのみならず、あらゆるエクスプロイテーション、勞働者自身によつてのエクスプロイテーションをも廢止することが、社會民主々義の職分である。カウツキーは明白にこう述べてゐるのである。從つてカウツキーの期するところは決して勞働階級の專制ではなく、勞働階級によつてのエクスプロイテーションの要求ではない。如何にしてこの狀態を實現し得べきか。カウツキーに從へば、エクスプロイテーションの基礎は生產的手段の私有である。即ち生產手段の私有を廢してこそエクスプロイテーションの廢止ができるとするのがカウツキーの立場である。その廢止のためにはカウツキーは階級鬪爭を主張する。しかし彼は決してブランキストではない。彼れは『凡ての階級鬪爭は政治的鬪爭である』ことを主張する。さうしてカウツキーの政治的鬪爭とは要するに議會主義である。彼れは議會主義によつて階級鬪爭を實現せんとするものである。この點は彼れの『エルフルテア・プログラム』の階級鬪爭篇の第九節『政治的鬪爭』の全文

中に説かれてゐる。從つて彼れはこの『政治的闘爭』の最後において『普通選擧』の必要を説いてゐる。即ち彼れの社會民主々義は單に目的においてエクスプロイテーションのなき社會の實現にあるのみでなく、その手段においても全人民によつての政治的行動全人民によつての政治的デモクラシーであることを知るのである。重ねていへば福田博士がその特異なる社會民主々義論の根據となさんとするカウツキーの『ダス・エルフルテア・プログラム』は福田博士の社會民主々義論を覆すべき有力なる材料となつてゐるのを知る。

(四)カウツキーの書物のうちでデモクラシーの問題に接觸してゐるものは、實は『ダス・エルフルテア・プログラム』ではなくして『社會革命』である。この『社會革命』中には特にデモクラシーを論じてゐる一章がある。カウツキーの社會民主主義論を引用するものは何よりも先きにこの書物を引用すべきである。福田博士はこの書物には少しも觸れてゐないが、これによると社會主義と民主主義との關係についてのカウツキーの解説は極めて明白である。彼れは決してブランキストではない。さうして政權の獲得のために革命的手段を用ゐることは、カウツキーに從へば『無用』である。無用であるのみならず『有害』である。この立場からして彼れは必然的にデモクラシーの擁護者である。彼れは政治的權力の獲得のためにデモクラシーの必要を高調する。また勞働階級をして社會革命に對して熟せしめるためにもデモクラシーは缺くべからざるものである。これがカウツキーの立場である。さうして彼れは有名なる一語によつて彼れのデモクラシーに對する態度を躍らせてゐる。『勞働階級にとつてのデモクラシーは有機體における光と空氣とである。』とこの一語によつてデモクラシーに對するカウツキーの態度は最も明白である。それにもかゝわらず、福田博士がカウツキーの社會民主主義をもつて單に勞働階級の專制を意味するものであると説き、從つてデモクラシーの反對者であるかのごとくに論ぜられるのは、私には何の意たるやを明らかにしない。こゝに至つて大リープクネヒトの言葉は眞理である『社會民主主義の敵は、社會民主主義が勞働階級の專制を主張するごとくに論ずる』と。

(五)福田博士の講演速記によると、次のような不思議な一句がある『室伏君は社會民主々義も矢張り全人民のクラシー、本統のデモクラシーであることが明らかに書いてあるぢやないかと言つて其部分を飜譯せられて居るが、河上博士も同じ所を同

じように譯されてゐるのであります。私は其文のある所を知らないのであります』こゝに河上博士と私との譯してゐる部分とは、エルフルト綱領の宣言の方の最後の一節であるが、それを福田博士が知らないといふのはどういふ意味であらうか。その存在の事實を否定する考であるのであるか。しかし福田博士が如何に否定したにしても事實は何人も抹殺することはできない。福田博士が社會民主々義論の經典とせられるカウツキーの『ダス・エルフルテア・プログラム』の階級鬪爭篇の冒頭にも引用されてゐるではないか、

（六）福田博士はカウツキーの社會民主々義を排してベルンシュタインの修正主義に傾いてゐるかのように見えるところもある。さうしてベルンシュタインが『社會民主々義を排斥して、デモクラシーを主張する』とは福田博士の解說である。併し不幸にしてベルンシュタインもまた福田博士の謂ふところの『僞りのデモクラシー』としての社會民主々義の主張者である。私は深く社會主義運動を信んずるとは彼れの歷史的の著述（Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozial Democratie）の冒頭に述べられてゐるところである（ベルンシュタインの修正主義については『改造』十月號拙稿修正派社會主義または拙著『社會主義批判』第二章參照）彼れはあくまでも社會民主々義の主張者であり、社會民主黨員である。彼れのデモクラシーとは社會民主々義である。この書物の第三章中の『デモクラシーと社會主義』以下においてこの點が特に明白である。さうして社會民主々義の任務について次のように述べてゐる『社會民主々義は勞働者をプロレタリアンの社會的地位から市民のそれに引上げ、かくして市民權（das Bürgerrecht）を普遍的（全人民的）にすることに努力する。それ（社會民主々義）は公民社會の代りにプロレタリアンの社會を對抗させることを求めるのではなく資本家の社會の代りに社會主義者の社會的秩序を求めるのである。』即ちベルンシュタインに從へば社會民主々義とは勞働階級の專制を意味するのではなくして全人民の市民權を意味するものである。福田博士の解說とは正反對である。ベルンシュタインはこの立場からして勞働階級の專制に反對するのである。即ち社會民主々義の立場から勞働階級の專制に反對するのである。彼れのデモクランーは次の一句によつて最も明白である『デモクラシーは單に手段であるのみではなく、社會主義の本質である』と。

（七）以上の六點の說明によつて福田博士の論據——社會民主々

義は勞働階級の專制を意味するものであるとして福田博士の擧げた論據が全部維持することのできないものであることが明らかになつたと思ふ。私はこの點については最早やこれ以上述べる必要を感じない。しかし福田博士はベルトランド・ラッセルの信奉者であるから更にラッセルの解說をもつけ加へて置くことゝする。ラッセルは一八九六年に『獨逸社會民主々義』(Bertrand Russell, GermanSocial Democracy, 1896)を著した。彼れはこの書物のうちで獨逸社會民主々義の性質について可成り詳しい研究を發表してゐるが、それによると、ラッセルは獨逸の社會民主々義が一八九一年のエルフルトの會議においてマルキシアニズムの完全な勝利をもたらしたことを述べてゐるにもかゝはらず彼れは決して獨逸社會民主々義をもつて勞働階級の專制を意味するものであるとは論じてゐない。彼れに從へば獨逸社會民主々義の要素は政治的民主々義と經濟的團體主義との二つである。私はラッセルの解說と全然一致することができる。ラッセルとの一致は『日本のラッセル』としての福田博士との對抗である。かくしてラッセルと『日本のラッセル』との距離は益々遠くなるばかりである。私は福田博士がその無信仰的社會政策の牢獄から解放される日の來ることを望む。

(三)

福田博士の社會民主々義論の第二の特質はそれが單なる手段であつてツウエック(Zweck)でないとするの點にある。この點についても私は不幸にして福田博士とその見解を異にする。福田博士の意見は要するに階級鬪爭そのものと社會民主々義そのものとの混同、若くしは社會民主黨なる政黨と社會民主々義なる原理との混同であると思はれるが、この點は私と直接關係のない部分であるから省略する。(大正九年一月九日)

ページの上の解放に飽いた

賀川豊彦

「社會民主」の意味に就ては、私は八年十二月號の室伏君の解釋で結構だと思ひます。私の考へとしては、福田先生には御無理があるように思ひます。

社會民主は民衆を凡て同一の立場から論じたいと考へて居るものでありますから、階級別を主張しないものであります。第四階級の專制など云ふ思想は、思想としては近頃起つたものでありまして、福田先生が云はれるような、ソシアル・デモクラシーは第四階級の專制など考へられるのは、サンヂカリズム出現以後の説で、サンヂカリズムはソシアル・デモクラシーとは行き方を異にして居ります。

ソシアル・デモクラシーは十九世紀式色彩を帶びて居りますが、インダストリアル・デモクラシーは二十世紀式色彩を帶びて居ります。そして福田先生はこの二者を混同して居られるように私には見えます。産業民主ではどうかすると生産者專制を主張する傾向があります。然し之は最近のことでありまして、ソシアル・デモクラシーの時代には之が無かつたと思ひます。エルフルト宣言より古い、一八七五年ラサールとリーブクネヒトで、初めて獨逸のソシアル・デモクラトが生れたGotha program の一部分を英譯で引照しましやう。（獨文の本文が手許にありません）

The Social Democratic Party in Germany striver, thenform not for new class privileges of rights but for the renovals of class rule and indeed, of Class differences. It demands Similar rights and similar duties for all, without distinction of Sex or descent. From this stand point it attacks the Exploitation and oppression not only of the wage-earners, but also all manncr of Exploitation and oppression, against any class, any party, any sex or any race.

之を見てもソシアル・デモクラシーには階級別も、人種別も、

性別もありません。それを福田先生が、ソシアル・デモクラシーを仇敵の様に云はれる眞意が私にはわかりませぬ。階級爭闘を實行上の教條にしたのは Revolutionary Revisionist(サンヂカリズムのマルクス派の革命的修正派をベルンスタインの進化的修正派に對して、而か云ふ、ベルンスタインはソシアル・デモクラトである)で、ソシアル・デモクラトが第四階級の專制を主張すると云ふのは、ソシアル・デモクラト自身としては責任を持つまいと思ひます。

私は、福田先生のように階級爭闘否定論者であります。然し私としては『金のことで喧嘩と殺人はいやだ』と云ふ至極簡單な考へから來て居ります。が、また資本家階級が、自ら好んで、階級別をつけんとして居るとも否定しませぬ。それで私としては、ソシアル・デモクラシーではありませぬ。産業民主々義者でありまして『金によつて己れの自由は賣らぬ』と、生産者の絶對的拒否を今日の誤れる産業組織に與へる必要を感じて居ります。それで、私は、資本階級など云ふものを設けておく必要を感じないものであります。それで福田先生が資本階級を認めて猶且階級爭闘を否定せられるとするならば、私等の立場と餘程違ふのであります。

私のインダストリアル・デモクラシーは第四階級の專制を否定します。私は消費者にも生産者にも平等の權利を與へるのです。即ち私には、第三階級も第四階級もありませぬ。凡てが人格であります。

それで、私としては河上先生の、唯物史觀説には不徹底な所があると思ひますが、之は河上先生の哲學系統——特に認識的批判の缺乏から來て居るので、私は河上先生が經濟史觀と呼ばるゝものは、意志生活の上に發展した經濟行爲であるから當然唯心史觀的に解釋す可きものだと思ふが、河上先生が物心二元論に止つて居られる所に矛盾を感じて居ります。それで唯物史觀と階級爭闘説は附きものでありましやうが、私としては、唯心史觀より出發する爲めに、河上先生の樣に階級爭闘を主張する必要は無いと思ふのであります。地球が世界の中心であると考へることが誤謬であつた如く、資本で經濟生活が動くと考へることは誤りであります。問題はこの誤謬から民衆が目醒めることにあるのです。それは血を流す可きものでも無い筈なのです。此意味に於て私は福田先生に同意するのです。

たゞ私の福田先生に望む所は、河上先生に對して彌次的な態度に出られないで、共に日本に於ける社會改造に努力せられる

ことであります。今日は論爭の時ではありませぬ。壓迫せられたものの解放の時であります。河上先生も、福田先生も、あまり議論だけに時を移され無いで、ちつと、マルクスの樣に實際運動に出て來られてはどうであらうと私は思ひます。實際運動をやれば、二人ともちつと學說を修正する必要が起つて來るでしやう。ページの上の解放にはまう飽きが來ました。

福田博士の演說評

新居格

一

雜誌「改造」の主幹山本君から福田博士の演說批評を仰せ付かつたことはわたくしに取つては望外の榮譽である。であるが、至つて淺學無識のわたくしが博學多識で有名なる同博士の演說批評を敢てすることは大それた仕儀に違ひないと思つた。けれども福田博士が虛僞のデモクラシーは勞働專制を意味するのだが自分の謂ふ所の眞正なるデモクラシーは凡ての階級を包括しなければならないのだと云ふ提說に對してそうした所說は吾が福田博士を俟つまでもなく露西亞少數派の領袖マルトフ氏が夙に云つてる說（オルギン著露西亞革命）ぢやないが或地方で話したのを其後博士が同地方に講演に行かれた際博士の耳に入り「新居君は怪しからんぢやないか。マルトフはブレンタノー敎授の許では自分より二三年の後輩だつた。その後輩の說と同じだと云はれては困る。自分の說にマルトフのが同じなんだ」とわたくしの失言を叱正されたことがあつた。わたくしは博士の社會民主主義論の當體に向つて馳突したのではないたゞデモクラシーは凡べての階級を包括しなければいけないと云つた點がマルトフと同じでマルトフが早く云つてたと極く輕い意味に云つたのに過ぎなかつた。兎に角、そうした妙な緣故から禮を失して敢て博士の演說に寸評を加えることにした。尤とも、博士の演說は「勞働組合と階級戰爭」と云ふ題目ではあるが詮ずる所の要點は河上博士達に對する應酬戰であるから遡及して兩博士のその事に關する之までの諸論稿や、それに關連した第三者

の批評をも參看すべきではあるが突如の上京であり且つ原稿締切間際のこととてそうした勞も取れずたゞ山本主幹から與えられた福田博士の演說原稿だけに據らなければならなくなつた事を遺憾とする。

二

福田博士の演題は「勞働組合と階級戰爭」と云ふのであるが演說の焦點は社會民主主義に對する反對で一貫してゐる。とすればわたくしの福田博士演說評も其點を指目する事になる。所でその點は既に多くの人達に仍つて論議されて居る。であるからわたくしは極く簡單に感想を述べるより外はない。

歸する所、問題は社會民主主義なるものゝ見解が福田博士の論ずるが如くであるかどうかである。そこから議論が派生するしその派生から階級爭鬪の是認にもなれば否定にもなる。社會民主主義を博士は勞働專制を實現する手段だ階級戰爭の手段だ從つて虛僞のデモクラシーであると結論されるのであるが反對者はそうは見ない。決して勞働專制の偏執ではなく勞働階級の解放乃至擧揚であり人類的解放の目的があると見る。內容的に之を云へば眞正なるデモクラシーなるものは或る階級のみの專制でない社會狀態ソリダリチー、ソシアルであればいゝ譯なのだ。問題は社會民主主義がそうした志向のもとにありや否やで決する。そしてそれが論據を裏書きすべく社會民主黨の宣言や綱領乃至はマルクス初め其一派の論文に卽き萬國の勞働者よ、團結せよ」とあるからこうだとかこうした文句もあるから違ふと議論が分かれるのであるがわたくしは表面に現はれた文字や宣言よりも社會民主黨依立の精神を考へべきだと思ふ。そうするより仕方がない福田博士の議論も一理がある。その反對論者も當然理由があるからだ。わたくしが宣言乃至綱領よりも依立の精神に就いて考へる事の必要を思ふのは文字や宣言は當爲の思念よりいつも遙かに感情的であるからである。マルクスが「革命とは內部に轉曲されたる屈辱感だ」と云つたのを見ても分かる如くマルクスを初め社會民主黨員が宣言として表現するときには當爲の理想よりも先づ虐げられたる階級の憎惡感が迸出するに違ひない。けれどもそうした憎疾的色調の文字が必ず社會民主々義の當爲であるとは斷言が出來ない。階級爭鬪の高唱にしてもそれが直ちに無產階級以外の諸階級の倒壞を實現すべき手段であるかどうか或は河上博士の所謂健康を回復するために行ふ患部に對する外科的大手術であるとも思惟されないで

もない。詰り階級爭鬪の意味を强調するか、しないかに仍つて社會民主々義觀の異差が生れる。

社會民主々義は反政治的であり階級爭鬪に無上の信仰を持つサンヂカリズムでもなければ況んやアナキズムでもない。それは少くとも政治的であり政治的權利の獲得を所欲とする。又レーニズムが社會民主々義の何等改訂なき直系であり社會民主々義の遺漏なき具體化であるかどうかも考慮の餘地があり相である。

わたくしは福田博士の所說を一應尤もだと思ひ乍ら何となく無理があるやうに思はれてならないのである。

三

福田博士は社會民主々義に反對すと云はれるが學問上には之を是認される、特にメトーデに於いて。マルクスはヘーゲルの學說としてリアリチーに卽する尊貴を習得しそれに仍つて祖國の環境を凝視してそこに不合理の存在を認めその後多くの國に就いて同樣の不合理を發見した。唯物史觀の抱懷はそこから生れた。しかしマルクスの威嚴は單なる歷史派的メトーデの採擇のみではなく、事實——眞理——の認識から一步を進めて社會進化の實現的創造を變欲した事であつた。その點も博士からほめて貰ひたかつた。

不合理の否定から打開の直覺が生れその直覺から生れる創造的情熱を、純一なる衝動から來る馳突論理の遊戲を絕した實感の尊貴に就いてメトーデ以上に何とか云つて貰ひたかつたのである。

四

わたくしは博士の勞働組合觀の穩當さに一致する。勞働組合の常態は神聖なる勞働者の民主化なる作用を有するもの、勞働者の弱さに力づけて傭主と平衡的對峙を持つ事にある。それは政府の强制的所産では元よりない。そして英國のトレード、ユニオニズムがソシオ、サンヂカリズムの影響をうけて階級爭鬪化するの事實をも承認する。階級爭鬪はいゝ事だと云へないかも知れないが、しかし、ネセサリ、イビルとして否定することが出來ないと思ふ。

勞働組合が少許の階級的色彩を帶びたことが直ちに博士の所謂社會民主々義への墮落だとも斷言が出來ないやうに思ふ。

(一月十日)

河上博士の半面

「岡田君から立會演說を挑まれたかと云ふのですか」と低く笑ふた河上肇博士は「イヤ僕は敗けますからネ」と無雜作に記者の問に答へる。その顏面は引しまり、眼光は鋭く、痩せぎすの長身で、極めて思慮のある應對振りは智將の閃きがある。「岡田氏との戰評をやるんですナ、イヤ御免ですナ、今回で岡田氏も立場が明瞭になりましたナ」とストーヴをかこむ博士の裾にも冬枯の風が滿ち／＼ておる。博士は中々の嚴格な質で、其の講義に當りて、若し時間に遲れて敎室に入るやうな事があれば、先づ遲刻に對する周到なる辨解を試み、故に終講の時間を延期するゝ豫告して後ち始めて講義に入るのである。其講壇に於ける博士は將に英國流の紳士である。曾て關西の某私立大學に於て、博士の講義中、欠伸をした一生徒が有た爲め、奮然色を爲して退席し、爾來其の學校には出席しなかつた。

博士が大學を出て間もない頃の著書に「人生の歸趣」と云ふのがあるが其の中に「無我愛」を說いた一項がある。當時此は駒場農科大學の講師として居たが、利己心を否定しやうとして苦悶した揚句敎職を捨てゝしまつた。而も一切の利己心の發動を否定しやうとした結果、自己の生命までも否定しやうとした事がある。此の博士の性格と欲愛とが、他の唯物的社會經濟學者と甚だしく選を異にせしむるに至つたのである。即ち其の大學卒業當時既に社會主義評論なる文章を讀賣新聞に發表して、社會主義に同情を表し、マルクスの唯物史觀にはこの時から研究に取りかゝつた。社會改造は經濟組織の改造に基くべきを力說して居るにも拘らず、一方に於て、單に經濟組織を改造する事のみにては社會組織の改造は難い、所詮は敎育と宗敎の力に依りて人心の改造を計らなければ根本的社會改造の解決は出來ないとの說を立てゝ居る。

大正六年出版の「貧乏物語」は博士の著書中最も有名で洛陽の紙價を高からしめたものであるが、其れを通讀しても、博士が所謂單純な經濟的改造論者でない事を知る事が出來るのである。貧乏物語の決論は、何でも人心の敎育問題に最後の解決を置て居るやうで有た。博士は最近一切の新聞雜誌に執筆する事を拒絕して、只「社會問題研究」の孤城に據り奮鬪して居るのだが、其の博士にとつては唯一の發表機關とも稱すべき該誌第一冊の序文に於て

(上略)人生の目的は各自の道徳的完成にあらねばならぬ。それ故、如何に病氣を根治する事が急務だとは云へ、肉を救ふ爲に靈を亡してはならぬ。(中略)それ故私は、此叢書に於ても、時折人生といふ事を考へるであらう。

と宣言して居る。であるから、社會問題研究は一方にマルクスの學理的研究を掲げると同時に博士獨特の宗敎的感想文を掲げて人心改造のプロパガンダをやつて居るのである。博士の主義は唯物的と云ふよりも、著しく唯心的傾向を以て居るのを見る。實に博士は單純な社會經濟學者ではなく人道的社會改造家と稱する事が出來る。

博士の文章に至つては既に定評がある。其の簡潔にして婉麗、魅力ある文字は思はず讀者を恍惚たらしむるものがある。其は印刷するの文章のみに限らない、敎室に於ける講義が又一言一句珠玉の如き文章であると云ふ事である。殊に原書を引用する場合、先づ其の情味に富んだ解題をもつて、一度び原語を朗讀したる後、再び邦譯して口述するのであるが、其の邦譯たる實に一代の名文であると云ふ事である。

文章が旨く、演說が上手の博士は勉强にかけても天下一品である。

頭でも、祭日でも書齋に詰めつ切りで、學校では研究室と圖書館に這入つたまゝだ。その精力の絶倫驚くべきものがある。

博士の陣法はなか〳〵堅實を旨としてゐる。こんな塹壕だから福田氏に挑戰するには又た五六ケ月精査した上で悠々と對抗するだろうと京童は噂していた。(京都一記者)

福田博士の演説を見る

耳で聞いたのだが、僕の耳がマルクスには聾だから、先づ福田博士を目で見た位のことにしやう。芝居氣もあれば、面白味もあり、江戸氣分の野次作もあるのは福田君である。羅馬時代の古き役者、添田壽一クンが英國は尙ほトレード、ユニオニズムの國であるといつたのにソーデはないと一擊喰はして添一クンを引退らせた手際は鮮かであつたが、河上君は誤譯特權があると見えて、博士の著書には誤譯だらケだと皮肉くつて大向ふの喝采を博した。

何にせよ當日は、大學からは河津、渡邊、矢作、高野、森、櫛田、大内、上野、等の諸教授が來賓席にズラリと星の如く居流れ、福田君の本城である高商から、藤本、内藤、石川の諸教授それに慶應、早稻田の教授連は申すに及ばず、福田君の弟子である阪西由藏君はわざ〳〵神戸より上京し、大西猪之助君は小樽から上京する騷ぎでたいしたものだ。高商の生徒は福田派に、大學々生は自然河上派に聲援を與へるやうであつた。

福田クンの額は緊張し切つて、眼の光も恐ろしいほど光つてゐる。やがて社會主義者である現内務大臣秘書官瀧正雄君は「勞働問題の解決は、資本の國有を斷行するに非ざれば其目的を達する能はず」と社會政策學會で述べてゐる、そんな人を奈何にして此の會から除名せぬかと數圖く、内務大臣秘書官と云ふ非常に尊貴なる位にゐる云々の辭で聽衆は思はずプッと吹き出す。

福田クンの油はいよ〳〵乘つて來た。河上クンを大社會主義者だ、自分は昔から社會主義には反對であつて、現在でも反對であると極めて自分の態度をハツキリした。そして社會民主々義に對して階級戰爭を標榜するものに斷乎として反對を宣明した。

一語は一語と熱が加はつてくる、河上博士は吾々を馬鹿にするのか、福田が馬鹿かといつてゐるが、どつちでもない、卽ち階級戰爭は手段であつて目的でない、それが職分である、最後の仕事であるといつたのはチト考へる價値がある。

ソウかと思ふと、僕の論敵は室伏君で、河上博士は驢馬に乘つて騷ぐものだと一流の揚足取りが始まる。學生連の喜悅はたいしたもの、しかし教授連の額には淋しい冷かな笑ひが漂ふのを見た。

處がまだ〳〵皮肉がチヨク〳〵出てくる。堺利彥君によつて私のズルイことは天下に認められたらしいが、私は少しも狡くない、狡くない證據を玆に持つてゐるといつて、カウツキーの著した「社會民主々義の註釋」の批評を兩氏がしていないのは、知つていてせないのだから私より狡いといふものだ。

もう一つ、棹尾の大皮肉がなくてはならぬ。それは河上博士は民達的に名高い學者、イヤ官過的に有名な學者だとか、誤譯を是認せらるゝが如く誤讀特權も有りはせないかとやつたので、モウ聽衆もアマリの事に呆れ返つてしまつた。何にせよ、木戸錢なしで傍聽が出來るので、中央大學の講堂は立錐の餘地ないまでの大入滿員であつた。マルクスといふ異國の爺さんも地下で定めし嚔をしてあらふと思はれた。(一記者)



社會小說

死線を越えて

賀川豊彦

六

父の宅は出た。

榮一は何處へ行くであらう？　徳島本町を西に市役所の角を左に曲つて徳島橋を越へた。板野の田舍に歸るには少し回り道であるが、通町へ出て傘を買ふと云ふのである。警察署の電氣燈が鈍く光つて居る。西洋雜貨商の宮井は矢張り昔の宮井だ。何時かと時計を覗くと宮井の御主人は火鉢の前で居寢して居る少し頭が禿げた樣にも思はれる。通町の一丁目は變つて居らぬ。唯井關の本屋が大道から出て來て大きな店を張つて居る。こゝにも阿爺さんが居睡つて居る。二丁目は少し變つた。仙石が郵便局を兼ねたのと日本基督教會が新しく立派に建築せられた事である。啞の傘屋に這入つて番傘を買つて道を急いだ。雨は小降りだ。二丁目の角の夷神社へ來ると乞食の文やんを思ひ出した。跛の正直な――五錢銀貨と五厘銅貨を見せると後の方を取る――乞食。

『ぼんやんなんぞつかい。奥樣なんぞつかい！』と時間を定めて貰つて歩く乞食、快活で、いつも笑つて居る乞食、金持ちで百圓以上の貯金があると噂せられて居る五十計りの男、夷神社に寢宿りして堂守りの樣にして居る文やんはまだ生きて居るか知ら？　文やんから連想するのは大道のお千代。高慢な嚢ら相に貰つて歩く乞食の鹽川の子を產んだと噂せられた馬鹿のお千代。朝から晩までの左目尻を下げて妙な笑ひをして誰を見ても、

『うち、いや！あの人、おかしいの！』と大きな聲で叫ぶお千代、時によると鼻計り黒く塗つて、また時によると顔全體に壁の樣に白粉を塗つて袖の長い破れた着物を着て哀れな袋をさげて坊主頭をなでながら貰つて歩くお千代、七八年の昔、ある朝勢見の金比羅に散歩して見るとお千代が繪馬堂の前を笑ひ乍ら播いて居た事のあるのを思ひ出す。

それに、もう一人思ひ出すのは「日曜日」と云ふ乞食。之れも馬鹿で日曜日と書いた箱を頸から懸けて、日曜日でなくても金曜日でも月曜日でも貰ひに來た背の高い四十恰好の男乞食。

お千代に子を産ました鹽川は先年死んだと聞いたが彼を除いて此三人の乞食は皆徳島市の名望家で、市長より市民に可愛がられて居る。今頃は何をして居ることか？ 三人共皆野心を離れて實在を樂しんでをる。今頃は嘸無邪氣な夢でもみて居るであらうなど考へ乍ら一丁目へ來る。隆盛堂の本屋が潰れて借家札が貼つてある。小西の藥屋も菓子屋も昔の通り。市川の料理屋の四階が三階になつて居る。いつも賑かな新町橋が淋しい。

左の靴の底から水が浸入つて來た。

古川病院の電燈も光らない。瀧見橋から瀧の山を見ると光りが七つ八つ。監獄署はいつ見ても大きい。前川の橋を渡つて地鳴りの樣に聞えるのは紡績會社。雨の夜でも機械が運轉して居るらしい。前川駐在所は昔の所にある。上助任の八幡宮に來た十年前阿波國一の大相撲、諏訪の森がひいきで此處へ宮相撲を見に來た事を思ひ出す。

靴の心地が益々惡い。下駄屋へ這入りかけたが止めた。

古川の渡しに來たのが八時。川幅參町に架つて居る長い橋を渡る。淋しい。何だか風に乘つて居る樣だ。然し田舍へ歸へると歡迎せられるに違いないと思ふと愉快になる。が、又父と口論した事を思ふと夢の樣だ。五拘もあらうと思ふ鯛の濱の一里松も過ぎて人力車に會つた。今迄誰れにも會はなかつた。之れからまだ二里。疲れた（思ふが足は歩いて居る。牛飼の田臺（野原）を通り過ぎて中村へかゝつたが、また此村を過ると長い野道。盗賊が出たらと思つたが、盗賊が出たら皆遣る。そして裸體で馬詰まで走つて歸らう。殺されるなら消えるまでだなどと忙然としたことを考へながら、野原も過ぎて北村。北志多來のダラダラ（坂）を越えて自分の村の川向、俗に新田と云ふ處へ這入つた。板野郡堀江村大字東馬詰村小字新田である。榮一の宅は古田だ。氏神のお諏訪さんの森の前を通る。お祭の時に自分が太鼓を叩いて若手が獅子を舞ふた事を思ひ出す。それからそれ

へと逆想して、古田の天神樣の小供祭には自分が一年隊長になつて、一晩あの鎭守の森の祠で大勢の小供と寢て騷いだ事など思ひ出す。牛屋島の橋を渡る。中學の一年の時、此渡で與の水兵が二人の娼妓に惚れられて此處まで二人を連れて逃げて來たが、金が無くなつて心中をして居た事があつた。川の流れは靜で細い雨の音もまたしとやかである水が川幅一ぱいに滿ちて居るのは氣色がよい。薄い闇が川の上を蔽ふて三人の幽靈のことを忍ぶと何となしに妙な氣になる。この川で三月の節句には小供連れで舟遊びした事もあつた。……あの「令」の傳馬に乘つて壽司や煮しめを辨當にして川に出たことを思ひ出す。繼母と姉のお雛樣の事も思ひ出す。近所の娘がそれを見に來た事も、それから前の田宮の鶴子樣も見にきた事も――目のぱつちりした美しい女の子、自分も可愛い女の子だと思つたから、話するさへ耻しいと思つた鶴子樣、もうお嫁入りをしたかしら。僕も東京へ行つてから鶴子樣が這うなつたか一向聞かぬが――と先から先を思ひ廻らしながら榮一が高等一年生と二年生の間世話になつた學校の處へ來る。四年前の夏一寸と歸つて來た時にはまだ學校も立つて居たが今は跡形もなく唯石垣のみ殘つて居る。學校は何處へ移つたのであらう？　この牛屋島の學校で神戸育ちの生意氣小僧が大に威張つた昔を思ふと耻しい。まだ入學試驗も受けずに卒業生と一緒に送別會を開いて、三十五錢の會費で濱口屋の二階で酒を飮んだ事があつた。三十人の卒業生と五人の先生が皆醉つ拂つた。隅で獨り杯を傾けて居た小使も醉つ拂つた。小使の事を思ふと身震がする。酒が好きな小使で、生白い顏に血走つた眼付き髮は前を一寸五分計り高くして、むしやむしやと生へ放し、酒に醉つて來る程默る男。あの男の娘が八つ頃であつたらう。その子が二年生の夏休みに突然死んだ。そしてその病名は『肋』と云ふ字が頭に付くのであつた。突然その女の子は僕が洋傘で脇腹をついて肋骨の三枚目を折つたから死んだと云ふ噂が立つた。僕は全く關係も何もない事を聞かされて慄いた。二晩裏坐敷の蚊帳の中で泣き明した事であつた。その結果貯蓄して居た五圓を香典として自身に持つて行つた哀れな過去を思ひ起す。此那噂を立てられる位自分は腕白であつたと思ふが、また今になると此誤解を憤つて、小さい時から他人を可愛がると云ふ方に向つて居たのだと考へがつく。今日では、その娘は水車を踏んで居て、上から落ちて肋膜炎にかゝつて居たのだとわかつたがそれを無智な田舍人が榮一が誤つて肋骨を折つたのだと噂したのだと判明した。誤解程悲しい者は無

いと今でも考へる。醬油を製造する原の門長屋が昔の處にある。その門も昔と變らぬ。あの門で目の丸い大きい桶屋の常公に、『坊は學校の小使の女の兒を殺したと云ふでないで？』と問はれて吃驚して逃げて行つた。あれから十年たつがまだ此村に誤解があるかと思ふと足を入れるのが心苦しい。籔に包まれた川口屋と云ふ木賃宿に背の高い色の白い肥つた二十計りの娘があつたが今は何うして居るだらう。堤を傳つて榊の横を通ると、從姉のお兼さんが此處へ一度嫁入に來て居つたが姑が六ツヶ敷て離緣せられた事を思ひ出す。大きな槇の木の上に鎌を立てゝあるのは昔と變らぬ。川べりの小屋は桶屋の種吉の家、種吉の息子の常吉は馬話の宅の番頭。それから一町で非人の『助』の宅がある。屋根に網を張つてあつたので小さい時には特別に注意したものであつた。助は馬話の宅の夜番で、朔日、十五日には裏門から臺所の流しの溝の前に寂しく立つて一斗なり二斗なりの米を夜番賃として與へられるのを待つて居た。田宮の濱に小さい明りが見える。渡守の番小屋からであらう。背の高い目腐りの渡守の息子の辰。自分が富限者の小供であつたから兒分が多くあつた、その中で辰は第一の兒分であつた。正月に小供が寄つて賭博しても辰はいつも自分の下について居た。また游ぐ時でも隠れん坊する時でも辰はいつも付き纏つて居た。水泳から連想するのは田宮の鶴子樣の兄樣と自分が「潜り」を競爭した事だ。あの時、時行樣はもう十五六であつたが自分とは極く仲よしで雜誌を貸して上げては大きな夏蜜柑を乞つた事があつた。

牛屋島を離れて愈我が村へ這入る。川に沿ふた籔の中に馬の灸をすへる所がある。之れから三丁は家も何もない。兩側の籔間から廣い堀江の平野が北に見える。北山まで小一里もあらうか山の下には大谷と云ふ一寸とした町がある。その町の端に土御門天皇の火葬場がある。山路には所々火がついて居て淋しい此土手の川岸で學校へ上る冬の朝よく太陽に温つたことを思ひ出す。東馬詰へ這入つて第一の小屋が木挽きの政の宅。政は、此小屋の子持ちの寡婦に食つ付いたのだ。子の名が長兵衛であつたと思ふ。亂暴な兒で穢いことを云ふことゝ喧嘩計りを日課にして居た。此小屋から半町で新見の藍の賣場の番頭であつた市橋源三郎の屋敷がある。源三郎は金澤の賣場で死んだ。その裏の屋敷跡が、市橋熊藏の屋敷跡。中學の二年の時、北海道へ移住した。今は唯門跡の横にある黑柿が雨にうたれて居る計りだ。

源三郎の西隣りを東の新宅と云つて昔は大きな家屋敷を持つ

て居たさうだが、今は生垣の中に一寸とした家が立つて居る。前は堤である。堤の下が淵で、「西ら」のお爺さんがよく魚を釣つて居た處だ。愈自分の宅(うち)に近づいた。土手を降りて虎吉さんの宅がある。その隣が政吉さん、水門の横を通つて狸付のおかみさんが居た權助さんの横に出ると自分の宅の大きな門が見える。政吉さんの隣が坂東の平さん、煙草刻商であつたが今は何をして居る事か。昔はそれでも大きな家で、今と云へば近在に誰知らぬものゝない地持ちであつたのだが、今は母屋計りになつて屋敷が畑になつて居る。子守り歌にも、

『田宮金持ち、山十は地もち、
　裏の金内(かない)さんは娘もち。』

と唱はれた位である。金内さんと云ふのは新見家のことで美人が多くあつたさうだ。齋藤の信さんの裏を廻つて驚いたのは田宮の家屋敷の影も形も無いことである。唯乾(ゐぬゐ)の隅の三抱もあらうと思ふ赤松が、闇の中に淋しく雨にたゝかれて居る。榮一は唯不思議に思つた。

『東馬詰に田宮がなけりや
　後は川野のけゝす原』

とまで讃美せられた士族の田宮の屋敷が形も跡も無い。

榎の大きな木が生へて槇の生垣を廻らした田宮家の墓所の裏から右に折れて、新見の門の前まで道がある。新見の本家の家屋敷は田宮があつた時からでも一番東馬詰で大きいので先代盛平は十八ケ村の大庄屋。また腕の太い男であつて二十四間に五間の大きな藍の寢床と、四間に十二間の西の寢床を建てたのだ東納屋と云ふのがその大きい方で西納屋と呼んで居るのが小さい方だ。前納屋は二階付きで大きい高い建物だ。前納屋の東側に大きな門屋がある。

もう九時半、榮一は靜に此門屋の軒下に立つた。色々な感興が湧いて來る。門を叩いて屋敷の中に音がするかと思つて伺つてゐた。西納屋に馬が腰板を蹴つてコトン〳〵云はして居る。暫してまた叩くと母屋の戸を開いて、女の聲がする。

『誰れで？——』確か、笑(ゑみ)の聲である。そして何かまたも、ひとりの若い女の聲とぶつ〳〵呼いて居る。

『私——』と榮一は低い聲で答へたが、

『今頃誰れだらうな。』と笑の聲がしてまた若い他の女の聲と混つて話して居るのが聞える。聽こ、長い敞蓋(納屋の軒の方言)を二人で歩く音がする。その足音が響いてカン〳〵と音がする番頭が居らぬのか知らと思つて居る間に門の潜りは開かれた。

また馬が嘶いて腰板を蹄で蹴つてゐる。

『誰れかと思つたら兄様ですか？　どうなしたの？』と笑が尋ねる。若い女が蔭に隠れて居る。榮一は門の中へ這入りながら、

『番頭は居ら無いの？』

『一番は今夜一寸と產があつて往んで居るし……二番はお四國へ行つてまだ歸つて來ず……恐ろしいからおよつさんと一緒に開けに來たのですわ。よう此那に降るのにお歸りなしたな。ほんまにだれぞと思ひましたわ。』榮一は若い女に眼を付け乍ら、

『笑さんはまだ德島に居ることだと思つて居たら、早や歸つて來て居たのだね。』と云ふ。若い女は、

『若旦那、初めてお目に懸ります。私は常吉の妹で御座ります。』と禮をする。妹も、

『常吉さんの妹さんの靜さん――』と紹介して居る。妹と靜を見較べると下女の方が遙か美しい。靜の持つて居る六角の小燈の光ではよく見えぬが、生へぎわの美しい、地藏眉毛で、一皮目ではあるが優しい目付をして、透き通る様な皮膚を持つて居るのを見ると田舍には珍しい美人である。笑の様な髮の赤い、色の小黒い、唯太いと云ふ計りの女には雲と泥の違ひがある。

榮一も相當に禮をしたが、あまり美しいから、よく顧みるのも恥しかつた。三人はまた敵甃を母屋に傳つたが、笑は靜と二人で。

『誰れぞと思ふたな。』

『ほんまに吃驚り致しましたない。もしや强盜でも這入つて來たらと思つてない。』と話して居る。

『お母様は御機嫌？』と聞くと

『少しリヨマチスの氣かおありなさりますそうです。』

『いつから？』

『十日位前から……德島へ使で私を呼びにこられましてない。それで私が歸つて來たのです。』

寢床の敵甃から母家の敵甃に飛び移つて石段を五つ六つ昇つて三人は玄關に這入つた。（此地方の屋敷は大抵平地より二丈も三丈も屋敷を高くする。之れは吉野川が毎年八、九月頃に兩三度は氾濫するからである。）

玄關へ上つて榮一は『お母様は何處？』と尋ねたが、『裏坐敷』と答へて居るから裏坐敷の方へ行つた。

〰〰〰〰

榮一が歸つて來たので繼母も立ち上つて坐つた。相當に時候の挨拶から榮一の今度歸つて來た理由なども聞いて田宮の話が

出た。祖母は顎を左の手の母指と人指で弄りながら、折々鬢の乱れを右の手でなであげて語り出す。

『世の中はほんとに薄情な者でゝわ、……どんな身分のある人でも貧乏すれば相手にして呉れまへんわ。田宮だつてお金のある間は田宮、田宮と云つて、もち上げる者が多かつたけれど、今になつたら可哀相なものですわ。』

　母は額の小さい、色の白い一皮瞼の眼の細い女である。圓行燈が暗く光る。

『おまはんが歸た年の秋ない。あれが舊曆の十月の朔日か二日の日にない。朝から五六人の角袖が宅の前をあちらへ行つたりこちらへ行つたりするでないで、そうすると土手の方にも警部の様な人と巡査が二三人立つて居るんでよ。そのうちに田宮へ這入つたと思ふと誠さんが渡しから徳島の監獄署へ連れて行かれましたわ。妾も吃驚しましたわ。なんでも誠さんが村長をして居つたでしようが。それに村木で損をしたとかお米で損をしたとか、村役場の横の料理屋の女に入れたとか云ふが、なんでも役場の金を二千圓とか三千圓とか費ひ込んだそうですわ。そしてまた裁判もすまぬ中に牢屋の中で首溢つて死んだんですわ――おいとしい事でないで――それ聞いて奥様も氣が振つて川へ這入つて死なれましたわ、まアそらお氣の毒やらおいとしいやらで妾も泣きましたわ、奥様が身投げなしたと云ふことを聞いて、屋敷は取り拂はれる。這入る所は無しない。御隱居と鶴子様とまさ様は正月から盆まで宅の裏座敷にお出でなさりましたわ、あしこの化粧の間が臺所で此處の二間をお室になして然し鶴子様だけは四月に東京の叔父様とかゞ徳島の師範學校の先生になつていらつしやつて、その叔父様の宅へ養はれて行らしやつたが、此年はもう女學校を御卒業なしたゞらう。市の宅と裏合になつた家ですわな、田宮の御親類の宅は？』と自分の側に居る笑子に尋ねる。

　笑子は『二隅から乾の隅にお二階が見えますわ。』と答へて兄の顔を眤と見て居る。

『そして盆がすんで御隱居様はまさ様をお連れになつてお里へお歸りなしてない、總領の時行さんは矢張り東京の御親類にお出でなしたのだらう。まア然し變れば變るものですわ。田宮の屋敷が無くなつた當坐は何だか、淋しう御座りましたぜ。然しない榮一様、田宮の事じや御座りまへんでよ、宅も早晩田宮と同じ目に會ふかも知れまへんでよ。どうもお父様には困りますわ。榮一様ちつと云ふてつかはれ。』

榮一は笑の背梁から、今日の午後四時、二階から見た美しい女は鶴子樣であつた事と想像する。すると鶴子樣は却々美人になつて居る。

　榮一は父と喧嘩した事は無かつた。またあまり悲觀した樣な事も云はなかつた。

『二番が四國參りに行きましたつて？』と無意味な事を聞く。

『エ、每年村から一人づゝお四國へ出すのが今年は抽籤が宅に當つてない。一番は嫁が姙娠して居るから遣れないで、二番を遣る樣になりました。今日で宅を出て一寸二十八日になりますわ。』と母は云つて居る。榮一は閑な田舍人が佛の名を唱へて、物を貰ひながら遍路して居る樣を想像する。

　雨垂れの音の間に火の用心の聲が聞える。

『助が矢張り火の用心を廻つて居るの？』と榮一は聞くと

『エ、やはり、』と答へて居る。

『然しお母樣の御病氣もたいした事が無いので幸ですね。』と榮一が云ふと、

『有難う、唯一寸と右の足が自由にきかぬと云ふ丈けじやからない。そう心配せいでも、すぐ癒ると思ふて居るのですわ。』と答へる。

火の用心が西納屋の方から裏坐敷の方へ廻はつて來た時、次坐敷の話の聲を聞いて、

『お孃樣まだ帳場の戸が閉つて居りませんない。』と注意して居る。

『笑さん、それ、また帳場の戸が閉つて居らぬつて！』と繼母は笑に注意する。

『ア、忘れて居つた。先に誰ぞと思ふて門を覗いて、まだ開けたなりで――』と立ち上る。

『早やう閉てゝお出でなはれ！』と母は命ずる。

笑子は緣を母屋に走つた。

繼母は榮一に『あの子は鈍で困りますわ。』と呟く。雨はまだ強く降つて居る。

七

『太陽は實によく光る！』

　と表坐敷の緣側に仰向きに寢て、太陽を見て居た、榮一が云ふた。

　もう、午後一時半。昨夜の雨は、庭に僅かな濕り氣を殘して、何處かに隱れた。今日は朝から『よく光る』太陽が出て、春は一

度に甦つた。

榮一はあまり、まばゆいから左の拳に小さい穴を造らへて、それから太陽を見ている。奇麗なラデエーションが出來る。

『奇麗なラデエーション！　まるで虹だ！』と榮一は呟いて、色々と考へた。

『太陽の光線は美しい。これが九千三百萬哩やつて來たのか？此の光線が空氣の外では全くの紫色だと云ふが……どんな美しい世界だらう。神秘だね、光は――』と考へて、また種々想像を廻らした。

が、昨日の陰氣な一日に堪え兼ねた榮一は、今日太陽を見てあまり喜んでも居らぬ様だ。呪の様なことも云つていた。

榮一は、起き上つて、唯、忙然飛石の隅を見詰めていた。が急にまた氣が付いたと云ふ風な身振をして、兩手で、顏を拭いた。そして、すぐ、

『噫。つまら〱。神様は自殺したのだらう！』と無意味なことを云つて、庭に下りた。

東南の隅に「もち」の木がある。二抱もあらう。綠色の葉が一枚一枚光つて美しい。折々葉先を鳴らして躍る。その西に白椿。もう散つている。横に五葉の松が枯れて居る。見覺えのある木で、自分が湯殿の前に植えたものだ。その外、木犀と山梔が湯殿の横の衣裳倉の前にあつて、南天、馬楝などが隅にある。あまり廣くも無い庭が、一ぱい草木で詰つて居る。

榮一は駒下駄を穿いて、あちらこちら、庭の飛び石を傳つて、思ひに沈んだ。手織縞の女着に、弟の兵兒帶。色は青く、眼は非常に鋭い。

榮一の默想は段々と妄想になつて來た。

『……僕は何の爲めに散歩する？　生きてゐるから散歩する。何故生きて居る。生きているから生きて居る。いや、死にたくないから生きている。いやそうでもない。自殺したいが、黑闇には行きたくないから生きている……實云へば……頸に繩をつけられて引ずられて居るから生きて居る。生命に價値のないことは知つて居るが、何だか死より恐ろしい手が咽笛を押へて居るから生きて居る……生命が恐ろしい。……生命と云へば此頃は全く食欲がない。その上、朝も晝も、硬い麥飯。繼母は吝な程質素な人だ。だから田舍は嫌だ。嫌になつた。僕の様な大方の住む處じやない、都に居ると善い様に思ふが、來て見ると詩も消える。僕は田舍に葬られるのは何だか情ない。……が、都會へ出て何を喋る。社會主義？　まアそれ位いの者だね。然

し社會主義も、何だか飽いた。社會主義と云ふ主義は乞食の仕事だ全く。まア、然し國家主義よりは善いが。——處で、哲學は物知りのお玩具の樣な氣がするから之で名譽も得たくなし、それかと云つて、國にお辭儀して、飼ひ殺しにして貰ふのも面白くないとすると、矢張り、〇〇〇主義か社會主義だ。然し、都會で、大聲で〇〇〇主義でも唱へ樣ものなら、すぐ赤い衣は受合だ。あきれるね！……世界はまだ戰爭とか云ふものがあるのだからね。日本にはまだ軍艦と云ふものがあるのだからね。そうすると、都會へ出て行つて、武裝して居る世界を嘲つて、監獄へ一度位い這入つて……？　兎に角、トルストイや長明の眞似は止めよう。……それに此村で小學校の教員を始めたとした處で、昔の小使が居れば、また顏見られる毎に、震ひ上らなくちやならぬ。……が、町へ出るとパンに困る……』とまで考へて、石の上に立ち止つた。晄と自分の影を眺めると太陽は、益々照つて影は益々明かだ。然し、その影は非常に哀れだ。

座敷の障子を開いて笑子が顏出した。それで榮一は、

『笑さん、此五葉の松は何時枯れたの？』と問ふた。

『兄さんあれ？』と視線を五葉の松に轉じて。

『はア』と同じく榮一も松を見る。

『あれは何ですわ、お母様が植へ替へなして枯れたんですわ。』

『僕が湯殿の前へ植えたのに？』不平らしく云ふ。

『なんでも五葉の松は屋敷の辰巳に植えると貧乏するとか仰つて今年の一月であつたか自分手にお植え替へなしたんですわ。』

榮一は緣に腰を卸して

『常吉はまだ歸らぬのか知ら？　もう二時だね。』

『そうでしよう。もう二時過ぎますわな。』

『宅の晝御飯はいつもこんなに遲いの？』

『いつも之れ位いですわ。大抵なら一時半ですわ。ほだつて五度喫るのですからない。』

『そうだね。』

『兄さん東京つて、道那處です？』

『なに、つまらぬ處さ。』

『それでも徳島よりは大きくつて、美しいでしよう。神戸よりも？』

『徳島つて——笑さんは徳島に何ケ月位い居たの？』

『一月半も居りませんだわ。』

『なぜ徳島へ出て行つたの？』

『何故つて、そんなことは云へまへんわ。』

『兄様だから云つても善いだらう。』
『あの繼母はんが――云へまへんわ。そこにごたごたした事があるんですわ。』と俛いた。笑の髮には灰がとまつて居る。大竈の下で麥藁を焚いたからであらう。
『笑さん云へないことがあるものですか。兄さんだから云つて頂戴！何卒』
『繼母はんが、あまりお叱りなさるから徳島へ逃げて行つたんですわ。』
『何故』
『打つたり叩いたりなさるんですもの。』と袖を食べて口籠る。
『そう、繼母さんが無理だね。』
『私裁縫が下手でしような。それに出來んと云ふ理があるか、ほんな不調法なのなら、お前が下に降りて、下女を上にあげて縫はしますわと仰しやるのですからない。』笑は水仕で爛れた手を隱す。榮一は眼に涙を浮ばせた。
『徳島へ行つて遣うして居たの？』
『下女の縫りをして居たんですわ、お梅の下で。』
『お父様の處で？』と兄は顔を背けて泣いた。
『あのお梅が私に非道くあたりましてない。‥‥私、ほんとに徳島の事は何にも云ひたくありませんわ。』と咽んで居る。
『**何故そんな處で愚圖々々して居たの？**』
『ほだつて行く所がないんでへんか――』
『笑さん、お父様の處には下女は居ら無かつたの？』
『居りましたけんど、私が行つて二日程して直に往にましたわそしてまた來て、また往にましたわ。今度來て居るこまんさんは妾が歸る三日前に來たのですわ。お梅が六ケ敷いからない。
『笑さん、お梅はあれ、歳は幾つ、若く造つて居るが、』
『あれで三十二ですと來年が厄年じやと云つて心配して居りますわ。妾のお母樣が三十三の厄で死んだんでしような――お母様が生きて居らしやれば善いのに。せめては、姉様でもない。私お母様が生きて居らしやつたらと思はぬ日は一日もありませんわ。お母様があれば此那つらい心配はせいで善いのじやが。之れでも學校へも少し上つて居つたらない。』と怨む樣に云ふ。
榮一は小さい時から此妹を可愛く思は無かつた、姉様の樣に美人で無く學問も出來無かつたから。然し今になると何となしに可哀相であり、女の心で繼母との間柄をよく切り抜けて行くと思ふと豪いと賞めてやりたくなる。
『笑さん、然し失望する必要は無いよ。兄さんだつていつまで

も愚圖〳〵して居らぬからねえ――お母樣の事など思つて居たら際限りないから、もう心配するのを止めて下さいね。』

『それでも私死ぬ程辛いのですもの。每晚每晚寢屋へ這入つて泣かぬことはありませんわ。お母樣の寫眞見ては泣き、お母樣の寫眞見ては泣き、お母がたとへ今私と一緒に居られ無くとも何處ぞに生きて居つて下さるならと思つてない――いつそ死んだらまた會へる事もあると思ふて仕方が無いのですわ……ほれに去年の春からない、血の道の氣があつて、氣がふさいで仕方が無いのでしよう。およつさんに鷄と中將湯を買うて來て貰うて幾廻りも飲みましたが、効能が見えぬでしよう。醫者さんに見て貰いたいと思ふても、云へば叱られるしお金はなしない。六月七月八月と三月ぶら〳〵して寢込んで終ひましたわ。それでも誰も介抱して吳れる人は無し、繼母さんは反て、『笑さんの病氣は名が無いわ。唯泣いて居る計りの病氣じや……それ位な病氣が、なんで、氣をしつかり持てばすぐと直る。私であつたら寢込んだりしはせんわ。』と朝から晚まで、ぽんぽん仰るのでしよう。妾はその時こそほんまに死のうと思ひましたがない。然しまた今死んでは兄さんにもお父樣にも濟まぬと思つたからまたお母樣の形見の金の笄や繻子の帶を賣つて藥代を造らへて養生しましたの――』と泣く泣く物語る。榮一も泣かされた。

『德島でお父樣は何も吳れ無かつた？』

『歸る時にお梅が古い半襟一筋吳れましたわ。たつたそれぎり。』

『それじや笑さん、私に吳れた五圓はどうして造らへたの？』

『私前から持つて居りましたわ。衣服賣つたりして。』

『衣服つて、どうして賣るの？』笑の親切に泣く。

『牛屋島のお淸さんてない、干雜魚賣の阿婆さんがあるんですわ。その人が色々そんな世話してない、賣つて吳れるんですわ。』鷄が大庭を通る。

『安いだらうね？』

『安かつても仕方がありませんわ、生命には變へられまへんもの』と袖で淚を拭いて居る。

『笑さんその外何かお母樣の形見を貰つた？』母の形見と云ふと何となしに惜しい樣に思つて保存して置きたい心地がしたから尋ねた。

『え、大分貰りました』と笑への高調も少し過ぎて笑子はやつと顏を上げて榮一の顏を見入る。母に善く似た顏。眉から鼻筋

の恰好。口元のしまつた具合ひ。如何にも母に似て愛らしく優しい。その眼の大きくて二皮瞼に黒い瞳から洩れる濕い視線はどうあつても女の樣だ。

『兄さん。私、兄さんをお母様と思ひますから、兄さんあなたも私を可愛がつてください。私は兄さんひとりしか頼りにする人が無いのですから』と云つてまた頷垂れて終つた。榮一は今迄遠く離れて居た妹に此斯まで信頼せられると兄弟と云ふ者は妙なものだと考へる。答するにも言葉が無い唯默(だま)つて居ると、

『兄さん！』と妹が呼ぶ。

『何に？』

『お父様は矢張り兄様に學資を送つて居らしやいましたか？』

『ア、貰ふのは貰つて居たがね。』

『困りはなさら無かつた？　お父様があんな大きな家を建てたでしよう。そして前から借金のあるのにない。よく金を返して呉れと人が來〻のでしよう。それでもお父様は平氣ですね。：妾お父様が何かの話からもう兄様には學資を送らぬと云ふことを聞いたでしよう。吃驚してない。自分はお梅の衣飾の爲めなら百圓でも二百圓でも出す癖に月に十五圓か二十圓のお金を兄様に送れぬと云ふことがあるかと思つてない。』

『然しそんな事は違うでも善いさ。』と榮一はあまり問題にし無い様に見せて居る。

『然し兄様が耶蘇教の學校へ這入たと云ふので怒つて居らしやるのですな』

『そうだらう。僕は怒るとか泣くとか云ふのが面倒臭くなつたわ、笑さん。』と眉の間に皺よせて云ふ。笑は變に思つて默る。然し少し經(た)つて、

『兄さん、御病氣はもう全快なしたのですか？　矢張り血色はお惡いが。』と尋ねた。

『肺は樂をして御馳走食へば自然と直るがね——金が無いから僕には養生は出來ぬよ。肺病と胃病は金持の病氣だね』と榮一は一寸と笑つて見る。笑子も笑つた。笑つて太陽を仰いだ。

『今日は好いお天氣ですね』と云ふて居る。門に下駄の音がする。五十恰好の筒袖着た男が這入つて來る。

『ア彦吉がまた來た。あれ天理さんを弘めに來るのだつせ、お母様が病氣(びやうき)が惡いから。——恥しいから内へ這入らう』と妹は障子を閉めた。

『こんな散亂髮(さんばらがみ)見られたら恥しい。』と障子の陰に聲がして足音が段々遠くなる。

彦吉は表の庭の中門の前へ來て、
『誰さんかと思へば若旦那様でいらしやいますか？　久しくお目にかゝりませぬ。その後は御不沙汰を致しました。文藏がまた長らくお内でお世話になります。……五六年もお目に懸らぬと見違へる様に御立派にお成りなさりましたない。之れでは道でお會ひ申してもお見違へ申しますわい。その後御具合ひがお悪いと承りましたが、どんなお事で御坐りますか？』と腰を曲げて兩手を揉みながら頭を色々に向けて極く落付いて口上を申立てた。
『奥様はまた何かリヨウマチでお加減がお悪いとか誠にお悪いことで御座ります。然しまア今の處で格別どうと云ふてお惡う無いので御安心で御座ります。』と丁寧に云ふ。天理教の人は何處か違う。榮一もそれに相當の挨拶をした。
『今日はもし、お天氣がおよろしう御座ります誠に』と彦吉は白椿の木から太陽に視線を轉じて、腰の烟草入を探しながら云ふ。
『さア、今日は奇麗に晴れたね。——何卒此處へ腰をお懸けなして』と新見は促した。
『いやこれで結構で御座ります』と云つて白椿の下の岩に腰を卸す。
『お江戸の方は嘸珍らしい事が多いことで御座りましようね——何日こちらへお歸りなさりまして御座りますか？
『昨日——』と答へたが頭が重くて彦吉と顔を會せて話するのが何とはなしに物うひ。
彦吉は烟草を採んで皿の大きな烟管へ次ぎながら、『此五葉の松は枯れまして御座りますない』と云ふ。榮一は
『ハア、枯れましだ。——』と一寸と答へて續けて、
『彦吉さんは天理教の信者でいらつしやいますか？』と尋ねた。
『はい。』
『天理教と云ふのは一體どう云ふもので御座りますか？』と笑を浮ばせて。
『さもし、一口に天理教と申しましても一言半句では御話し申すことは出來せぬが中々勿體ない教で御座りますわい』と吸殻を落しながら云ふ。
榮一の好奇心が聊かそゝる。
『一つ、聞かして被下るわけには行きませんか？　一體あのオキミ老婆さんとよく云ひますが、どう云ふ人ですか？』
『へえ、中山ミキ　奥道彌弘晋知姫尊が卽ち世に云ふオミ・

中老婆で御座りますが、天理教の御教祖さんで御座ります。』と少し上瞼を膨らまして恥じ相に云ふ。

『ははア、――大和の國ですね――中山ミキの生れたのは。』

『へい。大和國山田邊郡三昧田村で御座ります。』

『その人はもう昔死んだので御座りますか？』

『い〻え、明治二十年九月廿六日に亡なられたので御座ります――先づ。天理様の起りと申しますと、ミキが小さい時から美人で、十三の時既に丹波市字三島中山善兵衛に嫁入に參つたので御座りますな。此の善兵衛の内は大工職で御座りましたが嫁入したのが文化七年九月十五日で御座ります。夫婦仲よく暮しまして、一男五女を造らへました。處が或時黒疱瘡が大流行を致しまして、お隣の大庄屋足達家の五人の兒供が皆死んで終ひましたが、獨り殘つた第六番目の息子と云ふのがおミキさんのお乳を貰つて育てて居りましたで御座りますな。それで御座りますからおミキさんは非常に力味まして此子だけは殺さ無い様にと世話を燒いて居りましたが、その子もまた黒疱瘡に懸りまして死に相になつたので御座りますない。それでおミキさんは此處が神佛の頼み處だと思ひまして一生懸命にお願を掛けたので御座ります。するとと不思議なことにはその御願が聞かれてその子が助つたので御座ります、之が抑も天理様の起りで御座りますな――まだ〱御教祖様の御威徳は數へられぬ位多いので御座りますが、……肺病も全快するは、腸を病んだ人も天理様のお蔭で生き返つたとか。それは〱數へきれません程で御座ります。』と得意になつて、薄い唇を大きく張つて喋る。何となしに野鄙な處があるので榮一は云ふ事の出來ぬ苦痛を感じた。、然し女預言者デボラの事など思ひ出してミキの自覺と感化の大きい事も考へた。

『あの、家、屋敷を貰つて教會に持ち寄りすると云ふのは一體どう云ふことですか？』

『いや、あれは中山ミキが四十歳の時、天理様のお教は是非とも世界に弘めねばならぬと云ふ決心を致しましたので自分の田地諸道具を皆天理様に差上げたので御座ります。これが起りで信者になりますと皆家屋敷を寄附致すので御座ります。何しましても大和の本部まで參詣致しますのにビタ一文もいらぬと云ふので御座りますから結構な事で御座ります。……私もこれ長年煩つて居りました黄疸が天理様の御陰ですつかり今では本復致しましたが有難いことで御座りますわい――』と唾を吐いて終りの方を尖らす。榮一は何だか哀れに思ふた。彦吉は唇を

濡らした様に手で拭いて、また語る。

『大和の本部は實に大きいもので御座りますな──昨年の暮に參詣致しましたが──そら京の本願寺や知恩院など申しましても話になりませぬわい。お正月の御鏡が一石二石と云ふ大きな奴で御座りますわい。それがお下りになるときは材木をひく鋸でゴシ〳〵と小切に曳くので御座ります。それを誰にでも雜煮にして食はすので御座りますから、たいしたもので御座りますない。』白椿の散りかゝつて居る花から、蜂が出る。靜かだ。

『それじや四海兄弟主義ですね？』

『本が伊弉諾伊弉冊の二柱から出た人間で御座りますからない。』とまた唾して下駄で消す。『膨れて居る瞼を伏し目勝にして少しの間默る。榮一はじつと彦吉を見た。青い顏色に白毛混りの髮、汚れた筒袖に母指の爪先の出た白足袋、帶は黒の角帶だが、小倉で紺がもうさめて居る。

『天理敎では神様は伊弉諾伊弉冊の二神ですか？』

『神は十柱で御座りますが、之の十柱の神様が日と月の二神から別れたので御座りますから──まア二人の神様と申しても宜敷う御座りますな。』彦吉は門の方に足音を聞いて一寸と立ち上つて、扭の花形の隙しから外を見る。常吉が歸つて來る。榮一は唯瞳を据えて足先を見つめて居る。

『十柱の神？　二神から別れた？　誤られた人間！　觀念と云ふ花嫁は空想と云ふ子を産んで、空想の子が神様を孕んで居る宗敎とか理想とか云ふものを口にして居ては自我をさへ失はねばならぬ。だから……自我が隱れ無い樣に凡ての自我を足先に集めるのだ。足先は客觀界の現實だ。觀念の中に迷ふ者では無い。實在？足先に實在の影が踊つて居る。』など考へて行く。視覺が鈍れて形も色も色々と亂れて來る。頭の中には何の考へも無くなる。唯無意味に時間と影が移る。蜻蛉が一匹飛んで來た。

彦吉は煙草を吸つて居る。そこへ常吉が中門を一寸と覗いて若旦那の居るのを見て這入つて來た。

『や、彦吉さんでか？　誰れぞと思ふた。また天理さんでか？アハ……』と笑ふ。

『何云ふので、歸つて來るから。ちつと常吉も此頃は氣が違つて居るな。』三人とも笑ふ。常吉は直ぐ眞面目になつて、

『若旦那。町の旦那様も奥様も宜敷申されまして御座ります。』

『旦那は居たの？』

『お晝にお歸りになつてお會ひ申しまして御座ります。』

『荷物は這うしたの？』

『預つて置くから、今日は是非とも町へ出て來る樣に云ふて呉れと仰ひまして御座ります。』
『私に來いつて？　そう。どうも有難たう。お使立申しまして誠に濟みません。お豊は？』と不安の念に驅られながら丁寧に云つた。
『はい。町で頂戴致しまして御座ります。』
『常さん。ねばり込んで御馳走になつて來たよ。どして晩まで居つて屛裏の二錢姫でも買つてこんでか。アハ……』と笑つて煙草に火を付けて居る。
常吉は一寸と手を延してマッチの箱を叩き落した。
『助け給へ天理王ノ尊……』と笑つて、『若旦那樣それじや別に御用事は御座りませぬか？』と問ふて、急いで中門を出た。
彦吉はマッチを拾ひながら
『こらまた常が惡いことをした。エヘヘ……。仕方が無い奴じや。』
『なんぼ天理樣でも常の惡いことする事だけはよう止めんな。アハ……。』
『嫁に子まで産ましてまだ惡いことがしたい樣では困るなお歲は幾つじや。』
『三十じや』
『まだ若いの。』
『彦吉さん――』と常は呼ばつて、兩手を揃へて内から外へ掌を覆して叩く。
『屋敷を拂ふて借錢借り込め田を賣り給へ。天理王ノ尊。アハ……』と嘲笑して西納屋の庇の方に歩んで行く。馬は藁飯を呉れる人が來たので嘶いて居る。
正義が學校を終つて歸つて來た。一寸と中門から首を出して『兄さん、唯今』と云つた切り玄關から奥へ這入つた。彦吉は
『小坊さんは大きく、おなりなさりましたない。』と云ふ。
『大きくなりましたね。――今から町へ行きますと日の暮れない中に着きましやうか？』
『そら、充分着きますとも。まだ日天樣はお高ふ御座りますからない。』
『それじや今から出掛けよう。――彦吉樣まア内へお這入りなさい。』
『はい、有難たう。』二人は内へ這入る。西納屋には歌が聞える。
『やれ寢むたい――寢た方がよかろ――。』

様と寝た方が、――盗よかろ――ションガエ……』
鳥も啼いて居る。

八

田宮の濱へ出ると干潮(ひきしほ)で濱が皆露出(むきだ)して居た。辰の親が渡して與れたが、舟の中で辰の事を聞いて見ると赤痢で死んだと笑ひながら云つて居る。善い心持もしなかつた。新田(しんでん)に渡つて、自分の宅の茅野を二町計り横過つた。此茅野へ少さい時に女の連れと「つ花」を拔きに來た事がある。その中に田宮の鶴子樣も居つて熱心に拔いて居た。自分は拔いた三四拾本の「つ花」を皆鶴子樣に與へた。すると翌日學校で皆に嬲れた。また或時は此處で雲雀の巣を見付けて置いたが翌日行くと早や誰れかが壞してあつた。

茅の芽は春に會ふて崩え出て居る。樺色、青色、萬色、が交り合つて美しい。雲雀の聲がする。十四五町向ふに大きな土手が見える。それまでは皆麥畑だ。よく實つて居る。ふり返つて觀ると古田の堤は餅で蔽はれて居る。その下に蒼い水が流れて田宮の濱の上には四五抱もあらうと思ふ榎の木が實に何とも云へぬ美しい芽を萌き出して居る。河上の方には德島の城山が確(ハツ)然(きり)見える。川を通る舟もない。唯古田に寄つた川岸の萱野(かやの)に風が渡つて今年出た青い細い葉に波が打つて居る。

茅野が終つて、自分の宅の麥畑の間を通り拔けて西の新宅の田圃へかゝつた。雲雀の聲が蟬の樣に聞えたと思ふと鳴き止つて何處かへ降りた。德島へ行つて父に何を云はれるのかと思ふと胸苦しい。いつその事此樣な晴れ晴れとした野原に小屋でも建てゝ自然を樂しんだ方が遙かに神に近い。此雲雀の鳴いて居る野原は世界の全部では無い。田園生活が生活の全部で無いとも考へる。榮一は畝道を歩み乍ら思ひつゞけた。

父の怒が何が恐ろしい。お梅の迫害が何だ。榮一は男だ。明治の俠客主義だ。凡ての權威を退けて平和と平等を來らすべき責任を帶びて居る者だ。永遠の平和と平等の爲めには、火と劍とを辭してはならぬ。『父を子に背かせ、婿を嫁に、嫁を姑に』と叫んだキリストの熱を持つて居るのだ。

慣習の家長制度! 父とは何だ? アポクリファにはキリストが『血肉にあるものを父と呼ぶ勿れ、父は一人なり、即ち天に在す神はそれなり』と云つた事があるが、之だ。父とは何だ? 權威とは何だ?

此那事を考へながら土手へ上つた。五六間もあらうと思ふ高

い堤。此堤は自分の小さい時に洪水で切れて新たに造つたものである。土臺の青石に金色の四角な一分か二分かの長方形の結晶體が付いて居るのを辰や、初ちやん、市ちやんと一緒に取りに來た事があつた。

それから段々と連想すると、蠟石を彫刻した事、姉に倉へ入れられて中で小便した事、裏の「すだち」の木から落つた事、越前から藍商が二人來て藍善さんを床の間に祭つて拜んで居た事から、田舎廻りに市川市十郎が來て幡隨院長兵衛を牛屋島の小屋で演じたが、自分等が、その眞似をして西らの厩の軒と、市橋歡一さんの納屋の軒で芝居を初めた事があつた。

あの時の事を思ふと獨り笑へて來る——

自分の宅から默つて姉様の着物を取り出すやら化粧の間から鏡やおしろいを持ち出して、與力窓の暗い暗い下で自分がお化粧をして、兎に角、女に化ける積りで涼み臺の舞臺へ現はれ席の幕の開くのを待つて居ると軈て幕が開く。女だけは出たが中々男が出て來ぬ。自分はまた納屋へ這入つて歡一さんに、早く出て來いと云ふと歡一様は自分の脫ぎ捨てた衣服を裏返しに着て額に紅で三つ四つの輪を入れて、今帯を占めて居る處であつた。占め終ると、

『坊々は後から出て來なはれよ』と云つて舞臺へ現れる。そして何か『エツサツサ、〱』と繰返して奴が使に行く眞似をして居るらしい。見て居る女の子も男の子も皆笑つて居る。自分も笑はせたいと思ふから、一寸もう一度鏡を覗いて、自分乍らも美しいと思つたから、姉様の長い絹の衣物の裾を取つて、俛いたまゝ如何にも萎れた風をして出て行つた。勿論髮は市ちやんの黑の前掛けの束髮である。處が案外にも之が皆を感服さしたらしい。後の方で見て居る鶴子様が川上のさかえさんに

『美しいな』と、

囁いて居るのが聞えた。自分は鶴子様がそう云ふたので恥しくなつて來たが、舞臺で何するか知ら無かつた。然し歡一さんの奴が僕を縛つて蹴つたり蹈んだりして奥へ引ずつて行つた事を覺えて居る。そして今度の幕の間に自分がまた加藤清正にならうと思ふておしろいを水で洗ひ落して居ると、鶴子様がこつそり獨りで這入つて來た。

『奇麗であつたワ、今の女の人は』と賞めて急いで自分の懐へ差入れて呉れた、何か知らぬが、薄い四角い厚紙を。そして『誰れにも云ふたらいきまへんでよ。』と云ひ捨てゝ表へ出た。生憎歡一さんは家へ衣裝を取りに歸つて居るし、市ちやんと眞一つ

アんは舞臺で何が席の幕を工合よく直して居た處であつたから外の者には誰れも見付けられ無かつた。

外に出た鶴子さんは川上の榮さんに、

『今見て來たらな、新見の坊々が今加藤清正になつて居つたではおまはんも見て來なはれ』と叫んで居る。それでドヤ〳〵と急に納屋は賑になつて女の子達が六七人這入つて來た。その中に衣裝を取りに歸つた歎一さんは衣物も何も持たずに、

『坊々やめよう――お母(かゝ)に叱られたけん』と云つて來た。それで芝居はお仕舞ひになつた。自分は鶴子樣に可愛がられたり賞められたりした上に、思つて居た芝居が出來ず中途に止めると云ふ樣な事が起つたので、臆病な時に起る樣な慟悸の打ちかたをさせて家へ歸つて行つた。そして鶴子樣に貰つた厚紙を見ると須磨の風景寫眞であつた。然し此芝居をしてから後夏休みが近かつたので、その上鶴子樣と仲善しする事も出來ず、兵庫の店へ遊びに行つたので戀と云ふか可愛がり合ひと云ふか何か知らぬが幼い時の美しい情が一時中止せられた。九月に歸つて來てからも。村で鶴子樣が、坊々を慕つて居ると云ふ評判があまり高かつた爲めに全く顏を見るさへ恥しくなつた。その翌年の四月に自分は中學校へ入學したからその後は勿論互に音も沙汰もする事が出來無かつた――など考へると過去が何だか淋しい樣な氣がする。それに

昨日見た美人が鶴子樣だとするとまた何だか一層妙な響きが胸にする。

また北志多來のダラダラを越えて北村の方へ歩んで居ると色々な過去の思ひ出が湧いて來る。

押入から砂糖を盗んだ事や、鍋錢を黑く塗つて一文に通した事、黃粉(きなこ)が好きでマッチの箱に詰めて前納屋の横で隱れて頰張つた事、買ひ食ひすると叱られるのだが五厘や一錢を盗み出して村はずれの山下と云ふ駄菓子屋で、ピラミッドの形に砂糖を固めた物を善く買つた事、西らのお婆樣について大谷の大師さんで一晩お籠りした事、――あれが夏の夜で蚊に食はれて一睡も寢られ無かつた事、大師の縁日の二十一日には必度二錢か三錢かの小遣ひ錢を貰つて初やんや。市つアんや西の新宅の小坊さんと連れ立つて參りに行つた事、その時分には胞卵を七つも持つて居た事、それから夏の夜の虫送りの焚松行列――『實盛さんのお通りじや』と大聲に呼ばつて村のはずれで焚松を消す習慣――東馬詰ではせぬが山路の大谷では每年するのを裏坐敷の格子越に見た事、また之れも夏の終り秋の初め、世が靜まつ

て稻田に涼しい淋しい風が吹くと折々高く折々低く山路邊に獅子の太鼓を練習して居るのが寢耳に響いて、小太鼓は鼓膜を破る樣に鋭く大太鼓は耳たぶを引張る樣に濁つて、淋しく物哀れに然し何か透き通つた樣に聞えて、繼母と姉と自分の三人の家内が今にも何かに襲はれて消えて終ふのでは無いかと十二三の小さい胸で心案じした事など思ひ出す。それから思ひ出すのは盆の地藏踊のことである。石川の佐平さん——村の世話役で面長のいつも笑つて居る人——の庭で一脚（涼み臺）を五つも六つも積み重ねて、その上に竹の四本柱を建てゝ幕を張り、音頭を出して、その調子で皆が、手足よろしく踊つた。大抵、踊るものは簑笠を着て居たが變ちきりんな態をして居たものもあつて音頭は太閤記十段目とか二嫩軍記三段目とかさはりを善く遣つて。三味線は西らの益さんがお極りで、音頭出す若手と三味線の益さんが臺の上へ昇つて、

『ヨオイ、ヨオイ、ヨイトコサ、明けりや、

お寺の、鐘がーー鳴る……』と

初めるのだつた、自分も益さんのお父さんに太閤記十段目を練習して一度臺に上つた事があつたが、三味線にも合はず、聲も充分出ず、中途で止めて賞品には澁團扇一つ貰つて失望して家に歸つた事があつた。

種々のことを思ひ出すと人間の過去と云ふ物は恥しいものであると考へられる。

北村へ這入つて車に乘つた。榮一が德島本町の父の宅へ這入つたのが五時過ぎであつた。市中は何となしに騷々して居た。

九

榮一が小學校の教師となつてから、早や四日立つ。父は市の要務を帶びて、上京して留守であるから、夕飯もいつもより早く濟して、散歩に出た。東京から歸つて、丁度一週間目、その日は土曜日であつた。町には學生がぽちぽち、散歩に出て居た。佐古の方まで散歩して、日も全く暮れたから、東新町をとぼとぼ歸つて來ていた。一丁目の角へ來ると、大勢の人が軒に立つて、讃美歌の聲が中から聞える。

榮一も立つて覗いて見ると、間口四間に奧行五間計りの土間にベンチを十脚計り置いてある。之れに小供が一ぱい腰を掛けて居る。正面の右二間は板壁になつて、その前に粗末な梯子で二階へ登る樣になつて居る。梯子の横に、讃美歌を大きな字で書いた紙が懸つて、左の二間は奧まつて疊を敷いてある。此座

敷の前に三尺計りの縁がある。之れにも女の子が、せり合つて腰を掛けて居る。座敷の眞中に白いテーブルクロースの掛つた机、其右手には大きなオルガン、此オルガンの上に錆たブリキの笠のついたランプが吊つて有つて、横の黄ない壁には、古びたユダヤの地圖が懸つて居る。座敷の裏側に入つて居る障子は、紙が茶色で處々破れて居る、左右の壁の眞中に煤けた細い虫の食つた柱が現れて居る。右側の柱に半紙を四尺計りに繼いで小ましやくれた字で、聖書研究會、毎火曜日午後七時より德島本町マツケンジー氏方、説教毎日曜午前十時及午後七時より通町教會堂にて、と書いてある。右側の最後のベンチの後には、隅に倚つて、燒芋屋の荷車が置いてある。

通りかゝる人は、一度は必ず説教處の内を窺く。窺くと第一に目に付くのは、小供に讃美歌を敎へて居る廿前後か十八九と云ふ、それは奇麗な婦人である。髮をマガレットに結んで、紫の袴を穿いて居る。眼は大きく黑くて、二重瞼の二重顎の福々しい女。その眉の形と云へば全く話に出來ぬ程美しい曲線だ。頬に赤みがあつて淡泊とした女である。

榮一は『鶴子樣だ……』と胸の中で云つて、珍らし相に見て居る二三十人の間に這入つて窺つて居た。歌が濟んで、ベンチの小供は騷ぎ初めた。十二三の男の兒が隊長となつて、部下の五六人が席の廣い狹いを爭つて居る。暫くして隊長は縁に進んで女の子を追ひ退けると五六人の家來が皆隨ふ。組の中に黄い聲で――

『われ等のいくさは肉ならず……』と歌ふ者があると思ふと皆に傳染して大きな聲で歌ひ初める。終りは唯『ウエヘエイ』と叫ぶ門口に立つて居るものもベンチに掛けて居るものも皆笑ふ。牧師とも見える洋服姿の五十恰好の男。髮を一寸と分けて、八字髯を生やした口の幅の廣い唇の右が少し下へ捻れて居る人がテーブルの前に立つて、小形の新約聖書を開いて居る。小供は矢張り大騷ぎをして居る。

牧師は『今からお話を初めますから、小供さん皆お靜になさい』と丁寧に注意した。すると隊長は口の右を右手で捻らして左の人指で八字髯の形を造らへて出て行つた。部下も皆同じ眞似をして出て行く。之は牧師の顔の形を眞似して居るのだ。外へ出て、

『口、いがみ、〱』と叫んで居る。

女の子のひとりが榮一の居るのを見付けて、

『今度來た先生！』と囁いた。すると少しの間に皆、柔和を裝

ひ初めた。然しこの慎みも暫くの間で、一人去り二人去つて小供の大抵は逃げ去つて終つた。牧師は默禱を終つて『讃美歌を一つ唱ひます』と云ひ乍ら、梯子の横に懸つて居る紙を一枚一枚裏返して

エスきみエスきみ　みすくひに
われをもらさで　いれたまへ
主よ　主よ　きゝたまへ
くだけしこころの　ねぎごとを
……………………

と初めに書いてある讃美歌を撰んで美しい婦人に『之れを』と云つて示す。

美しい婦人はオルガンの前に掛けて奏き乍ら唱ひ初めた。その歌が新見には身に浸みこむ様によく感ぜられた。

歌が終つて、美しい婦人はテーブルの影に坐つて俛いて居る牧師は説教を初める。

説教が大分進行すると今迄講義所の前に黒く集つて居る者が一人去り二人去つて僅かベンチに腰かけて居るものは五人になつて終つた。四十計りの背の小さい丸髷に結つた女が一番前に此女は少し酒を飲んで居るらしい顔を赤くして居睡つて居る。そのすぐ後に此講義所の家主である。お隣りの吉田洋服店の主人が寝て居る三つ計りの女の子を抱いて聞いて居る振をして掛けて居る。左側のベンチの壁によつて筒袖を着た白の兵古帯をしめた二十五六の青年が腰を卸して居る。痘痕(あばた)が有つて跛である。これが此講義所の番人。如何にも敬虔らしく天からインスピレーションでも聞いて居るかの様に、眼を閉じては祈り、眼を開いては牧師の口に注意して居る。

ベンチ、二つ置いて洋服屋の主人の側に掛けて居るのが年頃二十一二の青年これまた筒袖で黒の兵古帯。小麗張りとして居るが下駄を見ると廣い薄べらな筍の皮の様な者に棕櫚の緒をたてゝ穿いて居る。勞働者であるらしい。もひとりは新見栄一で講義所の番人の後ろのベンチに絣の羽織を着て、何だか氣の落ち付かぬ様な態度で掛けて居る。机の陰に隠れて居る鶴子さんが聞いてゐた。

牧師は頗る熱心だ。或時は沈欝な勞働者の青年に其次の瞬間には栄一に話して居る様に視線を轉じて説教する。

表に車夫が立つてゐるので、又二三人集つた。

説教者は熱心にイエスとニコデモの話しを語り終つた。その

眼は焰に燃えて居た。車夫が轍り背高く去ると共背に鶴子は一寸と頭を上げて往來を見た。

説教は長いもので一時間位かゝつた。説教がすむと美しい婦人はまたオルガンの前に現はれた。丸髷の酒呑先生が目を醒した。そしてづうと立つて歸つて行く。最後の讃美歌は、

みめぐみあふるゝ　インマヌエルの
ちしほのいづみに　つみをあらへ
じふじかのうへの　ぬすびとすら
このいづみをみて　よろこびけり

と云ふのであつた。新見は聞いて居ると自分も全く耶蘇のお弟子になつてしまつたかと思ふ様な心持がした。鶴子様の高い聲が胸を貫く様に鋭い。榮一は目を閉じて鶴子様の唱ふのを眤（じつ）と聞いて居た。歌が終つて牧師は祈禱を初める。然し榮一は目を閉じて居る間に、色々な事を考へた。

『……キリストが都の大きな塔の眞上に誘はれて、「爾此處から飛んでみい」と云はれて、よう飛ばなかつたのは卑怯だ、もし飛び降りる勇氣があれば、僕は彼の前に跪（ひざまず）くのだが……人生には塔の上から飛び降りる様な勇氣がないから、疲れる。キリストがもし飛び降りて居た時には、人生問題は凡て解決して居たのだ。人間なら人間で濟んだのだ。世界はキリストが塔から飛び降りなかつた計りで迷ふて居る。飛び降りて天の使が捧へたとアポクリフアが書いても人間は奇蹟だと云つて、笑ふてしまふだらうが、キリストが、どうせ十字架で死ぬのなら、薄命なエユフオリオンの様に、人間は死ぬなら死ぬと示して呉れて置けば善いのだ。彼は世界を迷はす。人間は疲れる。熱がない哲學者が皆寢入る。だから、「エリアの火」を呼ぶ必要はあるまいか？……永遠に燃えて居る。鐵の火箸を具へて置くのだ。寢入らうとする哲學者の口を裂いて、その軟い長い舌を引出して燃え立つ燒け火箸を、恐ろしい勢で舌にさし付けるのだ……燒けて血が口に滿つと鹽辛い血の味がする。ぴり〳〵と顎の所々が痙攣（ひきつ）る。そして延髓の處が重くなる。空想の哲學を産み出した神經中樞が破壞される。殘るのは、石を積んだ様な數學的の哲學を產む中樞ばかりだ。要するに人間が血眼にならねば哲學系統は湧いて來ぬ……が疲れた。東京から歸つて來て人間にも全く飽いた。唯人生を痛罵したい……』

祈禱が終つてアーメンと加はつた者は番人と鶴子様の二人。

牧師は祈禱がすむと直ぐ下駄を穿いて榮一の處へ遣つて來た。一禮して、

『失禮ですが貴君は今迄にキリスト教をお聞きになりましたか？』

『はア』と輕く答へて、一寸と鶴子の方を見てまた俯向いて指をもじくさす。

『何處でお聞きなさいました？』

『一週間前まで、東京に居りましたので、』

『學校に居らしやいましたか？』

『はイ』

『何處の學校に？』

『明治學院に』

『ア、そうですか。明治學院に居らしやつたんですか。それじやあなたは信者でいらしやいますか？』

　鶴子が進んで來る。

『いや、まだ信者じや無いのですが……』

『チツト私の內へも遊びにいらしやい。通町の敎會の裏に居りますから。』

『失禮ですがお宅は？』と續けて問ふ。鶴子は牧師の側まで進んで、

『橋本さん、失禮致します。おやすみ』と丁寧にお辭儀をして歸らうとする。

『田宮さん、一緒に歸りましよう、少しお待ちください。お急ぎですか？』

『いゝえ』と鶴子は答へて、跛の番人が表の戶を苦しそうにして閉めて居るのに氣が付いて助けに行つた。

　榮一は『德島本町で御座ります』と答へたが、

『德島本町の何處あたりでいらしやいますか？』と問ふ。

『新見で御座ります。』と答へたが、橋本は市長の息子だとは思はぬらしい。

『何處か洗濯屋のお近かくで御座りますか？』と尋ねて居る。

『洗濯屋の隣りで御座ります。』

『それじや市長さんの――』

『ハイ』

　戶を閉めて戶の外に立つて居た鶴子は新見と聞き、市長と聞いたから、內を覗いて見た。そして驚いた聲をして

『私……いや、……眞(ほんと)に忘れてしまつて居た。どうも失禮しました。』と叫んで這入つて來る。若い美しい靑年に禮をするのは

何だか罪深い樣に感ぜぬでは無かつたが、大きくお成りなしたから見違へましたよ。御免ください。』と笑ひ乍ら禮をする。

『あ、鶴子樣。』と榮一も腰を上げて挨拶した。

『暫く、御機嫌はおよろしう御座りますか？』

『あなたも？』

橋本牧師も笑ひ乍ら、

『田宮さんは、新見さんを御存知ですか？』

『はア、同じ村の前と裏で、同じ學校友達ですの……新見さんは御親類にも當るのですの……然し長らくお目に懸らぬから全く忘れて居りましたわ。新見樣は大きくおなりなさいましたね。』身振の自由な、愛嬌のある話し振りをする。

『長くお會にならなかつたのですか？』

『そうですね、一寸と七年で御座りましよう。ね、新見さん？』

『そうですね。七年にもなりましようね。』

三人は揃つて新町橋を越えて、通町を歸つて來た。二町目から鶴子と榮一と二人で話しながら歸つた。

夜の空氣が冷かつた。

門の戸が閉じて居た。もう九時半。

新見家は朝が早いので宵寢だが、今夜は主人の留守だから特別に早く寢た。小僧の吉三郎を煩して内に這入つたが、室内の空氣が重々しくつて、壁の臭ひがするので胸が惡くなる。奥を覗くと行燈がついて居る。お梅がこちらに、益川がむこうに寢て居る。九時半は外出時間を半時間過ぎて居る。然しお梅は別に叱りもせぬ樣だ。榮一は鶴子に會つて少し刺激せられたから今から勉强せうと決心した。

『ランプ！　押入を開けてランプを取り出さねばならぬ。あの大きな押入の戸を開けると激しい音がする。お梅の安眠を破る九時半！　之れからの勉强。必度明日の朝は叱られるにきまつて居る。』と思ひながら恐る恐る玄關の押入からランプを取り出した。

『マッチ！　臺所の隅。足音立てずに。』とマッチを探したが無い。奥の行燈の臺のマッチを取つて來た。

二階へ登らうとすると、段に澁紙が敷かれてある。吝なことをしたなと獨語しながら、出來るだけ物音立てずに上り初めた

が、家が新しいからギユウ〳〵と新しい木が鳴る。

『なに勉強しに上るのだから、鳴つても善いさ。また別に足元に注意する必要も無い』と正々堂々と上つたが鳴りは一層家の隅々まで響いて大騒動が起る様だ。

『こら少し悪かつた。』と思つたが猶上ると猶響く、『或はお梅が叱るかも知れぬ』と耳底を澄まして下から起る聲でもあるかと思つて居ると、妙なものだ。時過ず、下からお梅の鋭い聲！

『だれで、そんなにドン〳〵二階へ上るのは、人が寝て居るのに、』『悪い事をした。然し生意氣だ、「誰で？」僕と解つて居て、」と考へたが、

『はい私です。』と穏和しく返事をする。

『兄さんで？ 今から御勉强？』

『ハイ、』と答へて置いて、トン〳〵と昇りつめてお梅の云ふことなどは還うでも善いと自分の書齋の襖を開いた。

書齋にも澁紙の上敷が延べてある。榮一は少なからず驚いた。

『お梅は僕が美感も何も無いと思つて居るのだな。まアよし：…：ア、今夜も戸を閉てるのを忘れて居た。また明日の朝は小言を聞くのだ。鶴子様はまだ勉強するのか知ら？』と戸を一枚開いて此の方を見ると、二階立の家にはまだ戸が開いて居てランプの光が輝いて居る。黒い影が障子に寫つたり消えたりして居る。

『アレは女の影だ。障子一枚取るとマガレツトの鶴子様が現れるのだ。女は可愛い。あしこに飛んで行つて見たい。……然し勉强しよう。——と榮一は戸をピシヤリと閉めて机の前に坐つた。ランプの油は少ないし、ホヤは掃除して呉れて無い。吉三郎まで自分を輕蔑して居ると思ふと腹が立つ。硯箱も變へて總つてある。散歩に出て居る間にと思ふと散歩を悲しく思ひ、三時間のうちに、室の有様が變つたのだと思ふと時間が惜い。

『然し不平が人間の職務では無い。默想錄に何か書いて見よう今夜は思想の統一は無いが。此問題はなるべく早く完全した者を得なければならぬから：…下から聲がしたのじや無いか？お梅の野郎が二階へ上つて來る様な氣がするが、僕の錯覺がまア墨でも磨つてと：…此筆は何だ。先切れのお古。待て。——なに我慢するさ——何か書いて見よう。』

榮一は筆を取つて、三百枚計りの原稿紙を綴つた帖を開いて『唯物論の實在觀(五月十二日)』と書いた。

『墨が薄い。字が泌む。こんなげすつた墨！ 大きくても質が

惡ければ糞にも立たんじや無いか、小さくても古梅園なら屑でも善い。虐待だ……まア辛抱するさ。然し何から何まで、よく虐待しやがるなア。きやつ！ 生意氣だ。』など考へながら筆を下す。

「電氣物質觀は非常なる速力を以て、その研究の歩を進めた。最近の或新聞紙には電子の形態を論じあるを見た。近き將來に於て或は此電子論より人間の自覺を説明するの時期がくるかも知れ無い。——」

『ウム、下から聲はしないか？ お梅が二階へ上つて來る樣に思ふが。何に。かもうものか。我輩は勉強するさ。虐待も何もあるものか。我輩は悲觀と樂觀に超絶して勉強するのさ。我輩の能力の凡てを發展さすさ。what は For とか And と云ふ意味は無い。眞理を求むる哲人は透明だ、自ら(みづか)には、色も香も淚も喜びも、輪廓も影も無い。唯透明なガラスだ。凡俗の埃や塵には無關係だ。……然し鶴子は美しい。可愛い。また可哀相だ。兄さんが今度臺灣の郵便局へ轉勤するつて？ 別れるのが辛いだらうね。獨りの兄樣が氣候の不順な臺灣へ行く。僕は同情する。鶴子樣は高等女學校が出來るとすぐ二年へ入學したつて云つたね。今は補修科を修めて居る。……それからと——』

「然し其の時期になつても自覺の中に含まれたる目的論的見解が盲目的機械論に征服せらるる事はあり得ない。相對にして、不可思議な時間空間の中に表顯したるイオンが、その中に無限の實在卽カントの所謂デング、アン、デツヒを具へたる、絶對の實在なりと證明せらるべき事は到底不可能の事である。——」

カントの現象論とハミルトンの相對論を思ふと頸筋に冷水を流される樣に感じる。……

鶴子樣が洗禮を受けたのが、去年の二月の二十一日、祝福せらるべき日だ。僕が社會主義の事を一寸と話すと安部磯雄氏の「瑞西」と平民社の「ラサール」を讀んだ事があると云つて居た明治學院に居たと云ふと喜んでいたね！ 信者で無いと云つた時には少し失望して居た樣だが、『それでもあなたも妾もキリストに耳を傾けて居ると云ふのは不思議な事ですね。』と云はれてば僕の胸が少なからず騷いだね。キリストは實に偉大だ。彼は世界で最も貴い愛のシンボルだ。然し認識論が云ふことを聞かぬ。認識は神を知らぬと云ふ、……此唯物論の實在觀でも解決した上で、唯心的神が其の力を以つて世界を創造したと云ふならば、キリストを信ずる。……チエ、また空想に耽つて居た。

「……茲に吾人が實在を知覺するに當つて、その知覺する者は

エネルギーなる事は明白な事實である。或は電子の形態を論**するも皆之れ主觀の空想或は假定であつて客觀の事實として**は形態を有するイオンを假定するも可いけれども、絶對實在として之を認識することは最近の心理學が許さゞる處である。

そのフオースなる物を盲目的とすれば、吾人の意識はその盲目的フオースの進化したものとせねばならぬ。然し認識は相對で、機械論的見解を認識するには目的論を離れて知ることも出來ない。……」

面倒臭くなつて來た。我輩の此樣な論法では唯心論になるかも知れぬ。認識論に這入つては面倒だ。もう筆が進まぬ。頭に哲學を默想する樣な餘裕は無い。鶴子が凡て占領して終つて居る。……然し哲學者が此樣な事では困る。もし僕が日本の哲學界に貢獻しようと云ふのなら、も少し虚心平氣にならねば駄目だ。此世紀はカール、マルクスが云つた樣に哲人が出でゝ社會を根本から解決せねばならぬ時じや。世界は豫言者の變りに眞の哲學系統を求めて居る。……駄目だ、戀に哲學を猻れては! 世界の最大哲學者は皆禁欲主義の無妻主義者だ。キリストや釋迦は云ふに及ばず、エピクテタスもアウガスチンも、スピノザもライプニッツも、カントも、ヒュームも、ロツクも、ミル、シヨウペンハウエルも。**それに佛教とキリスト教の多くの聖徒哲學者**……が、僕だけ情欲から離れて理性の鍵をしかと握ることは出來ぬか? 理性と肉慾とはどちらが根本的だ? 最も根本的のものが哲學ならば肉は哲學の最も聖なるものだ。……僕は既に鶴子に囚れた。

女性觀を多く說く必要は無い。男も女の子だ。男がまた女を産むのだ。子が産みたい! 子が産みたい! 何だか戀した上で子が産みたい樣な氣がする。生れて初めて此那事を考へるのだ。僕には這那子が產るだらう。藝術品の中で子を產む程立派な作物があらうか? 人間の子は肉付きがよくつて跳ね廻る! 戀! 生殖! 伊賀駒吉さんの樣に六百頁も七百頁も女性觀を書く必要は無い。戀! 僕は女と居たい! 凡ての哲學は解決するのだ。耳の底に殘るのは今夜別れる時の鶴子の最後の言葉!『おやすみ!』

僕は身體がぐにや／＼になつて終つた。下女と、宿屋の給仕と、ミルクホールの姨さんにしか接しなかつた僕が、美しい鶴子樣に肩と肩とを並べて歸つて來た時の胸の中。僕は忽に飛び付いて抱きしめて城山の森の中へでも連れて行きたかつた——

あまり鶴子さんが優しいから——少なくも、別れる時だけは手を握りたかつた。然し、「肉を離れた戀」と云ふ聲がして恐る恐る手が縮つた。彼女は僕の偶像だ。不潔な事は出來ぬ。また威厳に恐れて手が出せ無かつた。僕は彼女の手を握りたい。然し肉慾を超絶して？…遂に僕は悩める者だ。此那時に鶴子様の顔を一目見れば。ア、もう寢て夢に鶴子様を忍ばう。あゝ睡い！』と榮一は机の下に足を入れて仰向けになつた。

『ア、鶴子様が戀しい。誰か呼びに行つて呉れれば…』と身體を縮めて兩手で顔を蔽ふた。その時急に、

『兄様もう、おやすみ』と云ふ聲が入口の襖の方にした。榮一は反射運動の様に起き上つて、机に倚つて、後を見た。然しお梅は居ら無かつた。自分の神經であつた。それでまた讀書でもしようかと思つたが、頭が重くて讀書する勇氣も出ぬ。また、

『アゝ鶴子様が戀しい。此那に戀しいのなら別れ無かつたら善かをたのに。』と仰向けになつた。此那に仰向けに臥て居る處をお梅に見付けられたらと折々入口を見たがお梅も上つて來ぬ様だそして暫くの開鶴子の容貌身振を想像して居ると、

『おやすみ、兄さん、蒲團の中へ這入つて——』と云ふ聲が入口の方にした。入口を見ると今度は眞にお梅が寢卷きのまゝ立つて居る。あはてゝ起き上つて、机の上へ兩臂ついて頷垂れて默つて居ると、

『兄さん、そんなにして寢て居つて、足で机の上のランプでも引繰り返して火事を放つた事なら大變でよ、お父様のお留守に危い。ほだけん、夜は早く寢て、朝早くお起なはれと云ふのに兄様もう下へ降りて、おやすみ！』

『火事をやる？　大きな事を云ふ』と考へて、默つて居た。

『兄様。もうおやすみ。』榮一は顔さへ見せぬ。

『もう十一時だつせ。』榮一は立うともしない。お梅は『お休みなはれよ。』と云ひ捨てゝ一寸と梯子段を降りようとしたが、また歸つて來て、

『兄さん、此居間の上敷はない。疊が新しいのですから、机を置いたり、本箱を置くと、奇麗な疊の上に形が付いて汚れるからない。晩方に一寸と吉三郎と倉から出して敷いたのだすワ。先きから默つて居るから解らんが、もしや、上敷の事で怒つて居る様な事なら、そんな理由じやけん怒らん様にしてつかはれよ。』と云つて、辯解して居る。

榮一は一寸と顔をお梅に向けて、足先から頭までじろ／＼見た。お梅は、

『兄さん、私はもう下へ降りて行きますから、どうぞ早く降りてつかはれよ。』とまた降りかけたが、また引き返して、窓の障子を開いて、戸が閉ぢてあるかを験べる。

『吉三郎が閉てたのじや。若旦那は宵に閉てゝ無かつたが――』と云つて、栄一の横顔を凝視て居る。

栄一は鋭い視線をお梅に浴せかけた。それでお梅は『もうお寝なはれよ』と下へ降りて行うとしたが、襖の所まで來ると栄一が笑つて居る。それで自分を笑はれたと思つたのか『いやな笑ひ方するの……』と云ふた。そして、何か復讐したいと思つたのであらう、暫く考へて居て、

『兄様、まだお降りなはらんので？　私がランプを持つて降りて消しますから、あんたは先へお降りなして、』とやつて見たが返事が無い。

『あまり起きて居つたから火の用心が悪いけん、もうランプを消しますでよ。』と今度は强迫的に出た。栄一の所へ近いて行つてランプを吹き消した。

栄一は決して反抗はしなかつた。飛び立つて下へ降りて仲の間で寝た。床の中で泣いた。

十二

それから三日立つて火曜日の夕方であつた。新見はぼんやり嚴然しい門の前に立つて、通りの人を見るでもなく、また別に考へるでも無く、意味なしに時を過して居たが、不圖氣がついたのは福島橋の方から走つてくる二人の小供である。

先の子は淺黃の様に洗ひ切つた紺の筒袖の所々破れたものを着て、舟の様に大きい草履を穿いて居る。年は十か十一かで悪る相の兒である。手には模様入りの古い手拭に何か穀物を包んで持つて居る。帶は走つた爲めか解けて居る。

後から追つ馳けて來る兒の風體はちやんとした中流の小供らしい。洗足である。新見は先の子が後の子に弄められて居ると云ふ事を見て取つたから、止めに行うと思つて居ると、新見の屋敷の隅あたりまで二人が馳けて來て、後の子は突然前の貧乏人の子をつき飛ばした。

貧乏人の子は手に持つて居た包みを向ふに飛ばしてドシンとうつ伏に倒れた。倒れた時も起き上る時も別に泣く様にも見え無かつたが、手拭の中の米が散らばつて居るのを見て、大きな聲を上げて泣いた。つき飛ばした兒は得意になつて『ウエヘー

イ』と町の遥か向ふに集つて居る小供の群に凱歌をあげて飛んで歸つた。

新見は一寸と微笑んで小供に近寄つた。可哀相に、その子は唯、町を向ふへ走る腕白小僧の影を見守つて、うらめしそうに泣いて居る。

『可愛から、泣いちやいけないよ。可愛いね。』と榮一は繰返して小供の衣を振るつてやつた。小供はその影が大勢の中へ消えるや否や、そこに散らばつた米を砂も小石も共に手拭を擴げて拾ひ入れる。そして口の中で、

『わし内へ往んだらお父さんに怒られるわ、アー――』と云つて泣く。榮一は同情して小供を助けて米を拾ひ集めながら、小供に尋ねるには。

『あなたの家は何處!』

之れを二三度問ふたが小供は中々云はぬ。四五度聞いて漸く、

『むこふの方』と顎で方角を指すばかりで確と所を云はない。然し口の中では續けて、

『内へ往んだらお父さんに怒られる』と云つて泣きしやくりをして居る。

『それじや、私が送つて行つて、上げましようか?』

『うゝうむ』と頭を左右に振る。『他所の人やかい連れて往んだら怒られる』とまた小聲でひとり言を云ふ。

『なぜ?』

『なんでも――』と急いで掻き集める。新見を排斥する様な氣味を見せて、飛び立つて走り出した。

新見は小供に手を掛けて、

『あなた、私が行つて言ひ解けをして上げよう、ね。』と親切に云ふたが、小供は唯默つて走る。走る小供にまた追ひついて、

『米をそんなにしたからお父さんに叱られるだらう。僕が君の宅へ行つてお父様に謝つて上げよう。泣かずに居るんですよ。』

此度はもう榮一に反對しなかつた。然し猶泣いて居る。小供と歩調を合して歩みながら榮一は尋ねた。

『何故あの子があの様に突き飛ばしたの?……あの子、何處の子?』

『岩城ちう宅の子。』

『どうしたの?』子供は云はふとしてまた聲を出して泣き初めた。

『ね。可愛いから泣いちやいかんよ……どうしたの?』

「……あの……わしが、福島橋のねきの米屋で米を買ひようたら、あの子が皆と一緒に居つて、こいつは此間船場で……遍路しまつた奴じやつて云つて頭はつたけん、急いで逃げて出て來よつたら皆が泣かしてやれと云つて後を追かけて來たん……』

『そう。悪い子だね』と榮一は言葉を返したもの丶此小供の大膽な告白と資本家の子弟の殘酷を思つて涙ぐんだ。其後二人の間に言葉は無かつた。日も全く暮れて、城山の鳥の啼く聲も聞えない。小供に導かれて福島橋を渡つて、右に折れて牛町と行かぬ中に長借屋の下駄屋と芋屋の間に奥まつた路次がある。此路次を處々折れてついて行くと先づ澤庵の腐敗した堪え切れぬ臭氣に貧民窟の影を覗ひ得たのである。實に想像より豫想外な所に舞ひ込んだ。小供は先に走つて影は消えた。想像しなかつた天地。家根は低く家は小切つて普通の家の玄關の土間だけも無い。人間はこれだけまでも家を區切る必要があるかと思つた多くは戸が閉ちて光も無かつたが、光の付いて居る所も豆ランプが精々、大抵はブリキ製の糸心の燃え出し、ずうと榮一は兩側を見て通つたが、左側で光の付いて居る三軒目に、女の甯走つた聲で、

『馬鹿野郎が、福島橋の所まで一寸と使ひに遣つて今迄かゝるてないなら……』と叫ぶのが聞える。次いで小供が打たれる音と小供の泣き叫ぶ聲が起る。急に新見は此家の前に現れた。

『御免なさい。』三十五六の女が竈の前に跼んで火著を持つて火を焚いて居る。榮一は一寸と後ろを顧ると向側は寢つて居る九つか十かの女の子が竈の前に坐つて、年寄の身體の不自由な人であらう通りに頭を向けて臥て居る。『此塵と此老衰！』と榮一は臆病な心が起つた。『あんな老人を僕が世話すると云ふ日になればもう御免だね。あれでも生きて居りたいかな。』と眉の間に皺をよせた。女は、

『さ、何卒内へおはいりなして、ほんとに欝陶敷う御座りますか』と鋭い目に愛相をしやうとして新見を見た。引詰の髮にしいけの一面にして居るのは糸屋か機屋に出て來るからであらう。這入れと云はれても、四尺計りの後ろにあの老人が寢て居ると思ふと、這入らずに直ぐ歸つて行つて美人の顏でも見て氣晴しがしたい樣な氣がして這入れぬ、貧民窟と云ふのは此那悲慘な所で、壯年者が病んで臥て居ると云ふのならまだ希望と云ふものがあるが老衰と來ては話にならぬ。身が縮まる。

『有難とう』と新見は遠慮して、後ろをも一度見たいと思つたが、「あの薄い蒲團の中のあの老人」と眼の前に畫いて見ると、

また見るのが恐ろしい。

女は榮一に愛相を云つて置いて、土間から三尺計り高い床にうつ伏にもたれて包みを掩いたまゝ泣いて居る息子に

「をまへ、お米を出さんかい。何を愚圖々々して居るので？もう泣くのを止めて竈の下でも造ろはんかい。と云つて居る。

危機が迫つたと新見は内へ這入つて、

「おばさん、實はね、私はお子供さんの代りに云ひ譯けを致そうと思つて參つたので御座りますがね。……」と云ひ終らぬ中に、

「え、うちの子供がまた何か惡い事でも致ましたので御座りますか知らん？　うちの子は仕方の無い惡い子で御座りますのでない。惡いことでも致しましたら御免なしてよ。」と早口に云つて、榮一には別に頓着しない樣な、また尊敬も拂は無い樣子である。

「早く竈の下でも見んかい。」と一つ頭を撲つて米の包みを取り上げる。之を見て榮一は、

「その包を私に貸してくださりませんか、その米代は別に進上げますから」と申出た。然し女は、

「どう致しましたんぞいない？」と云ひ乍ら竈の火の明かりで米を調べて居る。石や砂の混じて居るのを別に不思議とも思はて居ない樣だ。が、米を棚に置いてつか／＼と小供の側へ來てまた頭を一つ擲つた。小供は泣き叫んだ。女は、

「早くあしこを見んかい。」と大きな聲で叱り付けて、「お父様。米が砂や石と一緒に混ぜつて今夜は食べられでよ」と隅へ向いて云つて居る。すると隅から、

「お客様。どうぞ、ちつとおかけなして。誠に鬱陶敷しう御座いますが」と一寸と蒲團の中から首つき出して新見に會釋をする。

新見は吃驚した。此家は三疊敷一間に、一坪の土間と云ふ作りだから二人の外に人が居れば必ず目につく筈だ。實云へば這入つて來た時小供があまりお父様お父様と云つたに、男の親の樣な者も見えぬ。唯隅に朝起きたまゝ卷いて捨てゝあるのだなと思ふた蒲團が置いてあると思つた。が、聲があつて初めて氣が付いた、此蒲團が父親なのだ。髮は長く生へ延びて青い顔色唇の艶の無いのが、心持ちが惡い。榮一は入口の柱に片手をかけて左の足駄の爪先を立てながら、

「へ、有難たう御座ります。御病氣でいらしやいますか？」と優しく尋ねた。父親は竈の下の燃ゆるのを見詰めて、また榮一

の顔を見送つて、
「はい・いや別に之れと云ふ病氣では無いので御座りますが三月まで鐵道の方に出て居りましたので御座りましたが三月の初めに鴨島で足を汽車に轢かれまして、エヘヘ‥‥一生立ち上る見込が無くなりまして、それからぶら〳〵して居るので御座ります‥‥ちつとどうぞおかけなして。」

女が竈の前へ踞んだので父親の顔は見え無くなつた。子供は矢張りうつ向になつて顔を見せ無い。

「そうで御座りますか？　そらどうも誠にお氣の毒で御座ります。」女はふりむいて榮一の顔を見て、

「ほんまに、お客様、もうつく〴〵、生きて居るのがいやになりましたわ。宿があんなに怪我しましても鐵道の方からは二十圓の御見舞金で見放されますしない。それかと云つて便つて行く所は御座いませず。私が朝早うから晩の遲うまで機屋の管卷きを致しまして今日の細い烟を立てゝ居りますが女一匹ではどんな事が御座りましても二人の男を食はす事は出來まへんはなもし。今夜はあれが久し振りにお米の御前が喫べたいと申しますので五等米を五合計り買ひに遣りますと、此通りでない。」と恨めし相な口吻が如何にも哀れである。

「それはね、おばさん、私が見て居りますと、お内のお子さんが明口にして、歸つて來るのを何處の子か知りませんが後からつき飛ばしてね。この子さんが倒れて通りに米をこぼしなしたのですよ。お子さんの惡いのでは無いのです。‥‥」

「そうで御座りますか――それにまああなた様はどちらのお方か存じませんが御親切に云ひ解けに御出で下さりましたので御座りますか？　誠にお禮の申し樣も御座りません。いやうちの子も惡い子で御座りますので誠にどむなりまへんので御座ります。學校へ行けと云つても行きませぬ位いの兒で御座りますから、もう親も手にあまして居るので御座ります。」

「どうして學校がお嫌ひなのです？」

「いやなんで御座りますの――三月の節句の翌日で御座りますの、私が今日は食ふものが無いから何處へでも出て行つて、何でも貰つて來て食ふて呉れとよく聞かせて外へ出しました處がもし、晝頃になりまして泣く泣く歸つて來て頭痛がすると云つて臥込んでしまひまして、その翌日が丁度學校へ上る日で御座りましたが、もう行くのはいやと申しまして參りまへんのですわ‥‥父親が字は一字も讀めぬので今日困つて居りますので、せめては尋常だけでも卒業させてやりたいと申しまして、食ふに

食へぬ中から尋常の三年生まで出しましたんで御座りますが：：いやどうも貧乏すると子供までが自由になりませいでない。』

女はこゝまで語つてあまり烟るので火吹竹を取つて口を嗽ふた。榮一は大抵女の云ふ事で小供の告白が讀めた。がこの人々に何をして遣るかと云ふ方法を知ら無かつた。

『三年生までいらしやつたのですか？』

『續けて行つて居りましたら今は四年生で御座ります。四年生に及第つてすぐ止めましたので——一年は子守に遣つて御座りましたから遲れましたんで。』

榮一の心は二つに分裂した。一方は無理矢理に此那うるさい所で博愛主義などの眞似をしなくて早く逃げて歸つて、あの立派な蔭の敷けて居る父の中で哲學の一頁でも讀め、君は此那ものに手を出して居ては遂に平凡と相去る一歩だと云ふ聲がすると共にまた他方では親切は生命だ。有機體の社會で或ものが生きる爲めには或るものが犧牲にならなければならないと云ふ聲がするのである。

『失禮で御座りますが、あなたさんのお内は何處だんで？』と女は尋ねて居る。

『いや何處つて：：：此處からは遠くはないのですが——あのお小供さんは今何をして居らしやいますか？』

『今之れと云つて何もさして居りませんが父親の使をしたり、私の糸繰る手傳をしたりさしてをります。稲島橋を向へ渡りますと散髮屋が御座りますわない。あしこに丁稚に來て與れんかと云ひますので、やらうかとも思つて居りますがない。ものになるまで辛抱が出來るかとも思つて心配して居ります：：：どうぞ、そんなにおたちなさらずに、ちつとお掛けなして。』と云ひながら一寸と蓋を上げて麥が湧いて來たのを見て居る。そして隅の手桶を取つて門口の方に出かけた。水を汲みに行くのであらう。

新見もあまりこんな陰氣な所に居りたく無いと思つたらしい。』

『散髮屋ですか？　そらおよろしう御座りましよう：：：私はもう失禮致します外に用事も御座りますので——これで失禮致します。どうぞ私の歸つた後でお小供さんをお叱りにならぬ樣にお願ひ申しやす。』と云つた。別に米代を渡そうとも爲なかつた。

『どうも有難たう御座りました、またちつとお話にお出でなしてくださりませ、むさくろしい處では御座りますが。』と女は戸の外に立つて云ふた。榮一は病んで居る男に向つて、

『さようなら、お身體をお大事にと云つて見た。然し心の中では無意味な偽善を云ふと笑つて居た。

『どうも御親切に。さよなら誠に鬱陶敷う御座りますが時々お話に。』

『有難たう。また伺ひます』と答へた。

然し心の中で、新見は、貧民を愛しないのではない、此那處ばかり見て居ると人間が縮み込んで終ふと思つた。

榮一は夢の樣な思をして暗い路次を出た。城山に赤い光の天氣豫報が上つて居た。福島本町の角で小僧の吉三郎に會つて一緒に歸つた。

然し吉三郎と、何の話もしなかつた。

夕飯をすまして、約束があつたから、鶴子樣を訪れた。

十二

新見は今自分の宅の門の前に靜に立つて居る。今夜も外出時間に遲れたのだ。先きからいくら叩いても開けて呉れないので稍退屈して居る。

一寸と通りに出てみたが、德島本町は皆よく寢て居る。それも其筈、もう十二時少し廻つて居るのだ。今までに三度遲れた二日前の日曜の晩、教會へ出席した爲めに吉三郎が火の用心の拍子木をたゝいて屋敷をぐるりと廻つて了度門を閉じると云ふ所へ返つて來たと、先きの土曜の晩遲れたのと、今夜とで三度である。

今夜は遲くなる理由がある。榮一は鶴子を訪れて遲くなつたそれも日曜の晩、教會から歸りに、鶴子の兄樣の時行さんが歸つて來て居るから、是非とも此二三日の中に一度遊びに來て呉れと云はれたからだ。

新見は空を仰いで見たが星が眠む相に光つて居る。實は自分が眠いからである。榮一は父が九時限り門の戸は一切開かぬぞと云つた事を覺えて居る。それに今夜は父も東京から歸つて居る事だから實際遠慮して激しくは叩かぬ。亦吉三郎の安眠を破るのを非常に氣の毒に思つたから、十一時頃鶴子の宅から歸つて來たが遠慮して叩きもせず、一時間程助任橋の方まで散歩して來たのだ。いや實は自らに刑罰として、——四五里ある處を往復しうと思つて出かけたが、途中疲れて來たのと、明日學校に出て生徒に眠む相な顔を見せたくない、生徒に讀み方を教へなくても、實は眼を開いて居るものだ位いの事は教へねばならぬと思ひ付いたから、吉三郎には氣の毒ではあるが、再び戸を

叩きに歸つた。眠らねばならぬと思ふと實にねむい。星までが[illegible]居る。眠むい様に見える。

榮一はも一度叩いてみようと門の戸近く寄つたが拳を握つて戸を叩く段になると、叩く一つびとつが皆父の胸に釘を打つ様に感ぜられる。また隨つて父の怒が自分に報ゐてくると思ふから我が吾身を礫殺する様な者であると考ると、敷石を下駄で蹈むのも恐ろしくなつて郵便受の下で暫し蹲んで思ひに沈んだ。

『何故僕はいつも乍ら、眞の父を此様に遠慮しなければならないであらうか？　何故自分は家の外の冷かな空氣に觸れて門の横に蹲らなくちやならないのであらうか？　自分は全く父の親切を要求する權利が無いのであらうか？……けれども鶴子の可愛い今夜の應接振り！　兄様は撫養から歸つて來る筈で遂に歸ら無かつたが僕は却て滿足した。老爺さんと老婆さんが寢てから後僕が鶴子様の書齋に導かれた時！　僕は頷いた。僕は近頃の女學生の氣質と云ふものを知つて居る。が鶴子に於ては決して……いや、僕が若し鶴子様を愛すると云ふ段になると、たとへ輕躁な女學生でも厭ひはせぬ……が鶴子には境遇上凡て輕躁な點は除き去られて居る。鶴子様は嫋々しい亜米利加美人だが莊重な處は確かにゴシックだ。佛蘭西タイプと型を異にして然し二人が机の前で西洋歴史の話をして居る中に自然と手を握り合つたには自分ながら驚いたよ。いやうれしかつた。鶴子様が過去を語り出て、二人とも泣いたが、自分の膝の上に泣き倒れられたにはし恥くもうれしいかつた。

實に鶴子様の悲しむのも尤もだ。義理の老爺さんやお婆さんの下で下女働きは苦しい。女の狹い胸ではそれに違ひはない。尤もお父様やお母様が、あの様な最後を遂げなさらなかつたなら鶴子様も他人に一歩は措かないであらうが、何れ、お友達と身の上話が出ても襃ひ上つて立ち退くのであらう。僕だつて妾の子だと云はれるのは決して善い心持はしないもの。……

鶴子様はクリスチヤンになつて朋友が減つたが教會の親切な奥様方のお仲間入りが出來て決して淋しくは無いと云つて居られたが、あれは祝賀すべき事だ。僕は奥様と名が付く人は離れても好きだ。奥様の仲間入りをして居る鶴子はそれだからすきだ。日本では妻君は下女か子を産む機械か判然せぬが、女が多勢の子を持つて泣いて居るのは決して憎い者では無い。苦痛美と勢力美の交つた可愛い者だ。

僕は鶴子を愛したい。愛する。全身を献げて愛する。……然

し何と無意味な事だ、僕は人生の意義を知ら無くて戀をして居た、ねえ！る。無目的の人間が？ 人間の歴史を進化さす爲めに？ 無意味な進化論！ 我輩の生活に何處に進化がある？……チヤンス！……噫。人間にはチヤンスも運命も進化と云ふ權威も無い。……唯人間は冷い海の中に沈んで行くのだ。鶴子を戀するのも沈みの一尺にしか過ぎぬ。無目的と云へば無目的だ。無目的でなくて、盲目的なのだ。そうかと云つて、無目的だから死ぬか戀するかと問はれると、勿論生きて鶴子と一日の苦痛を共にしたい。然し我輩に戀人と快樂を共にせよなど云ふ事は無意味だ戀人と泣くのだ。そして最後は心中！ 戀はそれで遂げる。然し一躰戀とは、何だ？……

でも、今夜の樣に突然戀が成立すると、セキスピアの十二夜物語の樣で何だか馬鹿々々しい。一躰戀と云ふものはあんなものであらうか？ 然し鶴子が僕を生捕つて終つたのだ。我輩の意志で、どうすることも出來ない。實云へば僕もあの樣な美しい戀人を持つとは思は無かつた……然し戀と云ふのは何だか馬鹿らしい者だね。僕は〇〇の〇〇か〇〇かの快樂の爲めに長い戀と云ふ馬場を馳つて居るのでは無いのか？ 神聖な戀？ 莫迦々々しい。まるで浄瑠璃の文句を夢の中で讀む樣だ。つまら

嗚呼もう飽いた。戀に飽いた。我輩の戀はこれだけの觀念で上等だ。もう觀念もいやだ。快樂は一瞬だ。戀は苦痛だ。醒めた後が苦しい。戀はいやだ、頭痛がする。女を愛すると云ふのも要するに苦しい快樂を貪るにしか過ぎぬ。人間が子を産む爲めに妻君を？ 無意味だ！ 誰だ子を産む爲めに子を産む。唯抱いて寢る爲めに抱いて寢るのだ。安眠が出來るなら、美人などいらぬのだ。佛陀！ 小乘的思想！ 衆生寂滅。諸事涅槃！僕は大海の一波にしか過ぎぬ。早く冷かな、沈んだ黒青い海の底に落ちて行きたい。人間！ 面倒臭い。え。え。フム。チエ舌を嚙み切つて死んで了ひたいな。生きて居ると貴族主義の臭がする。僕は香水の匂ひは嫌ひだ、社會主義だもの。涅槃と死！ 社會主義は此時だけに………』……榮一は立ち上つた。屋根の瓦も落ちよと云ふ程猛烈に檜の柾板の立派な戸を拳かためて撲り上げた。

然し何の反應も無い。世は矢張り寢つて居る。死者も別に墓の中から飛び立つて來無い。世界は逆に睡から睡りに移つて居る樣だ。だから、も一つと今一層烈しくやつた。が矢張り答は無い。天を見ると星が澁い顔して居る。向への軒から雀が一羽

また一羽。飛び立つて五軒目の軒に隠れた。

『父を起さずに雀を起した。罪が深い。然し資本家が猶罪が深い。扨と云ひ門と云ふものを造らへて、自由勝手に人間が出入出來ぬ様に屋敷を構えて威張るから罪が深いのだ。耶蘇の坊主も隨分罪深い。キリストにあるものは悦ぶべしだと吐かして、べらんめえ、現世主義の、貴族主義の、個人私有財産主義の、泥棒主義のゴリ〳〵で固め上げた遺傳宗教で滿足しやがつて、神の國が來るものか……僕はもう煩悶に堪えぬ。釋迦――涅槃――然――涙が氷る。が、死ぬには勇氣がありすぎる。覺えて居ろ！　仁王立が？　獅々吼？　さア、これから……今から、革命だ。我に自由を與へよ。然らずは永遠の生命を保證せよ。然らずは死！悶への涙が知らず、識らず流れる。人は知るまいが宇宙は我胸に革命を起して居る。ア、僕が此處に踞つて居る間に福島濱側の貧民窟には神を呪つて居るものがあるのだ。苦しい生命。之れでも矢張り生きたいのだ。……　柔順と稱せられた僕が之れから天の星を降らせ、海原を乾發にする權威があるのだ。何も遠慮して此邪處で愚圖々々する義務も無い。善より惡が賢こい事が多い。戸を叩くべしだ。革命の鐘だ。革命も佛教的革命だ……佛教の長所は小乗的○○にあるのだ。なめくじの様な大乗は雨に解けて終ふ。と云つても、釋迦は革命の失敗者だ。現世に火をつけずに彼世に火をつけた。婆羅門迷妄は善かつたが印度列國の存在を○○しなかつたのは大馬鹿だ。日本の坊主に至つては猶以つて馬鹿だ。大乗教！　法身佛！　國教！　本願寺！　馬鹿にも程がある。佛が折角人生は盲目的××の連鎖で遂に涅槃に達すべき事を說いたに今は政府の餘唾を拭いて居る。故に我輩は之れから佛者的大革命を始めるのだ。此革命に凡俗は參與する權威が無い。然し靈界には感應がある。必ず果が結ぶ。此小さい徳島の市に僕が生きて居ることを知る人は多くあるまい。けれども誰れがナザレにエスありと知つて居た？　○○！』

榮一は苦しい謀反氣を起して全身を震はした。身震ひしながら拳では思ひ切つた音が出ぬから右の下駄を採り上げて振り上げた。

玄關の戸がガラ〳〵と開いた。榮一は誰れが開いて呉れるかと待つて居たが、父が手燭を持つて戸を開いた。父は榮一が門へ這入るや、額をつくづく見て居た。が、默つて急に拳を固めて榮一の左の頬を擲つた。

榮一は涙に咽せんで自分の室に閉じ籠つた。

僕は机に倚りかゝつて忙然唯泣いてみた。泣くと大分氣が鎭まる。暫くしてかうして居てもつまらぬと思つたか涙を拭いて頭を上げると、壁に懸つて居るカーライルの半身像が横に向いて澁面して居る。

榮一はサータス、レザルタスを思つて、ゲーテ式失戀派哲學者の意味は虚弱だと思は無いでは無いが、自己の悲哀な運命と資本家社會の地獄を泣かざるを得ない。そして自分も一歩一歩「永劫の虚空」を自己の胸に掘つて居ると考へあたらざるを得なかつた。

「嗚。永劫の虚空！　何が榮一の虚空を充し得るのだ。僕は影の様なものだ。そうだ苦しい夢を見て居るのだ。生命と見えるのは僕の夢だ。

面倒臭い。父が養子に新見家へ來ながら、本妻を置いて僕の母を妾に置いた。母が死ぬとお梅を入れる。人生は中々急しいその間に父は代議士になつたり、貴族院書記官になつたり、今度は代議士を止めて市長。市長になつても急しい。家は新築しなくちやならぬ。賄賂は取らなくてはならぬ。お梅の機嫌は取ら無くてはならぬ。その間に徳島鐵道の取締もしなくちやならぬ。その取締をしても急しい。折々工夫が負傷する様な事が起る、……あの徳島本町の哀れな工夫の家庭！　取締役の父がもう少し省る所があればあんな家庭の慘事も起らぬに。僕が父のかわりに人を可愛がらうか？　いや。自分の生命の所置にさへ困るに貧民に世話まで出來ようか？　此刹那！　自分の身體は唯燃えて居る。此一瞬間でもよい酒にでも醉つ拂つて此苦痛を脱れたい。熱烈に女でも捕へて死ぬ様なキッスがしたい。ア、此一瞬！　此刹那！　夢！　夢！　影！　影！　空！

思ひつまつて世界を盲目と觀じ自分を虚空と觀ずると一種の法悅からくる微笑の催しがある。沼に白い蓮が咲いて居る。……と云つて、之もつまらぬ厭な生命の一部分だ……實際は謎の様な噓だ……未だ鶴子が戀しい。戀しい？　よ――し！　現實を捕へて戀と云ふ一瞬の夢に隠れよう。一瞬の快樂で足る！消えるなら消す。亡びるなら亡びる。打衝る處で打衝つて破滅する時に破滅する。ア、、自殺がしたい。二度も三度も自殺がしたい。

然し鶴子、鶴子、君は僕を神秘に隠してくれるか？　兎に角僕を愛して呉れるか？　君は可愛い。美しい。奇麗だ。そして僕の者になれば僕が救はれる、靈も肉も。榮一を愛し給へ君、君僕は今少しの間氣狂ひだが、君が僕を愛して呉れないと全くの氣狂ひになつて終ふよ。僕は滿足する、滿足する、君の爲め

に氣狂ひになるなら。どうせ世界は氣が狂るつて居るのだから君の爲めに氣狂ひになるなら氣狂ひの中でも高尙な方だよ。戀。僕は遂に戀に囚れた。そして囚れた事に贊成する。戀は狂氣たるを要する。贊成、鶴子を得る爲めに狂氣とならう。オ、うれし・・・・涅槃がある。女は神だ。・・・・父のプルタル、フォース！牛獸主義贊成！やつつけるじや僕も。然し父が僕をあの樣に打つとは？もう云はぬ。僕はもう云はぬ。唯戀を與へよ。然し疲れた・・・・。

又疲勞は榮一を夢の夢に誘つた。机の下に足を入れて仰向きになつて少しの間眩(まどろ)んだ。が、キー、キーと云ふ音に驚いて目醒めると、室の入口に、またお梅が立つて居る。

見付けられちやつたと今更の樣に心臟いだが、仕方もなし、頭たれて机に倚つた。

『お休みなさい——お父樣がお休みつて、榮一さん。』とお梅は齒の根にしみる樣に云ふ。

『有難とう御座ります。』と榮一は柔和に答へて、二階から降りることに決心した。

『が、どう考へて見ても、生命は眞面目の樣で眞面目で無い。僕が之れから寢る？　つまらねえや！　寢る？　馬鹿にしていら！　醒めて狂ふものを暗い床の中に突き込んで、僕の自覺と生命を數時間なりとも奪ふと云ふのか？　僞だ！』と榮一は立ち上つて二階を降りかけた。

『榮一さん、まだ二階の戸が閉つて居ますまい。』

『しまつた。』榮一は再び室に立ち歸つて戸を閉ち始めたが、乾の方の鶴子の室はまだぼ、つと明るい。影は鶴子であらう。『此那に遲くまで鶴子は何をして居るのだらう」と思つたが、こちらの戸を閉てる音に鶴子も障子開いて閉て始める。

此一瞬、榮一は滿足した。閉(た)て終つて玄關に降りた。榮一は全く氣狂ひたる事を自任した。『少しの間、他人に見られない樣に氣狂ひになるのだ』と玄關の押入から蒲團を出さうとしたが、『どうせ、氣狂ひだ。どうせ、父やお梅からはいちめられるのだ。父やお梅が寢て居る間だけでも手足を延ばそう。今夜は寢ずに居てやらう。今夜どころか、死ぬまで起きていてやらう。死ぬまで？　いや我輩は死なぬ。』とかう考へ乍ら其處で身を倒した。暫らくの間、暗い暗い押入の中で禪(ぜん)の眞似をした。

『禪の眞似？　之もつまらぬ。疲れる計りだ。明日の敎授が面白くなからう。兎に角寢る事にしよう。そして小さい薄い夢でも見よう。もう仲の間に移る必要も無い。此處で寢よう。』

と吉三郎の横に床を延べて寢卷きも着かへず、そのまゝ床の中へ這入つた。床は矢張り心地が善い。『これなら一層寢卷きに着かへて』と、も一度起きて寢卷きに着替へた。榮一は考へた

『寢床だけには敵が居らぬ。——嫌(いや)な睡は最後の救じや。・・・・ア、、女よりか寢る方がよい・・・・』と。（續く）



生命の藝術

與謝野晶子

○

私は次第に順當に導かれた。藝術に由つて人間へ導かれた。

○

藝術ほど個性の爆發を唯一の條件としなければならないものは無い。創造の自由を文字通りに實現しなければならないものは無い。

○

藝術は描く人の魂の奥にある。描かれる物の中には無い。

○

藝術は、どうしてもじつとして居られない内部衝動に乘つて出て來る。出て來なければならない。春風が吹き、日光が射し、木や草の芽が香ると、鹿の子が木蔭から踊り出さずには居られないやうな必然の力を以て、魂の奥から押し出し、噴き出し、爆ぜ出して來るもので無ければならない。

○

求める所は、唯だむき出しの魂。唯だ魂の端的の表現。生命の純粹の聲。

○

藝術は偶然と見えるばかりに必然でありたい。大無意識と見えるばかりに大有意識でありたい。超個人的と見えるばかりに徹底個人的でありたい。

○

藝術の題目は他奇を要しない。ミレエの農夫、ムニエの勞働者、ゴウガンのタヒチの蠻婦で十分である。外形はどんなに古いものでも、歪んだものでも、凡庸なものでも、醜いものでも、それに藝術家の愛の率直な感動があれば、屹度その製作は海の

やうな力を以て人に迫る。

○

生命の奥から來た藝術なら、人は之を讀んで、低い、狹い、小い自我を忘れて、高い、廣い、大きい自我に目醒めるであらう。

○

皮相の藝術は人と人との皮相の一致しか無いが、生命の藝術には、そこに人と人との深い深い内的一致がある。人を單に恍惚の中に陶醉させるばかりで無くて、大歡喜の中に睿智化させる。

○

藝術は自己の群像である。一にも自己、二にも自己、三にも自己。絶對に自己。

○

藝術家が自然の中に居るので無い、自然が藝術家の中に居るのである。自然はすべて藝術家の中に落ちて來る。藝術家はその自然を紡ぐ。藝術は自然の醇化である。

○

好新欲、驚異欲、好奇欲、涕泣欲、哄笑欲を滿足せしめる程度の藝術は、藝術の最高標準から遙かに遠い。

○

それにも滿足しない、これにも滿足しない。人は誰も期せずして最高の生命を讀みたがつて居るのである。

○

人は唯だ一種の藝術に滿足して居られる者で無い。人間性の全音階を聽きたいからである。何と云ふ絶大な貪欲であらう。

○

客觀的の調和不調和をあらかじめ氣にしない藝術、出來ばえにあらかじめ期待を掛けない藝術、成心を超えた藝術――要するに唯だ主觀的眞實の生一本の表現。これほど必然の、さうして絶對の調和があらうか。

○

藝術の上の世俗的の調和はすべて眞實が窒息して居る。世俗的の不協音と見えるものゝ中に往々純眞の藝術が大きな叫びを揚げて居る。

○

元始的人間の踊には統一は無かつたであらう。唯だ已むに已まれない衝動の噴火の自然の流れがあつたゞけであらう。藝術

は常に其處まで歸つて健康を新たにせねばならない。さうして、再び新しい統一へと進み、それがオペラにまで精錬されたら、また直ちに打崩して自然に歸るが好い。

○

藝術は自己に終始する。この國の古には「天に父母無し」と云ひ放たれた天子（一條帝）がある。この大膽な聲明は藝術にも通じる。

○

生命の藝術を心掛ける者は、機械的、事務的、賃銀勞働的氣分の製作に反對する。かくてこそ藝術は新しい。かくてこそ眞實がある。かくてこそ藝術は歷史主義、典型主義から超えることが出來る。

○

資本主義的經濟制度の中にある現代の藝術家は、餘儀なくして賃銀勞働的氣分の製作に從はしめられる場合が多い。悲しいことである。また之がために、現代の藝術家がはげしい良心の呵責に苦しめられ通しであることも事實である。悲しいことである。

○

藝術は、自然または人生の個々の相をその姿とする。之を見て、藝術は再現であるとするなら、最も近い必要なものを見ないで、遙かに掛け離れた非實際的な幻影を見て居るのである。

藝術は、作家の生命をその生命とする。姿とは、その生命の象徵に外ならない。

○

ミケル・アンゼロも、ラフワエルも、ロダンも、神や人體を假りて、彼等自身の生命を象徵した。藝術家の恐れるのは瀆神で無くて、自己の冒瀆である。人間の魂の萎縮である。

○

藝術の或物は、たとひ昔からの外面的な形式を保存して居ても、その表現した精神は形式を征服して、その上に歸つて居る。藝術は必ずしも自由詩や未來派の行き方の中ばかりにあるので無い。短歌の中にもある。俳句の中にもある。小唄の中にもある。

○

片腕は缺けて居ても、ミロのヹニュスは完像であり、巨像である。

藝術の製作に從ふ私達は、せめて血のある生命の斷片だけでも表現したい。

○

私は巴里でロダンの製作に驚いたあとで、ダン・ドンゲンの製作をも鑑賞することが出來た。それが生命から出て、生命に觸れる藝術であるなら、それを受け入れて共鳴する幾つもの「吾」が自分の中にある。純眞の藝術の上に「天に二日無し主義」は行はれない。

○

創作力の旺盛な、油の乘つた藝術家は、他人の意見や批評を聞く必要はない。さう云ふものに耳を假すことは、多く自己に不忠實な結果になる。思はず知らず側見をして、氣を散らすからである。若しも誤つて他人の意見が混りでもしたら、それこそ一大事、その藝術は不能なものになる。

○

藝術は誰が何と云はうとも、作家自身の良心に省みて不純の疚しさの無いものでなければならない。

○

藝術家が批評家の言葉に注意を拂ふのは、その藝術がまだ未熟で、模倣的で、自信の乏しい時か、さも無くば、爛熟して、少し疲れて、少しぼけ出したと云ふ不安を感じかけた時かのことである。

○

藝術に生きる者に神は用は無い。人間性の可現的な未來の存在――無限に動きながら發達して行く存在――の象徵を藝術に由つて讀むからである。人間性の無限に亘る有形的存在の鍵、たとへば巴里のパンテオンの前にあるロダンの「考へる人」は、永久に存在して、痩せず、死なず、理想の追求の苦痛の中に、沈思しながら、發達に發達を重ねて行く人間の魂の具體化である。

○

藝術は豫言する。紫式部は御堂關白の榮華の絶頂を見ないで若死をし、井原西鶴は元祿六年にもう故人であつた。しかも平安朝の文化は紫式部の暗示に由つて增大し、元祿寬永の文化は西鶴の刺激に由つて沸騰した。

○

藝術家は現實的利害の中に居ながら、民衆に先んじて現實から突出しようと努力する。從つて未來の生活の理想を發見することに敏感であり、正確である。人生が藝術に先導されねばな

らない理由は此處にある。また新しい偉大な藝術を持たない國民が、いつも其れを持つて居る國民との行進から落伍する理由も此處にある。

○

私は望む。詩歌、舞踊、音樂、彫刻、建築、繪畫さうして學問科學が渾一體となつて中核を形成し、それの自動につれて政治問題も、社會問題も、經濟問題も廻轉する人生であつて欲しい。

○

博愛平等の感情、世界聯帶の精神、創造進化の理想、況勞働主義の組織に由つて統一された文化生活の完全な象徴は、それを藝術に求めずして何處に得られやう。藝術だけが、ひとり能く、專制主義、功利主義、常識主義、形式主義、物質主義、妥協主義の迷妄と因習とから超越して居る。

○

因習に從ふことは無事である。さうして社會からは善として推賞される。生命の藝術は冒險である。さうして社會からは悪として峻拒される。併しながら、無事と冒險と何れが生甲斐があつて、何れが人生の目的にふさはしいかは言ふまでも無い。無事は自己を殺すものである。

○

我國に於て、これは近頃何の兆であらう。先づ教育界に於て**藝術主義が唱へられ、次いで今は、勞働の藝術化が唱へられる**やうになつた。

○

藝術家は自己の泉を穿つことに苦まねばならない。樂々と出て來る水は、大抵早く他人の掘つて置いた井戸である。藝術は、親がためて置いた財産を子供が引出して遣ふやうなものであつてはならない。みづから全身に汗して作り出すべきものである。過去より脫れよ。藝術家は常に一作をなす度に處女作家たるべく、決して摸造品の職人であつてはならない。

○

生命の藝術は生命を裸體にした藝術である。美はこの一點に集つて輝く。

○

私の藝術はまだ極めて小さい。併しながら照準は此處に定つた。私は謙遜と敬虔と歡喜とを以て敢てこの一大難事に當らう。

○

人間は曾て神々からその翼を取り下ろした。さうして今、人間自身に翼を附けることは人間の自由である。



大人は何だつて働くのだらう？

生方敏郎

○

正月が來ればお互にお目出度ふと云ひ、そして又實際にお目出度がる、緣起の惡い事はなるべく打ち消して、目出度い意味にとらうとする、正月でなく平常の時でも何事も目出度い意味に解釋しやうと勉める人が甚だ多い、支那人の家屋に「福」と云ふ字を書いた赤い紙が彼處にも此處にもべた〳〵貼りつけてあるが、あれも多分其麼意味からだらう。「四」の字が「死」の字に音が通ふ爲めに四の字を云ふ事を甚だしく避ける隱居の話が落語などにあるが、實際あのやうな人を私は是れまで幾人も見た。芝の神明前を「よばのよんめいまえ」と云ふやうなものだ。

私の知つて居る或る大きな新聞社では、其の電話番號に四の字と七の字のつくのを甚だしく避けて、其の爲めに折角揃つて居る番號を態々飛ばせて居る所さへある。況して無智無敎育な人々の社會に、如何に緣起と云ふ事が考へられて居るかは、略々想像がつく事だらう。

私の鄕里からほど遠からぬ澁川と云ふ町の可成り富んだ家で恰度元日の朝、何うしたはづみか女中が土瓶を破つてしまつた、主人の落膽は一通りではない。屹度今年は何か惡い事があるにちがいないと、すつかり鬱ぎ込んでしまつて、雜煮の膳に對つたが箸をとる元氣すらない。處が、その家のお婆さんが中々奇智頓才ある人であつたので、直ちに筆をとり、

元日やどいんとひいんとがかけをちて

吾が手に延る金のつるかな

とやつたので、主人も始めて安心し、家内に大きな笑聲が起つたと云ふ。

是れは眞實（ほんとう）に有つた話で、子供の時分、母が私に話したのだ。其の頃は、蜀山人の影響で私の國なぞでは、大分狂歌の流行つて居た時代だ。

なるほど、他人の事ならば、其麼場合に滑稽な狂歌をも詠み出す事が比較的困難ではないかも知れない、然し事が自分の家庭の上にかゝつて居る、其ふ云ふ場合にはよほど平常心の鍛錬の出來た人でなければ、落ちついて滑稽な狂歌を詠み出すと云ふ事は出來ない。此のお婆さんは人物が中々偉く出來て居たにちがひない。目出度い狂歌を詠まないでも、禍を轉じて福となすだけの力を持つて居た人だつたにちがひない。

お役所などで辨當を食べ乍らならば、駄洒落は幾らでも出る。其れは英雄豪傑を要するまでもなく、腰辨先生に依つて盛んに連發される。けれども一旦自分の身の上に災難を豫想すべき雲がかゝつて來た時に、其下で尚ほ平然と洒落を云ひ、滑稽を吐くと云ふ事は、平常心の修養を積んだものでなければ難か

しい。

なるほど、人間は生きて居る限りは長生きもしたいし、富貴榮達はもとよりいやなものではない。其れ等のものを求めるからこそ縁起のいゝ事を望むのだ。時には其れを望むの極、縁起のいゝ方へこぢ付けるのだ、そして目出度くもないのにお目出度ふと云ふ。

昔の正月は農家なぞでは、一年の仕事が悉く終つて外では仕事は出來ないし、先づ一休みと云ふ處だから、其の間に餅を搗いて食べたり、麹臭い手製の酒を飮んだり、圍爐裡を取り卷いて無駄話に耽る必要がある。だからお正月はいゝものだつたらう。

けれども、太陽曆の一月は未だ春の氣分は動いて居ない。殊に東京などでは風が寒く吹き荒び、空の色も鉛色になつたり黄色くなつたり、何となく鬱陶だし、風が吹けば埃がひどく、雨が降ればいつまでも道の泥濘が涸かず、晴れゝば空氣が燥いて咽が痛く、外へ出て遊ぶにも面白くなければ、家に居ても晴々しない。そして仕事は忙しい、正月のある爲めに客も多く、自分も外を出歩かねばならず、厄介な年始狀を交換したり、無駄な仕事が、いやが上に嵩む。農家の如うに、自分の穀倉から持ち出して餅を搗かせる米があるではなし、不景氣極まつた話

だ。其れが何でお目出度いんだらう。本音を吹けばお目出度くない事この上なしだ。

そればかりではない、人間は一年一年齢をとるのだ。而して齢をとると云ふ事は、死ぬよりも惨めな事だ。勇氣は衰へ水氣（みづけ）は無くなり、食慾は減り、愚痴は増へる、よく喜の字の祝とか八十の賀だとか云つて騒ぐが、あんな事は一種のお葬ひのやうなものだ。人間が蝶の如うに、毛蟲と蛹の時代を經て、晩年に羽化して登仙するものならば八十の賀も目出度いだらう。しかし水氣（みづけ）がなくなり愚痴が増へ偶々口を出せば老人の冷水（としよりのひやみづ）として嘲られるのでは、例へ從一位公爵大勳位となつたところで、その目出度さは乞食の兒にも及ばない。例へ乞食の兒でも、少年の頰には紅が宿つて居るのだ、君に勸む金鏤の衣を惜む勿れ、須く少年の春を惜むべし、と云ふのは其處だ。

だから實を云へば、正月は少しもお目出度いものではないのだ。其の信なるは私が此處に取り立てゝ云ふまでもなく、たれでも知つて居る事だ。然し、其れを敢て目出度いと云ふのは、恰度醉拂ひが俺は醉つては居ないぞと云ひ度がるのと同樣だ。酒呑みには、何人（たれ）しも醉へば醉ふほど醉拂ひ扱ひされるのを嫌やがる。

「君は醉つて居るね」

など云へば、必ず彼は

「大きにお世話だ、お前樣の酒を御馳走になつた譯ではあるまいし」

と喰つて掛る。

つまり醉つて居ればこそ、醉つたと認められるのが嫌やなのだ。目出度くない正月であればこそ、目出度いと云ふ事にして。其の不目出度さを打ち消し、一時の安神が得たいのだ。滑稽ではあるが憐れむべき人心の弱味だ。

本來は空だ、人間本來無一物だ、裸で生れて來て、そして裸で死んでゆく、妻子珍寶及王位、一つとして身に附いては行かないのだ。それを思へば、別に緣起のいゝ事もあるべき筈がなく、又そんなに心配するほど緣起の惡い事がある筈もないのだ。如何に巨萬の富を持つて居たからとて、一生の中に自分の口にはいる食物の量は知れたものだ。着る衣物とても知れたものだ。そして極めて短い夢のやうな一生が忽ち過ぎてしまうのだ。無かつた前の事を思へば別に悲しい事でもなく、さりとて現世の富貴がさう嬉しい事でもない。

深く考へて見れば、まあざつと斯麼ものだ。何事が起つて來たとて、**さう騒ぎ狼狽る事はない。此處に根本的の安心がある。**然し乍ら人間はいつでも其麼偉い覺悟をしては居られないし。又そんな大覺悟の人ばかりでは面白くない、其れでは電車の車掌と喧嘩をするやうな事は絶對にない。東京市民諸君のやうに、一錢の値上の爲めに電車の燒打ちをするやうな活潑な行動がとれなくなる。一錢の錢に迷ふのも人間はお愛嬌でいゝ。さう云ふ心になればこそ人間は笑つたり泣いたりして、知らない間に其の一生を何ふか斯うか送る事が出來るのだ。正月にかこつけて酒を飲むもよし、藝者を揚げて騒ぐのもいゝ。心配したり、お目出度がつたり、それが浮世の面白味だ。

○

私は恰度二十年前に京都へ來た事が有る。今度また來て見ると前に來た時に較べて餘程京都の京都らしい所が減つて居るやうに思はれる。一つは私自身が若い時ほど驚異を持たなくなつた故もあらうが、京都其ものが東京に接近した點も少なくない。所謂文明の風は千年の古都をもだいぶ吹き荒して居る形である。それでも尚ほ寂びた古雅な所がよほど殘つて居る。

前に來た時には、道を歩くと椀冠りと云つて頭髪をお河童にした小僧が風呂敷包を背負つて通るのを非常に多く見掛けた、中には二十歳を越へた椀冠も多く居た。今は其れが全く見られない。前には羽織の丈が非常に短かつた。東京では舞臺の上の外は見られない如うな短い羽織を、或は其れ以上短い羽織を京都の人は着て居たのだ。其麼、旅客の眼につく如うな風俗が餘程減つて居る。束髪と云ふものが都鄙東西を均齊してしまつた。

小學校の教科書、新聞雜誌の文章、それと女の束髪とは日本文明を地均した。然し入毛を態々外へ出して束髪や挑割を結つて得々として街を歩いて居る娘達は京都でなくては見られまい。

恰度二十年ばかり前、上野山下あたりから鐵道馬車に乘つて花見の時など、混み合うと女の髪の臭いのに堪へられなかつた然し今日では、あゝいふ臭ひは東京の女の髪にはなくなつた。此間、北野へ行く電車に乘ると、立派に髪を結つて居る品のいゝ内儀さんの頭髪から私は久し振りで此の臭ひを嗅いで、計らずも二十年前の鐵馬時代を回顧した。

と云ふと何だか京都がひどく遲れて居るやうだけれど必ずしも其ふではないのだ、否な其れどころではない京都は屡々恐ろしく進み過ぎて居る。其の無考へに進み過ぎて居る事が、最も

京都を裏切つて居るものだ、電車も日本一早くから敷かれて居たのだ、疏水工事も随分古い、そして今は電車が加茂川の中を馳つて千鳥を追ひ飛ばしてしまつて居る。

川から西は交通機關も必要なら自由に設けるもよからうが、せめて川の東だけでも昔ながらの美觀を停めて置きたいものだと他人事ながら考へられる。

あの殺風景な東京ですら行々は隅田川の兩岸をリバーサイド、パークにしたいと考へて居る人も多く、或は其麼夢が實現せらるゝかと思ふのに、京都が千年以來の唐金擬坊子の橋をぶち壞してコンクリートの四條の橋を架けたのは、文明の猿眞似のやうな氣がしてならぬ。西洋の物は無論いゝに定まつて居るが、京都で橋を西洋式にするのは日本中で一番後廻しにした方が賢明だと思ふ。

店で賣つて居る品物にも純京都式のものは追々減つて、東京の品物に似て居て其れよりも粗惡な物のみを多く見掛ける。大丸——も疑物やら眞物やら澤山あるが——の品物も矢張り其ふ云ふもので東京式でそして田印だ。客あしらひでも陳列でも三越など見て來た眼では見られない。

新京極は淺草よりも賑かなくらい賑かだが、其れも私が前に來た時の様に木戸口に婆さんが座つて居て「お入りやす、お入りやす」と呼んで居た時のやうな好奇心を喚る何物もなくなつた。東京から來れば只淺草の出店のやうな氣がするだけだ。俗惡なペンキ塗りの繪看板を見るにしのびない。而してその中にはオペラだとか何とか二十一世紀式のハイカラなものが交つてゐる。

清水の陶器は天下に喧傳されて居るものだが、前に來た時とちがひ今度來て何の店を覗いても皆な金ピカなものばかりだ。九谷の出來損ひのやうなもので、眞當の清水燒の面影は夢にも見られない。德利が鶯の啼眞似をしたり、鳩の鳴眞似をしたりするのが珍重されるとやらだ。其麼ものが何處の店にも澤山ある。今にライオンの啼聲だの、河馬の唸聲だのゝする急須などが發賣販布される事だらう。考へても恐ろしい事だ。

○

然し京都を俗惡にするものは、俗惡な觀光の客だ。恰度薩長政府の人々が大江戸の趣味生活を荒したやうに、東夷や大阪成金が京都を荒して俗惡にするのだ。

然し京都には未だ何と云つても他所では見られぬ呑氣な、古雅な所がある。東京では九尺二間の裏店さへ容易に借りる事が

出來ないで借家難の悲痛の聲が高まりつゝある今日、京都の週りには千人も二千人も或はもつと多くの人が泊る事が出來る大伽藍が數へきれぬ程ある。一ツ二ツのお寺を拜觀すれば道を三里も歩いたやうに疲れを覺へる。斯麼に悠りして居るやうに見へる京都でも、矢張り近頃は借家が乏しく地代も場所に依つては千五百圓の高値を唱へ、それが私が來た日の新聞に出て居た。

北白川のやうな郊外の果でも買ほうと云へば三十圓内外と云ふ高値を吹掛けられる。

◯

京都には町の名前に麩屋町と云ふのがあるが實際京都へ來ると金魚と間違へられて居るのではないかと思ふほど、彼方でも此處でも麩を食べさほる。寺でも食べさせる、料理屋でも食べさせる、旅籠屋でも食べさせる、だが其の麩の調理しかたは東京とは違ふ、非常に美味い。其他高野豆腐や油揚などを何處の料理屋でも使ふが、到底東京の人は知らないほどうまい。「だいいち」と云ふ有名なすつぽん料理屋、京で云ふ丸屋では、先づすつぽんを食べた後で其のソップ汁へ四角な大きな麩を入れて煮て、其れで御飯を食べるのが仲々うまい。先づ其麼時にも麩を使ふのだ。東京の人などが見ると、まるでつまらないと思ふものを巧みに料理する。麩を卸金で下して茶碗蒸しの如うなものをこしらへる。其他いもぼうだとかお多福豆だとか、皆な其麼野菜を原料にして其れをうまく食べさせる。例へば鰉のやうな魚を食べさせるにしても又は鮎でも燒魚に酢をつけて出す。お饅頭にしても、蒸したせいろうのまゝポカ／＼湯氣の立つを出す。そして大根卸しを添へて出す。東京では汁粉屋ですらひその外には、美味い漬物すら工夫しない。東京では材料の清新と豐富とを誇る時に京都では料理の親切と雅趣とを見せやうとする。京都の食物も永く食べて居ると營養不良の怖れがあるが、一寸は兎に角感心させられる。其れに器物に注意し、座敷にも注意する。食べてさほどでないものも見た目の感じがいゝので氣持ちがいゝ。何處へ行つて食べても、恰んど懐石料理で從て茶趣味、禪の趣味を基礎としたものだ。うす暗い狹い部屋で多くは茶席がゝつた部屋で食べさせられる。寂とか澁味とか云ふ方へ惑溺して居る嫌ひはあるが、東京の普通の料理屋で見るやうなピカピカした俗悪な趣味はない。從つて女中の黄色い聲を景物にするやうな事は餘りないやうだ。

家の造りなぞも、何處の家もうす暗くて閉口だが入つて見れ

ば中は親切に小器用に出來て居る。東京の大工の多くが穴堀大工、雪隠大工なるに較べて、京都の大工は親切で細かい所がある。

○

東京の趣味は趣味の中心が花柳界であるに對して、京都の趣味の根源は寺である。江戸に起つた歌舞伎の中に吉原の場面が多いやうに、京都で出來た能樂の中には必ず坊さんが出て來る。江戸の錦繪に遊女と役者が出るやうに、京都の繪には寺院が入る。京都の料理屋が茶料理であるばかりでなく京都の寺が各料理屋の代りをもする。精進料理、普茶料理、事務所に申込めば客殿で食べさせて呉れる。紫野の大徳寺で食べさせる大徳寺麩の如きは珍味中の珍味である。牛蒡の油揚や昆布の油揚も食べて見た人でなければ其の美味さは想像はつかない。

○

京都は東京のやうにS、M、U、のメンバーが多くないから、今日でもさまでに生活難の聲を聞かない、寺には相變らず御賽錢が上るし、祇園や先斗町には絃歌の音が湧くやうである。島原の極めて顔のまづい太夫を買ふにさへ、前から申込んで置かねば間に合はぬと云ふ程の景氣だ。然し東京の新聞は此處の宿屋まで勞働問題の叫びを鳴らして來る。日本の勞働者も九時間制が採用されたさうだ、其れに就いて何か意見はないかと東京から書を寄せて愚見を徴された雜誌もある。

勞働時間九時間と云ふ事は企業家に於ては其の少いのが不平であらうし、勞働者の方では九時間でもまだ多いのが不平であらう。違つた立場から考へて居るのだから双方の考が一致する事はある筈がない。

實を云へば、人間は少しも働かないでいゝ暮しをすると云ふのが極めて自然な理想であるのだ。私が親戚の二階を借りて居た時分、其の子供等は私によく馴れて、私もよく彼等の遊び對手となり、暇の時には子供達と半日も一日も遊んだ。彼等を率き連れて植物園へ行つたり動物園へ行つたりした。私の所へ偶々日曜に友達が遊びに來て、長尻をして居ると子供達は僕と遊べぬのを口惜しがつて女中部屋へ締を立てゝ煽ひだり、下駄にお灸を据へたりした。稀には原稿を書くのに忙がしく

『今日は仕事が忙しいから、何處へも伴れて行つてやれないよ』

と云ふと、凸坊は口を尖がらせて

『チエツ、仕事なんかしなくもいゝのに!! 馬鹿だなあ。大

人は何だつて仕事なんかするんだらう」

と叫んだ。

なるほど子供の云ふとほりだ。大人は何だつて仕事をしなければならないんだらう。雲は無心にして空を行き、水は樂しげに流れて居る、蝶は舞ひ鳥は唄ひ、子供は遊ぶ、それだのに大人ばかり、なぜ働かねばならないだらう。仕事をしなければならない爲に、子供等と遊ぶ事の出來ない大人は何と云ふ殘酷な馬鹿だらう。

吁々世の中がエデンの花園であるならば、裸體で居ても寒くなく、樹の枝々にある美味な果物は大人の採るに委せられてあるならば、何を苦んで大人が働くものか。森の梢に宿る鳥のやうに幾晩寢ても家賃を取られる心配なく、赤城山の鬼の如うにいつまで住んでも地代を取られる心配がなく、又は蜜蜂のやうに幾ら多く蜜を貯へても所得税を取られるといふ事がなく、孔雀の如うに美しい衣を着ても織物税がかゝらず。蛇の如うに幾らのたくり歩いても通行税を取られる事がないならば、何を苦んでか大人が働くものか。

大人は一日一刻も働かなければ飲む事も、食ふ事も、着る事も宿る事も出來ないのだ。煙草や酒などゝ云ふ子供の知らない味ひも知つて見ればやめられない。體面を保つとか交際を結ぶとか、其處よけいな事もある、足は二本親から授かつて居たがら、其れでも時々は電車や汽車に乘らなければならない。少し過激な事でも云ふと細長い名刺を持て來て何かと世話を燒いて下さる刑事とか云ふ恐い小父さんに支拂ふ給料も、國民としては負擔しなければならない、時々は夜半に來て出刃庖丁を目の先に突きつけて凄い文句を並べたりする強盜と云ふ活潑なお方をも、捕へて見れば煉瓦塀の高い大厦高樓に住はせて高いお米を只食はせて、其支拂ひをも國民としては負擔しなければならない。其れや是れやで、中々大人はお金が要るが、其のお金を取るには人はいやでも働かねばならない。そして此の短い一生を更に一層短くしてアクセクとつまらなく送らなければならない。全く子供の云ふ通り大人は馬鹿だ、何だつて仕事なんかをするんだらう。九時間は愚か、八時間にしても七時間にしても子供が見たら働くのは馬鹿だらう。然しそうもいかない事情があるのは前に云つた通りだ。

だから九時間だけしか働かなくも飯の食べる人は盛んに九時間制を稱へるがいゝ。九時間働いて飯が食へるのに十時間働くとは馬鹿な話だ。八時間働いて生活の立ちゆく人は盛に八時間

制を主張するがいゝ。其れ以上働いてもつまらない話だ。又八時間制のプロパガンダをやつて其のプロパガンダに依つて立派な生活の營める人は、大にプロパガンダをやるがいゝ。資本家が勞働者を食ひものにするやうにプロパガンチストも亦勞働者を食ひものにするのだらう。

然し、私達は迚も一日に八時間や九時間頭腦を働かせたのでは、飯が食へないばかりでなく、自分の才能も退化してしまう恐れがある。吾々は人が遊山に見物する所さへも、常に頭腦を使うて居なければならない、長い間さう云ふ習慣がついた爲めに、今更頭腦を働かすなと云はれても、働かさない譯にはゆかないのだ。

若し吾々もエデンの園に放たれたら何ふだらう。果してアダムのやふに頭腦を使はずに呑氣にして日を送る事が出來るだらうか。子供のやふに遊んで暮す事が出來るだらうか。恐らく吾々は忽ちバベルの塔を築いたり、身の丈、高き人を王と仰いで異邦人と戰端を開いたり、裁判所を建てたり、監獄を作つたり、電氣を發見したり、石炭を掘り出したり、人道的平和主義の名の下に血を流したり、其他さま〲の憂き苦勞を創造しつゞけはしないだらうか。又恐らくは軍國主義を打破しやうと努めたり、八時間勞働を唱へたりしずには居ないだらう。例へ吾々がエデンの花園に置かれても!!

何かしないでは吾々は無爲に苦しむんだ。無爲にして化すると云ふのは恐くは聖人の夢だらう。現實の人は無爲に苦しんで働き、働きに苦しんで無爲を望むに過ぎなくはないか。

制を主張するがい丶。其れ以上働いてもつまらない話だ。又八時間制のプロパガンダをやつて其のプロパガンダに依つて立派な生活の營める人は、大にプロパガンダをやるがい丶。資本家が勞働者を食ひものにするやうにプロパガンチストも亦勞働者を食ひものにするのだらう。

然し、私達は迚も一日に八時間や九時間頭腦を働かせたのでは、飯が食へないばかりでなく、自分の才能も退化してしまう恐れがある。吾々は人が遊山に見物する所さへも、常に頭腦を使うて居なければならない、長い間さう云ふ習慣がついた爲めに、今更頭腦を働かすなと云はれても、働かさない譯にはゆかないのだ。

若し吾々もエデンの國に放たれたら何ふだらう。果してアダムのやふに頭腦を使はずに呑氣にして日を送る事が出來るだらうか。子供のやふに遊んで暮す事が出來るだらうか。恐らく吾々は忽ちバベルの塔を築いたり、身の丈、高き人を王と仰いで異邦人と戰端を開いたり、裁判所を建てたり、監獄を作つたり、電氣を發見したり、石炭を掘り出したり、人道的平和主義の名の下に血を流したり、其他さま〲の憂き苦勞を創造しつゞけはしないだらうか。又恐らくは軍國主義を打破しやうと努めたり、八時間勞働を唱へたりしずには居ないだらう。例へ吾々がエデンの花園に置かれても!!

何かしないでは吾々は無爲に苦しむんだ。無爲にして化すると云ふのは恐くは聖人の夢だらう。現實の人は無爲に苦しんで働き、働きに苦しんで無爲を望むに過ぎなくはないか。

▶瓦の大は玉の小に如かず◀

◈最新學藝叢書全拾貳册完成◈

●第一編●法學士野口直人先生著
國際聯盟
八版
●世界改造を最も理想的の域に進めんとする刻下最重要問題の内容本書によりて最も明瞭

●第二編●文學博士大類伸先生著
世界的思想
八版
●總ての思想も運動も世界的たらざれば已まざる現代の趨勢を詳説して國民の覺醒を促す

●第三編●法學士吉岡淡水先生著
勞働問題
十版
●無資産階級の生活を人間らしくする爲めの大問題を極めて平明懇切に説明して所論明快

●第四編●文學士青木廷作先生著
デモクラシー
七版
●現代人はデモクラシーに對し何等理解なき空虚の生活をなすべきにあらず現代人必讀書

●第五編●文學士小林愛雄先生著
現代の歌劇
六版
●我新藝術の極めて純眞なる趣味を理解せしめ其内容に精通せしむる本邦唯一の歌劇讀本

●第六編●法學士野口直人先生著
罷業と怠業
四版
●同盟罷工とサボタージュを研究し資本家と勞働者の爲に刻下大爭鬪の勝者たる途を示す

●第七編●文學士小林愛雄先生著
女性中心説
四版
●女性中心の歐米最新學説を批判し男性中心と比較して最も穩健の説を立つ男女共必讀書

●第八編●法學士吉岡淡水先生著
マルクスの資本論
再版
●難解中の難解たる學説を極めて通俗平易に解説す社會主義勞働問題を説く者本書を讀め

●第九編●法學士小島正堂先生著
工業と勞働
再版
●工業政策と勞働問題との關係を詳説し進んで時局當面の諸問題に論及して所説明快懇切

●第十編●文學士生田長江先生著
能率增進の實際
新刊
●勞働時間の短縮に伴ひ實際的能率增進法の研究大急務也本書實例列擧實際的最良法明示

●第十一編●法學士小島正堂先生著
月給生活の改造
新刊
●今や大苦境に陷れる月給生活を改造する方法如何本書此難問を解決す月給生活者必讀

●第十二篇●文學士坂井正一先生著
民族自決主義
新刊
●民族自決の意義を誤解せる者世に少なからず民族主義運動詳説し自決の由來を明かにす

◈新式活字 ポケツト形 各册タツタ卅五錢 送料一册二錢 着金次第送本◈

發兌元 東京神田三崎町西通り 學藝書院 振替東京四六七九九番

大日本紡績株式會社

大阪合同紡績株式會社

宇野浩二氏著

藏（くら）の中（なか）

■鍋井克之氏裝幀■

その想や複雜、その文や平明多彩、我文壇多士濟々ありと雖も、その手腕、その才能に於て、氏の右に出づる者なかるべし。本書は氏の第一創作集にして、現文壇の人氣を恣にしたる『藏の中』『屋根裏の法學士』『轉々』『長き戀仲』の四大雄篇を集む。裝幀又美麗、作者の魅力ある筆致と相俟つて讀者の心を醉はしむべし。

四六判特製美本函入
紙質精撰總振假名附
定價金貳圓貳拾錢
郵稅金拾貳錢

傑作選集

武者小路實篤氏著

一つの道

■バーナード・リーチ氏裝幀■

本書は氏が精進十年の間に物したる數多き作品の中より當時名篇中の名篇として文壇を瞠目せしめたる『世間知らず』『養父』『わしも知らない』等長短小說三篇脚本三篇を收めたるものなり。實に本書こそ氏が唯一の傑作選集にして氏の全幅は此一卷に窺ふことを得べく日本文學の一偉著なり。

四六大版頗美本函入
總ポイント四百二十頁
定價金壹圓九拾錢
郵稅金拾貳錢

東京市牛込區
横寺町四十三地地

聚英閣

電話番町四六二番
振替四七八六九番



おせい

岩野泡鳴

一

「……………………」おせいは田口に離婚されても、子供と共に同家の先祖代々のお位牌を預つてゐた。そしてこの家を持ちこたへてゐる以上は、いつか知ら自分のうわきなをつとは――若い女に棄てられるか、またはその女をいやになるかして――再びここへあと戻りして來るに違ひないと秘かに考へてるのだ。が、然し、おもて向きでは、をつとの田口に對する恨みと憎しみばかりが先きに立つて、子供に向つてでも、『お前のお父アん（とつつ）は馬鹿で――薄情で――』と云ふやうなことを云ひつづけた。

尤も、これは田口が今の女をでなく、まだわけも分らない目かけを持つてそれに入りびたりになつてた時からのことであつた。そしてそれとも別れて、いよ〱こちらを離婚して、多少は素情もいい今のお兼と云ふ女と結婚した時には、〇〇と云ふ田口の雅號は新聞の上にも有名になつて、

『〇〇と兼子と現代式だ、ね』と云ふ、こちらから見れば馬鹿々々しいそして嫉ましいはやり唄までが出た。それを芝の公園で歌ひ賣りしてゐる書生があると聴い

て、半ば物好きも手傳つてだが、總領の文子に、
『行つて見ようぢやアないか、え』と云ふと、文子は
『耻かしいから、いやだ、わ』と答へた。
『ぢやア、雄ちやん、どう？』
『僕もいやだア。』
『ぢやア、政ちやんはいい子だから行かう、ね』と、末ツ子の政直をつれて出ようとすると、文子は
『何も分らない子にまでそんなことを見せないでもいい、わ。』
『なアに、却つてこれからの見せしめになつていいぢやアないか？』
『だツて』と、文子はます／＼怒つて、『見ッともないぢやアありませんか？』
『誰れもうちのお父アんのことですとア云やアしないよ。それとなく見て來りやアいいんだから、ね。』芝園橋へ寄つたところのひろ場でベースボールをやつてゐた。その近處の梅ばやしのそばで、果してその唄を大きな聲で呼び賣りしてゐた。『あれだよ、お前、よく聽いてて御覽』と、小さい聲で云つて、こちらはそれとなく立ちどまつてると、ひとりふたり買つてるものもあつて、そのものらをまで嫉ましくなつた。そしていやな氣になつて歸つて來てから、『それこそお父アんの方が見ッともないぢやないか、ね、あんな唄にまで歌はれて――馬鹿で――薄情で？』

それがまたいつのまにか口ぐせになつて、子供に向つてばかりでなく、親戚や知り合ひの人にも及び、遂にはまたあかの他人からちよツとでも同情の言葉を得ると、直ぐ自分の味かたに思ひ取つて、『田口は實に薄情な男ですから、ね』と云ふやうなことを訴へた。そしてその人がます／＼これに同情して呉れると、却つてそれを田口その人であるかのやうにして勢ひづいた不平を以つてその人に突ッかかつて行つた。

そしてそんなことは自分として當り前のことで、別に異狀な精神になつてるのではないと思つてた。だのに、文子は

こちらのことをうそでも云つてるもののやうに聞き取つて、意見がましくも、「おッ母さん、何も目の色を變へてまでお父アんのことをわざわざ見ず知らずの人にまで惡く云はないでもいいぢやアありませんか」などと云つた。『見ッともないぢやアございませんか――おッ母さんこそ馬鹿か、氣違ひのやうに見えて？』

『何が氣違ひです？おッ母さんはこれでも獨りの腕で正直にお前たちを育ててゐるんです』と、こちらは叱り付けた。それには、然し、少からずきまりの惡いことが一つないでもなかつた。自分は曾てをつとの一年以上も薩張り歸宅せぬに對する餘りの不平と詫しさとがこんぐらかつて、ふとしたことから、下宿人のひとりを好きになつて、炬燵のある部屋へ引き入れた。それを、眠つてたと思へた文子が知つてゐて、小さいくせに利口であつたから大變に怒り、こツそりその父の兄弟のところへ行つてうち明けた。あとではそんなことを取り消させるやうにしたけれども、そして文子もそれは思ひ違ひであつたと云ふことは承知したけれども、そのことを一つの有力な理由にされて、とうとう田口の望み通りに離婚となつてしまつたのだ。そしてさうしたことを思つても、多少わけの分つて來た娘には、わざとにも『おッ母さんは正直一方だから、ね』を押し付けずにはゐられなかつた。

をんな獨りでは營業がうまく行かないので、この方では、然し、隨分不正直なやうなことも企てて見た。下宿人と關係ができた時も、一つにはそれから多少のかねを出させようとしたのだ。それは然し不正直と云へば云へるが、家の爲めを思ふ一つの手であつたから、家の爲めには正直な企てだと云つて貰はなくてはならなかつた。その證據には、田口の友人で、友人としては年もずッとうへな爲めに、なかなか喰へないところがある隱居ぢヾイの山崎さんが、何度も酒に醉つて來て、色仕掛けでこちらを落し入れて家を乘ッ取らうとした時も、こちらは初めから感づいてゐたので、決してその手にはかからなかつたではないか？

『どうせわたしは獨り者だから、隅の部屋でも一つ與へられて、身のまわりの世話さへして貰へばいいので――その

代り、家の修繕費や營業費は出すわけです』などと云つた。

『然し、田口がどうせ承知しないでしようから、ね』と、わざと恥ちまでかかせてやつたのである。

その後、都合のいい人があつて、抵當の利子や地代や營業税をも引き受けて、こちらへ別に家賃を毎月三十圓拂つて貰ふことになつたので、おせいは子供三人と共に櫻川町を引ッ越して、巴町へ借家した。そして文子が小學校を卒業したのをしほに、近處の人の世話を以つてかの女を遞信省の雇ひに入れたので、向ふの家賃と文子の月給と田口から毎月の約束で來るかねとで、月に五十圓ばかりは這入つて、親子はじッとしてゐても先づ喰へて行ける勘定であつた。が、下宿屋から這入る家賃がしぶり勝ちになつて、その上に地代や營業税までもこちらへ直接に催促しに來られた。自分は親戚へ行つてかねを借りたり、自分の持ち物を質に入れて足し前をしたりした。そして營業代理者に立ち退きを命じたけれども、二ケ月、一ケ月、また半月と出しぶつてるので、裁判所へ訴へ出た。

その騷ぎの最中に、少し利口過ぎると思つてた文子が十六歳をいちごに腸炎で突然死んでしまつた。

『フミキノフケフキトク』と云ふ電報を打つたのだが、どうせ薄情な田口の來よう筈はなかつた。十圓の電報がわせがそれでも僅かに間に合つたので、『お父アんから今このおかねが屆きましたよ』と知らせると、病人はさうかと云ふことを

『ほう』とたわいもなく答へて、にッこりしたのが最後であつた。可哀さうに、電報を打つたと聽いて、若しや父が來はしないかと心待ちに待つてたのだ。が、『どうせお父アんはおッ母さんを見るのがいやなのだから』とは、不斷から云つて、あきらめてもゐたやうだ。

『…………』こちらは、かの女がおとなの人情を多少でも知つてただけ父の方に心を傾けてるのを憎らしくもあつた。世間の交際も上手であつたので、いろんな人から病氣見ひやら香奠やらが來て、思はぬ臨時收入ができた上に、子供としては感心にも勤務に忠實であつたと云ふので、うわ役の周旋により、破天荒の特典だとか云つて四十

圓の追弔金が下りた。それを不時の收入として直ぐ、他の香奠と共に郵便局へ預けて來た。そしてそのから包みばかりを子供の靈前へ供へて置いた。

葬式は追弔金を貰ふことの爲めに一日延ばして、午後の二時となつてゐた。が、その朝になつてのおせいの考へでは、今ま葬式を出すと、多少でも見えを張らなければならぬので、それだけ物入りであつた。折角できて、きのふ預けたかねをまた引き出すのは惜しかつた。ぶッつけに青山の方へ行く人には少し義理が悪いけれども、どうせ役所の人々だらうから、二度と顔を合はせるには及ばないものばかりであつた。

斯う考へて、葬列や坊さんをも斷わり、夜に入つてから、人夫二人に棺をかつがせて、自分だけがついて行つた。するると、田口家の屬する茶屋のおかみさんが、

『先刻、七八名のかたが待つてをられましたが、あまりおそいのでお歸りになりました。』

『さうでしよう』と、こちらは平氣で答へた、『いろんなことがあつて、時間が延びたものだから。』そしてこのいろんなことのうちには、田口が手つだひに來ない不平や、今の家主からの香奠料が少なかつた怒りや、久しぶりで郵便局へ預けたかねをまた櫻川町の家の爲めにつぎ込まなければならぬやうになりはしないかと云ふ心配なども數へてゐた

死者の籍は、もう、幸田の家に養女として這入つてたのだが、田口家の墓地へ速急のことだから無斷で割り込ませることにしてあつた。茶屋の方では、無論、これまでの關係上、違つた家のものとは知らう筈がなかつた。文子を埋めたその隣りには、長女の清子と長男の秋雄と三男の讓とが別々に埋まつてるのだ。そして、今は夜だから、向ふの森にかかつてる鎌がたちの月はあつても、目さきが暗くツてよく讀み返せないが、長女の小さい墓石には、自分のその時作つた俳句『永き夜を稚きものの獨り旅』と云ふのが彫り付けてあるのである。それは微かに思ひ出せても、今のわさ〳〵してゐる心にはそのもとのやうな、靜かにあはれな感情が浮ばなかつた。いや、今新たにできた墓に向つても、田口の薄情に對する恨みばかりが先きに立つて、素直な涙の出ないのをおぼえた。何だツても、これだけの子供を生ませてま

た死なせて置きながら、人を

『婆々アくさい』とか、『ヒステリづら』とか云つて、とう〳〵ぶッ放してしまつた。

『…………………』抵當入りの家を渡してこれだけ苦勞させれば、誰れだッて皺くちやにもなろう。ヒステリにも落ちよう。正直なものには――自分もさう云へるつもりだから――それが却つて當り前のことではないか？こんなに苦勞や心配を重ねてゐたら、世間の義理や人情もできるだけ切り詰めて行かねばならぬことを考へてゐた。

目の前にゐる人夫には約束通り、そして茶屋へは穴掘り料と別に二三十錢とを與へれば、あとは香奠返しなどもしないつもりであつた。そして文子の一番親しい友達として追弔金の爲めに度々足を運んで呉れた子などには、どうせお互ひに子供のことだから、別にお禮はしないでもよからうと獨りぎめにしてゐた。

歸つて見ると、留守居をさせて置いた子供のうち政直はまだ小さいのでごろ寢をしてたわいもなかつたが、雄作の方は蠟燭のともつた机の上の姉の位牌に向つて目を泣き腫らしてゐた。これを見て、子供ながら感心にと思ふと、おせいは自分も俄かに寂しい悲しみに打たれた。そして自分の手もとにあつて、近しく何かと云へば小ごとの相ひ手となるもののひとりが――而も自分のあと取りとして心だのみにしたものが――無くなつたのであると云ふことを、ここに、初めてしみじみと感じられた。

がツかりして、死んだ子供が使つてた机の前に坐わると、新らしい線香を二三本立て添へてやつて、かの女が父のやうに小說家になると云つてたことなど思ひ出しながら、

『おッ母さんはまだ文ちやんがゐなくなつたとは思へないが、ね』と、雄作に言葉をかけた。『まだお役所へでも行つて直き歸つて來るやうで――』

『…………………』雄作は別に返事をしなかつた。が、多分、姉の生きてるあひだを、あんなにいぢめたり、喧

事をしたりしなかつたらよかつたとでも後悔してゐたのだらうと思へた。

二

おせいはまだ動かないでその場にじッと坐わり込んでゐた。墓へ着て行つたよそ行きの衣物——と云つても、銘仙まがひの棒じまの綿入れだが——をぬぎ替へようともしないでだ。まだ秋は半ばで、寒いには早すぎる筈だのに、若い時から、

『少し猫背、ね』と冷かされた背なかの方から、ぞく〳〵と冷えて來るのをも感じてゐた。

何をするのもいやになつて、どこへでも坐わつたところでただじッとしてしまつて、兩手をふところへ入れたまま、何を考へるともなく自分の心がめいり込んで行くその氣持ちよさを獨り手におぼえたのは、もう、ずッと以前からのことであつた。それを田口のをんな兄弟のものなどは馬鹿にして、

『おせいさんは如何にもぶしようだから』と云つてるやうだが、こちらは苦勞をして見なければ分らない一つの樂しみでもあり、味はひでもあるとして、人からは何と云はれてもかまはないでゐるのだ。

襦袢にでもまたしらみが湧いたかして、苦勞の爲めに骨だつた胸の後ろあたりがちく〳〵と痛がゆかつた。ふところの中から、直ぐ左りの手を右の脇の下からまわして、その方の肩を少し縮めて、ぼり〳〵と搔いた。かゆいところへは半分しか屆かなかつたけれども、それが自分の沈んだ氣持ちに二重の心よさを與へた。そして自分までがこのまま文子と共に線香くさい眞ッくらな穴へ引きずり込まれて行つてもいいやうな氣になつてゐた。

そこへ丁度また來て與れたのは、向ふの家に假りに下宿してゐる堤さん夫婦であつた。もとから田口の友人で、この人も大阪では度々奥さんを換へ、それがみな仲居や藝者であつたが爲めに、親ゆづりの財産五十萬圓ばかりを全くすつてしまつた結果、今日のやうな見じめな天罰を受けてるのらしい。が、田口よりも人情があるかして、今回の訴訟事件

にも智慧を貸して吳れたし、この二三日は毎日のやうに來て、いろ〳〵手つだつても吳れた。けふも、午前にはおひる前までゐたので、今夜は來て吳れまいと思はれてたのだから、俄かに力を得て、こちらはその方に向き直つて、右の手をふところから出した。が、今度はその手の人さし指が思はずまた鼻の穴へ行つた。そしてそのついでに穴の奥でさわつた鼻くそをゆび先きの爪にかけて引き出して來て、むなもとから出た左りの手のひらに乘せて丸めながら、

『ヤッと今お葬の方をかたづけて來たのですの。』

『まア、これで一段落や』と、堤さんも圖ぬけて大きなからだを勝手なところへ坐わらせて、うち輪の人のやうに云つた。

『ほんまに可哀さうなことをして、なア。』奥さんはこちらのそばへ進んで來て、こちらの坐わり込んでる横手から線香をたむけた。

『…………』おせいはその手つきまでを見つめてゐて、藝者をしてゐた女にもこんな時には本當の人情があるのだらうかと思つた。直ぐ堤の方へふり向いて、『わたしやアどうしてもあの薄情な田口が殺したとしか思へません、ね。』

『そんなこた、もう云はん方がえい。向ふかて、貧乏のなかから十圓も送つて來たんやさかい、十分、文ちやんの死に目にや會うてやりたかつた意志は見えてます。ただあんたに會ひたうなかつたんや。』

『あなたもまだそんなことをおッしやるんですか？』おせいはさきに文子が同じやうなことを云つたのに突ッかかつて行つた時のやうな勢ひになつて、『わたしはわたし、子供は子供ぢやアございませんか？』

『そらさうやが、な——』

『…………』こちらは渠をも云ひ伏せたつもりになつて、多少の滿足をおぼえた。

『風を引きますよ、政ちやんにうたた寢させて置いたら』と、奥さんが渠の上に坐蒲團を二つ三つ乘せてやつてるの

をこちらから見ながら、

『いゝんですよ、憎らしい、こッちの歸つたのも何も知らないで！』おせいは今となつては、もう、雄作がたよりであつた。渠の機嫌を取り込むやうにして、『雄ちやんは、それでも、少し分つてるやうですが、ね。』

『もう、十二やさかい、な』と、奧さんも雄作の方へ向いて、『ねえさんがゐなくなつて寂しいでしよう？』

『…………………』雄作はそばに坐わつてるまゝ、にが笑ひをして目をしよぼ付かせた。

『これからねえさんのぶんも引き受けて、しツかり勉強しなけりやアいけないよ。』おせいは丁度いい折りを見つけて斯う云つて聽かせたが、自分もわれ知らず淚をこぼしてゐた。雄作は來年の三月にやッと小學校を出られるのである。女の子とは違つて、そのまゝ月給取りにもやれないのだ。して見ると、これまで文子が取つてたぶんだけがそツくり這入らないことにならう。それに向ふの家のありさまだ。

『然し、けふも、中尾が云うてたが』と、堤さんは營業代理人のことに云ひ及んで、『如何にわたしだッて出るやうに從來の義務が果せるなら、直ぐにも出ます。それが然しかねの思ふやうにできないので躊躇してゐますのだから、幸田さんもさうせツかちに訴訟などしないでもッて。』

『あなたが勸めたんちやアありませんか？』

『そやさかい、こッちやはとぼけてゐたんや。若しさう云ふおつもりなら、僕が仲に這入つてあげてもよろしいッて。どうも訴訟にや勝てないおもてるらしいさかい、出る用意はしてるやうや。』

『それでなきやアこッちが困りますさア、ね。』おせいはちよッと調子には乘つたが、こんなことやそんなことを一どきに考へ出すと、客の來てゐることも忘れがちになつて、ひえる夜を、自分も疊のうへに坐わつた切り、またふところ手をしてむな元をふくらませたり、ふところから兩手をえりに出して、なけ無しの鼻くそをほじつて丸めて壁の方へ指さきではじいたりしながら、自分勝手な世界を現じて、客にも坐蒲團をすすめることさへしなかつた。

が、堤さんはこちらにも都合のよささうなことを話し出したので、おせいはまたちよツと氣を引き立てることができた。これによると、渠がいツそのこと、こちらや田口の友達甲斐に、中尾の出たあとをそツくり引き受けて、こちらと一緒に下宿の營業をやつて見ようかと云ふのだ。

『これはまだあんたには云はなかつたけれど、田口君には先日會うた時相談して見て、承諾を得たことやが——』

『…………』こちらは田口の名を出されると、直ぐ反感をいだかないではゐられなかつた。『あんな者に何の權利がありましよう？』

『僕かてそら知つてる、さ。けれど、友人として先づ話しをして置かねば、感情を害するかも知れへんやないか？田口君に異存がなけりや、あとはあんたと僕らとの相談づくや。』

『それもさうです、ね。ちやア、いいやうに相談します、わ』と、こちらは答へた。そして中尾が出ると、自分も子供二人と一緒に向ふへ舞ひ戻つて行つて、堤夫婦と共に力を合はせて營業をやり直すことに話をきめた。文子は死んでも、櫻川町の家の方はどうやら斯うやらまた持ち直しさうだと云ふことが、せめてもの光明を自分の心に投げて來て與れた。『さうなると、もう、うち輪同士のことになりますから、ね、あなたの方へも香奠返しはしませんよ——少し勝手のやうですけれど。』

『そらお互ひのこツちやさかい』と、堤さんも心よく承知して與れた。

『…………』こちらは文子に關することはこれで最早や殆どすツかりかたが付いてしまつたと思つてしまつた。薄情な田口などへは何も返すに及ばないことだし、四十九日までに、ただ自分の方の身うち二軒へ壺屋の饅頭をでも申しわけにくばれば、もう、それでいいのであつた。だから、もう、あの中尾を追ひ出しさへすればと云ふことにばかり心が向いて、『ちやア、どうかその方を先づいいやうに頼みますよ』ともたれ込んで置いた。この頃は何ごとにでも成るべく人まかせの方が面倒くさくなくツていいのであつた。正直な自分の獨り腕で以つて、斯うやつて三人の

子供を育ててゐたのを同情して呉れてか、一番面倒くさかつた下宿の營業も中尾が――若し約束通り家賃を出せれば――うまくやつて呉れる筈であつたし。文子の急病に變じた時もおほ屋のおかみさんが醫者を呼びに行つて呉れたし。追弔金の奔走も文子の友達がすべてやつたし。埋葬の手つづきなども堤さんがして呉れたし、中尾とのかけ合ひもまた續いてやつて呉れると云ふし、そして自分は、もう、この最後の事件の結果をただ待つてゐたらいいのであつた。

二三日は何だか全く手加減が違つてしまつたかのやうに寂しくぼかんとして、らくはらくであつたが、手持ち無沙汰過ぎたほどだ。堤からも音沙汰がないのを待ちわびて、こちらから向ふの家へ出張して見ると、何のことだ？まだ少しもはか取つてはゐなかつた。男のくせに、

『さうひどくも云へないから、まア、じイわりとやつてるけれど――』などと云つてた。

『ぢやア、わたしがもう一度裁判所へ行つて來ます、わ』と、おせいは急にむきになつて答へた。既に一度は檢事にも面會して、田口の薄情から自分が棄てられて、今はただ借金附きの家をもと手に子供三人を養つて來たことをまで語つてあつた。そしてその大切な家の營業を月々の家賃にしてまかせた約束だのに、『コッちを女と見くびつてるからでしようが、中尾と云ふ男は不都合にも少しも約束を實行しないのです。』

『ぢやア、よく調べて見ましよう』とのことであつた。そしてこちらが今少し辯じて置かうとしたら、檢事は『いや、もう、さう能辯に云はないでも分つてゐますから』と云つた。だから、それを力にして再び面會に行くと、會つて呉れたことは呉れたが、まだ調べてないといふのであつた。

『あなたは』と、おせいはここでもむきになつてしまつた、『おや子四人のうち、ひとりはその僅か十日ばかりのあひだに無くなつてしまひましたし、あとのものらもいつ飢えて死ぬかも知れませんのにそれを見殺しにしておしまひなさらうと云ふおつもりですか？』

あとで少し云ひ過ぎたか知らんとは思つたが、その爲めに直ぐ事件がはか取つて行つた。そして中尾の方は三百代言

らしいのに代理させたから、

『あなたの方も知り合ひか何かの辯護士に頼んだらどうです』と云ふ注意を檢事から受けたけれども、おせいは、『いいえ、わたしはそれには及びません。正直に中尾と對決さへすれば分ることですから』と答へた。そしてそれもその通りになつた。

いよ〱對決の日になつて、中尾もよんどころない顏つきをして檢事の前へ出たが、相變らず證文の上の不備な點を楯に取つて。

『わたくしは一ヶ月三十圓の割りで營業の利益を幸田さんの方へ拂ふ約束は致しました。然し、それを毎月、毎月拂ふやうには約束致しませんでした』と、まことしやかに陳べ立てた。

『いいえ、それはほんの證文づらばかりのことです。あなたはわたしが毎月にして拂つて下さるのでしよう、ね、と念を押した時に、無論ですよとお答へになつたぢやアありませんか？』

『…………』中尾は直ぐ云ひ詰つてしまつた。

『女ひとりだと思つて、證文の文句などでごまかさうとしたツて駄目ですよ！』

『文句の上にも家賃としてと書いてある以上は』と、檢事もさすがいいところをつかまへて呉れた、『月々拂ふのが當り前ではないか？』

『それに致しましても、實は、營業上の利益がそれほどにあがりませんので――。』

『それは別問題だらう。利益のないやうな商賣をお前が引き受けたのが惡いのだ。』

『へい。』

『…………』つまり、こんなことで、おせいは自分の師匠に見て貰つて置いた易に出てゐる通りの期日に、櫻川町の家を明け渡して貰ふことができた。『正直のかうべに神がやどるとはこのことですよ。中尾も檢事の前へ

出た時にやア、まるであたまがあがりませんでしたから、ねい』と、嬉しまぎれの調子に乘つて、今度はうまく行くだらうと思ふ營業共同者になるべき堤夫婦に斯う語つた。

三

死人を出した巴町の家を引き拂つたのも幸ひが向いて來た一つのしるしだと思へたところ、今度は雄作がまた父の方へ行つて修業させて貰ひたいと云ひ出した。

あれだけ惡く云つて聽かせて來た田口のことだのに、文子も十二の頃から渠を戀しがつたが、その弟がまたさうかと思ふと、また死なした地ではないかとまで母としては憎らしかつた。折角ここまで育てて來たものを、ひとり死なせた上に、またひとり手放すことは意地にも考へ物であつた。

『お前は、あんな薄情なお父さんのところへでも、どうして行きたいの？』

『學問をさせて貰へるから』との答へだ。

『それもさうだらうが、ね。』わざと煮え切らない返事をして置いて、堤さんの部屋へ相談しに行つて見た。『どうしましようか、ね、今度はまた雄ちやんが田口の方へ行きたいと云ひ出したんですが、ね？』

『そら丁度えいやないか？』堤さんは案外わけもなく贊成した。『來年から中學やのに、あんたの手でつづくかどうや、實際は、分らんさかい。』

『つづかないこともないでしようが、ね』と、こちらは一つ、向ふのこちらを馬鹿にしたやうな言葉にいや味をうち込んだ。と云ふのは、子供の二人や三人を喰つて行かせるぶんなどは、下宿屋をしてゐる以上は、食物の餘分として獨り手に出て來るものだ。あとは、月謝の三圓や四圓しか雄作の爲めの物入りはないと思ふと、それ位は追ひ出された中尾に代る人として堤が出すべきのは當り前であつた。

『よしんば、あんたの力でつゞくにしてからがだ、雄ちゃんの爲めに取つて、あんたのはたにゐる方がえいか、それとも、學問のある田口の手もとにゐる方がえいか？』

『…………』その質問のわけをよく聽いて見ると、堤さんの云ふことも尤もでないことはなかつた。渠に田口が語つたこともあると云ふによると、雄作や政直は――みな、うへの子だが――こちらへ養子にしてしまつてもいいのであつた。田口にはそのあと取りなどは誰れにしてもかまはないのだ。だから、雄作を向ふへやつて學校へ入れて貰つても、卒業の後はこちらへ返して呉れる。して見ると、雄作はやがて文子の代りに全くこちらの物になるのだから、自分の手もとで育つ政直の方が却つて入らなくなつて、行く末はどこかの養子にでもやらなければならぬわけだ。ところで、どうせ養子にするのなら、堤さんが今から約束して政直は貰ふことにして置いてもいい、そしてこのことも田口には了解を得てゐると云ふのだ。『成るほど、ねい』と、最後には會得ができて、『それもいい考へです、わ。』

『さうおしになる方がよいでしよう。』堤のお竹さんもそばから親切に勸めるのであつた。

『ぢやア、さうしましようか、ね？』そこへ政直がいつもの物欲しさうな顏をしてやつて來た。そとでまた土いじりをしてゐたと見え、筒袖や衣物の裾をほこり色の土だらけにしてゐた。渠はそれをそのからだと共にこちらの膝のあたりへこすり付けながら、

『よう、おッ母さん、何かお呉れよ』と云ふ目付きをして見せるのであつた。そして自分には、この目付きに自分の子供の聲までが可愛く聽えてゐた。が、別にやる物もないので、

『また、その袖を御覧』と、なまぬるく叱り付けて、暫らくそのままあしらつてゐた。『お前はおとなしくしてゐないといけませんよ、堤さんの子に貰はれるのだから、ね。』

『いやだ、いやだ？』政直はます〳〵駄々を捏ねた。

『…………』おせいも自分の子を人の養子にやるかどうかは、その實、それには情愛があり餘つてゐて、

まだ決心してゐるのではなかつた。この營業をもまだ本當にまかせる氣にはなつてゐなかつた。これまでのところを何ぶんよろしくと云つてゐたのはこの家の明け渡しを三へ助けて貰へばよかつたのであつた。今のところは、ぼんやりとただ向ふの云ふにまかせて置いて、向ふのやうすを見てゐるのだ。蓋し自分の身に出たところでは、あまりいいことにも成りさうでなかつた。

然し、客も少くツて直ぐ女中も雇へない折りから、堤さんがその奥さんを見習ひとして臺どころへ出して呉れるのはこちらには女中代りとして便利がよかつたし。それに、もと手があるかなしのところへ持つて來て、この寒いのにそとへ出ておさいの工面をあれかこれかと見つくろふのも面倒なので、毎日僅かの煮まめとちツぽけな鹽しやけとですませてゐた。すると、堤さんが番頭がはりに出て來て、

『そんなこツちやあかん』などと、滑稽な大坂言葉で叱り飛ばした。『お前までが、もう、今から寒さうな風をして』とは、奥さんに云つても、實は、こちらへおこつたことらしい。『そやさかい、お客さんが積かんのやないか？毎日、毎日、同じ物を喰はせられてゐたら、わしらかて飽いてしまうが、な！』

『だツて、仕かたがないぢやありませんか、おあしがないんですから。』斯うこちらは口を出した。

『これで買うて來い』と云つて、堤さんは時々五錢銅や十錢銀貨をお竹さんに投げ出した。

『…………………』割りに合はないものを添へたりすれば、月末の勘定の上に損をするばかりでなく、客をつけ上らせることになるのを、まだ經驗のない夫婦は知らないのであつた。が、別にこちらのふところを痛めるのでもないから、うツちやらかして置いた。すると、堤さんの干渉はこちらのからだのことにまでも及んで來て、

『あんたがたのやうに一ケ月でも二ケ月でも湯に這入らんでは、お客さんにきたながられますが、な』と云つて、時々みんな一緒に錢湯へ行くやうに命令した。それも向ふのおかねを出すのだからいいやうなものの、時には、

『わたしだツてお湯をきらひなんぢやアないんですが、ね、お湯に這入ると、却つて風を引くことがありますから、ね』

と、强情を張つて見せたこともある。

『たまに這入るからや』と、堤さんはいやな顔をした。が、こちらはわざと笑ひに受けて、

『だから、這入らない方がお湯錢だけでも助かるぢやアありませんか？』と云つてやつた。今も湯に行くおあしをこちらは貰つてあるのだが、自分の財布にはそれしか這入つてなかつた。が、政直が餘りうるさいので、そのうちからはしたの五厘だけを出して、『ぢやア、これでおいもでも買つて來てにイさんとふたアりでお分けなさい。』

『おぢさんが、ほたら、少し足してあげよ』と云つて、堤さんは一錢五厘を出した。

『…………………』だから、丁度二錢になつてひとりに一錢づつ當るわけになつたので、今一度、『にイさんと半分づつですよ』と念を押してやつた。雄作も障子のかげへ來てゐたので、はしご段をふたりの足おとが下りて行つた。それにじッと聽き耳を立てて、見えない姿を目に見えるまでに引き寄せながら、無くなつた文子に對する情愛までも呼び起した。が、おもてには去りげなく見せて、『うちの子はみんな、なんて、あんなにいやしいんでしよう、ね？』

『あんたの仕つけが悪いのんや。』

『なアに』と、お竹さんは別なことを云つた、『子供と云ふものはみなあんなものでしよう。』

『さうでしよう、ね。』おせいは奥さんの言葉を自分の味かたを得たやうに考へた。子供は三人ともよく一つの物を取り合ひしたが、雄作はその姉に向つて亂暴なほどつよかつた。そして、

『ねえさんが死ぬのなら、生きてた時にあんなにいぢめなければよかつた』とまで後悔した。その割りには、弟に向つては少し弱い。ひよッとすると、姉に對する後悔の爲めに、その心がおとなびて優しくなつたのかも知れない。が、自分の發明だと云つて二三日も苦心して、やッとできたおもちやを、づるい弟に横取りされて逃げられながら、ただ泣きわめいて追ッかけるばかりであつた。いつもこちらが出て行かなければ、この兄弟同士の喧嘩は納まらないのである。

今ふたりでおいもを買ひに行つたのでも、その歸りには、どちらが大きいとか、小さいとか云つて、きッと、大道の眞

ン中で取り合ひの喧嘩をするのだ。が、何と云つても聽かないのだから、こちらはただ笑つてゐるより仕かたがない。それでも少しづつはふたりで親に持つて來るだらうから、それを樂しみにして。さうだ、親だツても喰べたいのだから

『貰つたものでも、何でも、少しはうちへ持つて來るものですよ』とは、不斷から數へ込んである。その一方の雄作が田口の方へ行けるとして見ると、自分も時々尋ねて行つてもいいやうにして置いて貰はなければならない。さうすれば、その度毎に多少の馳走もして貰へるだらう。まさか、赤坂のおばのところのやうに、お茶一杯で追ッ拂ひながら、そのあとで、

『おせいはおしりが重いうへにおしやべりで困る』などと、かげ口が云へた義理でもあるまい。

『兎に角、さうすると、雄作は田口の方へ行かせることに致しますから』と、堤さんに向つて、おせいはまたもたれ込んだ、『あなたから一應田口へかけ合つて貰はないと困りますが、ね。いきなり行つて、はね付けられても詰りませんから、ね。それに、子供が行つてる以上は、わたしも時々會ひに行けるやうにしていただかないぢやア、ね。これまでのやうに、毎月のおかねさへ直接に取りに行けないやうぢやア困ります、わ。これでも、もとは仲のいい夫婦であつたんですから、ね、いくら薄情な田口でも、さうなると、まさか、わたしを――』

『そんなことは云はんかて分つてるさかい』と、堤さんはうるささうに答へた。

『だツて、一應はそのわけを云はないぢやア向ふにもとほらないでしよう。たとへわたしは追ひ出されたにしても、さ』と、ぞんざいに口をあいて笑ひながら、『矢ツ張り、向ふの子供の親ぢやアありませんか？さうして見れば、子供に會ひに行くのア――云つて見りやア――いくらおほびらになつてもかまはないのが本當ですから、ね。田口が若しそれをいけないとでも云ふなら、わたしやア子供を渡しませんから、ね。こんな貧乏な家にやア、子供しかわたしの寶はないんですから。あなたがたなら、まだ子供がないから、この經驗はお分りになりませんが、わたしなどア、もう、子供を四人までも死なせたんですから、ね、ちよいとしたことにも、直ぐ驚きます、わ。おなかが痛いと聽けア赤痢になりは

しないか、せきをするからッて肺炎ぢやアないかツて。あんまりお湯へ行かせないのも、一つは、その爲めですから。ね。』

斯う述べ立てて來て氣がついたのだが、これで向ふが度々こちらどもを『あかだらけだ』と云はないばかりの顏をしてゐるに對する申しわけが十分にできたのであつた。この時、丁度子供が歸つて來たやうすだから、

『また喧嘩をしないやうに』と云つて、その坐を立つた。そして下の茶のまへ來て、直ぐこちらから子供の方へ默つて手を出すと、ふかしいもの親ゆびほど喰ひ殘されたのを政直は呉れた。そして雄作のはと見ると、それよりもたツた二倍ほどのものであつた。然し、その兩方を一切に子供から受け取つて、おせいは長火鉢——これもおぢイさんの坐わつてたかたみ——の前に坐わり込み、自分ひとりで番茶を入れた。そして女敎員をして獨立してゐた時からして、自分のお茶好きであつたことを思ひ出した。すると、また、自分のおほおぢの妨害を避ける爲めに、田口が夜ちう俄かに自分を自分の荷物と共に人力車に乘せ、そのあと押しまでして、小石川からこの家へつれて來たそのむかしのことまでも。その時は、まだ電車と云ふものがなかつたが——。

この家のしうと、しうとめや、小じうとにも、隨分苦勞をさせられたけれど、いよいよしうとが亡くなる時には、『吾助ではとてもこの商賣はやつて行けんから。よろしくお前がしツかりして、ね』と云はれた。その一言に感じてこそ、自分はいまだにこの家と田口家のお位牌とを——どうせ田口はそんなことには頓着しないたちだから——自分ひとりで守つてるのである。

四

堤さんは、

『けふ、あすはちよッとそとへ出る用があるから』とのことで、あさつては、きツと行つてやらうと受け合つて呉れた。おせいはそれがまた自分にも都合がよかつた。と云ふのは、近ごろ、しらが染めの束髮がその根もとから白いのを大分に延ばしてゐたのだが、それを染め直すかねもなかつたし、またその氣にもなれなかつた。

が、丁度いい折りだからと心を引き立てて、堤夫婦へはただ、

『お湯に行つて來ますから』と告げて、こツそりと、しらが染め屋へ行つた。さかなやが取りに來るぶんを融通すれば、染め賃と湯錢とを拂つて、なほ二十五六錢は殘るのである。自分から進んでお湯屋へ行くのも、自分ながら珍らしかつた。が、染めた時の氣持ちわるさに湯にでも這入つて直さないと、いつも忘れられないのであつた。三十前後から自分が染めてることは、もとのをつとたる田口のことだから、今だツておぼえてゐるだらう。

『若白がなどを嫁に貰つたのが間違ひだ』と、死んだおぢイさんは、こちらへも聽えよがしに、田口にこちらと別れることを勸めたこともあつた。その時には、田口は

『お父アんの女房でもないんだから、わたしの勝手です』と、きツぱり答へた。そしておぢイさん夫婦との二度目の同居をまたやめて、麻布の本村町へ別居した。その近處にあつたしらが染め髮ゆひの亭主と云ふのが文學好きで、田口——その時から多少の名は出てゐたので——に會ひたいと云つたけれども、田口は相手にしなかつた。それほど見識があつたものがこちらをよく愛して呉れてたそのむかしを思ひ出して、ちよツと恥かしい氣もした。

『然し、今、電車賃もないんですから、ね』と云つて、おせいは二十五錢の殘金はしまひ込んでて、三人分の往復電車賃を堤に出して貰つた。そして、政直までをもこんなに大きくしたと云ふ自慢をするつもりでつれて出た。久しぶりでうす化粧までしてゐた。そして市內電車を大塚終點でおりると、ガードの上にも電車がとほつてゐるし、またガードの先きの方にも電車があるのに驚き迷つてしまつた。堤さんはそんなことを詳しく云つて呉れなかつたし。通りすがりの人に聽いて見ると、先きの電車は、もう、市內のではなく、王子へ行く電車ださうだし。田口と云ふ小說家なら、な

んでも、ガードの下をとほつて左りの方へ這入つて行つた大分奥のところにゐる筈だとのことであつた。

して見ると、堤さんに書いて貰つてふところへ入れて來た圖にも確か、

『直ぐ左りへ入る』とあつたやうだが、そこのことだらうと思つて、圖を出して見るひまもなく、その方へ行つた。

そしてまた田口の名で聽いて見ると、

『その人なら、もツと、ずツと先きの、もと眞宗大學で、今は澁澤さんのお屋敷になつてゐる近處です』と教へて呉れた。

『さうですか？どうもありがたう』と答へたが、私かにこんなに遠さうな話でもなかつたがとの疑ひを生ぜしめながら進んだ。分らなければ大變だとして、政直がもう歸らうと云ひ出したのをなだめながら、雄作を相談相ひ手にあちらこちらと尋ねまわつて、十二時間も費やしたのである。そしてやツと突きとめたかと思ふと、それは元の住まひであつて

『今は天祖神社のそばにゐます』と云ふのであつた。

『ぢやア』と、おせいはやツと見當が付いたのを嬉しがつて、『それが本當でしようよ。わたしも何とか神社とは聽いて來たんですが、ね、つい、思ひ出せなかつたものですから。』

『本當だから本當のことを云つてあげるのです』と、教へて呉れた人は何だか不機嫌さうであつた。

『…………』こちらは、自分の一生懸命で探して來た心持ちも知らないで、おこつたりするのは變な男だと思ひながら、ちよツと禮を述べて政直の手を取つてやつた。そしてまた云はれた通りをうつせみ橋へ來て、それを渡ると、やがて神社の森が見えて、そのそばに『田口寓』『〇〇主義社』として二つの表札があるところへやツと到着することができた。

が、何だか少し恥かしいやうな、遠慮がちなやうな、そしてまたおそろしいやうな氣がして、先づ締まつてる門の戸のすきから、そツと中をのぞいて見た。兼て堤さんから話には聽いてた通り、つつじや菊を作つたり、蜜蜂を飼つたりしてゐると云ふそれらしい庭が左りの方に見えるし、小松菜や大根らしいその畑が右にあるやうだ。自分と一緒に暮し

てゐた無趣味な時とは丸で違つてゐると云ふ豫想が、餘り實際的に自分のあたまへ證明されたのでもあるから、自分は少からず向ふとの隔たりを感じないではゐられなかつた。そして雄作をじろりと返り見て、

『先きへお這入り上』と命じた。が、渠もおぢけが付いてたかして、尻込みしながら、にが笑ひをして、

『おかアさんから――』

『ちやア、政ちやん？』

『いやだア。』政直も赤い顔をしてあとずさりした。

『仕かたがない、ねい、お父アん（とつつ）のところぢやアないの』と、低い聲で叱つてから、おせいは自分で思ひ切つて戸を明けた。そして庭と畑とのあひだの敷き石を三間ばかりおづ／＼進んで行つて、玄關のがらす入り格子戸を引き明けた。

『御免下さい』が自分ながら人ごえのやうに聽えた。

それから、女中の案内で子供と共に玄關の三疊のまをとほつて、そのさきの六疊敷きの茶のまへ行くまでは、取りのぼせて殆ど夢中であつた。おそろしくもあり、早く見たくもある田口と向ひ會つた時、先づ何から云ひ出さうかと考へてた。が、幸ひにも、そこにゐたのは渠の今の女房だと云ふ女ばかりであつた。

『あなたが今の奥さんですか』と、少し馬鹿にして笑ひながら、挨拶をすませた。『まだお若いのです、ね。』そんなに若くツて、第一に大きな子供達の世話などができるかどうかがあやぶまれた。どうせ田口は無頓着で子供のことなどはかまはないだらうから。

『二階にゐますから、今呼びます、わ』と云つて、名は以前から唄にまで歌はれてるお象と云ふ女は玄關の方へ立つて行つた。そして『あんた』などと、越後生まれださうだのに、これも堤さん夫婦のやうなかみがたなまりで呼んだ、

『子供が來ましたよ。』

はしご段をどたばたさせて下りて來る音が聽えると、おせいはまた自分の顏がぼうツとほてつたのをおぼえた。

『來たか、ね』と云つて、田口がにこ〳〵して出て來たのをこちらはじろりと見上げたが、直ぐ下を向いてお辭儀をしながら、思つたよりもさう變はつてゐないと考へて、

『お變はりもなくお目出たうございます。』

『…………』田口はそれッ切り返事もしないで、そとの障子に近い隅に据わつてる長火鉢の前へ行つて、女とさし向ひに坐わつた。

『…………』おせいは田口の爲めにはそれ位の無愛相を當り前のことだと思つて氣にしなかつた。そして、もう、自分の心を落ち付けてしまつて、『今度堤さんのお世話で御承知下すつたので、子供をつれて來て見たんですが、ね。』

『つれて來て見たとは何のことだ?』田口はもと〳〵通りその持ち前の太い聲をして、こちらを横向きに見た。『來て見て、面白くなけりやア、また取り返さうと云ふのか?』

『さうぢやアありませんが、ね、いよ〳〵よこす日はわたしがまたよく調べて見てからにしようと思つて、けふはただ久しぶりのお目見えにつれて來たんです、わ。』

『矢ッ張り、下だらない易だらうが、そんなことアよせ!』

『だッて、こりやアわたしのいのちです、わ。云はば、もとの耶蘇敎の代りの信仰ですもの。』

『なアに、お前は疑ひ深いたちだから、とても、易なんかはほんとうに出よう筈がない。』

『わたしは、いつも子供にも云つて聽かせてゐるとほり、正直ですよ。だから、あなたがお目かけを山王のところへお隱しになつてた時でも』と、冷笑しながら、『直き見當が付いたぢやアありませんか?』

『ありやア、何も易で當たつたのぢやアない、さ。お前の氣ちがひにらみがひよッこり當つただけのことだ。』

『いいえ、違ひます。わたしのまことがちやんと易に現はれたのです。』

「そんなら、それでいいだらうから、なぜあんな家などうツちやつてしまつて、易の専門家にならないんだ？」

「見てゐて御覧なさい」と、おせいは自分からうち解けた笑ひになつて、『今に、きツと成つて見せます、わ。然し、家だツて何もうツちやるにやア及びません、わ。』

「持つてたツて、お前にやア持ちこたへられないやうすぢやアないか？」

「そんなことアうそです。誰れが云ふのか知りませんが』と、堤のことを思ひ浮べて、須がそんなことを云つてるのかと思ひながら、『これまでにも、あれをわたしから奪ひ取らうとして、いろんな人がわたしをだましに來ましたが、ね――』

「そりやア、お前が誰れから見ても色きちがひに見えるから、さ。」

「ありやア全くうそですよ。」炬燵の事件を云はれたのだと思つたのでちよッと顔が赤くなつたが、直ぐうち消して、「文子の思ひ違ひですもの。それに、あのちちイの山崎も――あなたのお友達でしたが、ね――度々やつて來ました。然し、とう／＼わたしが恥ぢをかかして二度と來られないやうにしてやつたのです。今度の中尾だツて、ちやんとわたしが看破つてゐましたから、裁判所へ出ても向ふはぐうのねも出せなかつたぢやアありませんか？』あの堤夫婦も當てになつたものぢやアないと思ひながら、『みんな、これもあなたの爲め、子供達の爲め、云はば、田口家の爲めぢやアありませんか？』

「いや、そんなおせつかいな考へにやア及ばないのだ』と、田口は反對した。こちらの意外にも、少しもこちらが苦勞して來たことを思ひやつては呉れないやうに、『子供だツて、お前が勝手に渡さなかつたのであつて、そのくせ、ろく／＼仕つけもしてないやうすだし――』

「わたしやア子供の教育にやア放任主義ですから、ね。それにしても』と、子供ふたりを返り見て、少からず自慢のつもりで、『これだけ大きくなつたんですから、ね。』

『大きくなるのア畜生でもなる！』田口の返事は相變らず亂暴であつた。そして渠がそのむかしもよく『ただなめずりまわすやうなのばかりが子供を育てる道ぢやァない』と云つたのを思ひ出せた。

『だツて、可愛けりやア仕かたがないでしよう』と、こちらはその時答へた。田口は不斷は無頓着なくせに、子供のことになると、隨分やかましくもあつた。が、いろ〳〵いそがしいことがあつて、こちらはさう手がまわらなかつた。

『放任主義よりやア、お前のアぶしようなんだ！昔、教員をしてゐたくせに、甲斐性もなく、一般の俗人同樣な考へになつてしまつて、學校へ行かせて置きさへすりやアそれでいいやうに思つてたにきまつてらア。世間のやつらは、ね、多くは子供をただ伊達に學校へやつてるやうなものだ。苦しいやり繰り算段をして、たとへば、醫科大學を卒業させたところで、家に財産がなけりやア、病院を建てることもできないし。また建てたところで、無理な借金の心配ばかりが先きに立つて、肝腎な專門技術よりやア親からの遺傳のやり繰りばかりが上手になつてしまう。それよりやア、身ぶん相當なところで學校を切り上げさせて、早く實社會へ出す方が自然のやりかただ。お前で云つて見りやア、まア、子供は早く勞働者にでもしてしまう方がましだ。』

『まさか、さうでもありませんが、ね。』こちらはひどいことを云ふと驚いたが、田口にはそれが當前のやうであつた。

『さうでもありませんぢやア行けないのだ』と、渠は言葉をつよくして、叱り付けた。『お前が若し子供をいつまでもそばに置いときたいなら、さうでもしなけりやアならないと云ふのだ。』

『だツて、お渡しすりやアいいでしよう』と、こちらは答へるより仕やうがなかつた。

『それに、今一つ云つて置くが、ね、あの家はお前の物であつて、もう、おれの物ぢやアない。田口家とは、だから、何らの關係もないので、あの家を維持できたところで、お前がそれを以つてこツちへ恩を着せようとするのは眞ツぴらだぞ。』

『だツて』と、おせいは不審になつたので云ひ返した、『お位牌まで──あなたの先祖代々のですよ──預つてあるぢ

ヤアありませんか？』

『馬鹿！位牌なんか子供と共に返せ！たとへば、日本の國民がとんぼがたの狹い陸地などに未練がなくなつて阿弗利加へ移つてしまつたとして、そのあとの地面など何になると思ふ？そしてなほ未練があらば、取り返すだけだ。お前はそれでいいか？』

『そりやア困りますわ、ね。』こちらは斯う云つて、田口を見つめながら、少からずがツかりした。自分は、堀川町の家が自分の物になつてるけれども、それを持ちこたへることは、子供の關係から、矢ツ張り、田口家の爲めだと正直に思ひ込んでゐたのである。これを田口は却つておせつかいだと云ふのであつた。そこに初めて自分は田口家と全く無關係にされてゐたことが分つた。『ぢやア、子供をあなたは一體どうしようと思つてるのです？』

『そんなことア分り切つてて、尋ねるまでもないぢやアないか？うへの子どもはかたツぱしから死んで――それもみんなお前のだらしないせいであつたとしか思へないが――今ぢやア雄作が總領だからおれのあと取りにたるんだ。』

『…………』こちらには、それも亦意外であつた。『あなたは子供はみんな入らないとおツしやつたぢやアありませんか？』

『入らないツてたツて、法律がさうたやすく許すもんか？』

『…………』さうなつて呉れりやア、實は、これより結構なことはないのであつた。こちらは田口にそんな意志はないと思つてたから、渠が死にさへすれば直ぐ田口家に對する相續上の訴訟を起さうと考へてゐたのである。

『雄作に取つちやア、無論、それに越した幸ひはないのですが、ね、――ぢやア、政直はどうなりますんです？堤さんのお話しでは、あなたが雄作をわたしのあと取りにして、政直を堤さんに呉れるとおツしやつたさうぢやアありませんか？』

『そりやア、雄作がこツちへ來ない時のこと、さ。』

『ちやア、來た以上は可愛がつてやつて呉れますか、ね』と、おせいはまた自分の子供らを返り見ながら、『みんなお父アんをこわい者のやうに思つてたんですが？』

『そりやア、お前がさうさせたの、さ。氣ちがひじみて、ね。』

『そんなことアない、わ、ねい』と、實は、當つてないこともないのを云ひくるめるつもりで、笑ひながら、子供の方へ向いてわざと念を押した。

『…………』子供はふたりとも返事しなかつたが、それとなくこちらの意を受けたかのやうにからだをもじ〳〵させてゐた。

『それで雄作のことは分りましたが、――ちやア、政直をわたしの方へ下さるんですか？』

『くどいやつだ、なア！欲しけりやア、やるにきまつてる！』

『だツて』と、こちらから田口の機嫌を取る爲めに笑つて見せながら、『聽いて置かなきやア分らないぢやアありませんか？』

『分らないのアお前ばかりだ。』

『だツて、ねい』と、おせいはまた女の方へも向いて、ちよツと媚びを見せた。雄作が案外らくに向ふへ受け取られたやうに、若しかまた政直をも欲しくなつてこちらへ渡して置けないとでも云ふことになつたら、文子は死んでしまつたし、自分はあぶ蜂取らずになるではないか？今から心配なのはそればかりであつた。

五

『わたしからも云つて置きますが』と、お衆は――こちらが何か云ひ出すだらうと私かに待ち受けてた通りに――云ひ出した、『雄作さんがこツちへ來た以上は、先づ、おとうさんの云ふことばかりでなく、わたしの云ふことも聽いて

貰はなければなりませんよ。』

『そりやア、さう云つて聴かせてありますが、ね。』斯う何くはぬ顔でおせいは子供に代つて受けたが、實は、まだそこまでのことはどう云ふ風にさせようかと云ふことを考へ中であつた。いよ〳〵頭を手放すことになるその日までに何とかきめてやればいいと思つてだ。たとへば、うわべだけではまま母にも素直に見せてゐなければならぬが、もと〳〵あかの他人だから、實母のこちらを忘れるやうなことがあつてはいけないとか、何とか。然し、今そんなことを云へた義理でもなし、また云ふにも及ばないので、ただ話を別な無事な方へ轉じさせる爲めに、口を明いて笑ひながら、この家のことを

『なか〳〵分りませんでしたよ。何だか、ずツと奥の方までも迷つて行つてしまつて』などと語つた。そして、ふと思ひ出して、明いてる口びるを縮めてさきの方で合はせると、そのさきがとがつてるやうな氣がした。

『前齒が大きいうへに出ッ張つてて、おまけに締まりなく笑ふので、どす赤い齒ぐきまでが一面に出る』と、意地惡くも、よくこちらの惡くちを云つた田口だ。が、それがこちらの堤さんに書いて貰つて來た地圖のことを聽いて、素直にも『どれ、出して見ろ。』

『わたしやア、子供をつれてることだし、もう、一旦引き返さうかと考へてしまひました、わ』と云ひながら、ふところのがま口に歸りの電車切符と共に入れてある紙切れを出して、先づ自分が見て見ると、矢ッ張り、圖の方がほんとうであつたらしい。『成るほど、堤さんも斯う書いてあつたんですが、ね、何だかわさ〳〵して忘れてしまつたんで――』

『この通りだ』と、田口は地圖を取り上げてから云つた。『神社の鳥居や敷き石まで書いてあらア。これで分らなかつたんぢやア、お前がどうかしてゐるんだ。』

『…………』さう云はれると、こちらもむきになつて、『わたしやア、なにも、どうもしてゐやアしない、わ。田口さんなら、ガードをくぐつて左りの方へ行つたところだと、間違つたことを敎へて呉れた人が惡いんぢやアあ

りませんか？』

『なんでもお前はあとの人のことを信ずるくせだ。さうしてまたそのあとのがあると、直ぐまたその前のを疑ふんだ。惡いくせ、さ。』

『さう馬鹿にしたものでもありませんよ。わたしだツて、あの山崎をあとからはね付けたぢやアありませんか？』

『ばアさんがぢイさんをはね付けたツて、それが何の手がらだい？』

『ふ、ふ』と、お兼は人の前をも憚らず吹き出した。子供の方と顔を見合せてだ。

『…………』が、こちらは先刻からそれとなく樣子を見てゐると、かの女は口かずも少く、つつましやかにしてゐて、先きの目かけなどとは違ひ、思つたよりおとなしい女のやうだ。これなら、子供の爲めにもよく、またこちらが時々やつて來るにも都合がいいだらうとは思ひながらも、『そりやア、お若い人を持つあなたは相變らず御自分も若い氣でゐられましようが、ね。』

それでも、お兼の心でお茶も出たし、お菓子には羊かんと奇麗に赤い林檎も出た。カステラに似て黒い色の西洋菓子をも珍らしいのでたべて見たが、ぶつ〳〵した物が齒に當つて、あまりおいしい物ではなかつた――子供はみなうまさうにして喰べたけれども。

そのうちに、奥坐敷の方で寢てゐた春子と云ふ女の兒が起きて來た。お兼がそれを女中から抱き取ると、『坊やのにイちやん達が來まちたよ、御覧なちやい』などと云つた。ことしの生まれとしては大きくもあつたし、またおとなしさうでもあつた。

『いい兒ぢやアありませんか』と、愛相だけは云つたが、こちらは先づ父の愛を段々にその子ばかりに取られはしないか知らんと思へた。

『子供に蜜蜂でも見せてやるから、來い』と云つて、田口は奥坐敷の方へ行つたので、そのあとからおせいも子供に

ついて行つて見た。

『雄作さん達は玄關から銘々の下駄をはいておまわりなさい』と、もう、お兼が母親氣取りで命令してゐるのがこちらには面白くなかつた。が、それよりも一層、蜂と聽いては、子供が刺されはしないかと心配であつた。寒いのと心配なのとで、こちらは緣ばなに立つてからだを縮めてゐると、黄の亂菊の大輪がまだ二つばかりおそ咲きに咲き殘つてる庭の中で、田口は寒さうもなく、ちやぼ檜葉の根もとなる蜂の巢の箱の横にしやがんで、子供達に何か說明してゐた。

『雄ちやん達は刺されちやアいけませんよ。』

『さう刺すものではありませんよ』と、お兼は兒を抱いてゐながら、こちらと一緖に見てゐて云つた。『そらを見てゐて御覽なさい。小さい黑い物がばら〳〵と雨つぶのやうに落ちて來るでしよう。あれはみんなうちの蜂ですよ。』

『…………』ちよツと、目を細めてそらを見たけれども、まぼしいのと恐ろしいのとで別に何も見えなかつた。『わたしにやアちツとも分りませんが、ね。』

『蜂と云ふ物は』と、田口が今度はこちらにも聽えるやうにして、『斯うしてせツせと働らいて冬ごもりの支度をしてゐるんだ。人間はせツせと勉强して一人前になるんだ。さうしてえらくなるとならないとは一人前になつた上のことだ。あの幸田のやうに、無常識の老いぼれになるのア禁物だぞ。』

『わたしだツて』と、笑ひながら、こちらはむきになつて、『常識は持つてゐますさア、ね。人間が正直でとほすことア一番常識です、わ。』

『こツそりおれのかねでへそ繰りを拵らへて、それが百圓とまとまつたからツて、またこツそりへツぽこな銀行へ預けて、すツかりすつてしまつたなどが不正直ぢやアないのか？』

『…………』あんなことまで今更ら誰れに聽いたのだらうと考へた。ふところ手のままで、かゆいとこ

ろを搔きながら、『あのときやア親類のものが惡かつたんぢやアありませんか？わたしは家の爲めを思つてしたんですもの。どうせ、あなたなんか當てにならないんですから、ね。』

みんなが再び茶のまへ立ち戾つて、親子三人がおひる御はん代りに天どんを御馳走されてからも、まだ〳〵むかし物語りの不平のたねは盡きなかつたのである。が、

『そんなことアいくら云つたツて無益だから、よせ』と云はれてしまつた。

こちらが思つてるほどには、田口は人間としての思ひやりも何もないのであつた。最初にはしご段を飛び下りて來たり、蜜蜂や植物の講釋を叮嚀にしたりするところを見ると、まんざら子供を可愛くないことはないやうだ。が、初めのうちの珍らしがりであつて、あと〳〵になると、こちらがいぢめられたやうに、また、どんないぢめかたをするかも知れまい。それがまた一つの心配になつた。半ばいやな氣になつて、『それぢやア、どうしましよう、ね？』

『なにをだ？』

『雄ちやんのことを？』

『まだそんなことを云つてるのか？來ると云ふから、こツちはそのつもりでゐるんだ！』

『だツて』と、また胡麻化し笑ひになつて、『ほんとに可愛がつてやつて呉れますか、ね？』

『くどい！』

『…………』斯う云はれては、こちらも取り付く島がなかつた。けふはこれで引き取つてと思ひながら、なほ、田口を賴むやうに見やつて、『ぢやア、よろしく賴みますよ。』

『…………』田口は返事をしなかつた、が、それがまた却つてこちらに男の賴母しいところのやうにも見えた。

そして、お象の方が

『わたしも引き受けた以上は、わたしの子供同樣にしますから、さう御心配なさらないでもようございますよ』と云つ

たのが、ほんのそらぞらしいお世辭ではないか知らんと思へた。そして、そんなうわッつらの愛嬌で以つて人のいい田口を丸め込んでゐるのではないか、とも。

こちらは年も行つてるだけに、そんな手には乘るものかと云ふ氣の引き締まりをおぼえたついでに、少し向ふのふところをへづつてやらなければ損だと思つた。そして、

『ぢやア、兎に角、歸りますが、ね、三人の歸りの電車賃を下さいよ』と、ねだつて見た。お袋が直ぐその財布の口を開らき初めたので、『さうして今度つれて來る時のもどうぞ。』それを受け取ると、今度來る時はまた堤から電車賃を往復とも取つてやればいいと考へながら、いとまを告げた。そして今度は、田口に云はれた通り、天祖神社とかの森の中を拔けながら、『斯う云ふ遊びどころもあつて、雄ちやんはこれからいい、ね』と、自分としては半ば子供に對してのいや味を云ひ加へた。そしてほんとうに父のところへ行きたいのか、母はどうも氣に向かないがと云ふことを相談して見たかつた。

が、雄作はと見ると、これもこちらのそばにはゐなかつた。そして少し隔つたところへ行つて、弟の政直と共に矢ツ張り、母の心を知らない子のやうに、いてふの枯れ葉などを拾つてゐた。

さうだ、もう、いよ〳〵秋も過ぎよう。うか〳〵してゐると、年の暮れも直きだ！

『本へ挾むのにいいよ』などと、子供が語り合つてるのが聽えた。

『…………』多くの大きな杉の木に立ちまじつて、また大きないてふが三本も四本もある。立ちどまつて、これを見上げると、高いえだ葉にそらもおほはれて、自分の目がくらんで凄いやうでもあつた。が、久しぶりでこんな天然に觸れて、自分も何だかのんびりとせい〳〵したのである。おかぐら堂もあつて、氣が付くと、自分の後ろが神社だ。僅かにその方へ向き直つて、ついでにだが、手を叩いて拜んだ。そして子供の爲め、自分の爲めに、けふのこのかけ合ひごとがどちらともうまく行くやうに願つた。

それから、また子供はと見ると、兄弟が手をつなぎ合はせて、大きないてふの木の一つを根もとに於いて取り卷いて見ようとしてゐた。が、おとなだツて、六人や七人の手のつなぎでは、とても取り卷けさうではなかつた。ふたりも斷念したかして、こちらへ戻つて來ながら、政直がその兄のあとから小癪らしい聲をかけた、

『馬鹿に大きい、なア。』

『そりやア、お前』と、こちらは兄に代つて笑ひながら答へてやつた、『丁度、まア、うちのいちぢくの樹に蟬がとまつたよりも比べ物にならないから、ね。』

『馬鹿に大きいんだもの』と、雄作も田口のうちでかしこまつてたやうな窮屈を全く離れてゐた。それに向つて、

『雄ちやんは矢ツ張りお父(とつ)アんのところへ行く氣か、え？』

『えい。』

『…………』行きたいなら行かせてもいいが、文子と云ひ、今度の雄作と云ひ、子供と云ふものも亦男おやと同じやうに珍らしがりなのか知らんと思へた。今までひとりで苦勞して育てて來た母おやのことなどは、あまり察しても呉れないで！

そこをとほり拔けると、直ぐ敷き石の道があつて、堤さんの書いて呉れた鳥居がその先きに見えるのであつた。

『近いんだ、ね』と、政直が云つた。

『おかアさんがあんな方へ行くからいけなかつたのだ。』これは雄作がその父を眞似ての小ごとであると受け取れた。

『おツ母さんだツて、ね、何もわけがなく行つたんぢやアないよ。』おせいは自分の子供にまでも道の眞ン中で口をとがらせて辯解をして置かなければならぬ氣がした。田口は子供のゐる前ででも渠等の母おやをののしつて見せる男だから、今後とも、こちらがどんな馬鹿なことを云はれるかも知れない。そんな場合に、子供が父のこと葉をそのまま信じないやうにはして置く必要があらう。で、ここでも、田口に向つて訴へたのと同じ理由で以つて、『間違つたことを敎へた人が

惡いんぢやアないか、ね？」

六

雄作が田口に受け入れられることになつたのを喜んだのは、おせい自身よりも堤夫婦であつた。

「それで世話甲斐もあつて、こッちやも嬉しい、わ。」堤のお竹さんは斯う云つた。すると、堤さんはまた、

「いッそのこと、政ちやんも渡したらどうや」と附け加へた。

「…………」おせいは自分としてむッとしないではゐられなかつた。あんまり馬鹿にされてると思へた。子供のうちの一名をさへまだ自分は渡さうか、渡すまいかと考へて歸つて來たのに、今一名をもとは一體何のことだ？

「ほたら、あんたの負擔がそれだけ輕うなつて、子供の心配なく、あんたの好きで凝つてる易の方を十分にやれます。」

「易なんか、まだどうでもいいんですよ。」こちらは凝つてると云はれれば凝つてるのだが、この方は自分のをとこ師匠のやうにもッと年を取つてからでもかまはない。それまでは、もッと研究だけをしッかりやるつもりである。そんなことにまで堤さんが干渉しようとするそのこんたんを考へて見るに、なか〳〵うッかりしてはゐられなかつた。

渠が子供のことでこちらと田口との仲へ這入つて呉れたのは、必らずしも子供の爲めではなからう。渠は、もう、この家を自分の物になつたやうに思つてて、きッと、自分の負擔を少しでもへらさうとしてゐるのだらう。が、自分としては、營業を人にまかせることさへ、もう、中尾で懲りごりしたのだ。堤夫婦と一緒に住むことはかまはない。そして堤が日々の營業費を出して、月末の總勘定に於ける利益をほんとうに公平に分配するのなら。然し、はッきりとさうもきめないで、ずる〳〵べッたりにゐずわつて、たまにお客さんのおかずに小ごとを云つたりしてゐるのでは、あんまり虫がよ過ぎるではないか？

いつまで奥さんの見習ひだ？どうせ藝者をしてゐたをんななんかが、如何に堅氣になつたッて、締まりはなからうか

ら、まかせッ切りにはできないのである。堤さん自身がもッと本氣にならないでは駄目だ。そして少し本氣になるところを見せると、つまり、こちらの子供までを邪魔にしようとする。そりやア、堤も

『僕が政ちやんを貰ふにしても、今のところ、ここで育てるよりも田口君のところへ賴んで置いた方が得や。學問の發達と云ふ點から云ふても、また金錢上の方からでも』と云ふ道理はくッ附けた。

『…………』が、そんなことをらくに云ふには、疑つて見れば、何か田口との向ふ二人ッ切りの相談でも濟んでるのかも知れなかつた。堤さんの初めに云つたところでは、雄作を一人前にしたらこちらへ呉れるにきまつてるから、政直は堤の養子に貰つてもいいとのことであつた。が、行つて見ると、田口は――子供を見て惜しくなつた爲めか――雄作は何と云つても法律上の相續人にすると云つた。そして政直の方ならこちらへやると。だのに、その政直をもまた今度は堤が向ふへやれと云ふのだ。得になるからッて、そんなうまいわなに落して子供をみんな母親の手から引き放し、子を欲しがつてる堤は田口から政直を直接にゆづり受け、その代り、この家はこの家で再び田口へ取り返してやるとでも云ふ陰謀ではないか知らん？斯う考へると、堤夫婦にゐずわられたのがよく易に合つてゐる。つまり、敵の間者を住み込ませてあることになつて、なかなか油斷すべきではなかつた。

『ちよッと考へて見ても分るこッちやないか』と、堤は然しこちらの心も知らないのでこの話しを進めた。渠のときまつてる二階の三疊に於いてだ。こちらは主人のことだから、もと死んだおぢイさんの居間になつてた下の八疊の坐敷を占領してゐたが――。『あんたに子供の心配と營業上の心配とがないやうになつたら、あんたの心もこれまでとはちごて、よく落ち付いて來るさかい、あんたの目的や云ふその易が進んます。あんたには少し人とちごたとこがあるさかい、きッと、易者には持つて來いや。あんたもえいとこへ氣が付いてるんやさかい、早うそれに成れるやうにすりやえいやないか――營業の方はあんたの云ふ通り公平に利益分配の約束をきめれば、僕がしッかり引き受けまッさかい？』

『さうです。ね』とは、おせいも渠や奥さんの顔いろに注意しながら答へたが、向ふの云ひ出しかたが、もう、遲いや

うに思はれた。どうも、自分の方にはそらぞらしく聽えて。

『僕らもさう〳〵あんたの男しゆや女中さんがはりになつてはをられん』と、堤は冗談にまぎらせながらだらうが、『あんたが營業上にはツきりした委任を約束して呉れませんと、お互ひに曖昧で、な。』

『…………』はツきりしないのは却つてさう云ふほうの本人ではないかと云はないばかりに、おせいはわざとにや〳〵笑ひをしてゐた。自分は向ふのやうすが獨り手にはツきりするまで待つてゐても、さう損にはならないのであつた。こちらの融通が行き詰れば、向ふにたよつてればいいのだから。地代の大分とどこほつてるのも、こないだ、多少、地主の氣がすむやうに堤が拂つて呉れたりして。

『さうでないと、な、僕らはさう遊んでもをれんさかい、また別に仕事を見付けまッせ。』

『…………』さう俄かに威かされては、然し、直ぐその代りは見付けられるものでないから、こちらもちよッと困るのであつた。『兎に角、あなたがたによろしく賴みます、わ』と答へた。

『兎に角ツて、おせいさん、こッちやは一と身上つぶして來た腹からの商人や。それに、あんたは昔から計算に鈍うて田口君に呆れられた女教員さんや。そろばんを持つた上のことなら、安心して、すツかりこッちやにまかせて置きなさい。』

『だッて、わたしだッてもこれまでこの家を無事に持ちこたへて來たんですから、ね。』さう馬鹿にされてるにも及ばないのであつた。それに、どうせこちらと商人肌の人とは金錢上の鋭敏さが違つてるに相違ないのだから、こちらは却つてすッかりなんてまかせて溜るものではない。

『けれど、田口君は云つてをりました』と、これは堤さんも笑ひばなしだらうが、『幸田があの家をそろばんで以つて持ちこたへて來たなんて云つてるのはちやんちやらをかしい。ただ無方針に出たら目の強情で持つて來たんだて、な。』

『田口の云ふことなんか、當てになりますもんか？』おせいはもとのをつとのことにかこ付けて、堤を叱り付けたつも

りになつた。が、堤がたいい氣になつて、雄がこの家とこちらの生活とを引き受けるのを機會として、易に熱中しろ。そして思ひ切つて髮をも切つたらどうか、とまで干渉を進めて來た。

『切り下げ髮にでもして、ちよッとちごた業者のやうな服を着て、どこか場所のえい四つかどの、狹うてもえいから、立て机を出せる店を持つて御覽。あんたはきッとをんな易者として有名になり、店もはやるに違ひない。』

『…………』珍らしいからと云ふのだらうが、世間の珍らしがりの當てにならぬことは堤自身でも前に云つてたではないか？それに、こちらはまだ五十歳にも達しないのに。たとへしらがでも、髮を切ることなどはしたくないのである。心では、むッとなつたが、

『それもさぞありがたいことでしよう、ね』と、笑ひにまぎらせて、おせいはその場をはづしてしまつた。そしてまた堤夫婦の要求をそのままにして置いた。

『今のうちは珍らしいから、田口君も雄ちやんを相續人にする云うてるけれど、向ふの春ちやんが大けいなつたら、その方をかあゆなつて、考へが變はるに違ひない。』田口君のこれまでの口ぶりもさうやさかい』と、堤さんの云つたことがあとでまた氣にかかり出したのである。

『…………』こちらには粗暴で、無頓着で、氣の變はり易い田口を、どうも、信用できなかつた。そして雄作を改めてつれて行くことは暫らくさし控へた。すると、雄作は親の氣も知らないでやい〳〵云ふし、田口からもいつよこすのだとハガキで催促して來た。で、向ふのやうすを今一度調べて來るつもりで。おせいはまた——今度は自分ひとりで——行つて見た。

『お前なんぞが何度來たツて用はない』と、田口はあたまから例の罵倒をあびせかけた。

『だッて』と、こちらは笑ひにまぎらせながら、『いい日を調べて見ないぢやア仕やうがないぢやアありませんか？』

『多分さうだらうと思ひまして、わたくしが調べて見ましたところでは、いい日はいくらでもございましたよ』と、お

象も利いたようにこの道のことを云ひ出した。

『…………』なんだ、白うとがとは思へたが、こちらはその實、まだそこまで氣が進んでゐなかつたのだ。いよ〳〵くろうとが調べることになれば、はしらごよみのおもてに出てゐるばかりでは濟まないのだ。そこがいゝ師匠やいゝ參考書を持つたこちらの德ではないか？『ぢやア、わたしの先生ともよく相談して見まして――。』

『なんだ、先生、先生ツて、そりやアお前のお茶のみ友達かい』と、口の惡い田口はからかつた。

『まさか、わたしだツて――？』こちらはお象までが吹き出したのを怒らないではゐられなかつた。そりやア、自分のいそがしくない時などには、こちらから出かけて行つて、自分も弟子の一人として、易を見て貰ひに來る客どもにお茶を出したりする手つだひはしたこともある。然し、それも經驗である。そして先生の弟子達のうちへも、たツた獨りのそんな弟子の顏をつないで置く必要もあらう。そして自分も多少の見識を以つて渠等に入りまじつてるので、決して馬鹿になどされてゐるおぼえがない。が、田口は今では、もう、自分と戶籍上では他人同士だのに、いまだにこちらを目したにばかり見ようとするのが――お象と共にゐる爲めだと思ふと、なほ更ら――面白くなく見へた。よしんば、お茶のみ友達になつてゐたツて、今では田口がかれこれ云へたものでもないが――。

もと〳〵通り默つてれば、もと〳〵通りであつたものを――こちらからわざ〳〵藪へびを出したやうなものだ。こりやア、どうしても、自分は子供を渡すとしても、雜作には色んなことを云ひ含めて置かなければなるまいと思ひながら、おひるをよばれてから電車に乘つた。田口へつづけざまには無心も云へなかつたが、師匠のところからは步いて歸つてもいゝつもりで、電車道をそこへ立ち寄つた。そして子供の爲めは自分の爲めだから、斯う云ふことにも慾が出て駄目だと云ふこともあるので、よく先生にまかせていゝ日を見て貰つた。

自分の考へでは、子供はみづのへ寅の八白で、その生まれ性は金箔のきんである。それに對して一番肝腎な相ひ手は向ふの繼母で、これもみづのへの歲だが、午の一白、楊柳の木性だ。

『して見ると、先生、こりやア金尅木ですから、いつも子供がその相ひ手に勝つてて、いいわけでしようが、ね――？』
『ところが、相尅と云ふことがあるぢやアないか』と、師匠は意外にも答へた。そして『元來、木は東方にくらゐし、春をつかさどるもので――故に草木は春に至つて發生して盛んに茂るなりとある。だから、さう安直にはいい合ひ性とア云はれない。』
『へい――？』こちらはさうなつて來ると、もう、いつものやうにまた何が何やら分らなくなるのであつた。五行と相尅の關係がいつも自分の思ふやうにはさうはツきりと行かなかつた。如何に子供に强みがあつても、親は矢ツ張り親だから、楯を突くやうなことはやらせないやうに云つて聽かせなければいけないと云ふのだ。然し、金が木に刻つ以上は、どこまでもそれで行つてよささうに、こちらでは思はれるのに。
『だから、せめてはいい月といい日をえらばねばならない』と云つて、師匠はこの十一月は六白でよし、けふから三日目の廿九日は九紫の辰の大安でいいときめて呉れた。
兎に角、この時の師匠が考へをする態度は如何にもかう〳〵しい物であつた。田口がうはひげを短く切つて若返つてるのも男らしいと云へば云へるが、長い口ひげをはやしたかう〳〵しい老人も、また、自分から見れば、なか〳〵尊敬に價へする。子供のうちのひとりをこの師匠のやうに成らせてやつてもいいのだ。が、今のことでは、どうも、こちらの滿足であるやうには子供と向ふの繼母との合ひ性を解釋されてゐないのが少し面白くなかつた。
その心持ちを露骨にも云へないので、自分のくびを曲げながら、
『わたしにやア、どうも、まだ分らないところがあるんです、ね。』
『幸田はまだ色けと、我慾とが勝つてるからいかん』と、矢ツ張り、田口でも云ひさうなことを云はれた。
『さうでもないのですが、ね』と、かの女は自分でも思ひ當つてゐないでもなかつたことを云ひくるめてしまつた。が、實際には、自分としてまだ〳〵師匠のいつも云はれる通りのことが拔けないのである。それも、薄情な田口に對して佷

みを持つたことが深く自分にしみ込んでる爲めだと分つてゐた。それに、また、家のことがうまく行かない爲めもあつた。

相變らずその日にちにも疑ひを抱きながら、歩いてうちへ歸つて來ると、雄作は學校から歸つてゐて、待ちかまへてたやうに玄關へ飛び出して來て、

「いよ〳〵あすから行つてもよくなつて」と尋ねた。

「お前はなんだ、ね！」いきなり叱つたほど、こちらの胸が立つてゐた。『文も文であつたが、お前もそんなにおツ母さんを見棄てたいのか、え？』

『…………』雄作がいやな顏をして立ちながらあとずさりしたのに、こちらはつけ込んで、なほ睨らみ付けながら、

『そんなことを云はないでおとなしいのは、今ぢやア政直ばかりだ。』

『お歸り』と、臺どころで働いてたお竹さんがやさしく云つて呉れたので、おせいは少し自分が主人らしい氣持ちをおぼえた。而も五十萬圓の家の奧さんたるべきであつた人を私かに女中がはりと見てゐた。

政直も出て來たが、直ぐ物をねだりがほであつた。それを見ると、また、渠をも叱りたくなつて、

『そんな顏をしたツて、何もありやアしないよ！おツ母さんは雄ちやんの用で行つて來たばかりだから、ね！』わざ〳〵行つたのだから、何か少しでも子供にみやげを呉れて置けばいいのに、あのお兼も若いからあんまり氣が利かなかつた。

早速、先づ、臺どころの方へ行つて見ると、お客さんの爲めに晩のおかずにしようと思つて、家を出る前に買つて置いた大根二本のうち、その一本が無くなつてるではないか？お竹さんに聽いて見ると、

『わたし存じませんよ』との答へだ。

『然し、なくなるわけがないんですが、ね。』こちらはてツきり堤夫婦がこツそり勝手におひるのおさいにしたのだらう

と思ひ込んでしまつた。そしてわざと子供を呼び付けて、『お前達は知らないか、え』と、大きな聲でから意張りに責めた。

すると、政直がわけもなく、

『あア、大根のことがい』と云ふのだ。

『知れたことです！』

『ぢやア、僕があすこへ植ゑて置いたよ。』

『どこへ？』茶のまから中の廊下をとほつて、うら縁がはをまた八疊のまの前よりも奥の方へ行つて見ると、兩隣りの板べいを境として、幅二間ばかりの庭が鍵の手になつてる。その三角の隅にいちぢくが一本立つてる。そのまた根もとに、問題の大根が福祿壽の繪の長いあたまのやうに眞ッ白な太い先きびろがりの根をうへに出して、葉の方が土の中に埋め込まれてゐた。これを見ると、おせいはおかしいよりも情けなくなつた。町ばかりで育つた爲めに、こんな子供に植物上の智識がまるでなかつたと云ふことを發見した爲めばかりでなく、もう、この子までもその父の眞似をしようとして、畑づくりを初めたのだ。『馬鹿だ、ねい、お前は！大根は白い方が根でありますよ！』

七

おせいは子供や堤夫婦にばかりでなく、何にでもさわるものには當り散らしたいやうな氣がして、十一月二十九日の大安日も空しくいなしてしまつた。

それとは知らぬ雄作は、毎日のやうに、はたから

『よう、巣鴨へ早く行かしてよ』とせがんだ。そして學校までをわざ／＼ぐずねて休んだ。

『うるさい、ね！』おせいは斯うおもてでは叱つた。が、自分は長火鉢のそばなる自分の席に尻を据ゑてゐながら、—

ト參考書をわざ〳〵自分の部屋から持つて來るだけの努力もなく、——あのお衆も多分ただ見てゐるらしいと思はれるのと同じやうなこよみを、そばにつッ立つてる子供に命じて、はしらから外して來させた。そして十二月の一日から繰つて行くと、三日のひがよかつた。三碧のさき負け、きのへさるだから、さきの相ひ手が先づ負けたあとへ、こちらの子供が勝ちを得つつこの家を去ると云ふ緣喜もあつた。そして向ふへ乘り込むにも、午前よりは午後がいいのであつた。で、ふとその氣になつてしまつたので、三日になるその前夜、ひそかに雄作を自分の室なる炬燵——これは他の家よりも每年早く開らいてゐた——のそばに呼んで、『お前がさう行きたいなら、行かしてやつてもいいが、ね、一圓、お前はわたしをどう思つてるの？』

『おかアさんと思つてます。』

『そりやア、分り切つてるが、ね、そのおッ母さんは早くからお前のお父アんに棄てられて、これまで苦勞して來たことはお前も知つてる通りぢやアないか、ね？』

『はい、知つてます。』

『ぢやア、どうしてさうおッ母さんを棄てて行きたいの？』

『棄てて行くのぢやアありません。僕が勉强させて貰ひに行くんです。』

『ぢやア、お父アんの方へ行つても、このおッ母さんのことは忘れないか、え？』

『はい。』

『どう云ふ風に忘れないのです』と、こちらがまじめに念を押したには、渠が向ふへ行けば、うちにゐるよりもいい物をたべて、きッとこの母よりも贅澤ができると云ふことがからまつてゐた。向ふへ自分が一度行つて見たところによると、堤さんから聽いて想像してゐたよりも結構な暮しを田口はしてゐるらしい。あのやうすで行くと、雄作が大きくなつてあとを取るまでには大分おかねも品物もできるだらう。その時には、それを自分が雄作の實母として乘り込んで一

緒に占領してしまうことができよう。が、先づ、それまで親子がかけ離れてゐて、雄作がうまい物をたべてゐるにも拘らず、自分は相變らずこれから五年なり十年なりを女ひとりの腕で貧乏してゐなければならぬかと思ふと、これが少からず渠に對して嫉ましかつた。渠は然し馬鹿だからそこまで氣が付かなかつた。そして

『どう云ふふうツて――僕が中學や大學を卒業したら――』

『そんなことは分り切つてるぢやアないか、ね？』一人前になつて母をたべさせてやらうと云ふのだらうが、こちらはそんな遠いさきのことを云つてるのではなかつた。

『ぢやア、忘れないやうに時々やつて來ます。』

『それもさうだが――』ぼんやりとただ手ぶらでやつて來たツて、母を喜ばせることにはならないではないか？この要求をどう云つてそれとなく聽かせたらいいかと考へてるうちに、『お前のお父アんは澤山おかねが取れるんだよ』と云ふ言葉が口を走り出た。『それだのに、あのお兼と云ふ女はお前の爲めにはまま母で、もツと詳しく云つて見りやア、縁もゆかりもないあかの他人ぢやアないか、ね？』

『それは知つてゐます』と、雄作は答へたが、こちらはさう云ふ問答では自分の云はうとするところへ直ぐには引き込めなかつた。

『そのことも知つてるべき筈だが、ね』と、自烈たい氣がして、『それよりもまだ大切なことがないか、え？』

『大切ツて――？』

『…………』さうだ、田口の儲けるおかねをあの女に自由にさせるな、とも云ひたかつたのである。お人よしのところがある田口のことだから、またその女房にへそ繰りをどし／＼されてゐるかも知れないから。さうして、雄作があとを取る時になつて見れば、田口の財産がまるで無くなつてゐるかも。然し、そんなことは雄作が幼稚な子供として、今のところ、どうすることもできないだらう。『大切ツて、おツ母さんの爲めに、さ。』

「まま母を追ひ出すことですか？」

「…………」それには、こちらも驚いてしまつた。そんなおそろしい考へが、教へられないでも、今から子供にあるのかと思つた。『さうなれば、無論、おッ母さんにも結構だが、ねー―とても、お前にやアできないことだらう』と、思はず調子をむかし英語でをそはつた疑問のやうに尻あがりにした。『それよりやア、お前、うわべだけおとなしくして、まま母のことをおッ母さんなり、おかアさんなりと云つて、お賃にもおいしい物をどッさり貰つた方がいいちやアないか、ね？さうして、さ』と、やッと自分の云ひたいところへ達して、子供をそそのかすやうな氣で、『さうして、さ、このおッ母さんへも時々そのおいしい物をおみやげに持つて來りやア、一番、わたしをお前がいつまでもおぼえてゐる證據になるぢやアないか？』

『分りました。』

『なんでも』と、今度は少し改まつて、『このおッ母さんをいつまでも忘れちやアいけませんよ。忘れるやうなら、初めからわたしが行かせませんから。』それから、また、別に自分がこれまでに田口家の爲めに盡して來たことを改めて云ひ聽かせた。まして向ふへ行つた以上は、お父アんの氣に入るやうにして、へたに廢嫡などされては承知しない。『さうしてゐるうちにやア、また、お前やわたし達の運が向いて來て、田口家がお前やわたしの物になるんだから、ね。』

『…………』

『分つただらう、ね。』これだけ詳しく、叮嚀に云つて置きさへすれば、雄作がその時になつて、お兼やその子達を追ひ出しても、こちらを入れて呉れるだらうと察しられた。都合によれば、時機を見て、また、雄作をおだてて今からでもお兼のやつてる悪いことを田口へうそにもこッそり云ひあばかせ、かの女を不信用にして出してしまつたあとへ、また自分が入り込んでもいいのだが、こちらの考へをそこまでは、如何に子供に向つてとは云ひながら、今のところ、うち明けるのが恥かしかつた。若い時のやうな氣持ちでではないが、自分には、矢ッ張り、田口のそばへ歸りたい氣があつ

た。

『分りました』と、雄作はまた答へた。こちらには、それが何だか實は分りもしないでゐることを利いた風に分つた顔をしたやうにも受け取れた。

そしていよ〳〵その翌くる日になつた。おせいは思ひ切つて、茶のまにつゞく六疊のまの、佛壇の中央に飾つてある田口家代々の這入つてるお位牌を取り出した。それから、佛壇のそとに額としてかかげてある田口の實母のあぶら繪を取りおろした。それから、また、自分の室の貴重品が這入つてる押し入の行李を明けて、田口家の系圖や繼母の遺品を出した。ずッと昔し流の櫛や笄はここの繼母も一度だッて使つたことを見せないで死んでしまつた物だが――。

『おせいさんは呑氣ですから、ねい』と、冷かすやうな、またわる口でもあるやうな猫撫で聲の言葉がいまだに聽えて來るやうだ。あの聲のぬしの爲めには、田口もよくその父と喧嘩をしたが、こちらも一度打たれそこねて、脊中の清子――これもその後死んでしまつた――に、きついおぢイさんの握りこぶしが當つたッけ。その頃呑氣と云はれた者がこのやうに自分ながら氣の落ち付かない者になつたのは、みなおぢイさんや田口のおかげだ。

すべて斯う云ふ品々を――今となつて向ふへ渡すほどなら――これまで自分が一生懸命に大切にして來たことが馬鹿々々しかつた。けれども、田口の命令で仕かたがないので、すべて取りまとめて、雄作の持つて行く本や着がへと共に大きな風呂敷に包んだ。そして今までのお佛壇をふり返つて見ると、最近に死んだ文子のまだ新らしい位牌だけが殘つてるわけであつた。

何だか寂しい氣がしながら、雄作が學校から歸るのを待つた。そして、一緒に出かけた。電車へ乘つてからも、子供のただ喜んでそは〳〵してゐるやうすを見ると、憎らしくなつて、今から、もう、自分が忘れられるのではないかと心配ばかりが先きに立つた。

『いい子です、わ』と、こないだも讃めて置いた初雄と云ふ、お君のつれッ子が田口の家にはゐるので、雄作は直ぐそ

れと共に底の蜜蜂を見に行つた。おせいはどうせ自分も晩の御はんを御馳走になるのだらうと思つて膝をすゑ、ゐない田口の歸りを待ちながらお兼と話し込んでゐた。が、自分ながら鼻くそをほじつてるばかりが能でもなからうと思ひ返して、お兼の手から一度脊子を抱き取つて見ようとしたのだが、いやだと云つて、なか〳〵來なかつた。『あなたのにイさんをつれて來てあげましたのに、ねい。』赤ン坊に向つて使ふ言葉なんかは、もう、なか〳〵出なかつた。

『おばちやんにだッこちて見ないの』と、お兼は赤ン坊に云つた。

『…………』おせいは自分がおばちやんなどと云はれるのをさへ馬鹿々々しい氣がした。田口さへ初めからちやんとしてゐたら、こちらは立派な奧さんで稼いて來たのであつた。お兼を、若くて奇麗でないこともないから、お目かけぐらゐにはして置いてもいいが――。やがて田口がそとから歸つて來たので、それに言葉や目つきを以つてもたれかかるやうにして、『つれて來ましたからよろしく賴みますよ。』

『なにはどうした――位牌なんかは？』

『それも持つて來ましたが、ね』と云つて、すッかりを渡してから、まだ未錬があつた。『これだッて、わたしが大切に保存してゐなけりやア、殘つてるわけがないぢやアありませんか？』

『なアに』と、田口は然し何とも思はない風で答へた。『お前が子供と共に人質に取つてあつただけのこと、さ。早くみんなをこッちへ渡して置きやア、おれもお前からそんな勿體をつけられるわけアなかつたのだ。』

『それにしても、毎月の物アつづけて下さるでしよう、ね？』これは離婚の條件の一つとして子供の爲めに規定されてゐた。

『やるが、ね、ひとりは、もう、こッちへ來たんだから、あとのひとり分だ。』

『たッた五圓ばかりですか？』

『いやなら、よせ。』

『いやとア申しませんが、ねー！』おせいは笑ひにまぎらせてそれでもいいにしてしまつた。そして田口の割り合ひに寛大なのにあまへてお湯にまでも這入り、また腰を据ゑてしまひ、とう／＼晩の御はんが出るまでおしやべりをした。そして今一度、雄作に念を押して置かうと思つて、その折を見付けてゐたのだが、雄作は少しもこちらのそばへも來なかつたし、また、こちらがあとを付けて行つても、初雄が一緒にゐるので、こちらの欲することそ／＼ばなしもできなかつた。

『雄ちやん、おかアさんがお歸りですよ』と、お粂は呼ばはつた。

『…………』おせいはかの女が、もう、雄ちやんなどと、こちらの子をわが子のやうに呼ぶのが自分の心に憎らしく響いたのに、雄作はただぼんやりと、この時、初めてきまり惡さうに茶のまへやつて來て、突ッ立つてるばかりであつた。馬鹿だ、な、と思ひながら、『ちやア、たべ逃げだが、おッ母さんは歸りますが、ね、これからお父アんや今度のおッ母さんのおッしやることをよく聽いて、ね、おとなしくするんですよ。』

『はい。』おづ／＼した返事であつた。何もおづ／＼などしないでもいいのにと、こちらは思ひながら、

『さうして、今までにおッ母さんが教へたことも、ね、よくおぼえてゐて、ね』と、一層睨らみ付けたほど熱心に自分の目で以つてそれとなくこちらの本意を渠に送り込んで見たのである。

『はい』と、また答へたが、こちらには何だかまだたよりなかつた。

八

雄作のことが一段落ついて見ると、また今度は堤夫婦のことにばかりおせいの心は向いて行つた。

疑つて惡かつたこともあるが、また自分としてはどうしても疑はなければならぬこともある。いつまでも口錢取りをしてゐるのが面白くなければ、ほかの商賣を何でもしたらできないこともなからう筈のその大の男が、わざ／＼ここで

こんな營業をこちらや奥さんと一緒にしようと云ふのは、第一、その意味が分らなかつた。おかねが無くなつたとは云つてながら、まだ〱ゆツくりしてゐるところを見ると、さう切破つまつてるのではないらしい。政直を欲しい爲めかとして見ても、またさうでもない。

『政ちやんはあんたのあと取りになるんやさかい、これからは、もツとよく仕込んでおやりなさい。行儀も知らなれば、また亂暴すぎもします』と。

『…………』一體、そんなことを今更らとぼけて云へた義理か？

『どうせ雄ちやんはあんたの手にもどるにきまつてるから、政ちやんの方はこツちやの子に貰ひたい』とまで、うそにも、云つたことがあるではないか？さうかと思ふと、また、政直をも田口の方へやつてしまへとか、こちらに大道易者になれとか。

『…………』易者になるのもいい。政直をやるのもかまはない。が、さうしてあとはどうなるのか？中尾の二の舞をして、今度は夫婦でけろりとこの家を取つてしまはうとしてゐるとしか思へないではないか？だから、もう、當てにしないで、誰れかしツかり頼みになる人を探してゐるのだ。そのあひだに、堤夫婦が出て行つてもかまはない。もう、こちらはそれとなく出て行けよがしにもしてゐるのだから。

ほかの客は不平を云つてよく出てしまうが、默つて長いあひだゐてイて呉れる二階のお客さんで、鶴見さんと云ふのは、遞信省へ勤めてゐるだけあつて、物もよく分つた人だと思つてゐた。薄情な田口のことから、こちらの苦勞して來たいきさつをすツかり云つて聽かせたら、直ぐに同情して、それからほかの人のやうな不平も云はずにゐて呉れたのだ。が、今度は、いつのまにか、この人を人の惡い堤が──特別に、こちらへは知らせないで附けたおかずか何かで──買收してしまつたかして、堤のやうすをこツそり相談して見ても、鶴見さんは

『まさか──わたしが話をして見ても、さう云ふ人物ではないやうですよ』などと、辯解がましいことを云つた。

『あなたは知らないからですよ。』こちらはむッとして、それッ切りにした。そして赤坂のをばのところへでも行つて見ようかと考へたが、これには、また、文子の四十九日にくばる物を忘れてしまつて、ちよツと行きにくくなつてゐた。ほかの方を略したので、つい、ここのをばのことをも思ひ出しそくねたのだ。家のことは結局子供に關係があるのだから、子供の爲めとして田口も相談に乘るだらうと考へて、ふだん着のままで渠をまた尋ねて見た。

雄作は毎日電車に乘つて芝の學校へかよつて來るので、まだ歸つてゐない時間であつた。が、毎日のやうすは學校の歸りにちよツと立ち寄つて語つて行くので、別に今渠に會つて聽きたくもなかつた。が、

『お前は全く呆れた女だぞ』と、田口から直ぐ叱られてしまつた。

『…………』雄作がこちらとの密約をうち明けでもしたのかと、おせいはあたまがふら〳〵するまで取りのぼせた。が、幸ひにも、このことではなかつた。

『雄作のからだぢうに掻きむしつたあとが雁がさのやうになつてるので、多分しらみがわいてるのだらうと思つて、けさ、女中にその襦袢と寢卷きとを調べさせたら、果して白い玉子や麥つぶのやうなのが行列してゐたぢやアないか？』

『まさか――』こちらは渠の話が詩人や小說家だからおほ袈裟過ぎるのだと見て、笑つて受けた。尤も、多少しらみがゐることは自分のからだにも分つてゐたのだが――。

『默れ、馬鹿！手めへが甲斐性なしの、ぶしよう者であつたのは昔からのことだが、まさか、それほどとは思はなかつた！』

『…………』こちらは笑ひをとめて、まだ半信半疑であつた。そしてどう答へたらいいのかとまご付いてると、田口は話を別なことに持つて行つたので、ほツとかたが拔けたかと思へた。ところが、また、それもこちらの落ち度のことであつた。

『けち臭い衣物を別に子供につけて來たのはまだしもだが、』それがまたどれもこれも寸法が合つてゐないで、みんな

ちくはぐだと云ふのだ。『まるで成つてゐないぢやアないか！』

『前はば六寸五分、後ろはば七寸五分、そで幅八寸五分ぢやア、まるで女のおとな物ですよ』と、お粂も口を出した。

『いくら肩あげをして見ても、そで幅がひろいから、どうにもできないぢやアございませんか？たとへ、裄かただけが二寸になつてゐたッて？』

『…………』それではおほかみがころもを着たやうになるのは、こちらにも分らないことはない。

『そのうへ、また、かた／＼のそで幅が八寸五分で、かた／＼のは八寸足らず。それに、そでくちと來ちやす、男の子だのにたッた二寸七分とは、ちよッと考へて見ても、三つばかりの子供のよりも小さ過ぎるぢやありませんか？』

『そんなことが？如何にわたしだッて――わたしだてッ！』向ふがわざとそんなことを云つてこちらを責めるのでなければ、一體、どうしたのだらうとびツくりして、目をきよと付かせた。そんなことは、しらみとは少し違つて、全く思ひも寄らぬことであつたので、不思議に思ひながら、『むかしですが、裁縫學校も出て、教員は正教員の免狀を取つた者ですから、如何になんだッて、そんな筈アないでしようが、ね。』

『まだそんなことを！』お粂も遠慮がなかつた。が、田口は一層あら／＼しく、

『筈アないッて』と、こちらをおそろしい目つきで睨らみ付けながら、『實際にあるぢやアないか？』

『…………』して見ると、氣のわさ／＼してゐる時に縫つて、そんな狂ひのできたのを知らなかつたのだらうかと、おせいも少しは自分で考へて見た。そして相談しようと思つた家のことも、また何とか叱り飛ばされても詰らないから、云ひ出せないでしまつた。また、ただでお湯に這入れると思つたこともやめにして。

すご／＼歸宅してから、先づ、こツそりと、おせいは自分の部屋で襦袢をぬいで見た。自分も度々かゆいのをおぼえるからである。すると、田口の云つたことが萬更らうそでなかつたのに、自分ながらもぞッとした。麥つぶのやうなのもゐた。白い玉子もあつた。炬燵のそばで肌をぬいだまま、それをつぶしてゐたので、その氣味がよさに、暫らく肌が

寒いのを忘れてゐた。

そして氣が付くと、右の腕も、左りの腕も、總毛立つて、粟つぶだらけだ。これだから錢湯へ行くことも——直ぐ風を引くので——嫌ひなのだが、今少し寒いのを辛抱して、かゆいところを長く延びた爪のさきで痛がゆいほど掻いた。ぽりぽり音がしたが、見ると、或爪のあひだには、黒いあかと共にちよツと血が附いてた。それと思ふところを念の爲めに指のさきで當つて見ると、肩の後ろあたりは粟つぶのほかにまだぶつぶつ、ざらざらした物が一面のやうだ。これが田口の所謂掻きむしつたあとか知らんと思へたので、今度はあツたかい腰のあたりをさすつて見ると、矢ツ張り、それがあつた。

身ぶるひして襦袢を新らしいのと着かへた。寢卷きになる時でさへぬくもつてる襦袢だけはぬがないのだけれども——。そして古いのを丸めて、がんくとかの梅に鶴の掛け物——これは田口が忘れて置きツ放しにして行つた切り、四五年もこのままになつてる——のかかつてる置き床の間の隅へ投げた。あすでも、天氣がよければ煮え湯をかけて洗はうと思つてだ。

ところが、あいにくにも、たツたそれだけ肌を出してた爲めに、また風を引いて二三日、寒どころのことをお竹さんにまかせて、自分の部屋を出なかつた。その後、氣が向いて共同の井戸端へ出て、自分のきたない襦袢を洗つてゐると、こちらの一軒建ちと横に向ひ合つた二階長屋のうち、その入り口が丁度井戸のそばについてるところの女、大川さんと云ふのが一緒に洗濯をした。

大川と云ふのは、もと酌婦か何かしてゐたので、人が惡いと地主のうちでも評判してゐる。そしてこちらもさう親しくしなかつた。が、話をして見ると、そんな女にしては正直さうなところもあり、また年輩もこちらの話し相手には都合のいい方だ。

「二階に置いてあるのはわたしの甥で、さる會社へ出てゐますが、云つて見ればそれにたべさせて貰つてるやうなもの

ですから、ね、わたしも何か別に初めたいと思つてますの』とも云つた。

『…………』して見ると、多少おかねを持つてるだらう。それをこちらの營業につぎ込ませて、そんな同士で經營すれは、堤と云ふ男あひ手よりもやり易くはないだらうかと云ふ考へが出た。

『まア、どうです、お茶でも一杯』と云ふのをしほに、洗濯がすむと、そのうちへあがつて見た。そして田口のことや自分の身の上ばなしをしてから、堤夫婦のことをも自分の考へてる通りに説明して、

『それでどうでしよう、つまり、わたしの家を奪ひ取る算段をしてゐるのぢやアありませんでしようか』と聽いて見た。女だけれども、大川さんは鶴見などよりも分つてゐて、直ぐ、

『そりやアそれにきまつてます、わ、ね』と答へた。

『さうでしよう！』丁度こちらの意見と同じであるのが嬉しかつた。『して見ると、わたしはどうしたらいいでしようか、ね？』

『あなたもお人がいいんです、わ、早くお斷わりなすつたらおよろしいのに！』

『それがまた六ケしいことがあるんですよ』と、おせいは向ふの機嫌に取り入るやうに笑ひながら顔をしがめて見せた。『田口も承知の上で來させたんですから、ね。』

『だツて、あなた、田口さんの物でなけりやア、田口さんが反對するわけアございませんでしよう。』

『それもさうです、ね。』矢ツ張り、大川さんの考へ通り、自分の家だから自分がつよく出るに越したことはないと云ふ決心を得た。それに、こちらさへ承知の上なら、

『ひとりいい資本家を周旋して上げます、わ』とのことであつた。『わたしが仲に立つてうまくさへすれば、きツと物になる人物ですから。』

『ぢやア、そのついでにどうでしよう、少し家の手入れもかけ合つていただいたら』と、こちらは話を今一つ突ツ込んで

見た。堤も云つてたのだが、第一に、臺どころの流しもとが腐つて、くさいにほひまでしてゐるのだ。また、雨はところどころ漏るし、とよは外れたまゝになつてるし、ねだも亦がた〳〵する部分が澤山できてる。家根に張つたトタンも張り換へなければ駄目になつてる。さうすると、また、ニスも塗らせなければならぬ。こんなに客が少いのでは、とても、その一つにだツて、手がまわらぬのであつた。中尾がすべてそんなことをも引き受けてたのだが、なんにも手をつけてなかつた。

『それも話して見ます、わ、さきは大工ですから。』

『そりやア、また、丁度いいぢやアありませんか？』正直にしてゐるものには、今にきツと運が向いて來ると信じてゐたのは、恐らく、これらしかつた。

運と云ふものはひよツくり來るものだから、これは必らず成ると信じてしまつた。そしてよろしく頼むと勇んで、堤にはいよ〳〵喧嘩を吹ツかけるつもりで歸つて來た。

『一體、あなたは』と、堤の部屋へ行つて坐わり込み、『約束も早くきめないで、する〳〵ベツたりにどうするつもりです？』

『…………』堤は直ぐ返事をしなかつた。計畫通り、むツとおこつてしまつて、『きめようとせんのはあんたやないか？僕が何度云うても云ひぬけばツかりして？』

『それがいけなけりやア、いつからでも出ていただきます、わ。』

『よし、さう人を馬鹿にするなら、直ぐ出る！これまで僕らがえいやうにだまされてたとおもや濟むこツちや！』

『何もわたしやア』と、わざと騒がないで、『あなたがたをだましちやアゐませんよ。』

『べら〳〵云ふな、畜生！』

『そりやア、少しひどいでしよう？』

『何がひどい？あんたの實(じつ)のないおしやべりは昔からのこツちや！田口君の云ふ通り、わるがしこう、づるうて！』

『づるいのァあなたちやァありませんか――わたしの困つてる家を種に利益を得ようなんて？』

『利益のないことなどに誰がかねをつぎ込むもんか？　然し、僕は僕の利益ばかり考へたんやない。あんたが困つてるのやさかい、友達甲斐にあんたがたを助けかたがた、僕の勞力にも報酬をえよおもたんや。それでなけりや、こんなけち臭い商買などに初めから誰れが手を出すもんか？』

『さうおツしやりやァさうでしようが、ね。』堤さんの云ふことにも道理がないこともないやうだから、こちらは少し折れて見た。それに、あの權幕と勘定だかさとでは、今までに出したかねを直ぐ返せと云ひ出すまいものでもないらしかつた。で、言葉を和らげて、『ぢやア、わたしはどうしたらいいんですの？』

『僕も少し言葉があろ過ぎたけれど、つまり、豫算を立てて、これ〱這入つたら、これ〱出て、儲けがいくらあるとして、その儲けをあんたの方と僕の方とで分け合うたらえいのや。』

『さうはちやんと行きませんよ、斯う客が出たり這入つたりしてゐちやァ、豫算なんか立ちませんから。』思ひ出すと、田口と一緒にここに住んでた時にも、こちらのそろばんがいつも合つてゐないのでおこられどほしであつたのだから。そんなことでまた堤なんかにおこられるのは面白くなかつた。

『そら、あんたにでけんなら、僕を信じて僕にまかしなさい。僕はあんたと政ちやんとを十分らくに喰へて行けるやうにしてあげまツさかい。』

『…………』それでは矢ツ張り家は向ふの物にして、こちらどもを厄介物あつかひに落してしまはうと云ふに違ひなかつた。公平な分配と云ふのは、馬鹿々々しい、そんなことか？こちらは自分で顔いろがまた變つたと思はれるほどむきになつて、『わたし達は何もあなたがたに養つていただくにやァ及びません！』

『分らない女や、なァ――ほたら、勝手にしなはれ』と、堤もおこつてしまつたので、丁度いい仕合はせだと思つて、

下へおりた。そして默つてこれも火のやうにおこつてたお竹さんには一言も聲をかけないでしまつた。

『政ちやん、もう、堤さんの部屋へ行くんぢやアありませんよ』と命じて、おせいは政直と共に自分の室に引ッ込んでゐた。すると、雄作がその日立ち寄つたので、渠にも堤がこの家を取らうとしたから出してしまうと云ふことを語り、然し、お向ふの大川さんがいい資本家を紹介して與れる筈だから、安心していい。大川さんは酌婦あがりで、評判が悪く、これもなか／＼喰へない女だが、この母にはまた母の智慧と覺悟とがあつて、『正直な神さまが守つて下さるから』と云つた。（この續きは題を改めて次號に）



断片三つ

島田清次郎

（文庫の整理をした折り、左の如き原稿三片を得たので、本誌餘白を借りて發表することとした。）

○

二月のある日の朝はしづかに明けやうとしてゐた。あらゆる人間のあらゆる悲しみ、苦痛悦び、──一切の生活の上に太陽は遍ねく照らうとしてゐた。太陽の光こそは人類にとりて最も古く、そしていつも新しい生氣の泉である。自分が今ここに叙述し、再現しようとするのは、某日の新しい太陽に輝やかされて感じたであらう人類の無數無量の感慨のうちの、ただ二人の人間の心のすがたである。その日の太陽の下に生きた人間の限り無い生活が今ことごとくどうなつてゐるか、それは恐らく流るゝ水のあとかたのないやうに消滅してしまつたものであらうか。あるひは『永遠の今』に織りこめられてゐるのであらうか。それは何れにもせよ、その朝の二人の人間の心がこうして自分によつて再現されることは藝術をもつ自分達人類の歡喜でなからうか。藝術が人類の歡喜であるとすれば眞の大藝術家は人類のいかなる種類階級よりも尊敬されなければならないであらう。──彼は人類の運命を負ふ者であるから。

さて、二月某日の朝はしづかに明けようとしてゐた。永い夜を領してゐた闇は、薄白い曉の色にかはつてゆき、東の空に光はかすかにただよひはじめて來た。曉の大地は寂びしくて冷やゝかで萬象が沈默してゐるものだ。こうした寂びしい曉を一つの急行列車が猛烈に走つてゐた。列車は昨夜東京の中央停車場を發して、東海道をわたる二すじの鐵路をころがりたどりつゝ寒い二月の夜中走りつづけて來たのである。薄白い曉の色、冷めたく堅い大地、寄り添ひ助け合つてゐるやうな森林、赤らむでくる東の空、列車は白い息のやうに湯氣を吐きながら、地面を走るのである。この列車が低い丘陵のやうな山裾にあらはれたとき、芦や薄の枯れた草叢をへだてゝまんまんとたたえた深青の湖水面が、地面の上にもれあがるやうに霧につつまれてあらはれた。湖水の面を霧がしきりに流れ、消え失せ、深い光耀のある青色があらはれるにつれて、湖水の彼方に太陽はあかあかと光熱を強めて照りいでようとしてゐた。カタリと音がして巾廣い一等室の窓戸が明けられて、髮の毛の白くなつた頭が窓から外をみまはしはじめた。薄い膜一重にさまたげられてあらはれようとしてあらはれることの出來なかつた太陽が、時にゆるされてこのときいつせいに輝やきいでた。新しい朝はひらかれたのである。深青の湖水面に黄金色の日は莊嚴な美を映じてゐた。

『貴子さん』と窓先から朝の風光をみつめてゐた老紳士は、車室の中を振りかへつて低い物悲しい聲で呼んだ。返事がなかつた。

『貴子さん、』と彼は少し言葉を強めて『すばらしい太陽です。それに何とも言へない崇高な美しさです。わたしはずゐ分この湖の朝景色を見ましたが、今朝のやうに、冷やゝかで、旺んな日の出ははじめてです。冬と太陽。そうです最冬の太陽ですからね。』と言つたが、自分の言ひ草のあまりに青二才の詩人じみてゐるのに氣づいたやうに『はつはつはつ』と笑つた。

『わたしもよく存じてをります。毎年北國の方へ巡教にゆきます折に通るものでございますから。――雪の降りしきる中に眞つ赤な太陽の登るのは何と申したらようとさいませう。ほんとに極樂世界とでも申しませうか。』女はこう答へ

た。

一等室内には赤い電燈が未だによどんで、スチームの加減で空氣は寢室のやうに暖かだつた。二人のほかに、室内には京阪地方の豪商らしいでつぷり肥えた男が妾でもあるらしい女といつしよに乘込んでゐるだけだつたが、その男は昨夜から寢こんだきり妾ともたれあつて寢入つてゐた。つまり室内は老紳士と婦人との獨占といつてよいのである。

『もう直き京都ですね』と老紳士は、女が窓際へ立つて來ないで、彼の占めてゐる椅子の他の一つの椅子に腰かけたきり身動きもしないで、空々しいことを答へてゐるのに我慢がならないやうに、窓戸を荒々しく占めて、クッションの上に腰を下した。よどんだ灯と窓より射す朝の光は半分白髪のまじつた頭髪、廣いつやつやした額眉毛の下の鋭い俊敏な、大きい眼、品のいゝ鼻、負けぬ氣に堅く結んだ唇、短い堅固な顎、黒羽二重の紋付を無造作に、きつちりきた小柄な引きしまつた身體を浮き彫りのやうに照らし出した。彼は六十あまりの年配であるべきだつたが、五十になるかならずで若々しく見えた。小刻みな額の線や、喉元からぼんのくびへかけての衰へ方は彼の容貌の俊英さに、彼の生涯の社會的功績を語つてゐるやうでもあつた。なるほど彼は一かどの人物に見える。しかし彼は單に『一かど』の人物位の人間ではなかつた。彼は昨日の全國の新聞が『××の神様』『澤田雪雄氏の普通選擧運動』と云ふ大見出しで紙面全部で書き立てた有名な政治家の澤田氏だつた。そして、澤田氏の鄰りの椅子にしずやかに身をよせてゐる婦人は――よどんだ灯の光は面長な輪廓の正しい、眉毛の美しい、鼻筋の優しい、そして細い、夢みるやうにうつとりと異樣な耀きをもつ瞳の情熱と頰の肉附の厚ぼつたくない高貴な淋しさと、黒々と渦巻いた髮とは彼女を美しく、見せてゐた。彼女は二十八九にしか見えなかつた。そして彼女はあきらかに貴婦人であつた。が彼が日本有數の『男の中なる男』の政治家であるやうに彼女も亦『女の中なる女』の貴婦人で、伯爵夫人で、有名な美人で、貞女のほまれ高く、日本婦人の龜鑑とつねづね世間から云はれ、その上、彼女が佛教の名家の出であるために一般民衆からは『生佛様』と拜まれてゐる岡村貴子夫人であつた。昨日の新聞は澤田氏が普通選擧運動の首領として京都での大集會におもむいて雄辯をふるふことを書く

と同時に、久しく東京の別邸にゐた岡村貴子夫人が京都の——宗本山の大法會に臨んで十萬の門宗徒に對し『有難い法の御聲をかけさせ給ふ』ことゝなつたと知らしたのである。

この有名な二人が同じ車内にゐて言葉を交はすことはさう不思議でないかも知れない。しかし『もう直き京都ですね』と吐き出すやうな威赫するやうな、がつかりしたやうに言つて腰を下した澤田はしばらくうつむいてゐたが、ぢいつと熱情と執着に充ちた、やゝ涙ぐむだやうな瞳を貴子の横顔に注がずにゐられないやうに注ぐのだつた。

『貴子さん、』

『はい。』

『もう一度わたしにあなたにお尋ねする自由を與へて下さいませぬか』

『何をでございますの。』

『この間申し上げたことのお返事を。』

『——』

『え、貴子さん、もう直き京都です。京都へ着いてしまへばもう二度とあなたにかうしたお話をする折もありますまい。貴子さん、生涯に二度とない時です。お返事によつてはこんどの運動も中止にしてしまひます。…………』

『わたし東京でお話しましたことをくりかへすより外に道はございません。——もしあなたがわたしを可愛さうとお思ひでございますなら、どうぞあなたの御夫人を御離縁なさつてからにして下さいまし。』

女はいかにもそれは出來ますまいと言ふやうに冷めたく言ひ切つた。運命的な冷酷さだつた。（未完）

○

（これはある小說の副主人公の手紙である）

兄の手紙は此上もなくよい時機に來てゐました。今私は靜かな秋の暗の中を、澄明な空を仰ぎながら、ある新しい宗教の會合からかへつた所なのです。さうしてゆくりなくも兄のお手紙を手にしたのです。ほんとに私は始め何を書けば宜しいのでせう。兄はもつと詳しく自分のことを言へといはれる。それは非常にうれしい仰せです。一つの甦りです。兄に、あゝ、昔ながらに眞情にあふれ、しかも昔よりも偉大な兄に自分のことを少しでも告げるとき、私は何か全然新しい光で一瞬間自分を見るかと思はれます。窒息しかけたものが鮮新な野原へ放たれるやうな思ひです。しかしこの手紙は長く書きつゞけられますまい。私は今、兄の手紙に感動してしまつてゐるのです。恥かしいことですが仕方がないのです。

當地はお手紙の通り一昨年の冬大火がありました。そして兄が沈默のうちに案じてゐられたごとく私の家は家と家財とをすつかり燒いてしまひました。恰度その頃は私が高等學校の入學試驗に落第したり、兄の行衛も不明であつたりして、まるで人生が暗く陰鬱でたまらなかつた時で（大兄よ、××子さんとの古い傷手も數ふることをゆるしてくれたまへ）私としては惰落してゐた時分です。ほんとにあの時燒けたことは私をはつとさせました。どうしたものか道を切りひらく希望が胸いつぱいに充ちて來ました。私は作家として立ちたいと決心しました。あゝ、失はれたる戀人よ、友人よ我が家よ、と私は思ひました。私が現世に何かも所有しようとすることは私の素質を裏切ることです。私は靜かにつつましやかに小さな人生の一滴をもなつ得ゆくまで味はひたいのです。私は兄がお手紙で私の小説を書いてゐますと云ふ一言に對し（作家たることもまた雄々しい男子の志であると言はねばなるまい。見ようによつてはこの世と人を內部より救つてゆくことは眞の作家の天職であるのだらう。この意味に於て作家は人間のうちの人間、內面的世界の帝王、男子五十年の生涯をぶちこみぶちこみ血をもつてあがのうにたる仕事でもあらう。）と云はれたのは私にとつて少し立派すぎます。私はもつともつと日影者で白日よりも夕ぐれのそよ風が好きなのです。恐らく兄が作家におなりならば前のやうな言葉もよいのでせうが、私の場合はちがひます。人類の親を救ふことなどはどうしてこ

の私に出來ませう。救はれたいものの隨一人が私です。大兄よ、私も、未だにあの昔ながらの弱い人間でゐます。私は月より以上の人間ではないのです。

兄よ、兄はここ三年あまりの苦しい放浪の生活の間に多少りつぱな文學にも接して今更のやうに私が中學の時分すでにりつぱな文學に接してゐたことに驚いたと云はれる。そして近頃何をよんでゐるか知らせと云はれる。しかしそのお言葉は今の私には少し無理です。以前のやうに手あたり次第によんだ時分は別として今の私は、私がどんな種類の人間であるかをよく知つてゐますので、あまりに第一流の偉人の名を並べることに羞恥を感じます。私はゲーテの偉大を尊敬することは出來ますがシラアにより多くの愛を感じる質です。カーライルを仰ぐことは人に劣りませぬがコンコルドの哲人により多くの親しみを感じます。ショウペンハウエルやニイチエやトルストイよりもメエテルリンクのものに心安さを感じるのです。ひところドストエフスキイを耽讀しましたが、しかし、ほんとうはツルゲネーフの世界に安住する方がふさはしいことを發見しました。ツルゲネーフの美しい悲しい戀物語は『エルテル』と共に私を涙ぐませます。先日、ローランのジヤン、クリストフをよみましたが、私は自分のことよりもむしろより多く兄のことを想ひました。ほんとに近頃しみじみ考へることは自分が天才でもなく英雄でもないと云ふことです。私には英雄が缺けてゐるのです。これだけ書けば兄は今の私をすつかり知つて下さるでせう。こうした私が毎日あの赤い煉瓦の高等學校へ規則正しく、かよつてゐるのです、ですから、私が兄が、行衛不明であつた兄が『二十世紀に於ける地上の改革』と云ふ本をとつぜんに出されたのを知つたときのぱつと胸がひらけたやうな感じを忘れません。兄は光です。光りそのものです。光りを持たない、微かな淋しい光りよりしかもたない私は夕ぐれを好みながら、太陽を渇仰せずにゐられませぬ。

何んだか兄を友人あつかひにしてこんなことを書き並べるのがはづかしい氣がしきりにします。こんなことを書いて何になるのかそれを考へると淋しい。何とも言へず淋しい。が、もう少し甘えさせて下さい。

先頃、餘所へ嫁にいつてゐたひとりきりの姉が、長い間私の姉であり先輩であり大きに友達であり、今では單に又姉であつた、その姉がとつぜん死にました。極端に音樂が好きで歌ふことはよほど上手でした。私が小説を試作したりすると小説家は自分の心を人に見られて恥ずかしいものですよ、などゝ云つたものです。私が高等學校を失敗いたしたとき慰めてくれたのもこの姉、火事で燒けたとき少しも困つたふりをしなかつたのもこの姉、私がオルガンを彈と、いゝ聲でうたつてくれたのもこの姉です。そしてそのオルガンは私が兄も去つてしまつたあと、とうどうたえ切れずなつて姉に××子さんのことを打ちあけたとき、父に何とか云つて買つてくれたものでした。今、家では父と母と祖母と私との四人きりです。兄の母上がどこに住まつてゐらつしやるかよく存じてをりませんのです。もし自分の母の生死が分つたなら知らしてくれ、との嚴肅なお言葉に對し私はあまりに無責任ですが、のちほど必ずお知らせいたします。

机の上の蠟燭は三本目が半分になりました。

あゝ、私は大兄と大兄の仕事を信じます大兄の昔なじみの友人であること、大兄の愛に浴みしてゐることを一生のほこりと感じるものです。

どうぞ、どうぞお身お大切に。大兄の著述に對しては批評どころではありませぬ。私はそんな資格のない者です。批判は對等以上の人間のすることです。私はただただ大兄の光りと熱と力とのうちにひらけゆく人間の未來を信じます。あゝ、それにしてもこうしてふたたび兄に手紙を書き得るとは何と云ふ悲壯な涙ぐましい人生の運命でせう！

○

市街から三里ばかり隔つた、××村の二つ手前に黑谷村と云ふ村がある。郡役所の所在地の小さな農民相手の商店や娼家ができてゐる、樹木の茂りの深く、青い町の、白い里道の踏切から、三町ばかりのところにあつて、村からは町の寺院

の古びた甍の傾斜が見え、町からは村の櫟や樅や杉の深い森や木の間がくれに、在所の寺院の甍が見えた。町の人々はその甍を見る毎に、習俗的な一般的なある嫌惡と牽引と尊敬との錯雜した心理を感じた。それは『異端者』の寺であつたから。嫌惡はその寺の主の異端者として、評判の惡いことや、女をだますことやのために牽引は亂暴者のやうにも勇氣ある者のやうにも荒れまはる我儘な自由さのために、尊敬はさうした間にも、小さな古臭い寺であつたのに、御堂を新築し、邸を新築し諸國より紳士らしき友人知己がたづねて來て、それに學者ださうでもあるがために。町の人々は、圓るい、大きい赤くはげ上かつた頭蓋に、ソフトをかぶつて、黑い顎髭をしごいて、俥を走らせる彼をその俥のために注意した。

黑谷村はむかしから決してさほどに貧乏な村でなく比較的いゝ程度の中農の百姓が多かつたが、狐氏の寺は荒れはてた貧乏寺で、彼が少年の時分には、ひろい淋びしい、垣根の破れた境内には、松の大木が一本あるきりで鐘樓もなければ、低い御堂の板戸の破れ目には莚があててあつた。彼の父は彼の四つの時肺病で亡くなつて、父の弟が村の檀家廻りをしてその日の暮らしをたてゝくれてゐた。彼の母はいつも、夕方貧しい佛壇の黑光りする佛像にむかつて亡き人に祈るやうに合掌してゐた。夕方のその合掌と唱命が、朝からの村の衆への心づかひや、米や野菜物を乞ひ歩く辛苦と卑賤から洗ひ清めるやうにも思はれた。彼は我まゝに育てられた。金澤に出來た中學へはいつたが、坊主になるのに英語はいらないといつて、英語を習はうとしなかつたので、退學させられてしまつた。その頃、京都に、眞宗の本山で中學を建てたので、彼と彼の母は村の人に泣くやうに賴んで京都へ勉強に出してもらうことにした。彼が十五の晩春のことで、村の衆が三里あまりの松並木の街道を、夜露にぬれながら、曉闇の平原の冷めたい中を、郡境のT河の岸邊までおくつてくれたのは後年の謀略とペテンとゴマカシの一生ののちにも忘れがたいものとなつた。薄闇に浮いたまつ白い砂洲、紺藍の洋々たる水の流れ、上流の光澤消しの淡はい山岳、對岸の村と平野、村の衆に別れて吊り橋をひとり渡つたとき、つり橋のゆれるのが悲しくて淚が出さうでならなかつた。しかし、雲が薄れ、山の端が白く、薔薇色に、血のや

うに光りと色がさしてくるにつれ、彼は不快な村のことを忘れてしまつて、盲目な野心でいつぱいになつた。彼はその時村の衆や母や家の者への一種の冷淡さを自覺した。そしてその冷酷さにある滿足を得ないでもなかつた。功名心と物質慾と支配慾――征服慾にガツガツしながら十五の彼は、その頃、わりに人材が集まり、事變のしげかつた京の宗學校へとびこんだのであつた。彼は舊い書籍と古典とにとじこもり、狹い宗學の天地にとじこもるには覇氣がありすぎ野心が深く、性格が政治家肌で威張りやで、御山の大將で、野次り屋で、煽動家であつた。それはある意味では最も宗教家的素質であると云つてもよかつたが、ほんものではなかつた。一切の事象の要領を把握する俊敏、一切を自分の利害の立場から判斷する商人的打算、相手を眼中にをかない、優秀なる者をも知らぬ顏をきめこみ得る圖々しさ、論理や信仰を度外においた、人をいゝ氣にさせる煽動的雄辯、そしてそれらの才能の眞只中に、強度の近眼鏡をかけた、顏面の盆のやうに廣濶な、髭の多い、口元に卑賤なしわをよせた彼が、尻まくりをしてどつかとあぐらをかいてゐた。聖經の敎を勝手にねじまげて、自分の都合のいゝやうに、情熱をこめて眞理らしくまくし立てゝゐた。彼は、學校一の華手者で、洋服をきて、應酬のうまい、青年となつてゐた。その、彼の政治的才幹を愛した人に、學校の先生で、當時、時代の殿たれ者であつた敎義を、新しい哲學の言葉をもつて解釋し、思想界の一隅にその存在を知らした。純理の冷めたさと、冷めたさから生ずる秋霜烈日の熱切と森厳さを有した、一代の學者Kであつた。勤直と、嚴精との人格をもつて世にきこえた蒲柳のその人にとつて、やゝ、可愛ゆ氣のある、露骨な物慾と、利己主義にガツガツした、負けることの嫌ひな、無茶苦茶な、ところが、自分に無い丈けすきだつたのかも知れなかつた。一宗の學藝の權威であるKの寵遇に甘えて、彼はK學校を卒業すると東京へ出た。が、やがてまた京都へかへつて來た。これは、彼が二三の同期生と共にKをかついで當時の本山の宗政を改革しようとしたためだつた。彼らは、その妄動をルーテルや法然やノツクスの青年時代に比較したりしたが、彼のみはそれは宗教改革でなくて宗政改革であることをはつきり自認してゐた。實際彼には宗敎や敎義はどうでもよかつたのであるが、この仕事は本山の役員の强硬な鐵血政策で打ち破られてしまつた。同志は解散し

て、各自の自坊へ幽居せねばならなかつた。が、幽居せられて、そのまゝでゐる彼でなかつた。彼は、坊主を止めて、もつと廣大なもつと自由な、もつと面白い豐富な生活に充ちた、實世間へとびこみたかつた。彼は、外交家になりたかつた。彼は、頭髮を伸ばし、背廣をき、赤靴をはいて、友人や先輩をたずね廻つてゐたが、彼の尊敬してゐる先輩の一人は『何故、眞宗をひつさげて、世へ出ないか。外務大臣になつたところでたかが知れてゐる』と一喝されたので、彼は再び同志を叫合して東京に出た。彼の二十七のときで、彼は友人の味をめとつた。

　彼に二人の親友がゐた。一人は九州の熊本の男で、學者としての優秀な頭腦と、親切な、友情の濃やかな、野心や大望はあつてもそのまゝ出すことの出來ない女性のつゝしみ深さをもつてゐた。彼はその味を、彼にくれる程に彼を長兄のやうな靜けさで愛してゐた。この、彼の存在は、放縱なすきだらけな、その場限りな彼の活動のよき背景となつてゐた。も一人の、三河の男は、詩人のやうな純情と、眞面目な人格と、正直なやさしさとをもつて、とかくに、露骨になりがちな彼の野望や手段や行爲を美しく飾り、匂ひあるものとした。そして、内部では、賢明で、淋びしい情質ではあつたが、思ひやりの深い、そして何よりも偉大だつたことは他人に對する、自らな同情と親切の美質ある彼の夫人が助けたのだつた。彼を嫌ふものも、彼の夫人を好いてゐた。彼はこの二人の友人と妻とをもつて東京に出た。彼の師のKが表面上の結社の首領となつてはゐたが、事實、彼の敵に對してはガムシヤラな味方に對しては寛大で、時には義俠で、世話好きで、信者や一般の人には、慇懃で一段高くかまへる（彼らは一段高くかまへる者を尊敬する）、それでゐて乃公と貴君ばかりが天下の眞を知つてゐると云ふやうな思はせぶりで相手を釣ることを知つてゐる彼の山師的人格によつて、その宗教結社は成立してゐるのであつた。このわりに幸運な彼が『恩寵』を說いたのは無理もあるまい。このまゝにて救はれてゐるのだ、と云ふ敎之は深い敎理の上からは別として、彼の口より說かれるときは、それは、淺薄なる實現肯定となつた。現世讃美となつた。彼の講話の聽衆の多くは、日淸戰爭以來の國力の膨脹につれて、發展しだした經濟力の所有者共が多かつた。經濟戰のためには石の罐詰をこしらへることを平氣でした奴共であり、快樂のためには[illegible]

女も後家も人妻も、金力で蹂躙せずにゐられなかつた人々である。その人々に『このまゝにて彌陀の大慈大悲は救つて下される。絶對他力の信仰に身を乘御すれば、何をやつてもかまはぬ。たゞありがたさに阿彌陀佛に南無したてまつれ』と說いた。佛は勃興しかけた資本主義に媚笑をおくつて、多分の賽錢にあづかつてゐたのである。彼自身はこれを『これまでの宗敎は弱者の安心を說いたが、自分は强者の安心をとくのだ』と主張した。全く彼は生涯强者の福音をとくであらう。しかし、彼のごとき强者は刻々にして、變移するがために、彼は刻々にして仕ふる主人をかへねばならない。それは、幇間のやうな急がしさであり幇間のやうな幸福である。彼は自分を幇間であるとは信じなかつたであらう。彼は彼等を救つてゐると自信したであらう。しかし、彼は彼らに媚び諂らつたに過ぎない。親鸞の深い體驗を頭腦でだけ解して、『安心』の安賣りをやつたに過ぎぬ。彼の政治的才幹と風釆が、この商賣を成功させたのに過ぎない。かくて彼の十年の壯年期がすぎた。幽玄な佛敎敎理の內的世界の無政府的な自由さを、そのまゝ現實の事象に混亂した彼の宗敎の破れる時が來た。彼は節操正しき基督敎徒や、社會主義者をののしつて、純理と信仰よりは彼の惡罵を侮蔑し去ることゝが出來ても、國情や時勢がそれ以上をゆるさなかつたが、十數年の時は、彼の敎界における有力者にし、彼の寺院を新築し、彼の邸宅を新しくし、彼の友人の一人は大學敎授となり一人は本願寺の重要な役員となつたが、同時に一つの波のうねりがゆきすぎてしまつた。古今を通じて永遠であるはずの眞の宗敎家でない、彼、時代の寄生虫でしかない彼にとつては、本樹が腐りかけてしまつたことは一異變である。『彼の番』が來たのである。一九一三年の夏夫人の總子は喀血して死んでしまつた。子がなかつた。彼は三月とたゝないうちに、九州のある金持の信者の、女學校を出たばかりの若い娘のやうな女を妻にして、同時に、結社を解散して、鄕里の自坊に籠つてしまつた。彼はすでに四十だつた。彼は嚴正な中央の思想界にゐたまらなくなつたものと云つてよかつた。彼は田舍にかへると同時に、亡くなつた妻や、遠くなりゆく友人の庇護がなくなると同時に、彼は彼の本質を露出して來た。彼はマックス、スチルネルの愛讀者であつた。その書物は商賣の材料にすぎなかつた。彼はもうけるだけもうけて別莊住居をする商人に似てゐた。金と、名聲とは彼の

器量の大きさでは充分にいつぱいになつてゐた。彼は若い妻と明るい宏壯な邸宅とに快よく住み、月の半分を諸國の信者の會合にのぞむための、金もうけの旅に費してゐた。物質慾のかつた、やゝ淺い、個人主義者だつた。そのくせ自分を一かどの宗教家とうぬぼれてゐた。その實、彼の寺の屬する宗派は墮落し果てた、偶像教であり、彼の思想を忠實に主張すれば何よりも本願寺を破壞し、宗派を絶滅し、國家を破壞し地を全く無政府の世界とすべきであつたのに、彼はわづかに『異端者』としてきらはれてゐるにすぎなかつた。彼のうぬぼれをうぬぼれとしてをくことを保證するものは、彼の處世術一つでしかなかつた。

兄の遺稿

正宗白鳥

江藤五郎吉は好奇心に驅られて、兄の遺稿や日記や手紙を捜せるだけ捜して、小春日和の温かい日曜を一日潰して讀耽つた。兄は小說でも飜譯でも記行文でも、何でも賴れた仕事さへあれば手當り次第に書きなぐつて生活の足しにしてゐた雜駁な著述家だつたので、在世中世間へ發表した著述の分量は可成りに嵩張つてゐたが、死後にその全集の出版されるほどの有力な作家ではなかつた。

これが××氏△△氏のやうな傑れた作家のであつたなら、手紙の切れつ端でも日記の斷片でも、みんな珍重されるのであらうが、兄のはどれも紙屑同樣の價しかないのだと思ひながら、五郎吉は世に名高い作家の作品に對するよりも一層强い興味をもつて亂雜な文字の上に目を凝してゐた。彼れはどちらかと云へば、讀書は嫌ひな方なので、ことに小說のやうなゴタ〳〵した作り物は、讀みながら退屈に感ずることが多かつたのだが、たゞ兄の筆に殘つたものだけは手に入るかぎり目を通してゐたのであつた。兄弟のよしみから自然兄の作物にも親しむやうになつたのであるがそればかりではない。兄が何處で、弟である自分の上への旅行や腹の中の思ひに筆を觸れるかも知れないと、多少警戒するやうな氣持も絕えず抱いてゐたのであつた。「この頃の小說には作者の經驗した事實がよく書いてある。自分の事ばかりぢやない、兄弟や親戚の家庭にまで立入つて、遠慮會釋もなくいろ〳〵なことを發きだしてゐる」と、友人や

兄自身の口からも話されるのを聞いてから、一層つよい好奇心と警戒とをもつて兄の作物に對するやうになつたのであつた。そして、「事實々々と云つてもこれだけしか書いてゐないのか。分らないのか知らん、分つてゐても書けないのか知らん」と、物足らなく感じたり、「おれの事もこのくらゐで止めて置いて呉れて大助かりだ」と思つたりしてゐた。

今五郎吉の調べてゐる兄の日記には、特別に彼の目を惹くやうな記事は一つも書かれてゐなかつた。來訪者の名前とか重な收入と支出とか、天候や食物のことがところ〲に書かれてゐるのに過ぎなかつた。手紙も平凡なものばかりで、他人に見られては悪いやうなのは、一つも殘つてゐなかつた。こんな筈はないのだが、多分破るか燒くかしたのであらう。兄自身にも他人に知られたくないやうなある秘密を有つてゐたことは、かねて睨んでゐたのだがと、五郎吉は手紙を見終つて物足らない思ひをした。

が、書きさしの原稿の一つを讀みかけると、彼れの好奇心は鋭く動きだした。それまで雜誌の上などで讀んだ幾十編の兄の小說や雜文から嘗て得られなかつたやうな生々した感じが彼の胸に湧いた。「これだ」と、彼れは呟いて、探偵がある捜索事件の手がゝりを得たやうな興奮を覺えた。確かに雜誌へでも出すつもりで筆を執つたものらしく、原稿用紙にキチンと書込まれてあつたが、遺憾にも僅か三枚あまりで筆が止切れてゐた。病氣のため後を書續ける暇がなかつたのか、あるひは周圍を顧慮して終りまで書徹し得なかつたのか。

しかし、三四枚の斷片でも五郎吉に取つては重要な証據物件であつた。小說らしく旨く作り變へてあるから、傍の者には事實の眞相が見破られないだらうが、おれの目を晦ますことは出來ないと、彼れは無氣味な獨り笑ひを浮べた。

そこへ、兄嫁のきく代がお茶を入れて、亡兄の好物の甘納豆を添へて持つて來た。取散らかされた書類に目を注ぎながら、

「保存しとかなければならない物がありまして？」と訊いた。

「大事な物は何もありませんね。焼つちまつてもいいでせうと云つたが、五郎吉はふと思ひついたやうに、「しかし、この小說の書きさしは兄貴の絕筆らしいから、記念に僕が貰つて置きませう。極く短いのだけれど、よく出來てるやうですよ。完結してゐればどこかの雜誌に出して吳れるかも知れませんがね。……ちよつと讀んで見ませうか。こんなのです」

五郎吉は小聲で、しかし、多少氣取つた口調で讀みはじめた。

つゆ子の死

何故つゆ子は死んだのか。去年の夏夫や夫の妹と一緒に小田原へ避暑に行つてゐた時に、ある朝一人で濱邊を散步しながら、知らず〳〵波打際まで行つて、不意の大波に浚はれて溺死したことになつてゐて誰れも疑ふ者はないのだが、私の心の中にはつゆ子の溺死の知らせに接した當時から、一種の疑ひが起つてゐて、一年後の今まで、彼女の事を思出すたびに暗い思ひに惱まされてならないのである。

溺死した前夜には、三人連れで知人の宿を訪ねて、到來物の西洋菓子を饗ばれて、陽氣な話に夜を更かしたのださうだ。つゆ子は自分の宿へ歸つて來ると、少し胃が重いと云つて、持ち合せの消化藥を飲んで寢床に就いたのださうだ。朝餐前の濱邊の散步も、胃の養生のためであつたと云はれてゐる。私が獨りで疑つてゐるやうな死の理由は、溺死前後の彼女に關はつた噂の中には發見されなかつた。

死者をして死者を葬らしめよ。灰になつてから既に一年も經過してゐるつゆ子の事を穿鑿したつて何の効もないことだ。彼女の夫であつた竹村宗一も最早追憶の淚を拭つて、新たな美しい妻君を娶つて睦じい家庭をつくつてゐるのであるし、竹村の妹のとみ子も良緣を得て年內に結婚式を擧げる筈になつてゐる、私一人が去年の凶變のいやな記憶を何時までも持つてゐて心を曇らせるには及ばないではないか。

「明土曜の晩、田舍から贈つて來た山鷄を御馳走したいから、萬事お繰合せの上御來遊を願ひたい。吉野君をも招きましたからそのおつもりで……」といふ竹村の招待狀は、今机の上に置かれてある。無論辭退すべき筋のものではない。喜んで招きに應じなければならない。……が、私は竹村の筆跡を見てゐると、亡きつゆ子の面影が生けるが如く目の前に現はれて來るのに堪へられない。今夜はことにあり〳〵と思出されてならないのだ。打消さう〳〵と努めるほど尙更、追懷の念や彼女の死因についての疑心が強くなつて、無氣味な蛇に堅く纏はりつかれて、その舌の先で腹の底まで舐められてゐるやうだ。

――それはつゆ子が自分から企てゝ死を急いだと見做さなくつてもいゝ。不意な大波が彼女の軟かい足に纏きついて恐ろしい死の底へ彼女を引込んだとしてもいゝ。けれど、その時の大波の渦卷いた白い波頭には、人間のどういふ強い思ひが宿つてゐたか、私の外の誰れの目にも見えないだらう。三人の中の誰れか一人が死なゝければ無事な收まりはつかぬと、かねて思つてゐたのであるが、運命はその中の肝心な一人を闇の中へ奪つて行つてしまつた。

「僕はあなたに害を加へやしないから安心してゐらつしやい。あなたが今の境涯に滿足してゐるのを妨げたつて、僕の幸福になる譯ぢやないんだから」と、ある時私がつゆ子に向つて云ふと、つゆ子は

「あなたは私が滿足して幸福な日を送つてると思つてゐらつしやるの。私の懷には何時も刃物を持つてゐるのが、あなたの目には見えないんですか」と、怨めしさうな目をして云つた。

「そんなことを云つて脅かしちやいけませんよ。お互ひに生きられるだけ長生をして、

原稿の文字は此處で盡きてゐて、あと一行ばかりは字性も分らぬやうに消潰されてあつた。

「どうです。面白くないですか」と、五郎吉が讀了つてから訊くと、

「私どもにはよく分りませんね」と、兄嫁は氣のない返事をした。

五郎吉は兄嫁が數年間同棲してゐた夫について何時も無邪氣であつたことを、今更のやうに重く思ひ、亡兄にかはつて感謝したいやうな氣持になつた。

自分の興味をまじへた遺稿整理の一役を濟ました彼れは、兄嫁やそこに居合せてゐた兄嫁側の身内の者と、晩餐を共にしながら、後仕末に關はつたことその他の雜談に耽つて、可成り夜が更けてから亡兄の家を出た。

「つゆ子の死」は無論懐の中にしつかり收めて來た。……三人の中の一人が死なゝければ無事な收まりがつかぬと小說は書かれてゐて、その貧乏鬮を作り名のつゆ子に引かせてゐるが、實際のところは、私といふ人物に相當してゐる作者自身が死ぬこととなつたのだ。と、五郎吉は運命の不思議を感じてゐた。全體つゆ子實はきぬ子といふ女は、どんな場合にも自殺なんかを企てる人間とは思はれない。作中には構圖の色取りのためにか、あるひは人目をくらますためにか、とみ子といふ妹を出してゐるが、結婚期に達してゐるやうなこんな妹は、男の方にも女の方にもありやしない。

しかし、上べの筋立てがいくら違つてゐたつても、この斷片的原稿から亡兄の秘密を、五郎吉は嗅ぎださないではゐられなかつた。そして、きぬ子の蕩けた眼差しや瑞々した頬ぺたを魔物のやうに思はないではゐられなかつた。

「近日一度訪問して見ようか。兄の死を喜んでゐるのか悲しんでゐるのか、あの女の腹の中をおれの目が見破つてやらう」と、彼れはそれを半ば亡兄のために盡すべき自分の義務であるやうに思つた。

竹村宗一が亡妻追憶の涙を乾かして新たに美しい婦人を娶つたなんて、兄も詰らない趣向に苦心したものだ。おれに文章が書けたなら、竹村宗一はいまだに魔物のやうな女に魅せられて睦まじさうに暮してゐると卒直に書いてやるのだつたが、その方が人に讀ませる者としても面白いであらうのに、兄は事實の剝出しが恐ろしかつたのだな。……

（しかし、お蔭でおれの秘密も兄貴の筆先でほじくり出されないで濟んだのだから有難いわけだ）

五郎吉は寄食者で下女代りに働いてゐる老女と淋しい二人生活をしてゐるので、年齢は亡兄と三つちがひの二十八

にもなつてゐながら、まだ妻もなければ結婚しようと企てたこともなかつた。若い者相應に女のことを絶えず心に持つて居りながら、ある一人の女を撰んで自分の一生の同伴者にしたいと思つたことはなかつた。彼れはその夜も鬱陶しい亡兄の家から、淋しい自分の家へ歸ると、老女と一しきり世間話をして、冷たい夜具の中へ入つたが、きぬ子に會ふことが一つの樂しいことゝして空想されだした。

彼れが吉川貞吉(亡兄が竹村宗一と變名した男)の家を訪ねたのは二三日立つてからであつた。四時に勤先きの會社を出て家へ歸る途すがら、ふと今日こそと思立つて足を其方へ轉じたのであつた。吉川とは以前亡兄に劣らぬほどに懇意にしてゐたので、遊びに行くのに不思議はないのだが、例の事を念頭に置いてゐると、何となく心が引締つて、自分の態度や言葉についても不用意ではゐられなくなつた。豫じめ仕組んだ芝居の一役を自分が勤めるやうな氣持になつた。

吉川は三田の高臺に住んでゐる。格別豐かな生活をしてゐる譯ではないが、亡兄の家などに比べると、家庭に華美贅澤の影が差してゐる。五郎吉は門の中へ一歩踏込んだゞけで、獨身者の寂しさを感じさせられるやうな晴やかな笑ひ聲を聞かせられた。成べくなら不在であるやうにと願つてゐた主人は、門の音とともに縁側から顏を出して、「珍らしい人が來たよ」と、妻君に知らせた。

五郎吉が格子戸を開けて入ると、夫婦は早くも玄關に顏を並べて待つてゐた。夫の顏が嚴くて妻の顏が締りのないほどに軟かいのがこの晩にはことに著るしく五郎吉の目に映つた。

「麹町へお伺ひしよう〳〵と思つてゐながら、御無沙汰して居ります。姉さんはどうしてゐらつしやいます」と。云つたきぬ子の言葉が彼れにはいかにも白々しく聞かれたので、

「姉は七七の逮夜が濟むまで彼家にゐるでせう」と、氣のない返事をした。

兄の突然の死についての弔辭が頻りに夫婦の口から出たが、さういふ世間並の極り文句は今の五郎吉には何の興味もなかつたので、

「僕は陰氣になつて仕様がないから、今日はあなた方に面白いお話を承はつて元氣をつけようと思つてお訪ねしたんですよ」と云ふと、

「私どもでも面白いことはありやしませんよ。あなたこそお獨りで自由に暮してゐらつしやるんだから、面白いお話をいくらでも持つてゐらつしやるでせう」

「君のやうな生活も氣樂でいゝだらうが、何時までもさうしちやゐられまいから、思切つて結婚しちやどうだ。僕だちが周旋の勞を取つてもいゝよ」と、吉川は眞面目に勸めて、きぬ子を顧みて、「Kさんはどうだらう。あの女なら僕が口を利けば物になるがね」

「先方のためによくつても、此方ぢやお氣に入らないでせう」と、きぬ子は氣乘りのしない返事をして、「五郎さんは私なんかゞ餘計なお世話を燒かなくつても、お嫁さんの一人くらゐは御自身で何時でも見つけて入らつしやるわね」。

「それは僕のやうなものでも賴んだら、嫁になつて呉れる女の一人や二人はあるかも知れませんが、まあ止した方がいゝでせう。兄貴のやうに若死にをしたら、後へ殘されたものが困るでせうから」

「そんなことを氣にしてゐた日にや、誰れだつて結婚は出來やしないよ」

「五郎さんは案外思ひやりの深い方ね」

弔詞に續いてこんな輕い話が暫く取交はされてゐたが、きぬ子の目くばせで察した吉川は、

「實は今日は晩餐を何處かへ食べに行く筈になつてゐるんだが、差支えがなければ君も突合つて呉れないか」と云つた。

「あなたがおいやなら止してもいゝんですけど、食事の仕度はしてゐませんから」と、きぬ子は附足した。

「何處へでもお伴しませう。どうせ夜は用事のない身體ですから」と、五郎吉は躊躇なく勸めに應じた。一週に一度ぐらゐは夫婦連れで旨い物を食べに出るのを例としてゐると、かねて聞いてゐるので、平生なら、さういふ夫婦水入らずの樂みの邪魔をする氣にはならないのだが、今夜は遠慮しなかつた。「蛇の舌の先で腹の中まで舐められてゐるやうだ」と遺稿に書いてゐる亡兄の胸の中を思ふと、きぬ子が平氣で食物屋通ひなどするのが忌々しくもあつたし、吉川がお目出度收つてゐるのが白痴見たいにも思はれた。

「御迷惑でもお仲間になつて下さいね。二人きりぢや本當に詰らないんですもの」

きぬ子は心からさう思つてゐるやうに云つて身仕度に取掛つた。その間五郎吉は膝を崩して、吉川の食道樂の話に相槌を打つてゐた。

「さう云へば、君の兄さんも食物のことにかけちやなか〱熱心だつたね。外の道樂はあまりなかつたやうだけれど」

「しかし、金がないからさう旨い物は食べられなかつたでせう。日記を見ると、何處で何を食べたとか何が旨かつたとか、よく書いてありますが、文學者の日記として價値のあることはちつとも書いてありませんよ」

「いや、さういふ日記の方が却つて面白いかも知れんよ。差支えがなければ僕に見せて呉れないか」

「どうせ反古にするつもりですからお送りしませう」

「兄さんは濃厚な食物が好きだつたね。朝からビフテキが食べたいといふ風だつた。……さう〱今年の花時に兄さんと僕だちと三人連れで上野へ花見に行つて、歸りに淺草へ出て、金田で鳥を食べたことがあつたが、今思出すと夢のやうだよ。人間は脆いものだね。……あの時兄さんは妙に興奮して、絶望的のことや悲觀的なことを云つて、僕だちを困らしたよ。書いた物を見ると、筆の調子が何時も穩かなやうだが、人間としてはちよつと調子外れのところがあるのだね。僕は友人としてさういふ點を面白いと思つてゐた。家庭を解散して、世間に構はないで思ふ存分のこ

とをして暮す、こんなに愚圖々々して生きてゐるには堪へられないとよく云つてゐたよ」

「いや、兄貴は思ふ存分のことの出來ない人間です」五郎吉は動かせない斷案を下すやうに云つた。

「それは誰れしもさうだ。……しかし、兄さんは病氣になる前に家庭を破壞して獨身生活をしようと考へてたことがあるんぢやないかね」

「さうでもありますまい。大して義姉と爭つたこともないやうですから」

「さうかね。……君はまだ妻君を有つた經驗がないから、兄さんだち夫婦間の悶着に氣がつかなかつたのかも知れないね。夫婦の間には獨身者には解らないやうな悶着があるものだよ。それで僕の家内は調停役になつてたび〳〵霞町へ出掛けたのだよ」

「さうでしたか」と、五郎吉は輕く受答へをしたが、無論亡兄と兄嫁との間に他人の調停を待つやうな悶着が起つてゐたとは斷じて信じなかつた。此家の妻君のきぬ子がそんな口實をつくつて、夫の吉川を欺き亡兄を愚弄する機會をつくつてゐたのかと、新たにきぬ子と亡兄との秘密に心を凝すやうになつた。で、

「兄はあなたに何でも打明けてゐたのでせうね」と訊くと、

「僕には隱立てをする人ぢやなかつたが、妻君のことについちや何も云はなかつた。……」吉川はその點に不審を置いたやうな顏して、話が生眞面目になりかけたが、そこへ、手輕に身仕度したきぬ子が入つて來て、

「どんな話してゐらしつたの？」と、迂散くさい目を向けて、「さあ出掛けませう」と、二人を急立てた。

夫婦で決めてゐる日本橋のある鳥屋へ着くまでに、きぬ子は絕えず話題を持出して餘計に口數を利いた。五郎吉はその一語々々によく耳を留めて、その顏付や步き振にも目をつけてゐたが、さうしてゐると、この女の所行を憎むよりも、馴れ親み易い淫らな女として彼れの空想を快く刺戟しだした。他人の妻として心に隔てを置いて對してゐないでもいゝのだと獨りで極めてゐると、料理屋入りのお伴も窮屈でなかつた。

食事時刻で賑はつてゐる周圍の樣を見ると、ふと霞町でションボリして夕を送つてゐる義姉の淋しい顏が思出されたが、それは彼れの心に憂欝な影を投げる力も有つてゐなかつた。この頃霞町を訪ねるたびに、義姉の境涯を氣の毒に思つたり、その無邪氣な心根を尊く思つたりしてゐたのも、今では通り一遍の思ひ遣りに過ぎなくなつて、亡兄が素直な妻との平和な生活に安んじてゐられないで、きぬ子の蕩けた身體に心惹かれて、人知れぬ悩みを重ねたことが尤ものやうに思はれだした。

「兄貴はかういふ所で飲食することを好いてゐたのだ」と思ふと、亡兄の影が食卓の側に割込んで座を占めてゐるやうに空想された。きぬ子と差向ひで、遺稿にあつたやうな會話を取りかはしてゐた有樣が胸に浮んだ。

三人で一つ鍋を突ついて、男同士は盃を擧げながら、新聞を賑はしてゐる時事問題や知人間の噂をしてゐたが、話が亡兄の事に觸れても、きぬ子はそれがために何の動搖をも顏に現はさなかつた。

「僕も今の家には可なり長く住んでゐるが、近に轉居しようかと思つてるんだよ」と、吉川は微醉機嫌で云つた。

「どうしてです?。この頃は空家が拂底で、お宅のやうな住みいゝ家は容易に得られさうぢやないですがね」

「轉居には少し譯があるんだ」

「お止しなさい、そんなお話は」と、きぬ子は眉を顰めた。彼女の顏にはじめて雲がかゝつたのに五郎吉は注意した。

「云つたつていゝぢやないか。……君も知つてゐる通り、今の家は場所もいゝし、間取りもいゝし、自分で理想的の家を新築するまでは、何年でも轉居しないつもりでゐたのだが、この頃變なことがあつて居づらくなつたのだよ。ちよつと怪談らしくて、君なんかゞ聞くと、馬鹿々々しく思ふだらうがね。先月の中旬ごろから、夜が更けて周圍がシンとして來ると、人間の聲とは思はれないやうな變な笑聲が何處からともなく幽かに聞えて來るんだ。時々は二階の緣側の方でミシ／＼と幽かに足音がしたり、夜中に僕が目を醒ました時に、枕許に誰れかゞ立つてゐたやうに思はれたりするんだ。この頃は電氣を點けたまゝで寢るのだし、目を開けた時に部屋の中に變な影が現はれてゐるのぢやないん

だが、僕が眠つてゐる間枕許に立つてゐた者が、今急に姿を消したといふやうな氣持がしてならないんだ。家内は僕の神經だつてはじめは笑つてゐたのだが、この頃は自分でも變な事に氣がつきだしたのだよ」

「それは、毎日そんな氣味の惡い事を聞かされてゐれば、私だつてたまには變な氣持にもなりますさ。……五郎さんは可笑いでせう。今の時世に大都會の眞中で氣の拔けたお化話見たいなことを信じて、轉居騷ぎをする人間があるんですから」

「しかし、僕は迷信家でも神經病者でもないんだからね」吉川はちよつと目を閉ぢて、嚴い顔をますく\嚴くしたが再び目前の酒食を樂む氣持になつて、「今の話はまだ他の者には話してゐないんだから、そのつもりでゐて呉れたまへ」と云つて、猪口を干して相手に差した。

「えゝ承知しました」

五郎吉は重々しい返事をした。吉川の話り振りが座興ではなさゝうなので冷かす氣にはなれなかつた。先つき食卓の側に朦朧と現はれてゐるやうに彼自身空想してゐた亡兄の姿が、吉川の夜の枕許に立つてゐた人影と同じものであるやうに思はれた。

「そしてお引越しになる家は決つたんですか」

「まだ決つてる譯ぢやないが、大抵の所で我慢して大急ぎで移轉しようと思つてるんだ。どうせこの冬は小田原で暮すことになつてるんだから、此方にゐるのもあと一月あまりだ。どんな家にでも我慢してゐられるだらう」

「五郎さんも年末のお休暇には小田原へお遊びに入らつしやいましな。彼方は溫かですよ」と、きぬ子も言葉を添へた。

「えゝ是非お伺ひしませう。去年の夏避暑にお出でになつたのも小田原でしたか知ら」

「いゝえ、去年の夏は大磯へ行つてゐましたの」

「あゝ、さうでしたね」五郎吉は亡兄が去年の夏大磯へ行つたことをふと思出して胸を轟かして、「大磯は波が荒いんでせうね」

「えゝ、でも高い波を見てると氣持がいゝものね。荒模様で海水浴が出來なかつた日に、私一人で濱邊を歩いてゐて、うつかり波に浚はれかけたことがあつたんですよ。まさか此處までは來まいと思つて、波が立つたり崩れたりするのを見てると、出抜けに私の胸元まで波頭が打つゝかつたんですよ。轉んだゞけで生命に別條はなかつたけれど、身體はズブ濡れ。憐れな樣で宿へ歸りましたの。……でも私ちつとも懲りてやしないわ。も一度あんな目に會つて見たいと思つてるんだから呆れるでせう」

「何を云ふんだ、青い顏して震へてゐたくせに」吉川の言葉は尖つてゐた。

「あの時私が死んでゐたらよかつたかも知れないわね」きぬ子はせゝら笑ふやうな卑しい表情をして、「でも、あの時波に捲込まれて太平洋へ連れて行かれなかつたらばこそ、かうしてお旨い御馳走を頂けるんですからね。……私お旨い物をドッサリ食べて長生をしなければならないと思つてますわ。……五郎さん、この前お目に掛つた時よりも私また肥つたでせう」

この前よりも一層太つて一層艶々してゐるきぬ子を五郎吉は魔物のやうに思ひながら醉眼に映して、「本當に死ぬ者貧乏なんですね。僕も兄貴のやうに若死をしないやうに氣をつけなければなりませんね」

すると、きぬ子は眩しさうに目を外らした。三人の言葉が止絶えて、ジリ〳〵と肉の焦げつく音がしてゐた。

「君の兄さんは死ぬ時まで僕に惡意を持つてゐやしなかつたらうね」

「そんなことがあるものですか」五郎吉は強い口調で斷言した。

「君がさう云つて呉れゝば安心した。人間は長く突合つてる間にはお互ひに誤解することもあるんだからね」

「……これはあなた方にだけお話するんですが、兄は死ぬる二三日前に、非常に不機嫌な顏して沈んでゐました

よ。僕も心配になつていろ〳〵と訊ねたのですが、さうすると、自分は近い間に死ぬるのぢやないかと思はれてならない。死ぬるのは仕方がないとして、生命のある間に自分がまだ誰れにも洩らしてゐない重要な秘密を詳しく書残したいと思つてる。今までは糊口のために下らないものばかり書いて來たが、今度は一生の記念として、思切つて大切な經驗を赤裸々に現はして見たいと思つてる。そして、まだ筆を採らない前から、その事について苦しんでゐるんだと、兄はかう云つてゐました。生命の長い短いは天運だから分らないが、書くべき事は思切つて書いたらいゝでせうと、僕は何の氣なしに答へといたのですが、今になつて考へると、兄貴がその重大な事を書かないでこの世を去つたのがいかにも殘念なのです。全集を出版する價値のないやうな平凡な作家として一生を終つた兄でも、最後に思ひついた者を充分に書いたなら、あるひはその作一つの力で不朽の名譽を得たかも知れないと思ふと、僕は兄のために非常に氣の毒に思ふんです。折角思立つた時はもう死期が迫つてゐたのですからね。兄だつて死に切れなかつたでせう。この世に思ひが殘るだらうと思はれますよ」

　五郎吉は出鱈目を云つたのだが、自分でも出鱈目を云つてゐるやうな氣はしなかつた。吉川は酒の醉ひも醒めるやうな氣持で聞いてゐた。

「それは殘念だつたね」と云つたがそれは腹から出た返事ではなかつた。

「思切つてお書きになるつて、どんな事だつたのでせう」きぬ子は詰らなさゝうに云つた。

　また言葉が止絶えた。三人は亡兄の重大な秘密を前に置いて、それ〳〵の思ひを寄せて見詰めてゐるやうだつた。

「さあ、もう出掛けませう。腹こなしに銀座まで散歩しようぢやありませんか」と、きぬ子はつと立つて呼鈴を押した。自分の手で支拂ひをして、過分な祝儀を女中に與へた。

　五郎吉はもつと話を進めたい興味に驅られてゐたが、鳥屋を出ると、三人の心は自から街上の混雜に紛らされて、きれ〳〵な取留めのない話が取かはされるのに過ぎなくなつた。そして、日本橋を渡つて白木屋の前まで來ると、きぬ

子はふと足を留めて、夫に耳打ちしたが、近所の知人を訪問するといふ口實の下に、五郎吉を棄てて道を轉じた。

五郎吉は二人に別れても電車には乗らないで、眞直ぐに銀座の方へ足を進めた。きぬ子が自分を煙たがつてゐるのかも知れないと思ふと、亡兄の秘密が當人の死によつてもこの世から消失せないで、生々殘つてゐることが感ぜられた。五郎吉自身が亡兄の秘密を受繼いで、吉川夫婦に對してゐるやうに思はれた。夫婦が肩を並べて睦まじさうに歩いてゐる後姿を、彼れは嫉妬の思ひをさへ寄せながら顧みた。

銀座のカッフエーで飲みたくもない洋酒を舐めなどして、暫く時間を過ごしてゐる間にも、彼れはきぬ子の窶けた眼差しや瑞々した頰つぺたを目の前に描いては見据えてゐた。淋しい自分の家へ歸つてからも、先日までのやうにきく子を他人の妻として淡白に思出してはゐられなくなつた。

「つゆ子の死」を彼れは、手文庫の中から取出して再び念入りに讀みだした。……作中の小田原は實は大磯なので、きぬ子が大波に浚はれたのは兄の捏造とばかりは云へないので、兄が大磯へ遊びに行つてゐたのもその時分であつたのかも知れない。……この原稿の先がもつと書續けられてあつたなら、たとへ作り變へてあるにしろ、事件の奧底を見破る材料になるであらうのにと、もどかしかつた。

ヅブ濡れになつて沙の上に立つたきぬ子の姿を、五郎吉は原稿に書いてあるやうな執念の蛇の目で見据えて、われ知れず蛇の舌で舐めてゐた。出鱈目な運命の打擊で人一人頓死したからと云つて、それを幸ひにあの一家を幸福に生かして置くものかと、われ知らず、考へられた。そして、何時になく眠づらい思ひをして眞夜中に煩はしい夢から目醒めたが、すると、三田の吉川の枕許に立つて夫婦の寢顏を見下ろしてゐるのは、亡兄でも、あるひは他の誰れでもなくつて、五郎吉自身のやうな氣がしだした。

老女は次の室で幽かな寢息を洩らしてゐる。家の中の淋しさ獨寢の淋しさが、今宵はことに身に染みた。

翌日會社が退けると、同僚を誘つて外で食事を濟まして遲く家へ歸ると、殿町の義姉が墓參の歸りにわざ〱立寄

つて、長いこと待つてゐたと、老女は話して、
「毎晩何處へ行くんでせうつて心配してゐらつしやいましたよ」と附け足した。
「でも、義姉さんは用事があつて來たんぢやないでせう」
「どうで御座いますかね。あなたがこの頃は幾日も家を空けることがあるかつて心配さうに訊いてゐらつしやいました。御安心なさるやうに御返事をしときましたから、あなたもお暇な時はたび〳〵霞町へ行つてお上げなさいましな」
「家を空けるなんてあなたの方から話したんでせう。僕は今まで義姉さんにそんなことを云はれた覺えはないんだから」
「何を仰有るんです？」と、老女は不平らしい顔して、「私は餘計なお喋舌はいたしません。義姉さんによく訊いて御覽なさいまし。あなたの事は私よりも姉さんの方がよく御存じなんですから」
「僕は人に知られて惡いやうなことをした覺えはないんだがな」
五郎吉は老女の饒舌家でないことは平生よく知つてゐるのであつた。そして、老女の口から出たのでないとすると自分の事を兄嫁はどうして知つてゐるのか、また知つてゐながら面と向つた時に一度も話に洩らさなかつたのかと不思議に思はれた。
「吉川さんの奥樣は此方へお遊びに入らつしやるかとお訊ねなすつたから、旦那樣は時々お見えになつたけれど、奥樣には一度もお目にかゝつたことがないとお答へすると變な顔してゐらつしやいました。あの奥樣はお美しいけれど心掛けはあまりよくないさうぢや御座いませんか」
「へえ義姉さんは吉川のことまで話してゐましたか。しかし、人の妻君の心掛けなんか、どちらだつていゝさ」
五郎吉は腑に落ちない思ひを抱いて眠りに就いたが、きぬ子と自分との間には斷ちがたい因緣が出來てゐるやうに

思はれてならなかつた。日々の凡庸な會社勤めや有振れた色戀沙汰にさしたる樂みを見出し得なかつた彼れも、俄かに世の中が變つたやうに空想しだした。

翌日は勤めを終つてから霞町を訪づれたが、兄嫁は親戚の者に誘はれて遊びに出てゐた。五郎吉は亡兄の著書や藏書などを手當り次第に本箱から引出して徒らにページをめくつたり、ところ／＼を讀下したりした。職業も違へば性質も餘程違つてゐた亡兄の藏書には彼れが慾しがるやうな者はなかつたが、その中の二三冊を形見として持つて行くことにして、古新聞にくるんだ。

もう十日もしたら、家財はあらまし賣拂つて、兄嫁は一先づ實家へ歸るのだが、まだ年齢の若い兄嫁は、子供もないのだから、早晩新たな夫を得て、亡兄の事を忘れるだらう。眞心で妻を愛してはゐなかつた亡兄に、老いるまで連添つて詰らない日を送るよりは、今の間に死別れた方が却つて兄嫁のために幸福だつたかも知れない。……亡兄の死は誰れに取つても不幸の種になつてゐやしない。強いて云へば、「外に兄弟のないおれが、一人きりの手頼りを失つて心淋しくなつたくらゐなものだ」

五郎吉は、まだ死別の涙に濡れて、稍々もすると心細いことのみ云つてゐる兄嫁に、今日は會はなかつたゝめに、その悲しみにかぶれないでむしろ兄嫁の前途を靜かに祝するやうな氣持になつて其家を出た。

薄ら寒い夕風が吹いてゐた。彼れは三田の方へ足を向けたが、續け樣に吉川を訪問するに相應しい口實が思ひつかないので躊躇した。

「……亡兄の形見として書籍一卷お屆けいたしたく、なほ今後の事について御高見拜承いたしたく候につき、近日お訪ね申べく存居り候」と、彼れはその夜吉川に宛てゝ端書を出した。すると、返事の手紙が、翌日彼れが會社から歸つた時には既に机の上に届いてゐた。

「……お形見分けの事有がたく存じ候。頂戴いたし永久に保存いたすべく候。近日御光來下さるとのこと、喜んで御待ち申上ぐべき筈のところ、昨今俗用頻出、且つ荊妻儀恙に罹り、御好情に酬ゐがたきやう存ぜられ候につき、遺憾ながら他日におのばし下されましくや、切望仕候。いづれ當方より好時機を撰び、改めて御來車お願ひ申すべく存居候。末筆ながら霞町のお宅へもよろしくお傳へ下されたく候」

ギクシヤクした文字で書かれてあつたこの訪問拒絶の手紙を見ると、五郎吉は吉川夫婦の間の暗い影を察しないではゐられなかつた。先日は自分の訪問を歡迎した彼等が、俄かに拒絶を企てるやうになつたのには、深い譯がなければならないと、その譯を索つてゐると、きぬ子に對する愛着の思ひに堪へられなかつた。

嘗て亡兄がきぬ子と親しさうに話をしながら芝の神明のあたりを歩いてゐるのを、他所ながら見て變に思つたことも、黑人に闘り合ひのない亡兄にも隱し女のあることを、ちやんと睨んでゐたことも、亡兄の生きてゐた時分よりも今になつて、五郎吉に取つて却つて重大な事件になつて來たのであつた。

彼れは一日の間を置いて、早目に會社を出て、手紙の文面にはこたはらないやうに何氣ない風をして、吉川の家の門を入つた。思ひなしか、先日とは違つて家の中がヒツソリしてゐたが、女中の取次によつて、玄關へ出て來たきぬ子の顏は意外にも晴々してゐて、微恙の影もなかつた。

「御病氣だつたさうですが、もうおよろしいんですか」と訊くと、

「病氣つていふほどぢやありませんの。まあお上んなさいな」

「兄の形見を持つて來ました」

五郎吉は玄關で書物を渡して、躊躇してゐたが、きぬ子の方でさして毛嫌ひしてゐるらしくもないのに甘んじて、座敷へ通つた。吉川の不在であつたのが何よりも、悦しかつた。見たところ化物などの現はれる家としてはあまりに小奇麗で明るかつた。張り立ての障子には夕日が深沈に差してゐた。

「吉川は朝から空家搜しに出掛けましたよ。大久保の方に一軒心當りがあるんですつて」と、きぬ子は冷淡に云つた。

「先日のお話は本當なんですかね」

「吉川には本當なんでせう」きく子は微笑して、「轉居の理由は外にはなんにもないんですからね。それに先日の晩あなたが氣味の悪いお話をなすつたから、吉川は尚更この家に落着いてゐられなくて、一刻も早く轉居しようと思つてるんです」

「僕が兄貴の死ぬる前の話をあなた方にお話しゝたのが悪かつたんですか。……あの話が何故吉川さんにそんないやな印象を與へたんでせう。不思議ですね」

「五郎さんも白ばくれてゐらつしやる。吉川を苦しめようと思つてわざ〳〵あんな話をなすつたんぢやありませんか」

きぬ子の蕩けた眼差しもふと凄く光つた。魔性のきらめきに打たれたやうに、五郎吉は胸を轟かしながら、

「僕はさういふつもりぢやなかつたんですがね。あの時兄貴の話が出たから、つい餘計なお喋舌をしたんですよ」

「そんな言譯はなさらない方がいゝのよ。吉川が化物をこしらへたりして苦しむのは自分の勝手なんですから。……私は化物なんか幾つ出て來たつてちつとも怖かあないのよ。五郎さんはどう思つてゐらつしやるの。兄さんが一生の大事な秘密を書かないで死になすつたから、この世に思ひが殘つてるなんて、本氣でそんなことを云つてゐらつしやるの？。あなたにも似合はない、可笑いぢやありませんか。……私は死ぬる人はみんな極樂へ行つてこの世に思ひを殘したりなんかしないと思つてゐますわ。だからあなたがどんなことを仰有つても私はちつとも怖かないんですけど、吉川は臆病なんですからね。なるべく脅かさないやうにして下さいな」

「あなたの仰有ることは謎見たいでよく分りませんが、僕の兄が極樂往生をしたやうにあなたには見えるんですかねえ」

「……兄さんが急病でお亡くなりになつたといふお知らせがあつた時には、私吃驚して卒倒しさうだつたのですよ。四五日は御飯も喉へ通りませんでしたの。でも、いくら泣いたつて祈つたつて、亡くなつた人が生返る譯ぢやないんですからね。私すつかり諦めることにしましたの。……兄さんはね、五郎さん。どんな思ひを胸に持つて息を引取りなすつたか知らないけれど、今はお墓の中で冷たくなつてゐるんですよ。いくら御兄弟の情誼があつても、あなたの思ひが今の兄さんの胸に通やしませんよ。思ひの通ふのは生きてゐる者同士の間に限るんですよ。……いゝも悪いも、怖いことも楽しいことも、お互ひに生きてゐる間だけのことじやありませんか。私、兄さんが夢のやうに出抜けにお亡くなりなすつたことを思出すたびに、つく〴〵さう感じるんですよ。人間は生きてゐる間だけのことだつて。……かうして五郎さんとお話してゐられるのも生きてゐる間だけのことですからね。あなたはさう思ひなさらなくつて？」

「さうですねえ」

五郎吉は煮え切れない返事をした。きぬ子のふて〴〵しい言草を憎まうと努めながら、この座敷の空氣が彼れを夢心地に誘ふのをどうすることも出來なかつた。

「臆病な吉川が化物を何時までも見てゐたければ勝手に見させといて、あなたは傍から突つかないやうにして下さいね。突ついて見たつて、あなたのために何の得にもなりやしませんよ。……それよりもあなたの内所の面白いお話をゆつくり聞かせて頂きたいんですがね」

きぬ子はさう云つて、五郎吉を二階へ導いた。二階は二室つゞきで一室は書齋にあてられてゐた。今様の趣味によつて装られてゐて、きぬ子にはあまり弾けもしないオルガンが備付けられてあつたり、高原を描いた洋畫が懸けられてあつたり、丸善の飾窓に出てゐるやうな書棚や机が置かれてあつたりした。五郎吉は殺風景な自分の書齋とはくらべ物にならない居心地よさゝうな部屋の中を彼方此方と歩きながら見廻して、夫婦水入らずのスキートホームを想像してゐたがふと次の室に懸つた姿見に映つた自分の顔を見て驚いた。亡兄の顔がそこに現はれたやうに思つたのだつ

た、子供の時分に瓜二つと云はれたことはあつたが、自分で自分の顏が兄によく似通つてゐようとはかつて思つたことゝなかつたのにと、彼れはその鏡を無氣味に思つた。

葡萄酒に林檎を添へて持つて來たきぬ子に向つて、

「吉川さんはもう歸つて來る時分ぢやありませんか」と訊ねると、きぬ子の目は異樣に光つた。そして、默つて相手の顏をまじ〱と見入つた。

「どうかしたんですか」と訊返すと、

「いゝえ、何でもないんですの」と、きぬ子は持前の蕩けた目差しをして、「私、先つきのあなたの聲に驚いたんですけど、何でもありませんの。……吉川はまだ歸つて來りやしませんよ」

「僕の聲が變だつたのですか」五郎吉は自分の聲が亡兄の聲に似てゐたのかと思つたが、それを明らさまに訊ねるのは躊躇された。

「吉川が歸つて來たつて構ひませんよ。あなたが脅すやうなお話をさへなさらなければ。いゝんです」

かをりのいゝ葡萄酒はきぬ子の手で注がれた。五郎吉は飲まぬ前から醉つたやうな氣持でコップを手に持つたが戶外の足音が絕えず氣にかゝつてゐた。

「御緩くり召上れな」

「えゝ……」五郎吉は落着かない自分の心を、きぬ子に見破られまいと努めながら續けざまにコップを飲み干した。

「五郎さん、私に惡意を持たないやうにして下さいね。そして、年末のお休みには是非小田原へ遊びに來て下さいね。お互ひに生きてさへゐればこの先いゝ事が待つてゐるんぢやありませんか」

きぬ子は特別の持做しのつもりでオルガンを彈きだした。五郎吉は隣家の女學生のよく唄つてゐる「舊都の月」の調子に似てゐると思ひながら聞惚れてゐたが、すると、何處からともなく不快な唸き聲がオルガンの音にまじつて聞

えて來た。何の聲かと訝りながら、演奏中のきぬ子に訊ねるのを憚つてゐたが、オルガンの音の止んだ頃には、唸き聲も自から消えてしまつた。

きぬ子は、

「お隣に病人でもゐるんですかね。吉川さんが氣味を惡がつてゐたのは、あの聲なんぢやありませんか」と訊くと、

「あなたもうお聞きなすつて。お隣には精神病者がゐるんですよ。オルガンを彈くとか、何とか、私の家に異つた事があると、變な聲を出すらしいんです。私は耳が惡いのか、薄ボンヤリのせいだか、よくは聞えないんですけど、吉川の耳にはよく入るんですつて。そして、この頃はあの唸き聲は狂人の聲ぢやないなんて、獨りで極めてゐるんですからね」

　だからいやになつちまうと云ひさうな顏をした。

「狂人か病人の聲でなければ何の聲だと云ふんです？」

「それをあなたは吉川に敎へなすつたんぢやないの、此間。吉川は化物の正體を見つけたつもりでゐるんですから、あなたも罪な人ね」

「……」、五郎吉は何か答へようとしながら口が利けなかつた。

「吉川は雲を摑むやうないやな思ひから離れて、新しい生活をはじめるつもりで、一刻も急いで空家搜しに熱心になつてゐるんですけど、家を變つたつて駄目ですわ。……みんなあなたの所爲よ」

「……………」

「どうせ私だち夫婦は今までのやうな調子では暮せなくなつてるのよ。でも、五郎さんはこれから私の味方になつて下さるのね」

「えゝ……」

　五郎吉は幽かに返事したが、それは自分の聲ではないやうな氣がした。電燈が點いて、きぬ子の顏は一層艶々しく見えた。彼れは長い間生命を懸けて戀してゐた女に對してゐるやうに胸を躍らせた。



水溜（小品）

廣津和郎

何故思ひ出すと云ふわけもないが、時々私はその時の事を思ひ出す。

今からもう二十年以上も前の事だ。私が十才前後の時分、私の兄は大變亂暴な小學生徒だつた。牛込の小學校に私が行つてゐる時分、二つ年上の兄は、私が八つで小學校に入つたのに引更へ、彼は七つで入つたので、私よりも三年も級が上だつた。

高等二年（今の尋常六年）の頃に、兄はもう學校中での餓鬼大將のひとりだつた。高等三年四年の生徒でも、兄の命にははいはいと云つて從つてゐた。その頃の小學校の生徒は今より亂暴だつた。丁度日清戰爭の後で、人心一般に殺伐な風があつたためかも知れない。――『決鬪』と云ふ言葉がよくはやつた。毎日々々生徒の間に喧嘩があつて、それが大概學校の隣りのA神社の裏手、よく私達が奥山と呼んでゐたところで行はれるのであつた。今日は誰と誰とが喧嘩するなどと聞くと、私達は、その頃はやつた皮の鞄をぶら下げて、それをばくばく音をさせながら駈け出して、奥山に見に行つたものである。――さういふ場合、私の兄はいつでも喧嘩の審判官と云つた格で、喧嘩する二人の人間の直ぐ横に突つ立つて、眼を光らしながら。二人の樣子をぢつと見つめてゐた。正々堂々と云ふのが、その頃の合言葉で、ちよ

つとでも卑怯な態度があると、『おい、卑怯だぞ』と私の兄が側から怒鳴つた。さうすると、喧嘩してゐる二人は、喧嘩のそれぞれの相手よりも、兄の方が餘計に恐いと見えて、もうそんなに喧嘩に氣が乘らなくなつてゐるのに、兄の手前、止すわけに行かないと云ふやうに、厭々ながら、强ひて元氣をふり起しては、さあ來い、さあ來いと、から元氣の大聲を出して、互の顔を撲り合つてゐた。……私はそれを、澤山の見物してゐる生徒の後から、よく覗いた事を覺えてゐる。

牛込にはA小學校と、もう一つそれに匹敵した位に大きいA×小學校と云ふのがあつた。A小學校とそこの小學校とが、大變仲が惡かつた。その小學校にはNと云ふ區會議員の息子である餓鬼大將がゐて、それが卒ゐるA×小學の一隊と、兄の卒ゐるA小學の一隊とが、戸山の原まで行つて、よく喧嘩をしたものだつた。三十人、四十人、時によると五十人位の生徒を、兄は卒ゐて行つた。そしてみんなが、小さな木刀を、襟の中から袴の下にかけて、隱してゐた。

兄はさう云ふ亂暴者だつた。……私は兄の庇護の下に、學校ではばの利く子供のひとりだつたが、それを得意に思ふよりも、心が痛むやうな場合の方が多かつた。

――私が十一の時に、一家が早稻田の鶴卷町に越した。その頃の鶴卷町は、今のやうなあんな賑かな町ではなく、その大部分が廣い田圃だつた。『早稻田田圃の眞ん中で……』と云ふ歌があつた位、廣い田圃だつた。殊に私の内は家つづきの一番はづれにあつて、門の直ぐ前から、からつとした田圃が展けてゐた。

私はそこに引つ越してからは、學校から歸つて來ると、毎日、その田圃の中を駈けまはつて暮した。ザルを持つて行つて、田圃の中の小川で鮒を掬つたり、もち竿で蜻蛉を捕つたり、蝗を捕つたり、秋から冬にかけては、ヒルテン網で雀を捕つたりした。――まるで田舎の子供の生活であつた。

季節は忘れたが、何でも、霽れるかと思ふと、直ぐざつと雨が來、雨が來たかと思ふと、直ぐ又雲が切れて、青空がのぞくと云つたやうな時分だつたから、六月の梅雨期か、秋雨の頃だつたやうに思ふ。門の前に立つて見てゐると、雲の蔭が田圃の上を、一方から一方へ向つて地圖のやうな塊で走つて行つたり、又、突然ざつと降り出した雨が、見る見

る遠くの方から、灰色の煙となつて此方に近づいて來たりするのが見えた。

或午後、その時分始終私のところに遊びに來た吉田と云ふ級友と、私はその田圃の中を天神町の方へ拔けてゐる小徑の上で遊んでゐた。もち竿を持つて蜻蛉を捕つてゐたやうな氣もするし、又蝗か何かを捕つて歩いてゐたやうな氣もする。

すると、突然、

『やい』と私達に向つて呼びかけたものがあつた。見ると、私達よりも三つばかりも上かと思はれる、酒屋の小僧らしい小供が後に立つてゐた。胸の上で十字に手を組んで、その指先を、袢纏の中に、一寸突つ込みながら、にやにや意地の悪い笑を浮べてゐた。

私も吉田もどつちかと云ふと臆病者だつたので、相手の樣子に脅かされて、二人とも顔を見合はせたまま、默つてゐた

『やい、手前達は生意氣だな。……ぶん撲るぞ、こん畜生！』とその小僧が云つた。

私と吉田とは尙も顔を見合はせてゐたが、別段撲られる理由はないと思ひながらも、併し子供の喧嘩と云ふものは、大槪そんな風にして、理由も何もなくて初まるので、私達は恐ろしくなつて來た。——二人は急に家の方へ向つて逃げ出した。

『こん畜生、こん畜生』と云つて、小僧は少し追つかけて來たが、そのまま立止つて、後から小石を拾つて投げかけた。ころころと小石が私達を追ひ拔けて、地面の上を轉がつて行つた。

私達が家の門の前まで來た時、私の兄が門から丁度出て來た。私達は直ぐ兄にその事を訴へた。

『よし』と兄は云ふと、直ぐつかつかとその小僧の方へ早足で寄つて行つた。小僧は一丁ばかり先の田圃の側にしやがんで懐中から卷煙草を出して、火を點けてゐた。——十三四の小僧が、さうして煙草を喫むところがふてぶてしく見えた。

私達は兄の後から、今度はいそいそとして跟いて行つた。——『生意氣な。煙草なんか喫んでゐやがる』と兄は呟いた

『おい、お前一寸此方に來い』と兄は小僧の前に行つて云つた。

『なにを…』と小僧は云つて立上つたが、その樣子には多少ひるんでゐるところが見えた、――『こいつ等が、俺の事を、小僧粉にして團子にしよ』つてからかやがつたからだ』
『そんな事を云ふものかい』と私と吉田とは口を揃へて云つた。
『まあ、いいから此方に來い』と私の兄はおちついて歩き出した。小僧は默つて踉いて來かけたが、益々元氣がなくなつて、それでも口だけで、ヘツ、ヘツと冷笑するやうな音を出してゐた。
私は兄が小僧を何處につれて行くのかと思つて、兄や小僧の後から、踉いて行つた。少し行くと茗荷畑があつた。そこから小徑が二本に別れて、一本の細い方には、兩側に細いくぬぎの並木が立つてゐる。兄はそこまで來ると、細い方の徑に曲つた。そして五六間行くと、田圃の中の小川から引いた灌漑用の水溜があつた。そこで兄は立止つて、振向きながら、
『やい、こつちを向け』と云つた。
『なにを』と云ひながら、小僧は兄と面と向つて突つ立つた。『一體何がでい……』
小僧の身長と兄の身長とは、殆んど同じ位の高さであつた。併し兄の方がずつと瘠せてゐた。
いきなり兄の手が小僧の肩にかゝつたかと思ふと、小僧の肥つたからだの姿勢がぐらぐらと崩れて、頭から側の水溜の中に轉がり落ちた。――『馬鹿野郎』兄がかう叫んだ時には、小僧の身體全部が、水溜の中に完全に藻掻つてゐた。
『さあ。行かう』と兄は笑ひながら云つて歩き出した。併し私はその光景に半分快感を覺えながら、半分吃驚してゐたので、兄と一緒に引つ返しかけながら、後を振返りつゞけてゐた。
その灌漑用の水溜は、それ程深くはなかつたが併しその底が柔かなので、泥深かつた。私達が四五間行き過ぎた頃、小僧はやつとその中から、這ひ出したが、その着物も頭も顔も手足も、泥で眞黒に染つて、何だか溝泥を浴びた坊主のやうに見えた。――小僧は兩手をへんにぴよいぴよいと振つた。多分手の泥を拂ひ落すためだらう。それから兩手で顔

を撫でるやうにしてゐたが、

『やい、やい』と泣聲のやうな聲で怒鳴つた。そして私達の後から、『お前んところに云いつけに行くぞ。やい、やい』と喚きつゞけてゐた。

『構ふもんか。捨てとけ、捨てとけ』と私の兄は云つた。私は内に云いつけに來られたら、兄も私も困るだらうと思つたが、兄がおちつき切つてゐるので、やや安心しながら、内の方へ歩いて行つた。――可愛さうだと云ふ氣もかなりして來た。

『やい、やい。』と罵りながら、小僧は五六間間隔を置いて、後からついて來た。

兄は内の門まで來ると、

『おい、お前達、門の内に入つてゐろ。來やがつたら、どやしてやるから』さう云つてそこに立止つて、そろそろと近づいて來る小僧の方を向いて、『來るなら來て見ろ。さあ、もう一度投げ込んでやるから』と云つた。

小僧はぴたりとそこに立止つてしまつて、薄暗く汚れた顔から、白い齒を出して、何か云ひかけたが、兄の見幕に恐れてか、そのまゝくるりと向ふを向いて、歩き出した。かと思ふと、急に『わあつ』と云つて泣き初めた。そして天神町の方へ行く例の小徑を、聲をはり上げて泣きながら歩いて行つた。

私達は顔を見合はせて、初めくすりと笑ひ合つたが、何故か妙に薄氣味惡くなつて來た。私はへんに恐くなつたので門から玄關の方へ逃げ出した。吉田も一緒に逃げて來た。するとたうとう兄も門をぴたりと締めて、私達の後から逃げ込んで來た。門から玄關までは、三四十間の距離があつたから、此出來事を、内の者は誰も知らなかつた。私達は玄關から上らずに、裏にまはつて、兄と私との居間に定められてゐた六疊の部屋の緣側から、そつと障子を開けて、部屋の内に忍び込むやうに上り込むと、そのまゝ目白押しに身體をくつつけるやうにして坐つて、長い間、互に何も云はずに、息をころしてゐた。（九年一月）



續戀愛合戰

宇野浩二

十

そんなに怠け者のくせに、たとへその前の晩どんなに遲く寢ても、まるで呪はれたやうに早起者の大下千吉郎は、珍しくその朝に限つて、目を醒ましたのが十時頃であつた。以前は、夢にも、大きな鴉の背中に乘つて池のやうに見える地中海（それは確そんな看板が出てゐた）の上を飛び廻つたり、東郷平八郎と角力を取つて勝つたり、如何にも夢らしい夢を見たものだから、たとへ目の醒める一瞬前までそれを見てゐても、目を醒ますと忽ち夢と實際とけじめが附いたものだが、近頃のは昨日起つた事や考へた事や、一昨日起つた事や考へた事を、どうかすると實際にはまだ起らない續きまで夢に見るやうなことがあるので、目が醒めてからも稍々暫くの間は、おいそれと夢の世界から解放されないので、頭がぼつとして困るのだ、神經衰弱が膏肓に入つてゐたのだらう。だが、そのうちに我に返つて、ふと昨夜の出來事を思ひ出すと、根が正直者だけに、珊子の身體の具合はどうだらうと氣になつて早速女中に樣子を聞いて見ると、中貫が青い酒を持つて來たり、それを飮んで珊子が醉つ拂つて、果は脚氣を衝心し掛らしたり、芦屋が來て、井波が叱り飛ばされて

歸つたり、大下が芦屋にきめつけられたり、そんな一切の出來事を知らない身のぺつちやんこの女中は、却つて法學士の間を不思議さうにして、「どうですか？　さつきから起きてゐらつしやいますよ、」と事もなげに答へた。

「お客樣は？」

「お見えにならないやうですよ、」と、法學生がやきもちを燒いてゐると見てとつた、おませの十四歳の女中は、斯う言ひ捨てゝにや〳〵笑ひながら出て行つた。

で、取敢ず顏も洗はない起き拔けに、法學生が廊下傳ひに彼女の部屋を訪問して見ると、珊子は部屋のまん中に下宿から借りた鏡臺を据えて、けろりとした顏をして、昨夜のことなぞはまるでなかつたかのやうに、それこそ夢だつたんぢやないかな？　と神經衰弱の法學生に思はした位で、大肌ぬぎになつて、それが又男のそれより色黑で、引き緊つてゐるといふよりも、人間ではない何か別の動物の皮膚のやうな感じのする、頸から上の肉體を露出して、丁度一心不亂の畫かきが壁畫でも描いてゐるといつた有樣で、化粧に熱中してゐるところだつた。

「お早う、」と法學生、「今日は珍しく早いですね？」

「お早う、」と相手は目を鏡から放さずに、塗りたくつてゐる水刷毛の手さへ緩めずに、「あなたは又今日は珍しくゆつくりですね？　どこか氣分でもお惡かつたんですか？」

「あなたこそ昨夜は大變だつたぢやありませんか、今日は如何です、もうすつかりいゝのですか？」

「えゝ、もう何でもないんです。」

「大いに自愛して下さらないと、あなたのやうな方はその影響が一人ぢや濟まないんですからね。お蔭で僕もひどく芦屋君に叱られましたよ、……ところで、芦屋君は？」

「今朝早くお歸りになりました、……」

――そして彼女は依然として丹念に白粉刷毛で、白粉の相場の狂ふ程、ぴたり〳〵と、話相手の大下には聲を返すだけで

鏡に向つた目を一寸も反らさずに、塗りたくつてゐる手を止めなかつたものだ。

「大分綺麗になりますね、」と大下は言つたことだ、「どちらへお出かけです？」

「井波三五郎に案内してもらつてね、」と彼女は一應目鼻も見えぬ程に眞白に塗りつぶした顔に、それを七色白粉や紅や墨やで書き込み彩ることに從事しながら。「日本劇場の樂屋を見せてもらひに行くんですの。」

「結構ですね。……これ一つ食べますよ、」とまだ顔も洗はないで、丁寧に目やにさへくつ附けてゐる法學生は、昨夜彼自身が中買の命を受けて彼女に持つて來たところの、もう半分以上食ひ荒されてゐる水蜜桃を一つ摑んで、「水蜜桃がよく賣れましたね？」と言ふと、

「私ちつとも食べないのよ、」と彼女は小鼻の際の白粉のつきの惡いのを氣にしながら、幾度も幾度も手拭でふき取つたり、又刷毛でなすりつけたりしながら、それでも言葉にだけは大いに抗辯の意を強めて言つたものだ、「芦屋さんですよ、芦屋さんはよくお上りになるのね、自分でも買つてゐらしつたんですよ、向ふの隅に新聞紙にくるんだものがあるでせう、」とそこで始めて彼女は一寸その方を顧で差して、「あれがその皮なのよ。……」

「ところで美術座の方は一體どうなつたんです？　これでは藝者の鑑札が下るより骨が折れますね、」と大下は柄にもなく何處で聞きかぢつて來たのかそんな冗談を言つたものだ、そして「ハハハハハ、」と笑つてから、急に又眞顔に返つて、「だが、もう今日明日にも認可になるんでせう。そしたら、餘りその日本劇場などに屢々出かけない方がよかありませんかね？　どうもあなたが井波君たちと交際するのを寳部君は喜ばないらしい樣子ぢやありませんか？……」

「そんなに始終日本劇場へ行つてやしませんわ、」ともう殆ど化粧の完成に近づいた顔を、化粧すると仲々派手な美人になる顔なんだ、この顔は神樣が始め美人を造るつもりで組立てたところが、中途で急に用事でも出來たか、外に心配事が出來たかして、一々の道具を無責任にくつ着けたものに違ひない、と誰かゞ言つたが、仲々言ひ得たものだ、それを、今迄傍目（わきめ）もふらずに鏡に向つてゐたのを、始めてキット法學生の方に向けて、さうすると、例の錢睥みの目が物凄

く光るのだ、そしてきめのけるやうに叫んで言ふには、「實部さんなんかもうどうでもいゝわ、面と向ふと調子のいゝことばかり言つてゝ、陰では丸尾さんの御機嫌を買つてるもんだから、私のことなどちつとも進行しないんですもの。・・・私、ことに依つたら、いつそのこと日本劇場の歌劇部に入つてしまはうかと思つてますの、あそこなら井波三五郎がちやんと世話してくれるでせうし、それに舞臺監督の佐伯さんだつていゝ人ですし・・・・」

大下は、まるで彼自身のせいでもあるかのやうに、彼女の憤慨の假裝敵に擬せられて、少なからず閉口したが、やがて氣を取直して、「だが、まあ始めに思ひ立つたんですから、もう少し短氣を起さないで待つて見る方がいゝでせう。それに井波三五郎なんていふ人物は餘り感心の出來ないものぢやありませんかね？・・・・。」といふ心は、彼は又彼並の嫉妬心と見られぬことばないのだ、何故なら、目下のところ多勢の彼女を取卷く男たちの中で、井波のはその遣り方が最も通俗的な代りに、最も完全に彼女を占領してゐるらしく見えるのだ、それが何も法學生に大した利害關係がある譯ではないが、それは又何とも言へず感じが惡いのだ、つまりやけるのに外ならなかつた。

「ですけども・・・・」と漸く彼女が顏の化粧を終つて、髮の方に掛らうとしながら、言つてゐるところへ、廊下に重い足音がして、

「珊子さんゐますか？」と言ふ聲と共に實部が入つて來た。彼は部屋の隅に大下を認めて、一寸不快な顏をして、「や！」と一言挨拶した切りで、「どこかへ行くんですか、これから、何處へ？」と、癖の、その額際の禿げ上つた、大きな丸い顏を振つて、近視の目を細く一文字にして、攻め立てるやうに聞いたものだ。

さすがの珊子もぐつと詰まつた樣子だつたが、くる〳〵と解いた髮を、頭を二三度前に傾けて振つて、それで少々迷惑した顏を隱すやうにして、それを二三度梳けづつてゐたが、卽座に大膽不敵な性質を回復して、大下なぞの存在を無視してしまつたらしく、「これからあなたの所へお伺ひして、私も一遍京都へ歸つて來なければなりませんので、母から始終催促して來るのですから、あなたにお願ひして、早くどちらとも美術座の方のお話を定めていたゞきたいと思つて

ゐましたの……」と言つたものだ、それは忽ち實部を有頂天にさしたことは無論であつた。彼は一瞬に相恰をくづして細い目を二三度ぱち〳〵としば叩きながら、

「さうですか、いや一日も早く、無論入つてもらふことになると思ひますがね、定るやうにしませう。ぢやあ、直これから一緒に事務所の方へ出かけませうか？」と言つて、早速大きな身體を突つ立てたが、相手がまだ髮を結ひ始めたばかりなのに氣がつくと、そこで始めて大下の方に向つて「先達ては失禮しました、」と挨拶したものだ。

さて、珊子が實部に連れられて出て行つた後、大下は自分の部屋に歸つて來て、再び、先程抜け出した時のまゝの恰好になつてゐる蒲團の中にもぐり込んで、腹這ひになつて遲い晝飯を食つてゐる所へ、一方の壁の片隅についてゐるまるで袋の口といつた體裁の、半間の扉を開けて、眞黒な、骨張つた、その癖どこか三枚目役者らしい愛嬌のある木内の顔がのぞき込んだ。

「珊ちやんは朝から何處へ行つたんです？」と言ひながら、入れとも言はないのに遠慮なく部屋の中に闖入して來て、「仲々便利なことをやつてますね。もう晝飯ですか？」と言つて、大下の枕元にどつかりと坐つたものだ。もう午後一時を過ぎてゐるのに、「朝から何處へ行つた」とか、「もう晝飯か、」とか、この男のみならず、彼等は大體時間の觀念の可成り變つた人間たちだつた。

「今の先、實部君に連れられて美術座の事務所へ出かけたやうですよ、」と大下は食ひ終つた食膳を傍に寄せて、それから悠然と蒲團の上に起き直つて、自分の今迄着てゐた薄い掛蒲團を二つに折つて、座蒲團の代りにそれを木内に勸めた。

「實部の奴、ひどく珊ちやんに惚れてるんですよ、」と木内は例の獨特の雄辯で始めた、「それで一生懸命に彼女を美術座へ入れようと骨折つてるんですがね、肝心の御大將のつき子が珊ちやんを大嫌ひと來てるんでさあ、蔵原さんだつてつき子の言ひなり放題ですからね、難しいもんですよ。僕の方の現代劇社へ來るといゝんだがな、僕が立派な女優に

仕立てゝ見せるんだがな、なあに、一つあなたから話し込んで貰へませんかね、お禮はしますよ、お禮は。」

「どうして僕にそんな腕があるもんですか？」と大下はにきび面に小さい目を見張つて言つた、「僕は相談役といふよりは番頭といつた格ですからな。」

「寳部なんて駄目ですよ、口の中は始終臭いし、芝居は拙いし、女には惚れつぽいし、」と木内はつゞけた、「あの男の女に惚れつぽいつたら、そりや話になりませんよ。いや、あんまり話になり過ぎるんだ、僕は二三十番も知つてゐますが、成功したのが一番もないんだから豪氣ですよ、そこへ持つて來て、その振られ方が一々奮つてるんですからね、つひ二三ケ月も前に、やつぱり今美術座に入つてゐる女優でね、……」

その時、又廊下に足音がして、それが大下には直中貫だなと分つた、「大下君！」と呼ぶ例の甲高い聲と共に「ひゆう！」と笛のやうな叫び聲をかけて、中貫は部屋の中に入つて來るなり、「珊子さんは何處へ行つたの？」と聞くのだ。この日頃大下を訪問する客に、先づ大下の健康を聞くものはないのだ、無理もないのだ、彼等は珊子がゐなければ彼を尋ねて來る筈ではないからだ。

「まあ坐れよ、」と大下は持前の皮肉な調子を出して、突つ立つてゐた中貫に言ひかけた。「珊子さんは寳部君と美術座の事務所に出かけて行つたよ、」それから多少客の二人を厭がらせるつもりで斯う附け加へたものだ、「それからひよつとすると日本劇場に井波三五郎を訪問するかも知れないよ。」

「井波といふ奴は實に好かない奴だね、」と中貫は言つて、その時始めて木内に「や、失禮！」と會釋して坐についた。

「あんな厭な男つたらありませんよ、」と木内は始めた、「あれはあの飯田橋の角に井波といふ一膳飯屋がありませう、あそこの伜ださうですよ。さういふと一寸飯屋の伜らしい所があるぢやございせんか？」言ひながら木内は昨夜中貫が買つて來た、珊子にとゞけた殘り物の水蜜桃を猿のやうに敏速にむしやむしやと食べ出した。彼がせめて物を頬張つてゐる間だけは坐が靜かになるので、

「昨夜は、君、君のお蔭でひどい目に遭つたよ、」ど大下が低い聲で中貫にこぼしたものだ、「僕も君と一緒になつて、珊子さんに酒を飲まして、脚氣を衝心し掛らしたと言ふので、芦屋君に人間ぢやないと言つて叱りつけられたよ。」

「芦屋といふのは、あの芦屋君のことですか？」と木内が最後の水密桃を頬張りながら大下に聞いた。

「あゝ、あなたとは芦屋君とこで始めてお目に掛つたんでしたつけね、」と大下も思ひ出して答へた。

「相變らず芦屋君流ですね、」と木内は指先に附いた水密桃の露を縱横無盡に嘗めながら言つたもんだ、「芦屋君もそんなに珊ちやんと懇意なんですか、驚きましたね？」

「芦屋君の最も愛する人ですよ、ホホホホホ……」と中貫が傍から註釋しながら、木内の方に向つて、「僕にも桃を一つ下さいませんか？」

「いや、これや失禮、」と木内は折角嘗め取つて拭いた手でぐちやぐちやの桃の食ひ滓を掻き廻しながら、「すつかりやつちまひました、」と恐縮さうに、然し多分の身振り入りで、言つた。

「まだ下にあつたかも知れんよ、」とその時大下は言つて、珊子の留守の部屋に水密桃を取りに出かけたものだ。「可愛い――イ、をとオコの――オ、度胸だめエシ――イ、サイショね、……」なぞと彼が變な唄を口吟みながら、心持跣足で誰もゐない筈の珊子の部屋に飛び込む瞬間、

「靜かにし給へ！」と凛とした聲がその部屋の中から起つたので、神經的な臆病者の法學生は蛇に遭つた蛙のやうに暫くの瞬間部屋の入口に立縮んだ恰好だつた。彼を、たしなめた聲の主は、大下が半年も前に國の母から送られたところの、牡丹に蝶々の友禪メリンスの座蒲團を、それを彼は自分でも碌に使用しないうちに夏が來たのだ、それを珊子が來たのでわざわざ彼女に貸したものである、それを机の前に敷いて、端然として片肘を机に突きながら、法學生の目的して來た水密桃をちよねちよねとおちよぼ口を以て食つてゐるのだつた。皿の桃は後一箇を殘してゐるだけだつた。それは言ふ迄もなく、哲學者芦屋だつたのだ。

「失敬、昨夜は失敬！」と稍々あつて言つてから、法學生は取敢ず部屋の中に入つたが、次に困つたのは彼の用事の目的がなくなつてゐたことだ、水密桃ぐらゐなくなつてゐても何のかまふところもないが、用事のなくなつた手持無沙汰に困つたのだ。

「何しに來たんだ？」とその上芦屋がきめつけたものだから、氣の弱い大下は益々狼狽して、咄嗟の間に、

「煙草を、煙草を忘れといたので、……」と言つた。

「煙草なんぞないよ、」と芦屋は最後の水密桃をそのおちよぼ口で、その態度には似ず、つゝましやかな恰好でしやぶりながら、やがてゆつくりとしやぶり終つて、「目的は煙草ぢやなくて、大方僕が來てゐるんで、樣子でも見に來たんだらう」と叫んだ。

「そんなことはないよ。」と大下は仕樣がないので、相手から二三尺離れたところに座りながら、「だつて、君の來たのを僕が知る筈がないもの……」

「一體、君たちには、」と芦屋は相手を複數にして始めた。「人間といふものがちつとも分つてゐない。君たちは人格といふものに就いて一度でも考へたことがあるか？」

「僕か？僕は……」と法學生は氣が落ちついて來ると、持前の、反對にひどく心持に餘裕を感じて、變に皮肉な口振になつて行つた、「僕は恥かしい話だが實の所そんな風に考へたことはないんだ。所謂醉生夢死の徒かも知らんが、まあ、この世の中がつまらないとか、味氣ないとか、何が何だかさつぱり分らないとか、……」

「だから、君たちのやうな人間は救へない、と言ふんだ、」と言つて、そして芦屋は彼自身がその救ひ手でもあるかのやうに、大きい頭を左右に一振り振つて、女のやうにくの字なりに曲げた右の手で、さつとその長髮を後にさばいたものだ。

「でも、」と飽く迄表面柔順らしい法學生は大人しい調子で云つた、「僕だつて救つてくれる人があつたら救つてほし

いと心から思つてるんだよ。」

「我々男性を救ふものは、」と芦屋は相手に聞かすといふよりは、自分で勅語でも讀むやう調子で、「我々男性を救ふものは、女性だ！」と凛として聲で言ひ放つた。

「さうかねえ？」と大下はその時始めて芦屋の顔を眞面に見て、「そんなものがあるかねえ、さうすると、珊子さんなどがそれかねえ？」と言つて、これは言ひ過ぎたと思つたので、後をわざと冗談らしく笑にまぎらしたものだ、「アハハハハハハ……。」

「君は君の部屋に歸り給へ！」と芦屋は叫んだ。その言葉がすかつかり終らない時に、廊下をどん／＼踏む足音、そんな大きな足音をさせるのは寶部の外にないが、それが又いつもより一層激しい音を立てゝ、間違ひなく、極度の近視のためにぐつとその細い目をした大きな丸い顔を突き出す癖の、寶部が慌しく二人の坐つてゐる部屋に飛び込んで來た、そして、あわてた時のその近視の目は、明らかにその部屋の中にゐた人たちが誰々であるかなぞ認められなかつたに違ひないのだが、

「や、や、」と挨拶とも何とも附かない掛聲をかけたもので、それからその首を一層突き出して、物を見究める時の彼等の通弊として、近視の目を糸のやうに細くしながら、やつと大下がゐることを確めると、彼は「珊子さんはまだ歸らないんですか。珊子さんは歸つて來ませんか？」と聞くのだ。

「どうかしたんですか？」と糞落着きの法學生は答へた。「あなたと一緒に出たつ切りですよ、ねえ、芦屋君？」

「さうだらう。」とこれ又糞落着きに落着いた調子で言つて、それから寶部の方を見て、

「兎に角、一度お坐りになつたらいゝでせう？」

「えゝ、いや、えゝ、いえ、」と言ひながら寶部も一先づ坐つた。

「一體、どうしたといふんです？」とそこで大下が寶部に向つて聞いた。

「珊子さんはどうも飽り見上げた人ちやありませんな、飽り見上げた……あれでは駄目です、あれでは駄目です、あんまり交際が廣過ぎますな、」と實部はまだ興奮しつゝけたまゝ喋るのだ、そして珊子のことで興奮して來ると、不思議なことに、誰も皆このにきび面の縮れ毛の法學生を假裝珊子に擬して、突つ掛つて行つたものだ、實部はつゝけた、「今朝から、僕たちが行かぬうちに、事務所の事務員の話に、珊子さんに二三度も電話が掛つて來たさうなんです、それは一日に一度か、三日に二度か必ず掛けて來る人ださうで、名前は『しない』といふんださうです、聞き違ひですね、井波なんですよ！」と彼は力を込めて、從つて持前の口臭と共に、無數の粉唾を吐いて叫んだ。

「何でも、」とそこで法學生はなるべく話手を落ち着けて、眞相を聞かうとしたものと見えて、火に水を差すやうな調子で相槌を打つたものだ、「何でも今朝僕も一寸そんな話を聞いたやうでした……」

「どんな話です？」と實部は叫んだ。

「いや、その井波君に案內してもらつて、日本劇場の樂屋を見物に行きたいとかつてね……。」

「ちやあ、やつぱり井波のとこへ出かけたんだな！」と實部は新派芝居に出て來る、一枚目役目のやうな見得を切つて叫んだ。

その時、又廊下に二人の人間の足音がしたのであるが、部屋の中の人たちは誰も氣が附かなかつた、それは大下の部屋で待ち兼ねてゐた二人に違ひなかつた。

「いよオ！どうしたのかと思つたら御歷々のおそろひで……」と骨張つた色黑の顏に、殊に目に立つ眞白な大きな前齒をのぞかせながら、邪氣のなさゝうな愛嬌笑を浮べて、木內が、つゞいて、「皆さん、失禮！」と笛のやうな聲の、お坊ちやんお坊ちやんした、但しそれが大分年とつて變な陰影が出來たが、可愛らしい顏をした中貫が、部屋の中に入つて來た。

「どうしたと言ふんだ？」と木內は實部に向つて、今の彼の言葉を廊下から聞いたものと見えて、「珊ちやんが又井波

とどこかへ行つたのかい？　困るね、あの尻輕娘！」と言つたが、一坐に誰も笑ふ者がないので、多少拍子拔けのした調子で更につゞけた。「さういへば、君ももう聞いたかも知れないが、今度珊ちやんが東京へ來たのは、始めは日本劇場の歌劇部へ入るつもりだつたんだつてね、だから、最始めに井波を尋ねたんださうだよ。もつとも井波の方からちやんと停車場まで自動車を廻しておいたと言ふ話もあるがね。ところが、外のは知らないが、井波の樂屋といふのは西洋室になつてゐて、內部からぱちんと錠が下りるんださうだよ。……」

この邊になると、法學生の大下も、文學生の中貫も、俳優の寳部も、そしてみんなから少し離れたところに、机に片肘ついて先程から身動きもせずに、皆の話を何處を風が吹くかといふやうな態度で、低い小さい、但し恰好のいゝ鼻をつんと空向けてゐた哲學生の芦屋も、次第々々に木內の話に吸ひ込まれてしまつて、誰も煙草一本吹かさず、咳拂ひ一つしないのだ。

「……內部から錠がぱちんと下りる、がいゝぢやないか？」と木內は次第に大袈裟な身振り入りで、その時は錠前を扭ぢる手眞似なぞをまぜて、そして話しつゞけたものだ。「ところで井波三五郎君、珊子を自分の樂屋に案內して、その錠前を內部からぱちんと下ろしたものだ、ラーラーララッラッラ、ラッラッラ、ラーラーララッラッラ」とそこで木內は巧みな西洋囃子のやうなものを入れて、「これは何だか知つてますか？」と文學書生の中貫の方を向いて、「こはストリンドベルヒの『伯爵令孃ユリア』第二番目の間の時の、墺太利の民謠といふ奴です、舞臺空虛、そしてこの音樂が聞えるのです、そしてその空虛の間に料理人がユリアを、その內部から錠前をぱちんとやつたわけなんです、芝居ではこの間が約五分間ですがね。ところがその井波の樂屋では約三十分間あつたさうです、ラーラーララッラッラ……」

「止め給へ！」とその時例の机に片肘を突いてゐた哲學生が凜とした聲でたしなめた、そこで一座がぎよつとして沈默してゐる瞬間に、彼の聲だけが豫告者のやうに響き渡つたことだ、「君たちは皆歸つてくれ給へ、歸つてくれ給へ！」そして誰も皆呆氣にとられて默つてゐるので、「君たちは婦人の家に來て、その留守中に何といふ無作法な話をするんです

まるで君たちは人間といふものを知らない。……」

だが、この木内の話に依つて、氣持を惡くしたのは芦屋だけではなかつた。實部も、中貫も、そして大下も皆同じ不快な思をした、聯合してその不逞漢井波に當らうと、これが國と國なら、決心し相談したかも知れなかつたほどだ。

一度言葉を言ひ放つと、一層强さうには見えるが、哲學生芦屋も心の中が忽ち荒野になつたやうな氣がしたに違ひなかつた、彼はもう一度「君たちは歸り給へ！」と言ひ放つて、それから机に向つて、その上にあつた硯箱を引き寄せて、その傍にあつた卷紙を開いて、何事か書かうと準備し始めた、そこで、もう一度外の人たちの方を見廻して、「僕はこゝで一寸物を書きたいし、するから、君たちは大下君の部屋にでも引取つて下さい！」と叫んだ。

で、大下が立つたのと殆ど同時に中貫が立つて、つゞいて木内、實部の順で部屋を出て、皆々大下の部屋にくり込んだ、皆々妙に默り込んだまゝだつた。彼等は大下の部屋にそれ／＼坐を占めてからも、變に白けた氣分を感じて、話がはづまないのだつた。

「一體、珊子さんがどうしたといふんだい？」と暫くしてから木内が、いつになく悄然としてゐる實部に尋ねた。

「いや、美術座の方の話が今日で大抵定りさうだつたんだ、」と實部は元氣のない、泣くやうな聲で言つた、「もう幹事連の方は殆ど全部承認してゐるんだ、で、今日の幹事會でつき子が承諾すれば、それでいゝことになつてゐたんだ。ところが、どうしたのか、例になくつき子が仲々出て來なかつたんだ、その間に珊子さんのとこへ、やつぱり井波だつたんだな、井波から二度も電話が掛つて來たんだ。すると、彼女が變に落着かないやうな、もぢ／＼した風をし出したものだから、今日は兎に角辛抱してくれ給へ、今日で大抵定ると思ふから、と僕は十分止めを差しといたんだが、それが突然歸つてしまつたんだ。駄目だね、もうあの人は駄目だね……」

そこへ下宿の女中が入つて來て、「あの波川さんに電報ですが、」とそれを見せて、「どうしませう？」と聞いた。

「よし、かまふまい、預かつておかう、」と言つて、大下がそれを受取ると、

「どこからです？」と言つて實部がのぞき込んだ。見ると差出人が「ナミカワ」となつてゐる。「ぢや、開いて見た方がいゝでせう、そしてことに依つたら、どんな急ぎの用かも知れませんから、」と實部が言つた。そこで、二三議論が出たが結局開いて見ることになつて、見ると、『ハハビヨキワルシスグカヘレ』と言ふのだ。

「これや直知らしてやらなければいけないな、」と大下は言つた、「日本劇場の樂屋に電話をかけたもんかな？」

「もう歸つて來るだらう、」と中貫が口を挾んだ、「どうせ、今歸つて來たつて今夜の汽車だらうから……」

「珊ちやんも大分大騷ぎをさしたが、もう歸つてしまふのかな」と木内が言つた。

「もう俺は知らない！」と實部が叫んだ、「女優の世話なんて、こり〳〵だ！」

「どうせ一度歸つて、又來ると言つてましたがね、」と大下はみんなを力附けるやうに言つた。

「それぢや、今夜發つんだらうな、」と木内は言つた、「どうせ送つて行く人は多勢あるだらうから、俺たちは行かなくてもいゝだらう？」と實部に向ふと、

「俺はそんな譯には行かんがな、」と實部は言つた。

「それぢや、又今夜來ることにして、一ぺん歸らうぢやないか？」と木内が誘つて、實部は一緒に歸つて行つた。

後に殘つた大下と中貫は更に一層白けた空氣の中に取殘された譯で、變に息がつまるやうな、お互にお互が腹立たしくなるやうな氣分の中で、長い間默りこくつてゐたが、やがてどちらが先にともなく、ごろりと手枕で寢そべつてしまつたものだ、二人ともその日頃は隨分寢不足なのだ。で、いつの間にか寢てしまつた。

それからどの位の時間が經つたものか、分らないが、大下は又むし〳〵するやうな、重苦しい神經衰弱の夢で、何でも珊子が誰にも知らさずに京都へ歸つてしまつた夢か何かを見てゐた時、「もし、もし、大下さん、大下さん、大下さん、」としつこく起す者があつて、漸くのことで目を醒ました。彼より少し前に、彼を起す聲に目を醒ましたらしい中貫が、「やあ、失禮、」と例の笛のやうな聲で挨拶したのを聞いて、やつと正氣に復つたものだ、彼を起したのは井波三五

郎だつた。

「折角お休みのところを、お起ししまして濟みません、どうも濟みません、」と井波が言ふのを、皆まで終らないうちに、

「珊子さんはどうしました？」と大下は聞いた。

「おや！」と相手が又大下の言葉に驚いたらしかつた、「おや！　ちやあ歸つて來なかつたんですか？　一度も、朝出た切り歸つて來なかつたんですか？」

「あなた一緒ぢやなかつたんですか？」と中貫が傍から口を挾んだ。

「いゝえ、」と井波は答へて、ひどく狼狽の樣を現し出した。

「だが、」と大下は言つた、「ひよつとしたらもう下に歸つてるかも知れませんよ。」

「いや、」と井波が一寸わざとらしい表情をして言ふには、「今下に行つて見たんですが、あの、何とか言ひましたな何とか、そら、あの恐らしい、高慢な、何とか言ひましたな、毛の長い……」

「芦屋君ですか？」と大下が多少微笑を以て答へた。

「それ、それ、芦屋さん、あの人が手紙を書いてましたよ、默つて、恐い顏をしてね。私の顏を見ると、「珊子さんはどうしました？』と聞きますので、『私も會はないのです、』と言ふと、『何しに、ちや、あなたは來たのです？』と言つて、『僕は一寸込み入つた書物をしてゐますから、大下君の部屋にでも行つて下さい、』と斯うです。……」

「まだ手紙を書いてゐるのか、」と中貫が言葉を挾んだ、「隨分長いね、」

「隨分長い手紙でしたよ、」と井波は言つて、ふと又前の心配さうな顏に返つて、「珊ちやんは朝美術座の事務所に出かけたんでせう？　それからずつと歸つて來ないんですか？」

「えゝ、それからずつとですよ、」と大下は例の皮肉な調子を始めた、「珊子さんは美術座を脫け出して、あなたのと

こへ行つたんぢやないんですか？ 確か日本劇場へ行つたらしいと言ふ話ですがね、もつとも僕はさう監督してる譯ぢやありませんから、保證は出來ませんがね。」

「……」と井波は稍々暫くの間、鼻眼鏡で吊り寄せられた目を閉つて考へてゐた樣子だつたが、突然相手の二人が大袈裟に云ふと飛び上る程の大きな聲で、彼は有名な聲量の豐富を以て鳴る歌劇役者だが、「ぢや、佐伯のとこだ、さうだ、やつぱり佐伯のとこだ！」と叫んだ。

「ぢや、僕も失敬しよう、」とこれ又ひどく先程から悄氣てゐた中貫が立上つた、「又夜來て見よう、」と半分は獨言で言つて、「さやうなら！」と細いので、そんな時は馬鹿に憐れつぽく聞える聲で言つて、そして歸つて行つた。

だが、井波はそれにも殆ど挨拶を返さないで、「佐伯……佐伯！……」と二度同じことを言つてゐたが、ふと傍の電報を取上げて見て、「おや、これは珊ちやんへですね、家から來たんですか？」と叫んだ。

「困つてるんですよ、」と大下は答へた、「早くそれを見せたいんですがね、餘り歸りが遲くなると、今夜の夜行に間に合はないかも知れませんからね。」

「ぢや、」と言つて井波はそれを手にとつて立上つた、「私行つて呼んで來ませう、行つてるとこは大抵分つてゐますから……」

「佐伯といふ人のとこですか？」と大下は皮肉な調子で聞いたものだ。

「多分さうだらう、と思ふんです、」と言つて、井波は一寸暗い顏をして出て行つた。佐伯といふと、あの井波等の歌劇部の舞臺監督をしてゐる男で、常々珊子が大下等にもそれとなく賞めてゐた男のことだな、多忙々々、と思ひやりながら、その實、大下だつて餘り愉快な考へではないのだが、そんなことを考へながら、玄關に慌しく例のブルドック型の十一文の赤靴を穿いて歸つて行く井波を送り出して、歸りに廊下のとこで會つた鼻ぺつたんこの女中に「珊子さんの部屋に、まだお客樣がゐるかい？」と聞くと、

「えゝ、」と彼女は答へたものだ、「あの毛の長い、恐い顔をした人でせう？　今私がお掃除をしようと思つて入つて行つたら、『掃除は後でしてくれ給へ、』くれ給へですつて、さう言つて、何だか手紙を書いてゐらしつたやうよ、それが長い、長い、こんな手紙なのよ、」と言つて女中は手をひろげて見せた。

大下は「さうか、」と答へて自分の部屋に入るなり、又ごろりと仰向けに手枕をして寢そべつたことであつた。

十一

珊子が今夜一先づ歸國するとなる、彼女が突然上京してから今日の日まで僅な間のことだつたが、日頃の怠けの罰が當つたのか、過分な勞働をしたものだ、明日からはゆる〱と骨を休め枕を高うして寢るかな、と法學生大下千吉郎は彼の箱のやうな部屋のまん中に腕枕して寢そべつて、斯う獨言ちながら、例の二方の壁の上部に細長く切られた窓の彼方のだん〱暮れ方に近づいて行く空と、隣の陸軍大將の庭の、折から微風さへも死んで、一葉そよがず蒸し固まつたやうに黒々と繁つてゐる立木とを、ぼんやりと見るともなしに見てゐたものだ、そして、その間が僅十分と經たなかつたことだ、もう少ししたらうと〱と寢かゝらうとしてゐた時に、部屋の隅の扉が開いて、

「又寢てゐらつしやいますの？」と言つて珊子が外出先からの極彩色の服裝のまゝで、滿面に愛嬌笑を浮べながら入つて來た。

「今歸つて來たんですか？」と大下はいつになく敏捷にバネ仕掛のやうに跳ね起きて、「誰にも會ひませんでしたか？」とうろたへたやうに叫んだ。

「どなたに？」と珊子は鐵睥みの目を光らして聞いた。

「あの、井波君にも實部君にも？……それにあなた歸つてからあなたの部屋に行つて見ましたか？　多分まだ芦屋君がゐやしませんか？」

「さう？……」と言つて、彼女が部屋を出ようとした時に、ふと大下は氣がついて、

「あゝ、珊子さん、珊子さん！電報があなたのお家から來てますよ。實部君と中貫君と僕との三人で、立會の上で開いて見ましたが、」と言つてそれを渡しながら、「すぐ歸れとあるやうですね、お母さんがお惡いといふぢやありませんか？」

「私、ぢやあ、」と彼女は電報を見ながら、多少心配さうなあわてた調子で急き込んで言つた、「ぢやあ、私、今夜の汽車で歸つて來ます、……どうせ又來るんですから、ごた〱した荷物など置いときますわ。」

「一寸あなたの部屋に行つて御覽なさい、芦屋君が多分まだゐるだらうと思ひますよ、」と大下は電報を手にしてその場に又坐りさうにする珊子に注意した。そこで又ばた〱と部屋を驅け出して行く珊子の足音を聞きながら、さてさて忙しいことだ、と多少その忙しいのを羨ましいやうな氣もしながら、法學生は又ごろりと横になつたものだ。長い長い日のことだが、日暮と共に彼の大嫌ひな蚊が二疋三疋と襲うて來たものだ、その中には臺所の蔭の水溜や溝の産のみならず、陸軍大將の庭の産なる大きな鍛蚊もゐることだ、體に似合はず虫に弱い法學生は閉口しながら、一分間おき位に寢そべつてゐる、怠け者の證據の毛だらけの足をばた〱させながら、「人間白日醒め且眠る、老子山中眠り却つて醒めたり……」と老子氣取りで、漢詩などを朗吟し始めたものだ。

すると又、そこへ珊子が小刻みな慌しい足音を立てゝ、「私、大下さん、大變よ！」と叫びながら入つて來た。大下は今度はゆつくりと起き上りながら、「どうしたんです？」とうるささうに言つて、「芦屋君はもう歸つたんですか？」と聞いた。

「その芦屋さんのことですよ、」と言ひながら、見ると、彼女は長々とした、芝居で見るお輕のそれのまだ三倍もあるかと見える手紙を鷲摑みにした手を相手の前に突き出して、「芦屋さんはもうゐらつしやらなかつたんですけど、これこんな手紙を殘してありますの。芦屋さんもひどいわ、私、どうしたらいゝせう？」

「あやまつたらいゝでせう、」と落着いた時の癖を出して、大下は皮肉る調子で言つたものだ、「何だか知りませんが、又芦屋君に叱られたんですか？　人が怒つた時は、大なり小なり此方に惡い所があるんでせうからね、兎に角あやまるんですね、それからはまあ『過は改むるに憚ること勿れ、』ですかねえ。ハハハハ……」と嘯くやうに言つた。

「まあ、兎に角、大下さん、」と珊子は一層むきになつた顔をして、「大下さん、この手紙を讀んで見て下さい！」と手紙の束を彼の膝の上に乘せたものだ。

「又絕交されたんですか、これで何度目です？」と言ひながら、大下は興味もなささうに膝の上から大凡三間もあるかと思はれるやうな長い手紙を手にとり上げた。

『珊子さん、これはあなたに對する最後の絕交狀です。』と案の如く手紙は斯う始められてあつた。『噓つきの大噓つきの珊子さん。一體あなたは今度上京するに誰を尋ねて、何をしに來たのですか？　町の樂隊をか？　而して彼等と淫蕩なる踊を踊るためにか？　あなたは恐らく今度上京するに當つて、一ダアスの手紙に「私の何某樣へ、あなたの珊子より、」と認められたのであらう。それを與へられる者が悉く町の樂隊や、道化役者や、不良少年等だけならば宜しい。……

「一體、町の樂隊、町の樂隊と書いてあるのは何のことです？」と大下は手紙を讀む目を一寸彼女の方に上げて問いた。

「さあ、何のことですか？」と彼女はわざと冷淡に言つて、中途で一度言葉を切つて、「井波三五郎のことでせう。」……

「はゝあ、なる程、すると道化役者は實部君で、不良少年が僕になる譯ですな、」と大下は言ひながら、さて又手紙のつゞきを讀みはじめた。

『しかしながら、』と手紙はつゞくのだ、『それが誠實なる、敬虔なる、選民に與へられたものである時は、決して許されることが出來ません。彼はあなたのために、噓つきの、大噓つきの珊子さんのために、靜な郊外の地に住心地よき家さへ求めて、既にそれの借受の契約さへした者です。彼は又あなたのために東西の選民に依つて著された、讀むべき名著

を用意した者です。……』

『要するに、どういふんです？ 僕、少し疲れました、』と法學生はそこで手紙を下に置いて、相手の顔色をうかゞひながら言つた。

「まあ、辛抱して讀んで見て下さい、」と珊子は促した、その癖「私もあんまり長いので、すつかりよくは讀んでゐないのですが……。」といふのだ。つまり法學生を遺憾なく番頭扱ひにしたものであつた。

「少し、ちやあ、飛ばし飛ばし讀みますよ、」と法學生は言つて、再び手紙を取上げた。

『……それに何ぞや、あなたは妙齢の婦人の身を以て、樂隊の一員にも過ぎざる歌劇役者の錠の掛る私室に入りて數十分の時を過すとは、咄！ ストリンドベルヒに呪はれてあれ！……』

「これや、面白い、面白い」と法學生が大いに面白がり出したところへ、

「波川さん、こちらにゐらつしやいますか？」と例の鼻ぺつちやんこの女中が首を扉の間から突き出して、「お客樣です、」と報告して來たので、

「さう、」と言つて珊子は立上つた。

「どうか、これ、あなた持つて行つて下さい、」と出て行かうとする彼女を大下はあわてゝ止めて、「こんなもの僕んとこへ置いといて貰つては困りますよ、それに芦屋君にだつて惡いですもの……」と泣くやうに言つた。

すると、珊子は二三歩引返して、手紙を取上げるなり、それを片端からズタ〳〵に引裂き始めた、長いので仲々裂き甲斐があるのだ。「斯うしたらいゝでせう？」と彼女は大下に向つて言つた、「あなたも手傳つて下さいな。後は紙屑籠に入れて下すつたらいゝんです、そしたら何もあなたの御迷惑にならないでせう？」

だが、何にしても苦々しいことだ、と何處かまだこの世に初心なところのある法學生は、默つて彼女のすることを手を束ねて見てゐた。彼女がその長い手紙を大凡切々に引裂き終つて、客が來てゐるといふ彼女の部屋に歸つて行つた後

も、彼はさうして可成りの間、山と盛られた紙片を眺めてゐたが、昨日今日、さては目前のこと、すべてが變に混沌とした、妙ちきりんな、淺間しいやうな氣がされて、何とも言へず憂欝な氣分に襲はれ出したので、癖で、その場に又ごろりと手枕で仰向けに寢そべつて、

「別れ話のたまづさに、
斯くも長きはあらじかし、」

と言ふ文句を幾度も幾度もくり返し歌つたものだ、それが出鱈目の節なので、くり返す毎に違つた調子が口から出て來るのだ、それを彼は自分自身で樂むやうに、くり返したことだ。文句は彼がまだ高等學校にゐた時分、獨逸語の稽古を兼ねて耽讀したハイネの句を、彼が當時自己流に意譯したものなのだ、調子がいゝので、それが今だに斯ういふ時、彼の口をついて出るのであらう。

そこへ又珊子がちよこ〱走りで入つて來て、「又ぐづ〱してゐて色んな人にやつて來られると困りますから、」と言ひながら、大下の傍にぺつたり坐つて、「だから、今夜何時の汽車で歸るにしても、これから直出て行かうと思ひますの。それに買物や、一寸寄つて行くとこや少し用事がありますから……」

「ちやあ、」と言つて大下はゆつくりと寢てゐる身體を起して、「僕、送つて行きませうか、荷物なぞも多少あるでせう？」

「いゝえ、三五郎に送らしてやりますわ、」と彼女は平氣を裝ふやうに、一寸口を前に突き出して言つた。

「さつきのお客は井波君だつたんですか？」と大下はくすぐつたいやうな、但し多少不快な顔付をして言つた。

「三五郎といふ男は本當に厭な、好かない奴ですのよ、」と悧好な珊子は忽ち相手の氣持に應ずるやうに話を向けた。

「あの私この間まで差してゐました可成り大きなエメラルドの指輪があつたでせう？　あれをこの間一寸貸してくれと言つて持つて行つた切り返してくれないんですよ。」

「返してくれと言つたらいゝでせう、」と大下。

「ところが、言つた位で仲々返す男なもんですか？」

「そんな方法があるさうですね、」と法學生は持前のとぼけた調子で言つた、「『女の心を取るには女の持物をとれ』といふ諺が西洋にありますよ。」

「まあ、いやな大下さん！」と珊子は銳睥みの目を見張つて言つた。「あなたも仲々隅に置けない人ですね。」

「冗談はおいて、ちやあ、僕は後で停車場まで行きませう、何時の汽車のつもりです？」

「それがはつきり未だ定りませんの、ですから、本當にようございますわ。」

「大いに行動を晦ましますね。」

「そんな譯ぢやありませんわ。」

と言つてゐるところへ、中賀が入つて來て、「やあ珊子さん、愈よ今夜お歸りですか？」と例に依つて最先に彼女に言葉をかけた、「是非送らしていたゞきませう、ねえ、大下君？」

「ところが、時間が分らないんださうだよ。」

「どつちにしたつて一汽車や二汽車のところは、僕等はどうせ用無しなんだから、ぶら〳〵散歩して暮してもいゝぢやないか？」

「それもさうだね。」

「私、」とその時珊子は立上つて、「ぢやあ、もう失禮します。ほんとに、又すぐ來るんですから、送つて下さいませんように、何時だかちつとも未だ見當が付かないんですから、」と言ひ捨てゝ、ばた〳〵と廊下を走り去つた。

後に暫く二人はぽかんとして取殘されて居たが、

「荷物なぞの用意があるだらう、」と突然中賀は口を開いた、「手傳つて上げようぢやないか？」

「却つて我々が行かない方がいゝんだよ、」と大下は例の相手を苛立たせるやうな調子で言つたものだ、「井波三五郎が來てゐるんだからさ！」

そこで中貫はぐつと詰まつた形で、それから二人はしばらく無言の行にはひつた。だが、そのうちに長い日も暮れて藪蚊や溝の蚊の押寄せて來る蒸暑い部屋の中で、ぼんやりと默り込んで向ひ合つてゐるのもつまらない次第なので、簡單な夕飯を認めて、二人は兎に角散歩に出かけることになつたが、玄關のところで珊子たちは？　と宿の主人に聞いて見ると、驚いたことには、もうずつと前、彼女が大下の部屋を出るとすぐ、井波と一緒に出かけたとのことであつた、で、何氣なく、大下は一寸そこに中貫を待たしておいて、珊子の部屋をのぞいて見たところが、その光景が彼を驚かしたものであつた。六疊の部屋は新聞紙の反古や、くしや／＼にした浴衣や、肌襦袢の洗濯物などで、その半分以上を亂雜に占められてゐた、その主人が急ぎの用で一寸二三町先まで用足しに行つた留守の間といふ體裁なのだ、だが、大下の目を吸ひ寄せたのはそれ等ではなく、それは彼の、その春國の母から送られた、彼自身が殆ど使はないでおいたのを彼女に貸したところの、牡丹に蝶々のメリンス友禪の大座蒲團が、床の間寄りの部屋の隅に、四つに折られて投げ出された恰好であつた。それが彼に非常に不愉快な聯想を起させたものなのだ。女の部屋の隅に一枚の座蒲團が四つに折られて置かれてあつたとて、それがどうしたと言ふのだ？　だが、あゝ、神樣、それを見て不愉快な聯想を起す心に呪あれ！　と思ひながら、止せばいゝのに、にきび面の法學生はその座蒲團の傍に近寄つて見たところが、助け給へ、長い髮の毛が三本もくつ附いてゐたものだ。

大下は急いで玄關に待つてゐる中貫の傍に歸つて來て、そこで二人で出かけようとする入口のところで、帽子も被らずに、禿げ上つた大きな額に汗をかきながら、息を切らして駈けて來た賓部に出遭つた、ひどい近視の彼は二人に聲を掛けられてから、二三度しよぼ／＼と目を細めて彼等を見究めると、「珊ちやんは？」と叫んだ。

「もう出かけましたよ、」と大下は落着いた調子で言つた。

「何時の汽車です？」と寳部はまだ息苦しさうに叫んだ。

「さあ、それが分らないんですよ、」と大下は益々落着きに落着いた言ひ方をした。「送つて行かなくてもいゝでせう。僕等もよさうと思つてるんです。」

「散歩がてら停車場まで行つて見てもいゝじやないか？」と中貫が例の笛のやうな聲で挾んだ。

「いや、用事があるんです！」と寳部は食つて掛るやうに叫んだ、「美術座に愈よ入れることになつたんです！」

「それやよかつたですね、」と大下は言つた、「だが、困つたな、汽車の時間が分らないのは……」

「いつ頃出かけたんです、一人ですか？」と寳部は尙せき込んで聞くのだ。

「何だか買物なぞをしなければならないとか言つて、もう彼此れ一時間も前ですかな、」とさうなると大下も氣の弱い男で、井波と一緒だと言へない氣がしたものだ。

「さうですか、」と寳部は言つて、「ぢや、失敬します！」と言ふなり、ひよこりとお辭儀をしたかと思ふと、身體相當な大跨で、二人を後に殘して大急ぎで去つてしまつた。

それから大下と中貫とは、互に互の腹の中を探り合ふやうな心持で、程遠くない電車の停留所まで歩いて行つたものだが、「兎に角乘らう。」電車に乘つて、「銀座に行つて見ようか？」と言つて尾張町で電車を下りたことだが、そこで二人は期せずしてそこの四つ角の大時計を見上げたものだ。

「八時四十分だな、」と中貫が言つた。

「八時四十分だね、」と大下は答へたものだ。

さういふ心は、二人ともこれから京都への下り列車が九時と十一時との二つ切りない、珊子は多分前者の時刻で立つんだらう、どうだ？ どうだ？ といふ意味に外ならなかつた。我儘の張合ひにおいては到底大下が中貫の敵でなかつたやうに、斯ういふ意地張りの仕合ひでは後者は所詮前者にかなはなかつた。彼等はそれから暫く又無言で敷石道を京

橋の方に向つて歩いてゐたが、とある町角で十七八の女が散歩の人々に生花を賣つてゐるところに來ると、ふと中貫は足を止めて、少なからぬ金を出して片手では持ち切れぬ程の生花を買つたものだ。

「半分持つてくれないか？」と彼は言つて、厭さうな顏をしてゐる大下に無理耶理に半分花を持たせて、「兎に角、多分九時のだらうから、停車場迄行つて見ようぢやないか？」と到頭切り出した。

「乾度井波三五郎が行つてるだらうから、」と大下は言つた、「感じが惡いから止さうぢやないか？　井波が行つてなければいゝがね。……」と本音のところを言つた。

「井波三五郎がゐたつていゝぢやないか？」と中貫は甲高い聲を益々甲高くして叫んだ。

「彼は彼、僕等は僕等。僕等は共に藝術の神に奉仕する道連なる、美しい婦人の前途を祝さうぢやないか？　行かうよ、行かうよ？」

それに對して暫く大下は反駁してゐたが、結局從つて、そこで急に足を早めて彼等が新橋停車場の大玄關を入つて行くと、それはもう發車の七分ほど前の時刻で、行く人見送る人は既にプラツトフオームに出てしまつてゐたものだから、がらんとして廣々と見える構內のまん中に、帽子も被らないで、禿げ上つた廣い額を光らせて、大きな丸顏の眼鏡の底に細い目をしばだゝきながら、入つて來る者を物色してゐる寶部の姿が最先に目についた。

「やあ！」と大下の方から聲をかけて、その傍に近づいて、「珮子さんが來ませんか？　もしかするとこの前の汽車で行つたんぢやないか知ら？……だが、三等で行く筈はあるまいし、この前の二等の附いた汽車といふと七時だからなそれで行くだけの時間の餘裕がなかつたらうが……」

「あなたはいつ頃から來てゐらつしやるんです？」と中貫が傍から聞いた「この汽車に乘つてゐるやうなことはありますまいね？」

「そんな筈はありません！」と寶部は臭い息を吐きながら、唾を飛ばして叫んだ、「僕はもう三十分も前から來てゐる

んです。怪しからんな、駄目だな、駄目だな！　あの女も！」

そのうちに九時が來て、發車のベルが鳴つて、汽車が出てしまつた、ぞろ〳〵と見送人が改札口を歸つて來るのだ。

それでも、尚五分ばかりの間、三人はきよろ〳〵と入つて來る人に目を配りながら、「どうしたんだらう？」とか「やつぱり先の汽車で立つたのかな？」とか、「十一時の汽車のつもりかな？」とか、口々に獨言ちていたが、突然肝癪を切らした賓部が

「ちえッ！」と多分の唾を飛ばして舌鼓を打つたかと思ふと、「もう僕は知らない！」と獨言の憤慨を洩らして、そして大下に向つて、「あなたもし珊子さんにお會ひになつたら、僕がもう美術座の方のお世話なぞ御免蒙る、と言つてたと言つて下さい。僕はもう歸ります、これ上げませう、」と言つて鋏を入れてない入場券を大下に渡した。

「だつて、美術座の方はうまく入れることになつたんだといふんぢやありませんか？」と大下は無意識に相手から入場券を受取りながら言つた。

「僕はもう知りません。以後珊子さんに就いては關係なしです！」と言つて、「さよなら！」と賓部は二人に向つてひよこりとお辭儀をして、それが辭らしいのだが、その仕方が大男なだけに變に不調和で可笑しいのだ、そして大急ぎで何處ともなく消えてしまつた。

後に殘された二人は暫くぽかんとしてゐたが、ふと顏を見合つて、どちらかゞ笑はうとした拍子に、他のどちらかゞ相手の手の生花を見たので、忽ちむつと變な氣がした。が、そのまゝ無言で二人は外の方に無意識に歩き出した。

「パウリスタにでも行かうぢやないか？」とやがて中貫が言つた。

「行かう！」と大下は應じて、歩きながら彼は並んでゐた中貫と反對の側の手に持つた生花を、目立たぬやうに小さくだが力を込めて、「くそッ！　こんな花みな首落ちてしまへ！」と振つたものだ。

「どうせ斯うして出て來たんだから、」と中貫は友人とは違つて尋常に片手の花をそつと持つて足を靜かに運びながら

言つた、「パウリスタでゆつくり休んで、十一時にもう一遍行つて見ようぢやないか？」

「それもよからう、」と大下は素直に、だが冷淡に答へた、だが、それは彼の自棄な無抵抗主義と見えて、彼はそのまゝ默つて歩きながら、例の片手の生花を更に力を込めて頻りに振つたものだ。それが丁度彼等が博品館の前に來た時で、その時大下は突然向ふから來る人込の中の四五間先に何者かを認めて、瞬間ぴたりと足を止めた間もなく、怪む中貫を引立てて！、

「君、向ふ側を歩かう、」と言ひながら、手を引くやうにして友人と共に車道を横切つた。そして反對の側の人道に來た時、くるりと振り返つて、怪む中貫に博品館の方を指差しながら、「あれ、君、あそこを珊子さんと井波三五郎が行くよ。……よさうよ、見送りなぞもう馬鹿々々しいから。」

如何にも、大下の指差す博品館の前あたりを、人込の中に目立つて派手な装をした、だが小柄な珊子と、それと並んで彼女の荷物らしい可成り大型の旅行鞄を片手にして、大きな身體を如何にも睦まじさうに彼女の方に心持かしげながら、並んで歩いて行く井波三五郎とが通るのだ。

——以上、第一卷——

新刊紹介

■藪の中（宇野浩二著）文壇のモンスターだと云はれる奇才宇野氏の創作集である、出世作「藪の中」以下「屋根裏の法學士」「轉々」「　」などが收められてある、世相の何も彼も知り盡して居ると云つた筆致、輕妙にスラ〳〵と苦もなく樣々な複雜な事件を描出した筆力、批評家は何の彼のと毀譽相半ばしたとを云つて居るが、そこが文壇のモンスターたる所以であらうが、オホヽンと納まり返つて毀譽を鼻であしらつて居る強さ—氏の作を讀んで面白くないと云ふ人はあるだらうか（定價二圓八十錢牛込區聚英閣發行）

■ド・プロフオンデイス（辻潤譯）オスカア、ワイルドの獄中記の全譯である作者の奔放なる享樂主義的思想とその絢爛華麗な文章とは此作に代表されて居ると傳へられて居る悲痛なる記錄である。（定價八十錢）

■勞働者クロオド（奥榮一譯）ユウゴオの原作である、死刑囚の心理を描き不合理なる刑罰に沈痛の叫びを發する一勞働者の悲慘なる運命を描いたものである（定價八十錢）

■少女マリイ　生田春月　中村千代子共譯）ジヨオジ、サンドの原作、佛蘭西浪漫派の閨秀作家の有名なる戀物語である、佛語の理想主義—可憐なる少女と田園生活の人情とを描いたものである（定價七十錢）

■楕圓形の肖像（布施延雄譯）幻怪なる作家ポオの原作にして楕圓形の肖像、あひびき、ベレニス・リジエイア、エレオノラ、モレラ、群衆の人、眼鏡等八篇の戀物語を納めてある（定價七十五錢　以上四冊神田中猿樂町越山堂發行世界名著文庫）

■人類の再生（杉森孝次郎著）社會改造の根本要素を哲學、倫理、教育等の見地から著者程に快く喝破してゐる人は當代に稀れである、就中新國主義、英雄主義、デモクラシー勞働問題、戰後英米の諸問題等に就て著者獨特の滾々として盡きざる比喩と、往々片言を呑ませる程の皮肉とを交へ乍ら、其の警言を吐露せる邊り社會問題研究の內的方面に讀者を啓發し熟慮せしむるもの多い（定價二圓八十錢麹町區平河町東方時論社）

■猫の百日咳（貝塚澁六著）一名日本一のユーモリストの銘打つて出た社會主義論集である、輕快な風刺、犀利な皮肉、滑稽百出の間に能く其云はんと欲する所を言はしめて居る、社會黨大臣の車夫時代、代理消化及代理姙娠、人間と蜘蛛と猫、結婚とは何をする事か魚食人と虫食人の話なぞ、快語縱談横溢である（定價一圓四十錢神田仲猿樂町アルス社發行）

■社會主義の立場から（山川均著）犀利なる論鋒、緻密なる頭腦は氏の論文の隨所に横溢して居る、社會主義論集としては氏の第二冊であるが、社會主義者の社會觀よりは更に深く廣く氏の卓拔なる所見と抱負を述べて居る、文辭平易に誰にも分る樣に說いてある殊に本書は大山吉野兩氏の不徹底なるデモクラシーに一矢を食はせて居る所興味あり（定價貳圓神田裏神保町三德社）

三月號豫告

■二月號は卷頭に掲載する筈の森戸辰男、小泉信三兩教授の論文が、或事情の爲め二篇共に掲載するとの出來なかつたのは、與々も遺憾であつた、然し兩氏は更に筆硯を磨して見ゆる筈である。

■三月號は社會的變化に依つて當然來らねばならぬと、一般有識家に依つて研究せられつつある

家族制度改廢問題

に關して、極めて興實なる、而して極めて緊要なる研究を諸大家に御依頼して置いた、其外思想問題、社會問題、政治問題に關しては、諸大家の御高見已に机上に山積して居る

■加ふるに文藝欄は愈々益々活躍の域に達して來たとは、讀者諸君と共に大に欣快としたいと思ふ、清新の藝術を求め、緊張し來りつゝある我が文壇に非常なる興味を感じつゝ天下の人士に對して、吾人は其求むる所のものを與へ、其期待する所の藝術を與へんが爲めに努力したいと考へて居る。

每月一日發行一回

改造定價

冊數	定價	郵税
壹冊	五十錢	二錢
半ヶ年	三圓	不要
壹ヶ年	六圓	不要

外國行郵税は一部十四錢增大號は別に定價を定む

廣告

▼廣告料は直接本社並に取次店に御照會願上候
▼廣告は御便宜の取次店へ御依頼願上候

註文の注意

▼御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▼增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▼見本御請求の向は振替又は郵劵にて定價通り御拂込ありたし但し郵劵代用一割增の事
▼御拂込は振替によるゝを最も便利とす

本誌大賣捌所

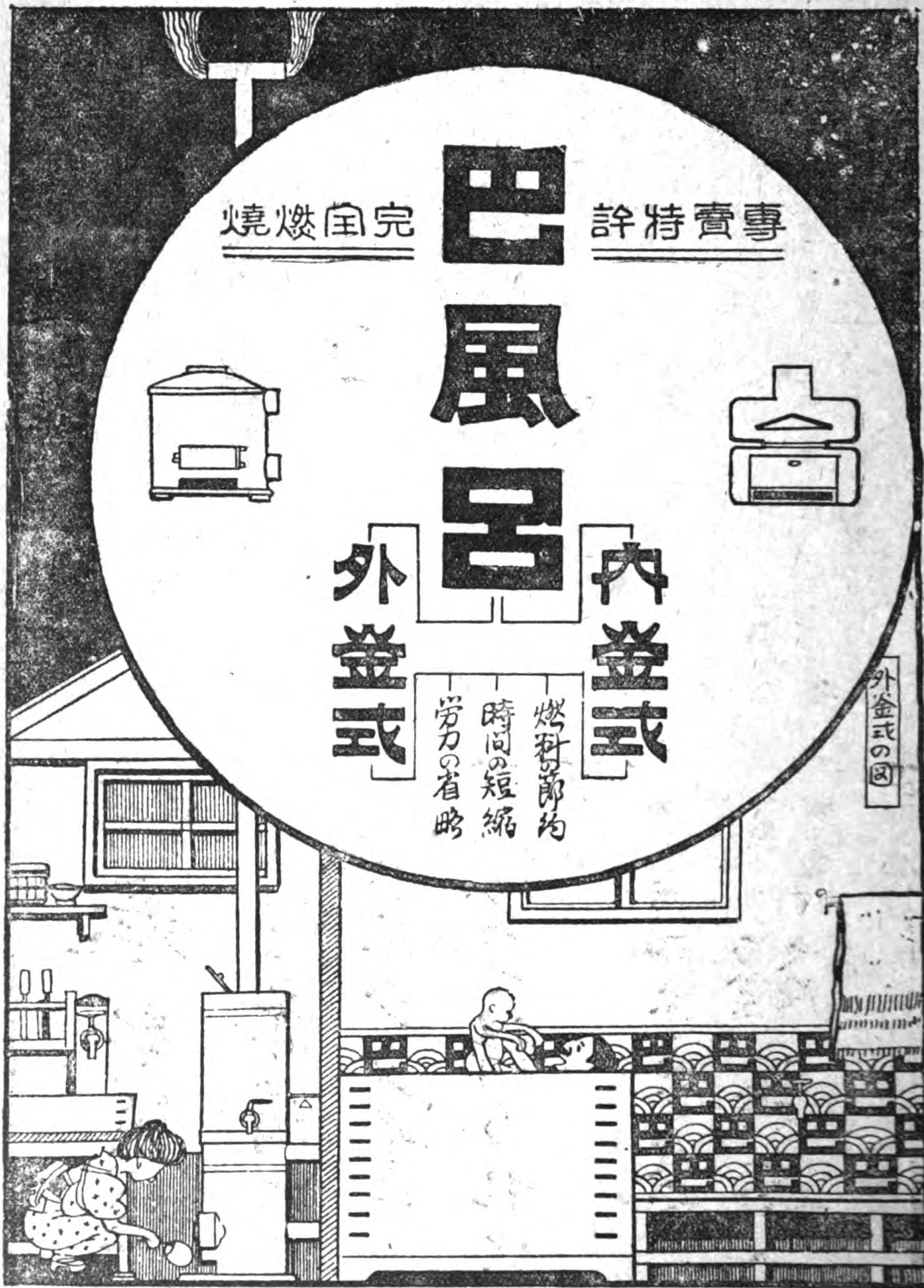
東京堂　東海堂　北隆館　上田屋　至誠堂

大正九年一月二十七日印刷納本
大正九年二月一日發行

本號に限り金七十錢

編輯兼發行印刷者　東京府中目黒七八六　横關利藤太
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿七番　秀英舎

發行所　東京芝區櫻田久保町七　改造社
電話新橋一八五九
振替東京八四〇二


專賣特許
完全燃焼
巴風呂
内釜式
外釜式
燃料の節約
時間の短縮
労力の省略
外釜式の図

改造第二卷第二號　大正八年三月廿一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）　大正九年二月一日發行

